

入江内湖遺跡（行司町地区）
発掘調査報告書

——滋賀県立文化産業交流会館建設に伴う発掘調査——

1988. 3

米原町教育委員会



S D01 (南西より)



土層堆積状態 (北壁)



高杯出土状態



保存処理後の高杯



高杯出土状態



保存処理後の高杯



木製農耕具

序

湖北の玄関口、米原町に県立文化産業交流会館が建設される運びとなりました。この建設予定地の隣接地に入江内湖遺跡が所在することから、事前に試掘調査を実施いたしましたところ、はたして古墳時代の遺跡が検出されました。

この結果、県立文化産業交流会館建設の原因者である、県教育委員会文化振興課のご理解により、2ヶ年度にわたり発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査で入江内湖遺跡の範囲がさらに広がることがわかりました。また多量に古墳時代の木製品が出土し、注目されました。

ここにその成果を報告書としてとりまとめました。本報告書が近江の古墳時代の研究に活用されますとともに、地下深く眠る埋蔵文化財の保護に役立てていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが今回の調査に御協力いただきました関係機関および地元関係者各位に対して厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

米原町教育委員会

教育長 福田定観

例 言

1. 本書は滋賀県坂田郡米原町大字下多良に所在する入江内湖遺跡行司町地区について、昭和60年度から昭和61年度にわたって実施した発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、滋賀県立文化産業交流会館建設事業に伴うもので、滋賀県の依頼にもとづき米原町教育委員会が実施した。
3. 本調査は試掘を昭和60年8月22日より8月28日まで実施し、その結果改めて昭和61年3月6日より同年7月12日まで発掘調査を実施した。
4. 出土遺物の整理作業及び報告書の作成は昭和62年4月1日より昭和63年3月20日までの間実施した。
5. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	米原町教育委員会	教育長	福田 定観
調査事務局	米原町教育委員会 社会教育課	課長	酒井 資夫（昭和60年度）
	”	”	後藤 法泉
	”	課長補佐	相宗又兵衛（昭和60～61年度）
	”	”	前川章太郎
	”	主任	清水 克章
	”	”	中畷 正寿
	”	”	藤原 幸子
	”	主事	池田 仁
調査担当者	”	技師	中井 均
調査補助員	細川英雄、井関敏、坂浩一、福井薫、池田潤実、古澤寛治、山本直樹、岩根達雄、宮川哲郎、田中慶希		

調査作業員 中関久松、中関みつえ、北川茂子、堀部逸江

6. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記補助員の他、下記の諸氏に協力を願った。
中川和哉、草薙祥貴、小林正伸、川森茂子
7. 自然遺物等については、下記の方々に鑑定を依頼した。
樹種鑑定……岡田文男（財・京都市埋蔵文化財研究所）
石材産地分析……藁科哲男 東村武信（京都大学原子炉実験所）
種子鑑定……渡辺誠（名古屋大学文学部考古学研究室）
8. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言、協力を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。
森浩一、木下忠、兼康保明、田中勝弘、用田政晴、工楽善通、金子裕之、井上和人、岩永省三、上原真人、泉拓良、西田弘、宇佐晋一、齋藤和夫、谷口徹、久保寿一郎、狐塚省蔵
（順不同、敬称略）

序

湖北の玄関口、米原町に県立文化産業交流会館が建設される運びとなりました。この建設予定地の隣接地に入江内湖遺跡が所在することから、事前に試掘調査を実施いたしましたところ、はたして古墳時代の遺跡が検出されました。

この結果、県立文化産業交流会館建設の原因者である、県教育委員会文化振興課のご理解により、2ヶ年度にわたり発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査で入江内湖遺跡の範囲がさらに広がることがわかりました。また多量に古墳時代の木製品が出土し、注目されました。

ここにその成果を報告書としてとりまとめました。本報告書が近江の古墳時代の研究に活用されますとともに、地下深く眠る埋蔵文化財の保護に役立てていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが今回の調査に御協力いただきました関係機関および地元関係者各位に対して厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

米原町教育委員会

教育長 福田定観

例 言

1. 本書は滋賀県坂田郡米原町大字下多良に所在する入江内湖遺跡行司町地区について、昭和60年度から昭和61年度にわたって実施した発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、滋賀県立文化産業交流会館建設事業に伴うもので、滋賀県の依頼にもとづき米原町教育委員会が実施した。
3. 本調査は試掘を昭和60年8月22日より8月28日まで実施し、その結果改めて昭和61年3月6日より同年7月12日まで発掘調査を実施した。
4. 出土遺物の整理作業及び報告書の作成は昭和62年4月1日より昭和63年3月20日までの間実施した。
5. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	米原町教育委員会	教育長	福田 定観
調査事務局	米原町教育委員会	社会教育課 課長	酒井 資夫（昭和60年度）
	〃	〃	後藤 法泉
	〃	課長補佐	相宗又兵衛（昭和60～61年度）
	〃	〃	前川章太郎
	〃	主任	清水 克章
	〃	〃	中嵐 正寿
	〃	〃	藤原 幸子
	〃	主事	池田 仁
調査担当者	〃	技師	中井 均
調査補助員	細川英雄、井関敏、坂浩一、福井薫、池田潤実、古澤寛治、山本直樹、岩根達雄、宮川哲郎、田中慶希		

調査作業員 中関久松、中関みつえ、北川茂子、堀部逸江

6. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記補助員の他、下記の諸氏に協力を願った。
中川和哉、草薙祥貴、小林正伸、川森茂子
7. 自然遺物等については、下記の方々に鑑定を依頼した。
樹種鑑定……岡田文男（財・京都市埋蔵文化財研究所）
石材産地分析……藁科哲男 東村武信（京都大学原子炉実験所）
種子鑑定……渡辺誠（名古屋大学文学部考古学研究室）
8. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言、協力を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。
森浩一、木下忠、兼康保明、田中勝弘、用田政晴、工楽善通、金子裕之、井上和人、岩永省三、上原真人、泉拓良、西田弘、宇佐晋一、齋藤和夫、谷口徹、久保寿一郎、狐塚省蔵
(順不同、敬称略)

また、昭和62年6月20日に米原町中央公民館でおこなわれた、木器検討会に出席された各氏より多大なご教示を得た。

9. 出土木製品の保存処理に関しては、(財)滋賀県文化財保護協会中川正人氏に依頼した。
10. 遺物の写真撮影については、寿福滋氏を煩した。
11. 本書の執筆は第Ⅲ章第3節(2)(3)を中川和哉が、第Ⅲ章第3節(5)を渡辺誠が、それ以外は中井均がおこなった。また第Ⅴ章に関しては岡田文男、藁科哲男、東村武信、宇佐晋一、齋藤和夫、中川正人の諸先生より玉稿を賜わった。
12. 本書の編集は中井均がおこなった。

目 次

口絵

序文

例言

第Ⅰ章	調査に至る経過	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	2
第1節	位 置	2
第2節	歴史的環境	2
第3節	既往の調査	4
第Ⅲ章	調査の成果	8
第1節	調査経過	8
第2節	層序と遺構	8
第3節	出土遺物	13
(1)	土 器	13
(2)	石 器	16
(3)	金 属 器	20
(4)	木 製 品	20
(5)	自然遺物	44
第Ⅳ章	結 語	49
第Ⅴ章	付 論	53
1.	入江内湖遺跡行司町地区出土木製品の樹種の調査結果について	53
2.	入江内湖遺跡行司町地区出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析	58
3.	入江内湖遺跡行司町地区出土の木製品の文様について	65
4.	入江内湖遺跡行司町地区出土木製高杯の保存処理	84

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺図	3
第2図	入江内湖遺跡既往の調査位置および遺物採集地点位置図	7
第3図	現地説明会風景	8
第4図	木器検討会風景	8
第5図	トレンチ配置図	(8~9)
第6図	土層堆積図(西壁部分)	9
第7図	SD01・SX01実測図	11
第8図	SD01 断面図	12
第9図	出土遺物(縄文式土器)実測図	14
第10図	出土遺物(弥生式土器)実測図	15
第11図	出土遺物(土師器)実測図	16
第12図	石器実測図	18
第13図	石器(石錘)実測図	19
第14図	金属器	20
第15図	金属器実測図	20
第16図	高杯木取り模式図	27
第17図	目盛板寸法図	28
第18図	桃核のサイズ	44
第19図	桃核サイズの比較	45

表 目 次

第1表	石器の観察表	17
第2表	木製品樹種一覧表	39
第3表	桃核計測値一覧表	47

図 版 目 次

図版 1	遺跡	(1)調査地全景(南東より) (2)調査地全景(北より)	図版20	遺物(木製品)	組合せ農具(鋤)
図版 2	遺跡	(1)調査風景 (2)土層堆積状態(北壁)	図版21	遺物(木製品)	えぶり
図版 3	遺跡	(1)S D 01(北東より) (2)S D 01(北西より)	図版22	遺物(木製品)	えぶり
図版 4	遺跡	(1)S D 01(西より) (2)S D 01埋水状態(北東より)	図版23	遺物(木製品)	えぶり
図版 5	遺跡	(1)S D 01土器出土状態 (2)S D 01土器出土状態	図版24	遺物(木製品)	えぶり
図版 6	遺跡	(1)土器出土状態 (2)一木鋤出土状態	図版25	遺物(木製品)	えぶり
図版 7	遺跡	(1)鍬出土状態 (2)木製品出土状態	図版26	遺物(木製品)	農具の柄
図版 8	遺跡	(1)剣形木製品出土状態 (2)高杯出土状態	図版27	遺物(木製品)	農具の柄
図版 9	遺物(土器)	(1)縄文式土器 (2)弥生式土器	図版28	遺物(木製品)	柄の把手
図版10	遺物(土器)	69~73: 包含層, 74~75: S D 01	図版29	遺物(木製品)	(1)農具の柄 (2)竖杵 (3)竖杵
図版11	遺物(石器)	(1)石鎌・剥片 (2)石錘	図版30	遺物(木製品)	竖杵
図版12	遺物(木製品)	広鋤	図版31	遺物(木製品)	(1)横槌 (2)たも
図版13	遺物(木製品)	広鋤	図版32	遺物(木製品)	弓
図版14	遺物(木製品)	広鋤	図版33	遺物(木製品)	(1)弓 (2)浮子 (3)鞆
図版15	遺物(木製品)	(1)広鋤(未完成品) (2)膝柄股鋤	図版34	遺物(木製品)	櫂
図版16	遺物(木製品)	(1)膝柄股鋤 (2)膝柄股鋤 (3)一木鋤	図版35	遺物(木製品)	(1)櫂 (2)櫂状木製品 (3)橈状木製品
図版17	遺物(木製品)	組合せ農具(鋤)	図版36	遺物(木製品)	アカトリ
図版18	遺物(木製品)	組合せ農具(鋤)	図版37	遺物(木製品)	アカトリ
図版19	遺物(木製品)	組合せ農具(鋤)	図版38	遺物(木製品)	アカトリ
			図版39	遺物(木製品)	脚付浅鉢
			図版40	遺物(木製品)	脚付浅鉢
			図版41	遺物(木製品)	脚付浅鉢
			図版42	遺物(木製品)	脚付浅鉢
			図版43	遺物(木製品)	(1)脚付槽 (2)脚付盤
			図版44	遺物(木製品)	箱形容器(槽)

図版45	遺物(木製品)	箱形容器(槽)	図版63	遺物(木製品)	有頭棒
図版46	遺物(木製品)	箱形容器(槽)	図版64	遺物(木製品)	有頭棒
図版47	遺物(木製品)	(1)箱形容器(槽) (2)皿(盤)	図版65	遺物(木製品)	棒状木製品
図版48	遺物(木製品)	高杯	図版66	遺物(木製品)	棒状木製品
図版49	遺物(木製品)	脚台状木製品	図版67	遺物(木製品)	棒状木製品
図版50	遺物(木製品)	脚台状木製品	図版68	遺物(木製品)	(1)板状木製品(箱材) (2)板状木製品(脚材)
図版51	遺物(木製品)	(1)脚台状木製品 (2)底板	図版69	遺物(木製品)	(1)板状木製品(脚材) (2)不明木製品(舟材か)
図版52	遺物(木製品)	(1)織機 (2)木錘 (3)木錘	図版70	遺物(木製品)	不明木製品(舟材か)
図版53	遺物(木製品)	(1)木錘 (2)木錘 (3)目盛板 (4)匙	図版71	遺物(木製品)	不明木製品(舟材か)
図版54	遺物(木製品)	(1)へら状木製品 (2)組板(あるいは折敷) (3)臼	図版72	遺物(木製品)	(1)不明木製品 (容器の組合せ材) (2)283拡大部分 (3)284拡大部分
図版55	遺物(木製品)	(1)臼 (2)椅子	図版73	遺物(木製品)	不明木製品 (容器の組合せ材)
図版56	遺物(木製品)	(1)火鑕臼 (2)鎌の柄 (3)鎌の柄 (4)刀形木製品 (5)剣形木製品	図版74	遺物(木製品)	不明木製品 (工具の部材か)
図版57	遺物(木製品)	(1)剣形木製品、柄、 鋳形木製品 (2)円板状木製品	図版75	遺物(木製品)	不明木製品(用途不明品)
図版58	遺物(木製品)	舟形木製品	図版76	遺物(木製品)	不明木製品(用途不明品)
図版59	遺物(木製品)	舟形木製品	図版77	遺物(木製品)	不明木製品(用途不明品)
図版60	遺物(木製品)	(1)舟形木製品 (2)琴	図版78	遺物(木製品)	不明木製品(用途不明品)
図版61	遺物(木製品)	梯子	図版79	遺物(木製品)	不明木製品(小部材)
図版62	遺物(木製品)	井筒	図版80	遺物(木製品)	不明木製品(小部材)
			図版81	遺物(木製品)	(1)不明木製品(小部材) (2)不明木製品(建築部材)
			図版82	遺物(木製品)	不明木製品(建築部材)
			図版83	遺物(木製品)	不明木製品 (建築部材のうち柱、杭材)
			図版84	遺物(自然遺物)	植物遺体 1
			図版85	遺物(自然遺物)	植物遺体 2
			図版86	木製品の樹種 1	(顕微鏡写真 1)
			図版87	木製品の樹種 2	(顕微鏡写真 2)
			図版88	木製品の樹種 3	(顕微鏡写真 3)

第 I 章 調査に至る経過

1. はじめに

入江内湖遺跡は、米原町入江に所在する遺跡で、その範囲は旧入江内湖全域を指しており、縄文時代早期より平安時代に至る大複合遺跡である。

今回調査を実施した地点は入江干拓田の承水溝、つまり入江内湖の汀線の外側にあたり、従来の入江内湖遺跡の範囲外になる。このため発掘当初は新発見の遺跡として、入江内湖周辺遺跡と呼称していたが、当該地南方に広がる入江内湖遺跡と層位、標高、遺物年代がほぼ同じであり、入江内湖遺跡の範囲が広がっていたと考えるのが妥当であり、周辺遺跡という名称では、あたかも両遺跡が別の遺跡のような誤解を招くことより、本報告からは入江内湖遺跡として取り扱うこととした。しかし入江内湖遺跡は周囲 8 km におよぶ大遺跡であるため、小字名を地区名として設定し、さらに地区の下に調査回数を入れることにした。これにより、今回の調査遺跡名称は、「入江内湖遺跡行司町地区第 1 次調査」とした。

2. 調査の経過

昭和60年7月、従来より周知されている入江内湖遺跡の隣接地に、県立文化産業交流会館を建設する計画のあることが米原町教育委員会に知らされた。米原町教育委員会としては、開発面積が10,000㎡におよぶこと、入江内湖遺跡に隣接することより、当該地付近の分布調査を実施した。当該地はすでに建設用地のため、1 m 強の盛土がなされてしまっており、遺物の散布状況を把握することは不可能であったが、付近の水田からは土器片を表面採集することができた。この結果を滋賀県教育委員会文化財保護課に連絡するとともに、文化庁に対して新たに発見された遺跡として、遺跡発見届を提出した。

このようにして発見された入江内湖遺跡行司町地区に対し、滋賀県教育委員会文化財保護課は事前に試掘調査を実施し、遺跡の性格、範囲の把握に努めることとし、その調査の実施を米原町教育委員会に依頼した。

米原町教育委員会ではこの試掘調査の依頼を受けて、昭和60年8月22日より同年8月28日までの間、調査を実施した。調査は当該地区内に20m間隔に5 m×5 mのグリッドを計11ヶ所設定しておこなった。その結果、現地表面下2 m 付近に保存状況の良い木製品を多量に含む包含層を確認した。

この結果に基づき、昭和61年3月6日より同年7月12日まで、建物建設部分約6,000 ㎡の発掘調査を実施した。調査は試掘同様、米原町教育委員会があたった。出土した遺物の整理および報告書の作成については翌年度事業となり、昭和62年4月1日より昭和63年3月20日までの間おこなった。

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 位置

今回の調査地点は、滋賀県坂田郡米原町大字下多良2丁目137番地に位置する。この地は旧入江内湖の汀線と考えられる承水溝の外堤部に位置することから、内湖縁辺部の低湿地部分に相当すると考えられていた。調査時点ではすでに区画整理がなされており、盛土も1mほどなされていた。現地表面の標高は85.8～85.9mであり、盛土除去の旧水田面の標高はおおよそ84.8m内外である。地目は区画整理前はすべて水田であった。

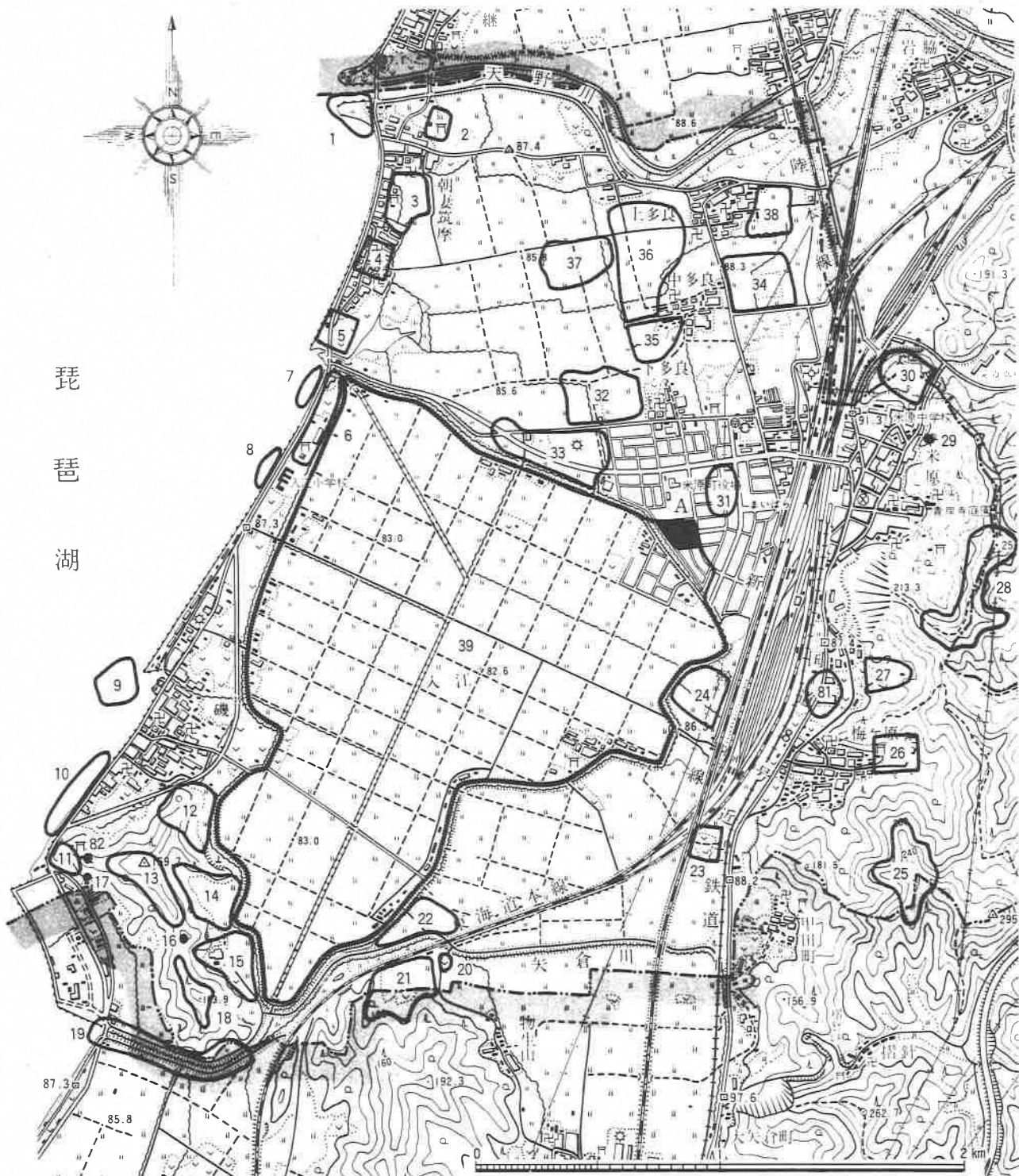
第2節 歴史的環境

入江内湖は東西2km、南北2.6km、周囲8kmにおよぶ、琵琶湖第2の大きさを誇る内湖であった。ところが昭和19年より昭和24年にかけて、干拓事業が実施された。この干拓事業の際、磯崎文五郎氏（現米原町文化財専門委員）の地道で熱心な遺物採集によって、入江内湖全域が遺跡であることが確認された。磯崎氏の採集遺物の内訳は、縄文時代に関しては早期の尖底土器、石棒、凹石、磨石、骨角製銚などがある。弥生時代では前期、中期、後期の土器をはじめ、鹿角戈4点、鹿角又鍬1点が注目される。古墳時代では勾玉、管玉、金環、石釧などの装飾具をはじめ、須恵器、古式土師器などの土器が多量に採集されている。また陶質土器も採集されており、坏蓋、長頸壺に関しては慶尚南道金海郡大東面禮安里39号墳や釜山市東萊区福泉洞10号墳等に類例があり、三国時代の新羅・伽倻からの舶載品として注目される。奈良時代以降の遺物に関しては、和同開珎、神功開宝などの銭貨をはじめ、墨書土器、灰釉陶器など平安時代末までの遺物が採集されている^①。

この入江内湖遺跡の縁辺部の遺跡に目を向けると、縄文時代では内湖の南西端に磯山城遺跡が位置している。磯山城遺跡では早期の押型文土器から条痕文土器が多量に出土しており、以後も前期より晩期に至る土器が、ほぼ空白時期を欠くことなく出土している。また早期末の屈葬人骨も出土している^②。磯山城遺跡のさらに南、彦根市に属する松原内湖遺跡からは縄文時代後期、元住吉山I式ないし一乗寺K式土器が多量に出土しており、磯山城遺跡とともに、琵琶湖東岸部における縄文時代の拠点集落であったと考えられる^③。内湖北岸では朝妻筑摩地先、小字佃に所在する筑摩佃遺跡からは早期条痕文土器及び中期船元式土器の出土がある^④。また中多良に所在する立花遺跡では小量ではあるが早期、中期、後期の土器の出土があり^⑤、内湖周辺の縄文遺跡の数は多い。

弥生時代については、中多良に所在する立花遺跡で前期の良好な資料が出土している。立花遺跡は前期に引き続いて中期・後期の土器も豊富に出土している。特に中期では玉造り関係の遺物が出土しており、注目される^⑥。

古墳時代では、内湖南西端に位置する磯山の西麓に磯崎古墳群が立地している。後期の群集墳で6基が確認されている。石室はいずれも横穴式石室で玄室は正方形プランとなっており、渡来系氏族もしく



- | | | | | | | | | | |
|----|-------|----|---------|----|----------|----|-------------|----|--------|
| A | 今回調査地 | 1 | 朝妻港跡遺跡 | 2 | 朝妻遺跡 | 3 | 朝妻城跡 | 4 | 法善寺遺跡 |
| 5 | 今江寺遺跡 | 6 | 筑摩御厨跡遺跡 | 7 | 筑摩湖岸遺跡 | 8 | 入江小学校前湖岸遺跡 | 9 | 磯湖底遺跡 |
| 10 | 磯湖岸遺跡 | 11 | 磯崎古墳群 | 12 | 磯山城遺跡 | 13 | 磯山城跡 | 14 | 堂谷遺跡 |
| 15 | 袖塚遺跡 | 16 | 神塚古墳 | 17 | 円山西古墳 | 18 | 虎ヶ城跡 | 19 | 矢倉川遺跡 |
| 20 | 埋塚古墳 | 21 | 物生山遺跡 | 22 | 入江内湖西野遺跡 | 23 | 福島城跡 | 24 | 米原駅西遺跡 |
| 25 | 菖蒲嶽城跡 | 26 | 霊水寺遺跡 | 27 | 善後寺遺跡 | 28 | 太尾山城跡 | 29 | 三郎谷古墳 |
| 30 | 岩谷遺跡 | 31 | 米原駅前遺跡 | 32 | 下定使遺跡 | 33 | 中多良入江内湖周辺遺跡 | 34 | 中多良遺跡 |
| 35 | 蘭華寺遺跡 | 36 | 立花遺跡 | 37 | 筑摩佃遺跡 | 38 | 本願寺遺跡 | 39 | 入江内湖遺跡 |
| 81 | 平野館跡 | 82 | ひじり山古墳 | | | | | | |

(遺跡番号は米原町教育委員会発行『米原町内遺跡分布調査報告書』1988と一致する)

第1図 遺跡周辺図

は海人との関連が考えられる^⑦。内湖北岸では、下多良に所在する下定使遺跡、中多良に所在する園華寺遺跡、立花遺跡、中多良遺跡などで古墳時代前期の集落が点在している^⑧。

奈良時代以降では、下多良に所在する中多良入江内湖周辺遺跡で万年通宝が出土している他、内湖南西岸、磯山の堂谷では白鳳時代と考えられる鷗尾および布目瓦が出土しており、古代寺院もしくは瓦窯が存在していたと考えられる^⑨。また内湖西岸に所在する筑摩湖岸遺跡からは墨書土器、風字硯、緑釉、斎串が出土しており、宮内省大膳職（後に内膳職）筑摩御厨跡と推定される^⑩。

このように入江内湖の南方は、松原内湖と入江内湖の背後に山をひかえ、琵琶湖を眼前に望み、また内湖北岸は初期農耕へのアプローチを容易にしたであろう低湿地が広がるという良好な立地条件のもとで、縄文時代から平安時代に至る遺跡の集中地域であった。

第3節 既往の調査

入江内湖遺跡は昭和19年より同24年に干拓事業が実施された際発見された遺跡であるが、今回の調査までに既に数ヶ所にわたり調査が実施されている。ここではそれらに次数を設定し、概略を記しておく。

1) 入江内湖西野遺跡（第1次）^⑪

昭和24年11月、京都教育大学小江慶雄氏によって、内湖南端を画する矢倉川と梅ヶ原承水溝の合流点近く、西野ガメ山北方の水田でおこなわれた調査。層序は表土が12～17cm、その下に腐植砂質土層が11～44cm堆積しており、以下薄い砂層、厚い礫層が存在していた。このうち腐植砂質土層より弥生式土器、土師器、須恵器が混在した状態で出土している。これらの遺物は砂流に沈澱堆積したものと考えられる。

2) 入江内湖西野遺跡（第2次）^⑫

昭和51年、矢倉川中小河川改修工事に伴い滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会が調査を実施した。

調査地点は入江内湖の旧汀線部に当たり、内湖辺に立地する遺跡の一端が知られた。旧陸地部では古墳時代中期末頃と考えられる、掘立柱建物3棟の他、溝、貯蔵穴、ピット群などの遺構が検出されている。

調査地域における内湖辺の変遷は、4層にわたる遺物の包含層が形成されている。まず内湖がスクモ（腐植土）によって埋り（第3層）、この時点で遺構が形成されるとともに、これに対応すると考えられる遺物の集積（第2層下部）ができ、遺構の廃絶後に、内湖部分をも覆って第2層上部の堆積がおこなわれている。第1層は後世の攪乱である。第3層から第2層上部までの包含層は純粋なものではないが、層位毎の形態的な差異の伺えるものがあり、湖北地方における土師器編年の基礎資料となった。

出土遺物のうち土器に関しては、大半が土師器であったが、弥生式土器および須恵器も出土している。石器類では石斧、石鏃、石錘が出土している他、銅鏃、管玉、小玉なども出土している。

なお木製品に関しては、たも網、弓などが出土しているが、農耕に関連するものが出土していないことは、西野遺跡の生産基盤を考えるうえで注意すべきであろう。

3) 入江内湖遺跡丸葎地区（第1次）^⑬

昭和60年、米原町立米原小学校新設に伴い、米原町教育委員会が調査を実施した。

調査の結果、遺構を検出することはできなかったが、木製品を多量に包蔵する包含層を確認した。この包含層より出土する土器はおおよそ古墳時代前期後半にあてはまるものであり、出土木製品もかなり時期を限定でき得る資料と考えられる。

遺物の出土した包含層(スクモ層)は標高83.0~83.5m付近にほぼ水平に堆積していた。これは現琵琶湖水面の84.371mより0.9~1.4m下となることが確認できた。入江内湖西野遺跡第2次調査で検出された遺構面の標高は84.3~84.6mであった。つまり、集落は内湖岸のやや微高地に立地していたと考えられ、入江内湖遺跡丸葎地区第1次調査で検出した包含層は微高地集落から破棄されたものと考えられ、出土した遺物を使用していた集落は、北方の内湖外に求められよう。

木製品の保存状態は極めて良好であり、出土量も豊富であった。器種は農耕具、狩猟具、容器、紡織具が中心であり、当時の一般集落における木製品の姿を如実に示している。これらは低湿地における農耕とともに、丸木舟、櫂、たもなどは琵琶湖の漁撈への積極性をも物語っている。入江内湖西野遺跡第2次調査では農耕具が出土しておらず、生産基盤が内湖に求められるとしているが、入江内湖遺跡丸葎地区第1次調査では農耕に依存しつつ、内湖への積極的なアプローチを認められるものがあった。

4) 入江内湖遺跡行司町地区(第1次) 今回の報告

5) 入江内湖遺跡丸葎地区(第2次)

昭和62年、免許サブセンター建設に伴い、米原町教育委員会が調査を実施した。

調査地は丸葎地区第1次調査地の東側隣接地で、調査の結果、耕土直下で厚い砂層の堆積が認められた。これは氾濫によって生じた堆積であると考えられる。遺物のごく少量出土したが、氾濫を裏付けるように、磨滅が激しいものばかりであった。この氾濫の時期は出土土器が庄内式~布留式に至るものであり、おおよそ古墳時代前期と考えられる。

6) 入江内湖西野遺跡(第3次)

昭和62年、町道彦根~米原線建設に伴い、路線上の試掘調査を実施した。

調査地は旧入江内湖部分と、内湖外側部分に分かれていた。内湖部分は現在でも沼状の低湿地で、底がないといわれている個所であった。調査の結果、現地表面下3mほど掘削をおこなったが、しまりのない粘土層とスクモ層のみであり、遺物の出土は皆無であった。

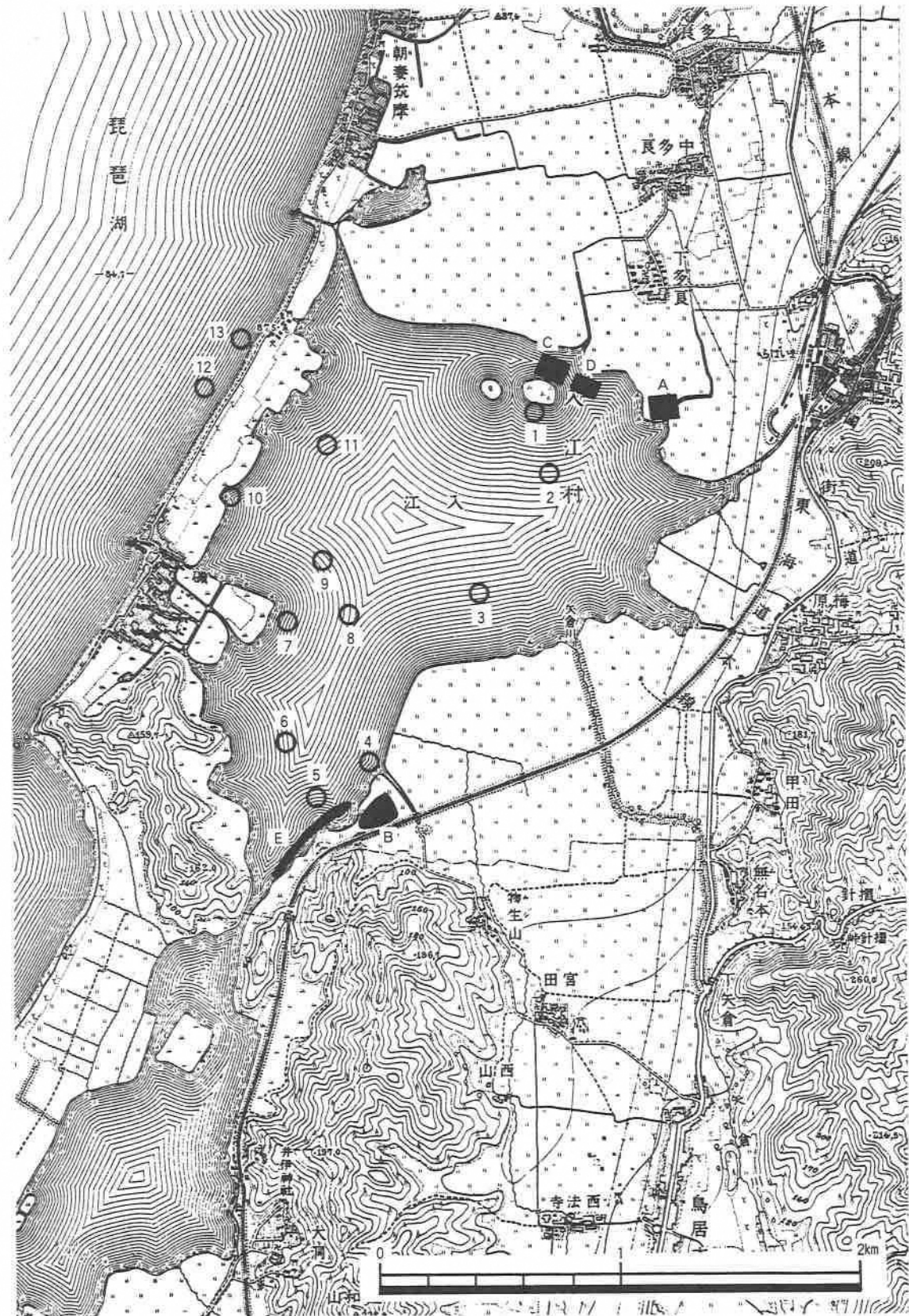
これに対して内湖外側部分では、入江内湖西野遺跡第2次調査と同様、旧汀線より陸側で安定した遺構面を確認した。試掘調査であり、遺構の発掘は実施しておらず、その性格は不明であるが、2次調査で検出した遺構と関連するものであろう。出土した土器の年代も、2次調査で出土したものとほぼ一致する。

以上、入江内湖遺跡に関しては、今回の調査を含めて6ヶ所におよぶ地点で発掘調査が実施されてきた。現在のところ旧内湖の縁辺部のみ調査で、内湖の中心に関しては不明である。しかし磯崎文五郎氏の採集地点は中心部にもおよんでおり、旧内湖のほぼ全域が遺跡であることはまちがいないであろう。しかも干拓事業によって遺構面、包含層が攪乱されているのではないかと思われていたが、耕土下は攪乱されることなく、遺構、包含層が認められた。これによって旧内湖は干拓されたものの、まだ充分遺構、

包含層の遺存していることが明らかになっており、今後も周辺の調査に大きな期待がもたれる。

註

- ① 磯崎文五郎氏の採集遺物の大半は、琵琶湖干拓資料館(米原町入江所在)において、保管・展示されている。なおこの磯崎氏採集遺物については、田中勝弘「入江内湖遺跡とその遺物」(『滋賀考古学論叢』第3集 滋賀考古学論叢刊行会 1986)などの論考がある。
- ② 中井均他『磯山城遺跡——琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査——』米原町教育委員会 1986
- ③ 細川修平「滋賀県松原内湖遺跡出土の篋状木製品」(『考古学雑誌』第72巻第4号 日本考古学会 1987)
- ④ 中井均『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会 1987
- ⑤ 中井均『立花遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会 1988
- ⑥ 前註⑤による。
- ⑦ 中井均『米原町内遺跡分布調査報告書』米原町教育委員会 1988
- ⑧ 前註④による。
- ⑨ 前註⑦による。
- ⑩ 中井均『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会 1986
- ⑪ 小江慶雄「琵琶湖湖底遺跡再考——最近の論議と新出遺物を中心として——」(『京都学芸大学学报』ser.A : No.13 京都学芸大学 1958)
- ⑫ 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1977
- ⑬ 中井均『入江内湖遺跡発掘調査報告書——米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査——』米原町教育委員会 1987



既往の調査 A 今回調査地 (行司町地区第1次) B 西野地区第1次, 第2次
 C 丸葎地区第1次 D 丸葎地区第2次 E 西野地区第3次

干拓時採集遺物の年代 1: 鎌倉, 2~3: 弥生, 4: 縄文・弥生, 5: 奈良, 6: 弥生, 7~12: 須恵器,
 13: 弥生

(地図は大正9年測量の1/25,000を用いた。遺物採集地点および遺物の年代は『筑摩の鍋冠祭』1981に拠った。)

第2図 入江内湖遺跡既往の調査位置および遺物採集地点位置図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査経過

現地での発掘調査は、昭和61年3月6日に開始し、7月12日までの約4ヶ月間を費やしておこなった。調査地はすでに1m近く盛土がなされており、しかも試掘調査の結果、包含層まで2mあったことにより、包含層まではバックホウにより掘削することとした。包含層は腐植土層（スクモ層）で多量の木製品が包含されているため、手掘りによった。当初木製品の出土状況図を作成していたが、出土層が包含層であり、しかも調査の季節が春から夏にかけてであり、一刻も早く木製品を取り上げなければ、破損するため、作図を中止し、写真撮影が終わると同時に取り上げていくこととした。

調査の結果、古墳時代の木製品が良好な状態で出土したので、6月14日、現地説明会を開催した。好天に恵まれ、地元関係者、滋賀県下の文化財担当者ら約150名の参加者を迎えた。

以後断ち割り、図面の作成等をおこない、7月12日をもって現場における調査工程を完了した。

第2節 層序と遺構

1. 層序

調査地区における層序は部分的に変化は認められるものの、基本的な層序に大差はない。

この基本的な層序は、第Ⅰ層（現代の盛土）、第Ⅱ層（灰褐色粘土層—旧水田耕土）、第Ⅲ層（青灰色粘土層）、第Ⅳ層（黒色腐植土層）、第Ⅴ層（青灰色砂質粘土層）、第Ⅵ層（暗灰色腐植土層—古墳時代遺物包含層）、第Ⅶ層（灰色砂層—古墳時代遺物包含層）、第Ⅷ層（暗灰色粘土層—基盤層）となっている。第Ⅰ層は厚さ0.6~1mにわたって堆積しているが、全て現代の盛土である。第Ⅱ層は厚さ70cmを測り、ほぼ水平に堆積している。区画整理される以前の水田耕土である。第Ⅲ層は厚さ60~70cmを測る。水田以前の内湖の堆積による湖成粘土層であろう。第Ⅳ層は厚さ15~30cmを測るスクモ層である。植物遺体のみで形成されている



第3図 現地説明会風景(S61, 6, 14)

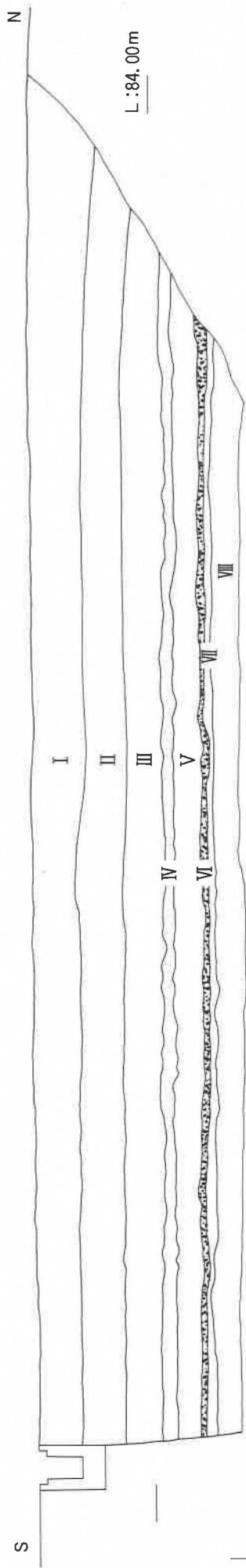


第4図 木器検討会風景(S62, 6, 20)



第5図 トレンチ配置図





L : 84.00m



- | | | | |
|-----|---------------|------|---------------|
| I | 現代の盛土 | V | 青灰色砂質土層 |
| II | 灰褐色粘土層(旧水田耕土) | VI | 暗灰色腐植土層(スクモ層) |
| III | 青灰色粘土層 | VII | 灰色砂層 |
| IV | 黒色腐植土層 | VIII | 暗灰色粘土層 |

第6図 土層堆積図(西壁部分)

が、人工的加工痕の認められるものは出土していない。内湖の低湿地時期を示す層であろう。第V層は厚さ40～50cmを測る。第VI層は厚さ10～30cmを測るスクモ層で、植物遺体とともに多量の木製品を包含していた。層内に包含されていた土器は古墳時代前期の布留式併行期のもののみであり、木製品もすべてこの時期のものであると考えられる。第VII層は厚さ10～25cmを測る。この層中にも若干の木製品が含まれていた。また土器に関しては最も集中して出土している。その内訳は弥生式土器、庄内式土器、布留式土器である。第VIII層では最上面にはりついた格好で縄文式土器、石器、弥生式土器、庄内式土器、布留式土器が出土している。このうち庄内・布留式土師器を除く遺物は激しい磨滅を受けており、原位置から遠く流されているようである。このように第VIII層は上面にのみ遺物の出土が認められ、層中は無遺物となる。

2. 遺 構

SD01

調査区の西端で検出した自然の流路である。調査区の南北方向を走り、北端でほぼ直角に東にクランクしている。埋土は礫層のみであり、上流より急激に、しかも短時間のうちに流れたと考えられる。幅6～10m、深さ1.4mを測る。調査区の南西方向に旧入江内湖が展開していることより、この流路は北東から南西に向かって流れていたと考えられる。急激に流れていたことを証明するように、埋土中より出土した土師器片は磨滅が激しい。

出土遺物は埋土中に含まれるもの以外に、河川の肩部分に安定した位置で高坏および小型の土師器の甕が出土している。これらの土器は布留式に併行する時期の遺物と考えられることより、このSD01も古墳時代前期に流れていたものであろう。

なお、このSD01は、第VII層より掘り込まれているが、上層の第VI層包含遺物と時期的に大きな変化はなく、SD01埋没後直ちに、水生植物の生えるような低湿地になったと考えられよう。

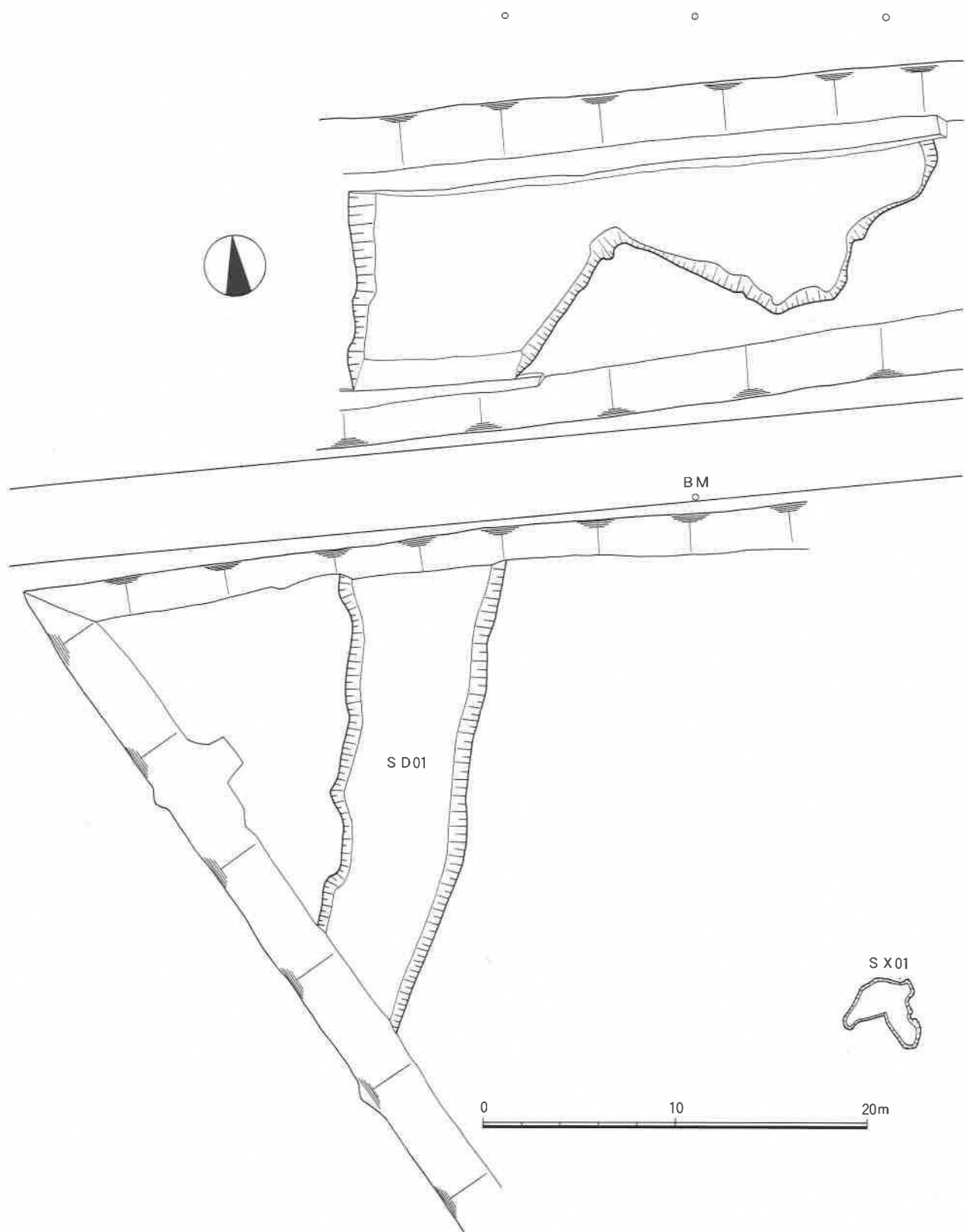
SX01

SX01は沼状の落ち込みと考えられる不定形の土壌である。出土遺物は皆無であるが、SD01同様、第VII層に掘り込まれており、古墳時代前半に形成されたものと考えられる。

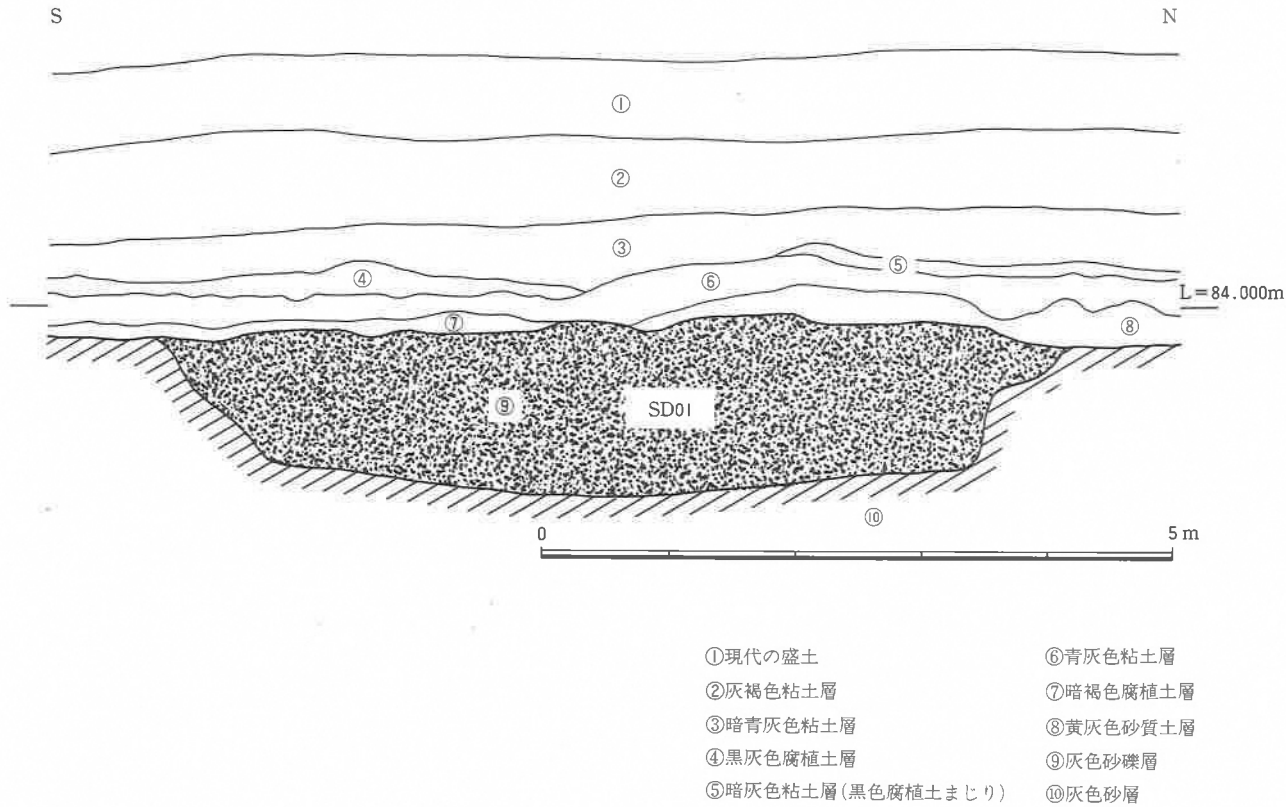
腐植土層（スクモ層）

今回の調査で検出された遺構はSD01およびSX01のみであった。しかも、いずれも出土遺物はほとんど含まれていなかった。今回の調査で注目されるのは、多量の木製品を包含していた、第VI層である。この第VI層は、葦などの水生植物が腐って堆積したと考えられる腐植土層で、一般的にスクモ層と俗称されている。自然堆積層ではあるが、滋賀県下、特に琵琶湖周辺部の調査では数多く検出されている。低湿地遺跡で検出される泥炭層でも、食料残滓の廃棄等の人為的条件によってできた泥炭層を特殊泥炭層と呼んだり、あるいは特殊粘土層と呼んだりしている^①。琵琶湖周辺部に形成される腐植土層は人為的ではないが、木製遺物を良好な状態で包含している、琵琶湖周辺部の特殊な腐植土層と呼ぶことができる。

今回の調査では調査区内全域において、このスクモ層を検出しており、その堆積範囲は調査区域外にも広がっていることが明らかとなった。このスクモ層中には大木の枝や根が含まれず、水生植物の茎が



第7图 SD01, SX01实测图



第8図 SD01断面図(西壁)

多量に含まれていることより、低湿地であったことは明らかである。

調査地近辺では、入江内湖遺跡丸葭地区第1次調査で、スクモ層が検出されており、やはり多量の木製品が包含されていた。この調査の断ち割り部分で、下層にも別のスクモ層が検出されており、数回にわたって低湿地化をくり返したと考えられる^②。また入江内湖西野遺跡第2次調査では汀線より旧内湖部分にかけてのみ、スクモ層が検出されており、集落の眼前には低湿地が広がっていたのであろう^③。

彦根市の松原内湖遺跡では腐植土層(スクモ層)が、草本類中心の上層と樹木類を多く含む下層に分層されており、木製品と土器を包含しているのは、スクモ下層と、さらに下層の黒色粘土層(植物遺体多く含む)の境界付近であった。遺物包含部には少なからず細砂が観察されており、湿地状を呈した旧内湖の中にあつて比較的水の移動が活発であった場所に集中的な遺物の堆積を示したものと判断されている^④。

湖南地方の調査では、志那湖底遺跡の第3層茶褐色腐植土層がスクモ層に相当すると考えられる。この層中からは自然木片を含む、木製品が出土しているが、土器はまったく出土しておらず、報告者は湖岸の葦原に漂着した木片が自然に集積したものと考えている^⑤。

以上数例ではあるが、湖辺部のスクモ層の検出例を提示してみた。このスクモ層は腐植土層であり、木製品を非常に良好な状態で保存してくれている。今後はこのスクモ層に対し、花粉分析をはじめ形成の要因等、自然科学分野からの分析こそが、琵琶湖の生成、遺物の堆積などの解明に寄与できるものと考えられる。

註 ① 甲野勇「青森県三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報」(『史前学雑誌』2巻4号 1930)

② 中井均『入江内湖遺跡発掘調査報告書——米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査——』米原町教育委員会 1987

③ 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1977

④ 細川修平「滋賀県松原内湖遺跡出土の筧状木製品」(『考古学雑誌』第72巻第4号 日本考古学会 1987)

⑤ 井上洋介『志那湖底遺跡発掘調査概要——志那南その2工区——』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1987

第3節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には土器、石器、金属器、木製品、自然遺物があった。遺構出土遺物は極めて少量で、大半が第VI層スクモ層出土遺物である。以下遺物の種別ごとに、遺構出土遺物を紹介し、つづいて第VI層出土の遺物を時代順に報告する。

(1) 土 器

SD01出土土器

(73)は高坏の坏部分で、硬質で堅緻な焼成である。内外面ともにナデられているが、外面にヘラの痕跡が残る。(74)は器高12cm、口径10.7cmの小型甕である。外面は体部から底部まで全体にハケを施し、口縁部はナデている。口縁部と胴部の接合痕が明瞭に残る。内面は口縁部はハケ、胴部はヘラケズリである。注目できるのは内面に湖成鉄の付着が認められることである。これら2点はいずれも古墳時代前期後半、布留式段階のものと考えられる。図示していないが、SD01からはこの2点以外にも土器の小片が出土しており、それらもほぼ古墳時代前期後半におさまる土師器である。

包含層出土の土器

縄文式土器

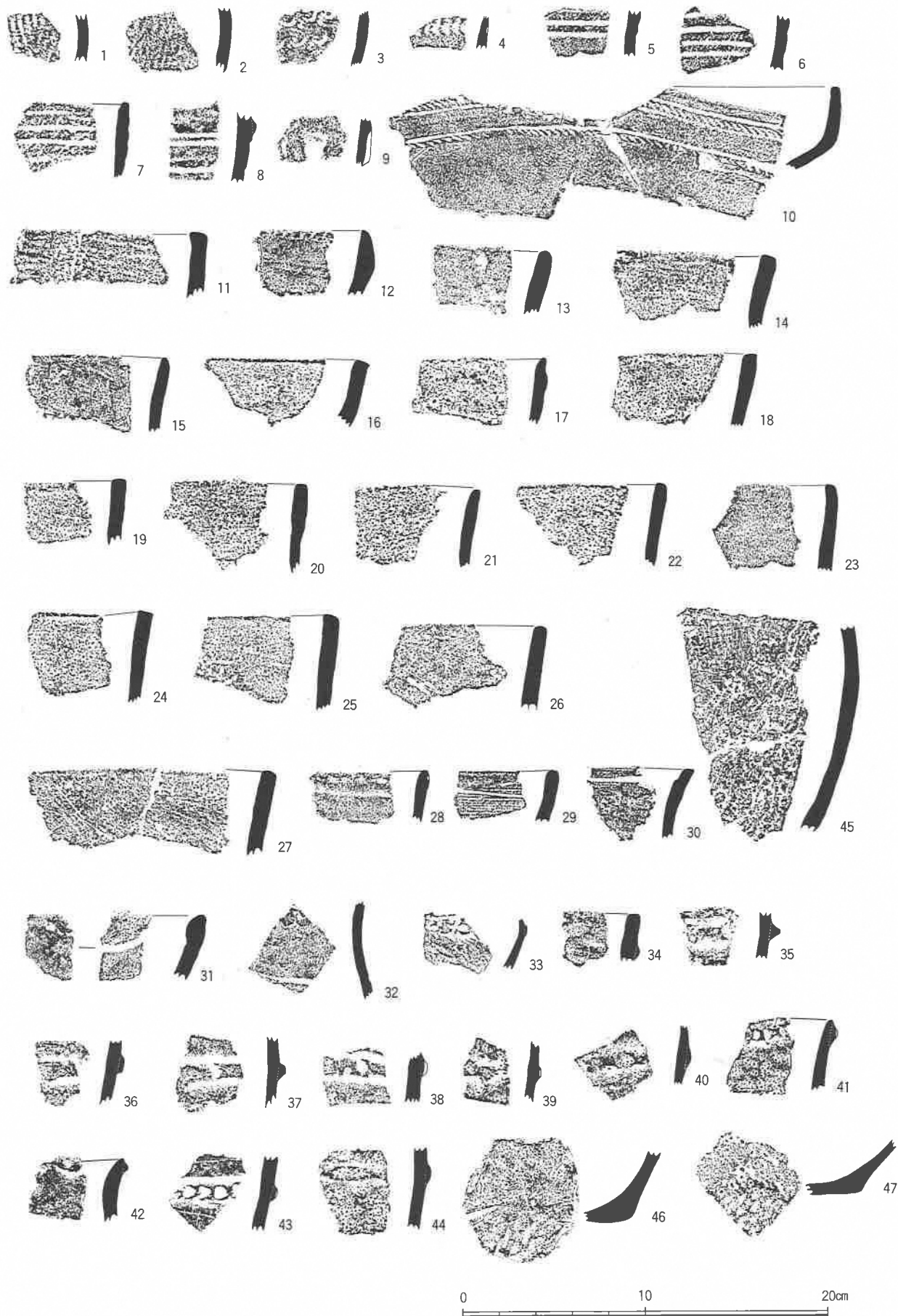
今回の調査で出土した縄文式土器は、すべて第VIII層の上面にはりついた状態で出土している。

(1)~(4)は器壁が薄く、焼成も堅緻で、おそらく前期の土器と考えられる。特に(4)はC字の爪形文を施しており、北白川下層Ib式である。(5)~(9)は沈線を施した後期の土器と考えられる。(9)は巻貝の扇状圧痕が認められ、宮滝式である。(10)は浅鉢で、口縁直下に2条の刺突を施し、その間に刻目を施し、胴部には一条の沈線を施し、その直下に刻目を施している。後期中~後半、一乗寺K~元住吉山II式併行であろうか。(11)~(45)は晩期の粗製土器と考えられる。(33)~(44)は突帯文土器で、口縁の残存する(41)に関しては、口縁と突帯が同時に製作されており、長原式と考えられる。(46)~(47)は縄文式土器の底部で網代の痕跡が認められる。

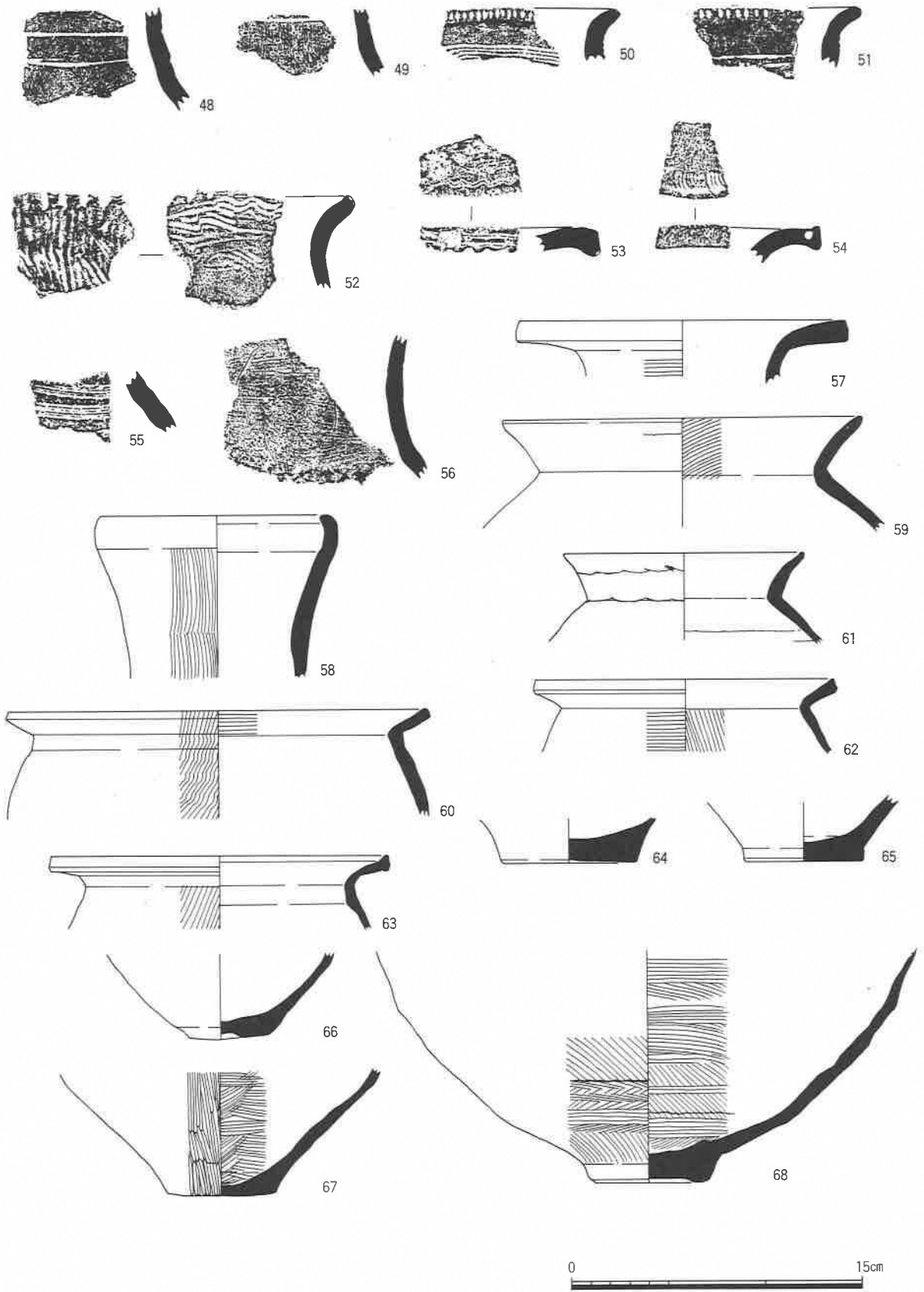
これらの縄文式土器は磨滅が激しく、原位置を保つものではなく、流されてきたものであろう。

弥生式土器

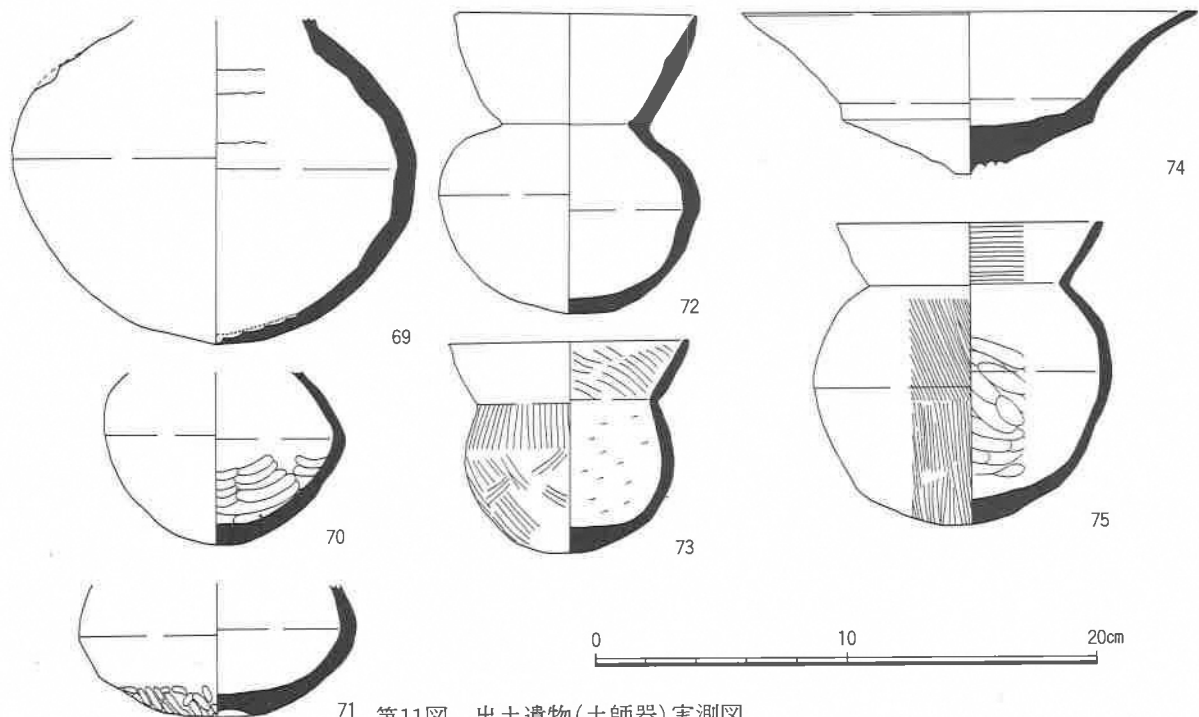
(48)~(51)は弥生時代前期の土器で(48)~(49)は沈線を施す壺、(50)~(51)は口縁端部に刻目を施し、体部に数条



第9図 出土遺物(繩文式土器)実測図



第10図 出土遺物(弥生式土器)実測図



71 第11図 出土遺物(土師器)実測図
69～73：包含層，74・75：S D 01

の沈線をめぐらす甕である。(52)～(58)、(60)、(62)～(63)、(69)は弥生時代中期の土器であると考えられる。(52)は口縁端部に刻目を施し、外面に粗いハケを施し、口縁内面は波状文、横線文、波状文を施す甕である。(53)は垂下する広口壺の口縁部分で、外面に横線を、下端に刻目を施し、内面は波状文を施す。(54)も壺の口縁部分で、内面に櫛描きの扇状文を施している。(55)は壺の体部と考えられ、櫛描横線文を施している。(56)は壺の頸部で外面全体に櫛描横線文を施している。(57)～(58)は壺の口縁部分、(60)、(62)～(63)は甕の口縁部分である。(69)は壺の体部で、外面全体にハケを施す。(59)、(61)は後期の壺の口縁部分と考えられる。(64)～(68)は弥生式土器の底部であるが、所属時期は不明である。これら弥生式土器も縄文式土器と同様、磨滅が激しく、流されてきたものであろう。

古式土師器

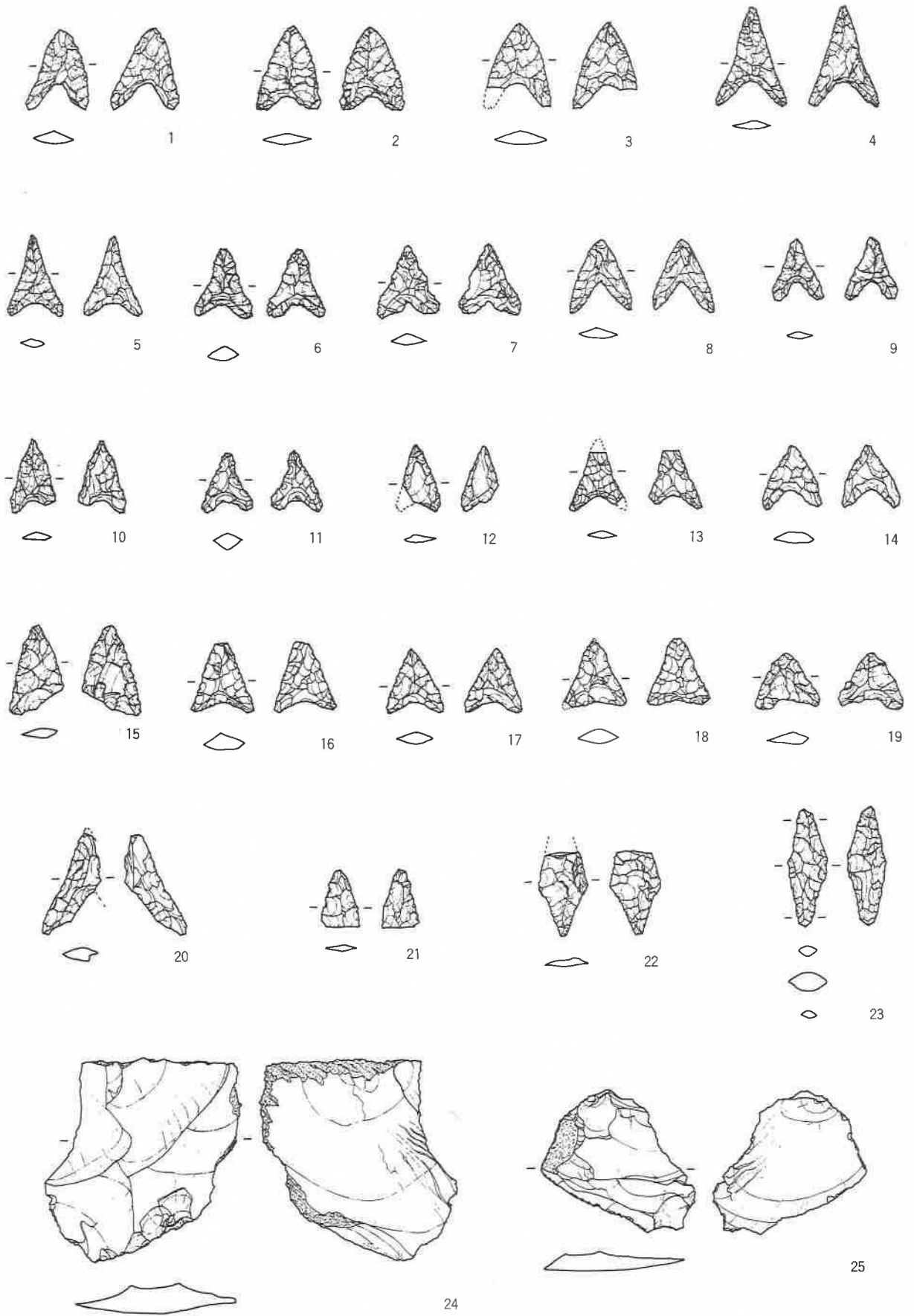
(70)～(72)は小型の丸底壺である。(70)、(72)は外面ナデ調整で内面はへら削りとなっている。(71)は外面へら磨きを施し、内面はナデとなる。(73)は小型の甕で、外面全体にハケを施し、内面は口縁部をハケ、体部をへら削りとしている。これらはいずれも古墳時代前期後半の段階の土器としてとらえられ、S D 01出土土器とほぼ同時期のものと考えられる。包含層中からは、これら図示しているものの他、多量に古式土師器の小片が出土しており、同層中より出土する木製品もおそらく、これらの土師器と同時期のものであろうと考えられる。

(2) 石 器

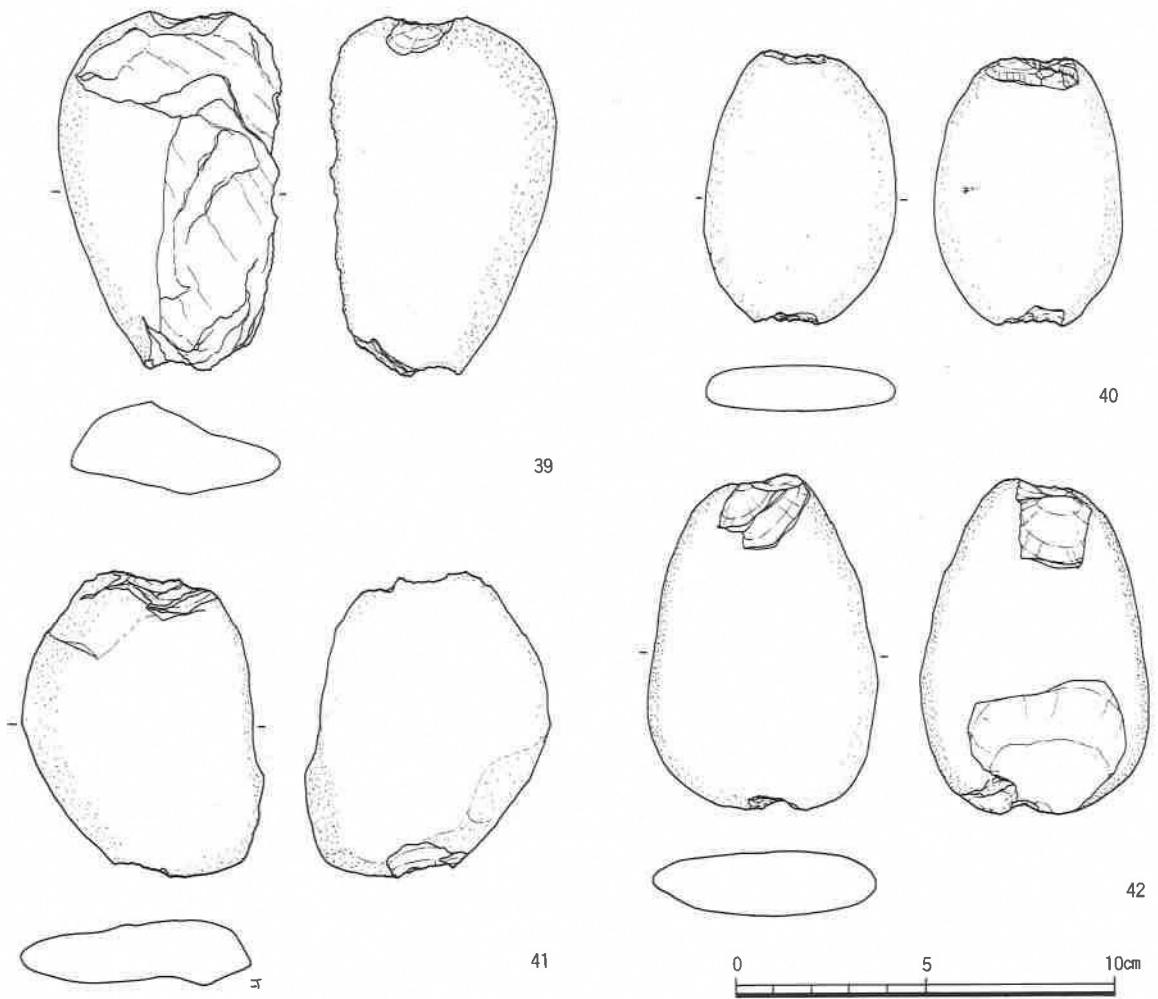
当遺跡において出土した石器はすべて、第VIII層の粘土層と上位の洪水砂層との間から出土している。共伴遺物としては、縄文式土器と弥生式土器があり、両者は混在して出土する。石器の多くは、磨滅のため、光沢やキズをもっている。これらのことから、本遺跡の石器類は本来の原位置を遊離していると考えら

第1表 石器の観察表

No.	石器名	長さ(m/m)	幅(m/m)	厚さ(m/m)	重さ(g)	石 材	産 地	資料番号
1	石 鏃	21.4	18.0	3.4	0.98	サヌカイト	—	
2	"	22.3	21.9	3.0	0.95	"	二上山	18296
3	"	22.2	(22.3)	3.7	0.97	"	二上山	18297
4	"	26.8	19.2	3.0	0.91	"	—	
5	"	21.1	15.3	2.8	0.55	"	—	
6	"	17.9	15.0	4.2	0.71	"	—	
7	"	18.1	16.5	3.1	0.64	"	—	
8	"	18.4	16.4	3.3	0.63	"	—	
9	"	16.0	13.6	2.4	0.33	"	—	
10	"	19.1	(12.2)	2.5	0.46	"	二上山	18301
11	"	15.0	13.0	4.2	0.55	チャート	—	
12	"	17.0	(9.3)	2.1	0.30	サヌカイト	—	
13	"	(15.3)	(14.0)	2.1	0.40	チャート	—	
14	"	16.0	15.5	3.1	0.55	サヌカイト	—	
15	"	23.2	15.2	3.2	1.05	"	二上山	18300
16	"	18.5	16.9	4.5	0.96	チャート	—	
17	"	17.0	15.1	3.9	0.57	サヌカイト	—	
18	"	(17.0)	16.1	3.9	0.76	チャート	—	
19	"	14.4	17.3	2.9	0.61	サヌカイト	—	
20	"	28.9	11.2	3.6	0.85	"	二上山	18298
21	"	(15.1)	(9.8)	(2.7)	0.34	"	—	
22	"	(22.0)	13.0	3.0	0.77	"	—	
23	石 錐				1.49	"	—	
24	剥 片	54.0	51.0	11.3	27.1	"	二上山	18291
25	"	38.0	40.9	4.6	7.6	チャート	—	
26	"	(20.5)	(25.8)	3.1	2.4	サヌカイト	金 山	18284
27	"	(25.1)	(30.0)	3.8	2.9	"	金 山	18283
28	"	15.8	21.1	2.4	1.2	"	岩 屋	18285
29	"	20.3	17.0	3.2	1.2	"	二上山	18286
30	"	13.2	18.4	4.0	1.3	"	"	18287
31	"	16.2	14.0	5.0	1.5	"	"	18288
32	"	20.0	9.0	2.0	0.6	"	"	18289
33	"	(12.2)	16.8	3.0	1.1	"	"	18290
34	"	(26.0)	11.5	3.1	1.2	"	"	18292
35	"	(18.0)	(19.3)	(3.0)	1.0	"	"	18293
36	"	17.1	17.7	3.1	0.9	"	"	18294
37	"	(15.1)	(13.8)	2.2	0.8	"	"	18295
38	"	11.2	14.2	2.1	0.5	"	"	18299
石錘								
39		93.5	60.7	22.0	133.0			
40		71.4	50.4	10.9	81.3			
41		89.4	60.7	19.8	116.4			
42		87.5	61.6	16.0	123.5			



第12図 石器実測図 (1~22: 石鏃, 23: 石鏃, 24・25: 剝片)



第13図 石器(石錘)実測図

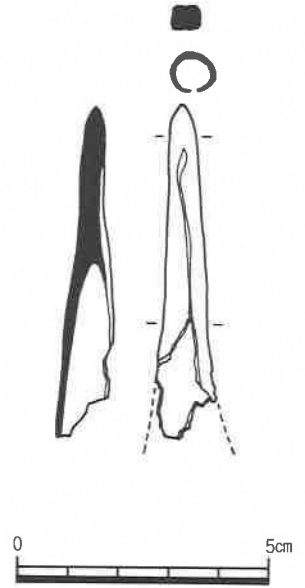
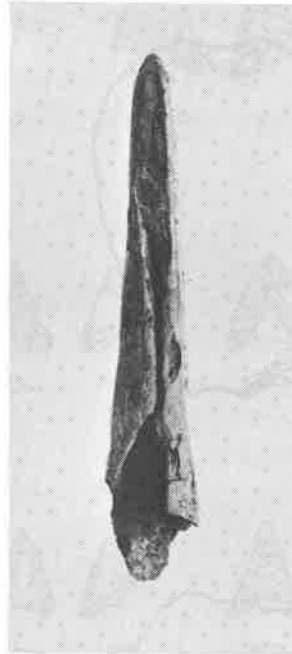
れる。

出土石器としては、石鏃、石錐、石錘、剥片がある。打製剥片石器には、サヌカイトとチャートが用いられており、製品の中における比率は、19：4でサヌカイトが多く用いられている。サヌカイトの産地分析の結果、金山、岩屋、二上山のものが出土している。なお、図番号と付論の資料番号は一致しないが、観察表に対応を明記している。

石錘には、扁平な円礫を用い、打ち欠きによってノッチ（えぐり）を作り出している。ノッチはすべて長軸の両端に入れられている。

(3) 金属器

木製品に混って金属器が出土した。これは表面が緑色を呈しており銅が含まれていると考えられる。図で見るように、袋状に加工を施しており、先端部は尖り、先端の断面は、角丸の方形を呈している。これらのことから古墳時代の石突に類するものとした。



第14図 金属器 (S=1/1)

第15図 金属器実測図

(4) 木製品

今回の調査で出土した遺物の中では木製品が最も注目できる。出土した木製品の総点数は、2,389点にのぼり、自然木を含めると3,000点以上となる。

木製品は下記の表のように分類整理した。以下、この順序で報告したい。樹種については、「付論1 入江内湖遺跡行司町地区出土木製品の樹種の調査結果について」を参照されたい。

1. 農耕具	鋤・鋤・えぶり・柄・杵・槌
2. 狩猟具	たも・弓・浮子・鞘
3. 運搬具	櫓・櫓・アカトリ
4. 容器	槽・盤・高杯・脚台・曲物
5. 紡織具	糸巻・木錘・切り目板
6. 生活・ 厨房具	匙・へら・俎板・臼・椅子
7. 工具	火鑽臼・鎌
8. 祭祀具	刀形・剣形・鏃形・舟形・円板
9. 楽器	琴
10. 建築材	梯子・井筒
11. その他	有頭棒・棒状・板状・部材・不明



1. 農耕具

a. 広鋤 (1~7)

未完成品を除く鋤は、広鋤Fと考えられるもので^①、前面の頭部付近に補強材(あて板)を挿入した「蟻じゃくり」の溝を有している。この「蟻じゃくり」は断面が内広がりの台形状となり、上場幅が1.8~2.6cm、下場幅が2.4~3.2cmを測る。つまり補強板は表よりはめ込むことは不可能であり、側面より挿入したとしか考えられない。これによって挿入された補強板は前後の打ち込み操作に対して非常にはずれにくいものとなったであろう。着柄角度は(1)が61°、(2)が67°、(3)が62°、(4)が60°、(5)が62°、(6)が63°となる。側辺の残

る(1)~(5)では、頭部から側辺にかけての形状が微妙ではあるが全て違っている。しかしこれは鍬の機能差を示すものではなく、製作者もしくは使用者の違いによるものであろう。(7)は未完成品の広鍬である。舟形突起まで作り出されている。しかし厚さが刃部で2.7cmあり、製品の鍬が1.2~1.5cmであるのに対し、異常に厚く、製作初期の段階にある未完成品の可能性が高い。

b. 膝柄股鍬 (8~10)

従来二股の着柄鋤とされていたものであるが、近年、膝柄を固定した股鍬が出土し、その機能が鍬であることが判明し、現在では膝柄股鍬と呼ばれるようになった^②。ここでは膝柄股鍬として報告する。

(8)は鍬身のはほぼ完形品である。着柄軸を撥形につくり、身部を二股につくる。軸の先端は断面半月形の棒状となり、身部に近づくとつれて幅広となり、伸びきったところが笠形に突出している。身部は刃部を外側にした刀を2本ならべたような形を呈する。全身67.2cm、着柄軸長15.6cm、同幅2.0~11.2cm、同厚さ2.0cm、身部長51.6cm、同最大幅7.2cm、同厚さ1.2cmを測る。

(9)、(10)も膝柄股鍬の破片で、(9)は着柄軸基部と身部の一方が現存している。(10)は着柄部分の破片である。(9)は現存長43.65cm、身部の最大幅7.5cm、厚さ0.75cm、(10)は現存長16.95cm、最大幅8.7cm、厚さ1.5cmを測る。

c. 一木鋤 (11)

身と柄を一木でつくる鋤。身の一部と柄の先端部分を欠損するが、ほぼ完形をとどめる。身の前面はゆるやかな舟底形を呈する。また、身の肩部は肥厚し、刃部にいくにしたがって薄くなる。柄は身に対して、まっすぐに交わり、柄の断面は円形となる。現存長77.4cm、身幅16.5cm、同長さ27.0cm、同厚さ0.9~3.3cm、柄長50.4cm以上、同直径2.7~4.2cmを測る。

d. 組合せ農具 (12~20)

いわゆる着柄の農具で、もちろんa、bもこれに相当するが、ここではa、bに属さない特異なものを一括した。

(12)、(13)は鍬と考えられるものである。いずれも前面頭部付近に(1)~(6)同様「蟻じゃくり」の溝を有する。舟形突起はなく、頭部より刃部に至るまで厚さはほぼ一定している。着柄孔は円形で、着柄角度は(12)が63°、(13)が60.5°を測る。(13)は着柄孔が身の中心になく、前面で左側にかたよっている。狭鍬の一種であろうか。(12)は現存長30.0cm、厚さ1.2cmを、(13)は現存長29.25cm、幅11.85cm、厚さ1.2cmを測る。

(14)は着柄の鋤と考えられる。刃部の縦横断面が湾曲するスコップ状で、方形の頭部を有する。着柄孔の脇には、あて板を装着したときに、緊縛するための方形孔が穿たれており、その孔には緊縛した、桜の皮の紐が残されている。現存長27.3cm、刃部の厚さ0.9~1.5cmを測る。富山県江上A遺跡出土鋤中の鋤A₁と分類されるものとほぼ同形である^③。

(15)は身と柄を一木で作った鋤で、短冊形を呈する。柄部と身の境には「く」の字状のえぐりが入る。刃部先端は扁平ではなく、中央部が尖る。現存長52.5cm、刃部幅9.3cm、同厚さ1.2cmを測る。

(16)~(20)も鋤であるが、形状はバラエティーに富む。(16)はナスビ形の形状を呈し、頭部に短い着柄軸を持つ。着柄軸は断面カマボコ型となり、その端部は節状となる。刃部中央よりやや頭部側に長さ6.9cm、幅2.4cmの長方形孔がある。おそらく、着柄軸で結ばれた柄が左右に動かないよう、柄の先端がさし込ま

れたのであろう。全長39.6cm、身部長34.5cm、同最大幅13.8cm、同厚さ1.2cm、着柄軸長5.1cm、同幅2.1cm、同厚さ1.2cmを測る。

(17)はやや小ぶりのスコップ状を呈する。やはり短い着柄軸がつき、その先端は節状となっている。刃部中央よりやや下がったところに長方形の着柄孔を穿つ。全長25.5cm、身部長20.7cm、同厚さ1.2cm、着柄軸長4.8cm、同幅2.4cmを測る。

(18)、(19)は、刃部が欠損しており形状は不明である。しかし、縁辺部がカーブを描かず、直線的であることより、(16)のようなナスビ形状になるのではなく、長方形の平面を有する鋤であろう。いずれも頭部付近に長方形の着柄孔を有する。また(18)は頭部に着柄軸の痕跡を残している。(18)は現存長19.5cm、幅15.3cm、厚さ15cm、着柄孔の長さ5.1cm、幅2.7cm、(19)は現存長30.6cm、幅14.55cm、厚さ1.2cm、着柄孔の長さ6.0cm、幅2.7cmを測る。

(20)は平面では鋤状の形状を呈している。しかし、刃部中央に着柄孔のあることから、鋤であることにまちがいない。着柄軸のかわりに、撥形の頭部を作り、頭部中央に穿たれた2つの方形孔の間に柄を置き、紐で緊縛したものと考えられる。全長35.4cm、身部長28.2cm、同幅19.8cm、同厚さ1.2cm、頭部長7.2cm、同最大幅15.3cm、同厚さ1.2cmを測る。

これらの鋤の形状の相違は時期差を示すものではなく、むしろ、深掘用の反転具、耕起具、土の移動具という、機能の違いによるものであろうと考えられる。

e. えぶり (21~31)

一般にえぶりといえは細長い板の長辺に鋸歯形の歯を切り込んだものであるが、ここでは、楕円形に近い円鋤状のものをえぶりとした。

(21)はほぼ完形で、頭部付近の中央部に円形の着柄孔を穿ち、刃部中央部に方形の小孔を穿っている。着柄は身に対して直交するものではなく、現存する着柄孔より観察すると、47°の角度を有していたこととなる。そして前後のぶれを防ぐため、刃部小孔に支木をはめ込んで柄を固定したと考えられる。つまり耕作に従事する人間は、腰をまげずに、柄を引くことによって、田ならしが容易にできたであろう。頭部付近に補修孔が認められる。全長31.5cm、幅18.6cm、厚さ0.6cmを測る。

(22)~(25)も(21)と同様、えぶりの破片である。いずれも刃部付近に小さな方形孔を有している。(24)は補修孔が多く認められる。

(26)はえぶりの頭部の破片と考えられる。頭部頂の断面は三角形を呈し、ここにあて板をくわえ込ませたのであろう。刃部は不明であるが、赤野井湾遺跡で同形のもので出土しており、刃部は(21)~(25)のような隅丸のものとなっている^④。これから類推すると、(21)~(25)は完形品ではなく、頭部は(26)状のものでついていたとも考えられる。すなわち(21)や(24)に見られる補修孔は頭部が折れたため、再使用する目的で穿たれたものとして理解できよう。

(27)~(31)もいずれもその形状より、えぶりの破片と考えられる。

f. 農具の柄 (32~44)

(32)~(35)は着柄農具の柄と考えられるものである。しかし(32)、(33)が着柄された場合、柄が鋤の前面から大きく外反するのに対し、(34)、(35)は、逆に鋤の前面部分へ屈曲して、鋤と直交するようになる。つまり

(32)、(33)は、耕作に従事するものが立った状態で腕力によって、鋤を土に入れ掘り返していったと考えられる^⑤。(32)の着柄先端部分は紐でしばったものが抜けないように突起をつくり出し、そり返りが始まる部分にも突起をつくり出している。この部分には紐のしぼり痕が残る。また、裏面先端5.4cmのところ有一段の段を有しており、着柄がずれないようにしている。

(34)、(35)も農具の柄と考えたが、前述したように、装着した農具（鋤か？）の前面に着柄した部分からすぐに内湾するため、(32)、(33)のように立ったままで耕作はできない。つまり腕の力に頼り前進して起耕するものではなく、柄を土に対して直に立てて、踏み込むものと考えられ、鋤はスコップ状のものが装着されたのであろう。一木鋤ではあるが、平城京6 AFISD881出土鋤や^⑥、民俗例であるが、江州鋤に近い形状になるものと考えられる。

(36)~(44)は鋤の把手である。(36)~(38)は、スコップの把手同様、環状にしたものである。(36)(37)は断面が円形に近い。(38)は断面が方形で、環も方形で把手としては握みにくく、製作途中の未完成品か、あるいは針葉樹であるため、把手ではなく、別の部材かもしれない。

(39)~(42)は円柱状の把手で、別木の柄を差し込む方形孔が中央に穿たれている。

(43)、(44)は一木鋤の柄の部分である。柄の断面は円形となり、先端把手部が撥形となる。(43)は把手部に加工を施しておらず、握みにくい。おそらく未完成品であろう。(44)の把手は一応把手部分を環状に穿孔しているが、手で握ることは不可能であり、これも未完成品であろう。

g. 豎杵 (45~61)

豎杵は大きく2種類が存在すると考えられる。1つはいわゆる豎杵で、両端部が搗部で、中央が握部になるものである。(45)は完形品で、搗部、握部ともに断面は円形となる。搗部先端は使用痕が著しく、平坦となってしまっている。全長88.0cm、搗部径6.8cm、握部径4.2cmを測る。

(46)~(51)も、おそらく、この豎杵で、握部で折れてしまった、搗部分と考えられる。(46)、(47)は、搗部と握部を明瞭に分けており、(45)に近い形態を示すものであろう。ただし(46)は、側部に敲打痕が残っており、横槌として、再利用されたことも考えられる。(50)、(51)は、搗部と握部の境界に段を設けるもので、池上遺跡の分類による、第I型式に属するものである。

さて、2種類のうちのもう1種であるが、横槌の形状で、一升壺に似る。つまり、片方が搗部となり、もう片方が握部になると思われるものである。(52)~(61)がこの類に相当するものと考えた。完形品が1点もないので、この種の形状を断定することはできないが、(55)や(59)の先端部径は2.8cmと非常に細くなっており、もう一方にも搗部がつくとは考えられず、ここでは、片側にのみ搗部のつくものとしておきたい。いずれも、搗部端部に使用痕が残っており、横槌ではなく、短い豎杵として使用されたことはまちがいない。

h. 横槌 (62~65)

円柱状の身部と棒状の柄からなる横槌である。(62)は身部長28.4cm、身部径14.0cm、柄部現存長10.4cm、柄部径4.8cmを測る大きなもので、身の側面に敲打痕が残る。

(63)は現存身部長16.8cm、身部径6.8cm、柄部長13.2cm、柄部径4.0cmを測る。柄部は先端部で幅広となり、握部を形成している。

(64)、(65)は身部と柄部が明瞭に分かれるものではなく、身部が徐々に細くなり、柄部となるものである。(64)は柄部の断面が方形となる。いずれも身部に敲打痕を残す。(64)の現存長24.0cm、身部径4.8cm、柄部幅2.4cm、(65)の現存長24.4cm、身部径5.2cm、柄部径2.8cmを測る。

2. 狩猟具

a. たも (66~67)

たもは2点出土している。いずれも自然木の枝を利用したものである。(66)は杵部の先端付近を削り込み、段を設けている。おそらく両端をくくりあわせる際、ずれを生じさせないように、この段の部分で紐を結んだのであろう。柄基部は細かい削りによって仕上げられている。柄部径2.8cm、杵部径1.6cmを測る。

(67)もほぼ同様の形状である。ただし柄基部に段を削り込んでおり、あるいは別木と着柄したものかもしれない。杵部先端は焼けている。柄部径2.4cm、杵部径1.2cmを測る。

b. 弓 (68~70)

(68)は全体に粗い作りで、弓弭も3方向から粗く掘り込んで作りだしている。池上遺跡の弓弭分類にあてはめるならば、E類に相当するものであろう⁷⁾。中央部で径2.8cmを測る。

(69)は弓弭付近と中央部の断面がかまぼこ状となり、他は円形に近い。弓弭は頭部を丸く仕上げている。池上遺跡のB類に近い。弓身全体に漆が塗られている。中央部で径3.2cmを測る。

(70)は(69)とほぼ同じ形状で、中央部で径3.6cmを測る。

c. 浮子 (71)

(71)は鏝あるいはヤスの形状をした木製品である。身部と茎部からなり、その境に段を設けており、茎部が差し込めるようになっている。身部の先端は尖がっている。身部の断面は円形となる。ここでは浮子としたが、富山県江上A遺跡では同様のものを鏝形木器としている⁸⁾。現存長7.1cm、身部長6.3cm、同径1.5cmを測る。

d. 鞘 (72)

(72)はほぼ完形の鞘の片身である。両端を撥形に広げており、断面はかまぼこ状となる。内面は刀身がおさまるよう、浅く削り込まれている。この削り込み部分の先端は鋒先が両刃状を呈していることより、短剣の鞘であったことがわかる。また、外面撥部直下に、紐で結んだ圧痕が残っており、同様の対になる鞘を重ね合わせ、草木のつるなどで結んでいたこともわかる。全長17.6cm、幅3.7cmを測り、木製鞘中では最小の部類に属する。

3. 運搬具

a. 櫂 (73~91)

(73)~(86)は明らかに櫂と見られるものであるが、完形品はない。いずれも水かき部分は扁平であるが、柄は断面円形になるもの(73)~(75)、(81)と、断面方形に近いもの(76)~(78)がある。また水かき部分の先端は丸くおさめるが、(78)、(85)は水平におさめている。水かき部分の最大幅は(73)が11.2cm、(74)が11.6cm、(75)が8.8

cm、(77)が10.0cm、(78)が10.4cm、(79)が12.0cm、(80)が7.2cm、(84)が7.2cm、(85)が10.0cm、(86)が8.0cmを測る。このように櫂の出土が目立つのは、内湖遺跡の性格を物語っているものといえよう。

(87)~(91)はその形状が櫂に酷似するため、ここに収めたが、別の用途が充分考えられる。つまり、これらは水かき部分に孔が穿たれており、櫂としては、あまり能力を発揮できるものとは考えられないのである。(87)、(88)は楕円形の孔を左右に穿っている。(89)は水かき頂部に近いところで小さな円形孔を左右に穿っている。(90)は、水かき部の上下に大きな方形孔を穿っている。(91)は水かき部のほぼ中央の左右に半月形の孔を穿つほか、側縁部に1ヶ所方形の孔を設けている。孔自体が半月形の特異な形状を示していることから、孔自体に何らかの目的があったのであろうか。これらはすべて針葉樹ではあるが、農耕具の可能性もありうる。水かき部の最大幅は(87)が8.4cm、(89)が11.6cm、(90)が11.6cm、(91)が14.4cmを測る。

b. 橈^{そり}状木製品 (92)

(92)は橈と考えられる木製品である。断面が逆T字状の形状をしており、底部両脇が薄く翼状に張り出している。おそらくこれと同形状のものとセットにして用いたと考えられる。背面に2ヶ所の方形の掘り込みがあり、ここに横木を渡し、その上に物資を載せたのであろう。先端部分は側面に方形の孔が穿たれており、軸木が現存している。これはこの孔に横木を打ち込み、もう一方の橈に渡していたと考えられ、これに紐などを結びつけて、引っぱったのではないかと考えられる。たぶん低湿地での物資運搬に用いたもので、いわゆる田舟のような働きをしていたのであろう。現存長85.2cm、底部幅10.4cm、身部幅4.0cm、身の高さ3.6~8.8cmを測る。

c. アカトリ (93~105)

ツイカワ（塗取）とも呼ばれ、舟の中に入った水を排水するのに用いたものである。形状はヒシヤクに似る。身部と柄部からなり、身部の先端は水がすくいやすいように徐々に薄くなっていく。柄は断面円形となる。身部と柄部が残っているものは、すべて一木でできており、柄の長さも片手で握れる程度のものである。ただし(101)は身部の掘り込みが浅く排水には適しておらず、あるいは杓子かもしれない。(95)は柄との接合部に小孔が穿たれており、柄と身は別木であった可能性が高い。(96)、(99)、(100)、(104)、(105)は柄を欠損しているが、民具資料の中には柄のないアカトリもあるため、これらも、柄が欠損したのではなく、あるいは当初からないものであったかもしれない。また民具例には柄が別木で1mに及ぶものがあり、(95)などは、別木の柄であるので、あるいは長い柄が着柄されていたとも考えられる^⑨。

4. 容器

a. 脚付容器 (106~114)

容器の底部外側に、2足あるいは4足の台脚のつくもので、浅鉢(106)~(112)、箱形容器〈槽〉(113)、皿〈盤〉(114)に細分が可能である。

(106)は長方形になると考えられる平面に、楕円形の浅い見込み部分を掘り込み、底部外面に台形の脚部を4ヶ所に設けていた。現存するのはその3分の1の部分と見られる。上面は見込み部分以外の外縁部分に弧文を線刻する。特に外縁端部の施文は掘り込んでレリーフ状となっている。底部には、片側の台脚より外縁部分に、やはり弧文の線刻を施している。端部の一部掘り込みや、底部片側のみの施文よ

り、あるいはこれらの線刻施文は製作途中の下書き線で、最終的には全体を外縁端部のようにレリーフするものであったとも考えられる。全長39.0cm、現存幅7.2cm、見込み部分長22.8cm、同現存幅6.0cm、器高3.6cm、台脚高2.4cmを測る。

(107)は楕円形の平面になる浅鉢で、底部外側には、立方体の台脚が4ヶ所に設けられていたとみられる。ほぼ2分の1が現存する。全体に器壁は非常に薄く仕上げられた精巧品である。現存長29.7cm、現存幅12.6cm、器高11.7cm、台脚高4.5cmを測る。

(108)はやや丸味をおびた方形の平面になる浅鉢で、底部外側には、直方体の低い台脚が4ヶ所に設けられている。(107)同様、器壁が薄く仕上げられた精巧品である。全長18.3cm、現存幅12.0cm、器高2.7cm、台脚高0.6cmを測る。

(109)は浅い楕円形を呈する鉢で、底部外側に、下駄の歯のような板状の台脚をつくりだす。この台脚は身よりも高くなっている。ほぼ2分の1が現存する。現存長36.8cm、現存幅9.6cm、器高12.8cm、台脚高6.8cmを測る。

(110)も(109)同様、浅い楕円形を呈する鉢で、底部外側に外反する台脚をつくりだす。見込み部分中央に3ヶ所の長方形の孔を穿っており、補修孔と考えられる。現存長36.8cm、現存幅15.6cm、器高8.2cm、台脚高4.0cmを測る。

(111)も平面が楕円形となるが、見込み部分の掘り込みはほとんどなされておらず、底部外側の台脚も未分離の状態で、おそらく未完成品と考えられる。現存長35.7cm、現存幅11.7cm、器高6.9cm、台脚高2.4cmを測る。

(112)は丸味をおびた方形の平面を呈する鉢で、底部はらくだのコブ状の台脚をつくりだす。身部の見込みの掘り込みは浅い。未完成品と考えられるが、台脚の形状から別の用途(椅子)の可能性もある。現存長31.8cm、現存幅7.2cm、器高8.1cmを測る。

(113)はいわゆる箱形容器で、一般に槽と呼ばれるもので、長方形の平面形をとり、短辺の器壁は斜めに立ち上る。底部外側に低い台脚が4ヶ所につくりだされている。全長38.1cm、現存幅7.8cm、器高7.5cm、台脚高0.6cmを測る。

(114)は平面が長方形を呈する皿(盤)と考えられる。長辺部分には器壁がなく、短辺部分もわずかに立ち上がるのみで、ほぼ板状のものに、台脚がつくりだされている。台脚は外側には直に立ち上がるが、内側にはゆるやかなスロープを描いている。現存長31.8cm、現存幅11.1cm、器高3.6cm、台脚高2.1cmを測る。

b. 箱形容器(槽) (115~123)

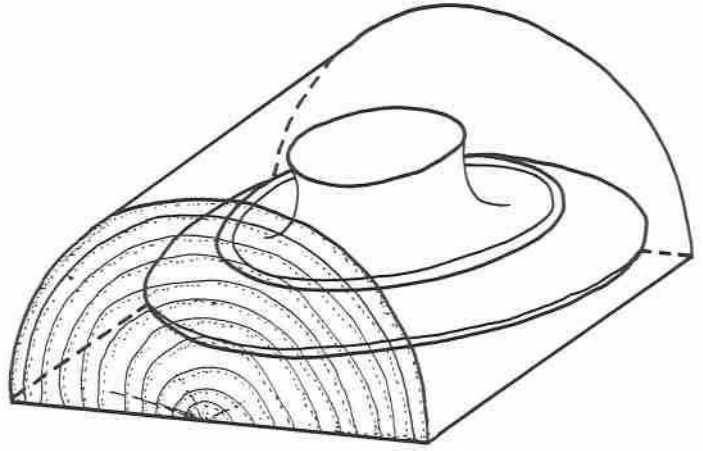
(115)は形状が(113)と同様、長方形の平面形をとり、短辺の器壁が斜めに立ち上がるものである。片側の短辺器壁に2つの孔が穿たれている。補修孔としては孔が大きく、その用途は不明である。全長66.4cm、幅20.4cm、器高8.8cmを測る。

(116)はやや特異な形状の槽で、半裁した自然木を掘り込んで見込み部分をつくりだしている。したがって、底部は平坦とならず、舟底状を呈する。外面は節をそのまま残しており、加工は非常に粗い。現存長39.6cm、現存幅13.2cm、器高10.0cmを測る。

(117)～(123) も長方形、あるいは楕円形の槽の一部分と考えられるものである。(120)を除いて、他のものは器壁の立ち上がりが低く、あるいは皿(盤)とも考えられよう。概ね加工は並である。(121)は見込み部分と底部を除いて器面全体に漆を塗っている。

c. 皿(盤) (124～126)

平面が円形になるものを、ここでは盤としておいた。(124)は外縁と見込み部分が明瞭な段になっておらず、舟底状となる。(126)は明瞭な段を有し、見込み部分は平坦となる。



第16図 高杯木取り模式図

これらはいずれも器高は低く、盆状をなす。ところが(125)は平面は円形になるが、器高が高く、皿という食膳具よりは、容器としての用途が考えられる。それぞれの器高は、(124)が5.6cm、(125)が11.2cm、(126)が4.0cmを測る。

d. 高杯(127)

(127)は直径42.4cmを測る、大型の高杯の杯部である。ろくろ引きによる製作と考えられる。内面見込み部分に一段の段を有し、この段より内側に赤色顔料を全面に塗っていたと考えられ、現在一部分にその痕跡を残す。外面は身部と脚部接合部からなり、身部には内面の段とほぼ同位置にやはり段を設けている。接合部には5ヶ所にわたり半円形の透しを設けている。また脚部との接合は放射状に穿った5ヶ所の柄仕口でおこなったと考えられる。柄仕口は波状に掘り込まれているが、その大きさ、深さは一定していない。外面身部には漆の痕跡が認められる。なお見込み部分に2ヶ所の方形孔と、器壁部分に円形孔が穿たれている。この高杯は形状、大きさが奈良県纏向遺跡出土高杯に酷似している。器高は11.2cmを測る。

e. 脚台状木製品(128～132)

(128)～(132)は平面が円形となる盤状のものである。ところが盤に想定してみると内面見込み部分の調整が粗く、外面や底部の調整が精巧であり、(124)～(126)の盤とは別の機能が考えられる。(128)～(131)は外面に段を有しており、ここでは高杯などの脚部に相当するものではないかと考えた。

(128)は器壁に刳り込みを施している。おそらく(128)、(129)、(131)は中央に柄仕口が穿たれ、軸部と接合していたのであろう。(130)は接合部もなく、直径も14.4cmと小型であり、あるいは蓋になるものかもしれない。また(132)は未完成品と考えられる。

f. 底板(133)

(133)は曲物や井筒など円柱状の木製品の底板である。側面に小孔が穿たれており、釘穴であろう。現存長25.5cm、厚さ1.5cmを測る。

5. 紡織具

a. 織機 (134~135)

(134)は板状の身の両端に柄状の突起をつくりだしたものである。柄部には小孔を穿つ。身の断面は長方形であるが、端部の幅に上下で差を生じている。復元長34.2cm、身長30.3cm、同幅3.6cm、同厚さ0.3~0.8cmを測る。

(135)は断面カマボコ状の身の両端に柄をつくりだしている。全長37.5cm、身長26.4cm、同幅3.9cm、同厚さ0.9cmを測る。これらはおそらく紡織に伴う木製品と考えられ、経巻具ないしは布巻具であろうか。

b. 木錘 (136~139)

(136)~(139)は、ツチノコ、コモツチなどと呼ばれる、もじり編み用のおもりである。

(136)、(137)は、渡辺誠氏の分類による^⑩、I Y d型と呼ばれるもので、丸太の中央に溝が一周する形態をなしている。(136)は全長15.9cm、幅12.6cm、厚さ9.6cmを測り、(137)は全長18.9cm、幅7.5cmを測る。

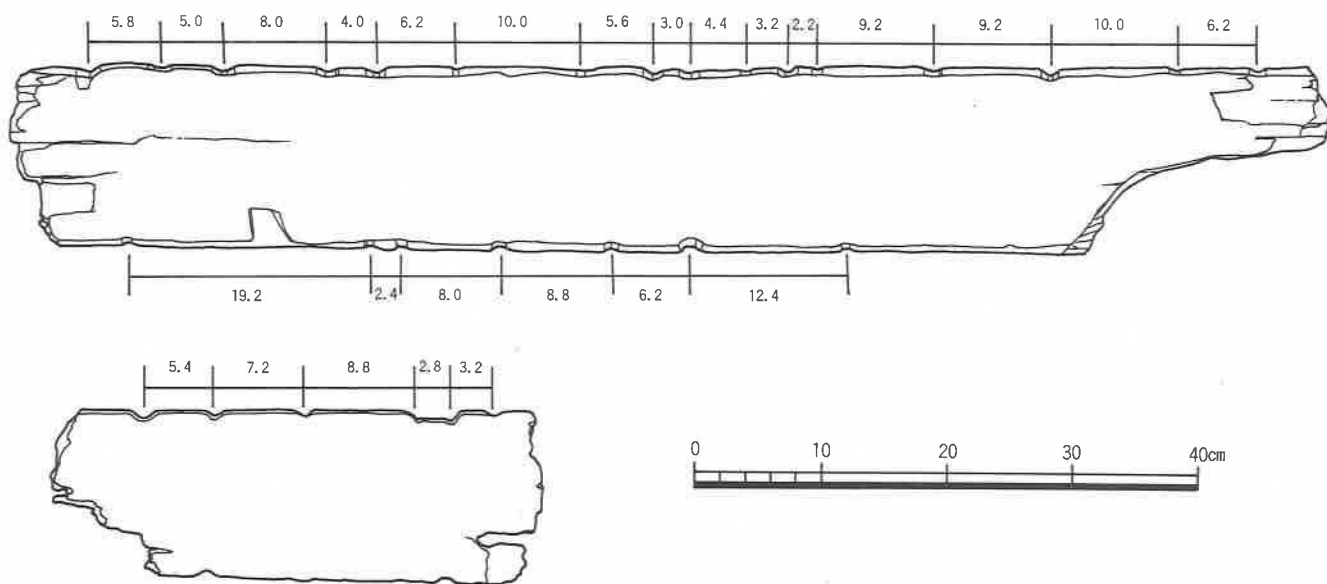
(138)は同じくI Y f型と呼ばれるもので、丸太の中央に向い細くなるようにした典型的な鼓形で、両端に旧丸太面を残す。この型式は民具資料としての木錘では、最も典型的な形態である。

(139)は、(136)~(138)が丸太材を用いているのとは異なり、太い丸太材を輪切りにした、ミカン割りにする形態で、渡辺氏のII Y a型に属する。これはミカン割りにされた長方形を呈す側面の中央で、芯寄りの上端寄りに穿孔されたものである。全長14.8cm、幅6.4cm、厚さ8.8cmを測る。

c. 目盛板 (140~141)

bの木錘を用いてもじり編みを行なうのには編み台が必要となる。(140)~(141)はこの編み台に伴う目盛板である。

(140)は幅13.6cm、厚さ1.2cmを測る板材。(141)は現存長104.4cm、幅14.8cm、厚さ2.0cmを測る板材で、目盛は両側に設けられている。これらの目盛の間隔は第17図の通りで、統一性に欠け、編み物の製品ごとに数種類の使い分けがおこなわれていたと考えられる。



第17図 目盛板寸法図

6. 生活、厨房具

a. 匙 (142)

(142)は非常に精巧に作られた匙である。現代のスプーンとほぼ同形で、木葉形の身に斜めに立ち上る柄をつくりだす。柄の中央に段を有しており、別木を差し込んで柄をつけたと考えられる。この段より身側に小孔が穿たれている。

b. ヘラ状木製品 (143~144)

(143)、(144)はヘラと考えられるものである。幅の狭い杓子状の形状をなす。身部と柄部からなり、いずれの断面も楕円形となる。(143)は現存長24.9cm、身幅2.7cm、同厚さ0.9cm、柄幅1.8cm、同厚さ1.2cmを、(144)は全長39.9cm、身幅2.7cm、同厚さ0.9cm、柄幅2.1cm、同厚さ1.2cmを測る。あるいは杓子とも考えられる。

c. 俎板あるいは折敷 (145)

長方形の身部に台脚のつくもので、本来の用途は不明である。入江内湖遺跡丸葎地区第1次調査で、台脚を差し込む俎板が出土しており、^⑩(145)もその大きさや形状が似ることより、俎板としておいたが、供膳の折敷とも考えられよう。現存長77.6cm、現存幅19.6cm、器高6.8cm、台脚高3.2cmを測る。

d. 臼 (146~147)

(146)は臼の上部、臼部の破片と考えられる。内面はなめらかで、搗部で搗かれ、飛び散った穀物を受けける部分であろう。

(147)は、臼部から台部まで残っており、全体の約2分の1が現存している。原木自身がややいびつであったのか、ややひしゃげた形状となる。臼部が台部より大きくなっている。内面は2段となっており、搗部と、飛び散った穀物を受けける部分とに別かれている。台部内側は上げ底状となる。臼部の復元径96.8cm、台部の復元径81.6cm、器高51.2cmを測る。

e. 椅子 (148)

(148)は椅子と考えられる木製品である。台脚付浅鉢に形状は似るが、長辺部分には器壁部分の立ち上がりがなく、容器としては考えにくい。短辺部分は幅3.9cmの面取りをおこなっている。全長46.2cm、幅26.7cm、現存器高12.0cmを測る。

7. 工具

a. 火鑽臼 (149)

(149)は割材を用いた火鑽臼で、現存長25.2cm、幅2.7cm、厚さ1.8cmを測り、断面長方形の棒の榫目面に臼部をつくる。臼部は6ヶ所認められる。この6ヶ所の臼部は全て火鑽杵によって使用されており、黒く炭化している。臼部の直径は約1.5cmである。

b. 鎌の柄 (150~151)

(150)、(151)は鎌の柄部分と考えられるもので、(150)は柄の断面が楕円形を呈しており、柄尻は腹面側に大きく内湾して、すべり止めをつくりだしている。

(151)は柄部の断面が隅丸の長方形を呈しており、柄尻は腹面側に幅の広い船の舵状のすべり止めをつ

くりだしている。

8. 祭祀具

a. 刀形木製品 (152)

(152)は刀をかたどった形代で、鞘からぬいた抜身で表現している。『木器集成図録』の分類では、A型式一柄と刀身を表現するもの一に相当する。刀身と柄をはっきりと区別し、柄元の幅を広くし柄間の内側に弧状の割り込みを入れ、頭椎風の柄頭をつくる。刀身も実際の刀を忠実に模倣し、刀先、刃先、鑄をつくりだしている。精巧品。全長42.6cm、刀身長32.1cm、同幅3.0cm、同厚さ0.8cm、柄部長10.5cm、同幅1.8cm、同厚さ0.9cmを測る。

b. 剣形木製品 (153~155)

剣をかたどった形代で、A型式一柄と剣身を表現するもの一、B型式一茎と剣身を表現するもの一とがある。

(153)はA型式に属する精巧品である。先端部分が欠損している。柄は端部を有頭状としており、断面は四角形となる。剣部は中央に鑄をつくり、刃部は両刃となり、断面は菱形となる。現存長27.6cm、剣部現存長21.0cm、同幅2.7cm、同最大厚さ0.9cm、柄部長6.6cm、柄部幅1.35cm、柄部厚さ1.2cmを測る。

(154)は剣部のみ現存しており、柄がつくのか、茎となるかは識別不能である。全体的に厚くなる。現存長21.75cm、幅4.2cm、厚さ1.8cmを測る。

(155)はB型式に属するもので、剣身は、剣先を欠損している。剣身中央に鑄をとおしている。関部(刃区)を削り込み、柱状の長い茎をつくりだしている。現存長19.2cm、剣身現存長12.0cm、同幅3.3cm、同厚さ0.9cm、茎部長7.2cm、同幅1.35cm、同厚さ0.75cmを測る。

c. 刀形あるいは剣形の柄 (156)

(156)は刀形あるいは剣形木製品の柄部分ではないかと考えられる。柄の把部分が弧状となり、端部兜がねの部分が大きく外反している。平城宮跡より類似品の出土があるが、それらは刀形に伴う柄部である^②。

d. 鏃形木製品 (157)

(157)は鏃を模した形代と考えられる。身部と茎部からなり、身部には右端に孔があり、おそらく左側にも穿たれていたと考えられる。現存長8.4cm、現存幅2.1cm、厚さ0.6cm、茎部長2.1cmを測る。

e. 円板状木製品 (158)

表面に直弧文様を施文した円板状の木製品であるが、本来の用途は不明である。鏡を模したものと考えられるが、紐の存在は見あたらない。表面の施文は(106)同様、線刻であるが、部分的にレリーフ状に凸凹をつけており、全体にレリーフする以前の未完成品である可能性も非常に高いものといえよう。径5.7cm、厚さ0.6cmを測る。

f. 舟形木製品 (159~168)

舟をかたどった木製品、舟形代は全部で9艘を数える。形態から大きく2種の分類が可能である。

A型式一舟長が27cm内外の小型のもの (159~162、165、166)

B型式一舟長が50cm以上の大型のもの(163、164、167、168)

(159)は精巧に出来た舟型で、舳と艫を明瞭に作り出している。舳底部付近に小円孔を穿つ。舳と艫部分には切り込みを斜位に施している。あるいは久宝寺遺跡で出土した準構造船^④を模した舟形で、斜位の切り込みは、波切り板を装着する溝を表現したものととも考えられる。沖ノ島出土石製模造品の舟形や、兵庫県辻井遺跡出土舟形木製品なども明らかに構造舟を模しているものがあり^⑤、本遺跡でも構造船の部材に相当すると考えられる木製品も出土しており、(159)は、構造船を簡略な表現によって模したものと考たい。現存長26.4cm、幅3.9cm、高さ1.8cmを測る。

(160)は、ノミ痕を明瞭に残す粗製品で、形もややいびつである。船の撓貫きは、一度焼いてからおこなわれたと考えられ、船内側は炭化している。全長25.8cm、幅3.3cm、高さ3.0cmを測る。

(161)、(162)は精巧な造りであるが、(159)のように舳部と艫部が明瞭に分離していない。(161)の両端部を観察すると、鋭く尖がる側(舳か?)と、丸くおさまる側(艫か?)となっている。(159)を準構造船を模したものと考えるならば、これらは丸木船の模造形代と考えられるのではないだろうか。

(165)、(166)は、A型式に属するが、船体胴部の幅が他のA型式のものに比べて広くなり、高さが低くなるという特徴を有している。(165)の胴部復元幅は約5.6cm、高さ1.6cmを測る。

(163)、(164)はB型式に属し、非常に大型のものである。同様のものとしては、石川県黒氏遺跡出土のものが全長94.0cm、滋賀県森浜遺跡出土のものが53.2cmを測る^⑥。(163)は現存長23.1cm、同幅7.5cm、高さ3.9cmを、(164)は現存長32.1cm、同幅8.4cm、高さ3.9cmを測る。

(167)、(168)は大きさからB型式としたが、船形代に断定するには疑問も残る。ここでは一応未完成品と考えておく。(167)は現存長52.4cm、幅12.0cm、高さ4.4cmを、(168)は全長48.0cm、幅8.0cm、高さ3.6cmを測る。

9. 楽器

a. 琴(169)

(169)は用途不明の木製品ではあるが、形状から琴を推定してみた。本品は琴の共鳴槽部分に酷似している。つまり、断面凹状のくり抜き一木づくりで、底部の厚さ2.0cm、磯板高5.2cmを測る。幅は12.8cmと小さい点から、琴の竜尾付近に相当するのではないだろうか。

10. 建築材

a. 梯子(170~173)

梯子と考えられる製品は4点出土している。(170)、(171)は踏段が1段のみ残ったもので、踏段の断面は、踏み部が垂直に切られ、下部は斜位に切られている。(170)は全幅24.4cm、厚さ4.4cm、踏段幅20.4cm、同高5.6cm、(171)は全幅20.8cm、厚さ2.4cm、踏段高4.8cmを測る。

(172)は踏段2段を残すもので、踏段断面の形状は(170)、(171)と同じである。現存長82.4cm、幅14.0cm、厚さ2.0cm、踏段高2.8cm、踏段間隔30.0cmを測る。

(173)も踏段2段を残すものである。下端中央に大きな方形孔が穿たれ、縁辺部も斜位に切り込まれ、

転用された可能性が高い。また上端部両脇にも小さな孔が2ヶ所穿たれている。上端部には踏段が存在しておらず、これが梯子の天場と考えられる。2ヶ所の方形孔は建物と梯子をくくりつける施設とも考えられよう。踏段の断面は他の3点と違い、下部の綾線が明確でなく、ゆるやかなカーブを描きつつ、次の踏段の踏部上端に至っている。全長80.0cm、幅15.2cm、厚さ3.6cm、踏段高3.6cm、踏段間隔25.2cmを測る。

b. 井筒 (174~176)

井戸の底に据え付けられた、井筒と考えられるもので、富山県江上A遺跡では、同様の木製品を桶と報告されている。機能的には同じである。湾曲した板を何枚かで組み合わせて円筒形とし、下端部で肥厚して段をなしている部分に底板を受けさせたのであろう。

(174)は全長27.3cm、幅7.35cm、厚さ0.8cm、(175)は長さ35.7cm、幅13.5cm、厚さ1.5cm、(176)は長さ30.6cm、幅13.5cm、厚さ2.4cmを測る。また、推定される復元口径は、(175)が31.8cm、(176)が55.0cmの井筒となり、それぞれ8枚と15枚でもって組み合わされていたと考えられる。

11. その他

a. 有頭棒 (177~231)

棒状木製品のうち、両端部もしくは片側端部を削り出して頭部をつくりだすものが多く認められる。ここではこれらを有頭棒として一括し、次のように分類した。

A-1 型式——頭部下に細く削り込み先付けをするもの。

A-2 型式——片側端部に撥形の頭部を設けるもの。

A-3 型式——片側部分を順次削り込み、端部を丸く削り出すもの。

B-1 型式——両端部下に細く削り込み、先付けをするもの。

B-2 型式——両端部を順次削り込み、端部を丸く削り出すもの。

A-1 型式 (177~210)

形状は小型の杭を連想させるもので、頭部下を細く削り込み先付けをするものである。削り込んだ部分に何かを結びつけて、機能したものと考えられる。頭部から中央にかけての断面は円形もしくは隅丸方形となるが、先端部分は楕円形となり、平面の形状も先端部分は尖がっている。大きさ、太さもほぼ均一化されている。完形品中で(177)を例にとれば、全長59.2cm、中央径1.6cm、先端部最大幅2.0cmを測る。用途は不明であるが、先端部が尖がっていることから、湖岸に差し込み、削り込み部分に糸を結びつけた、漁猟用の木製品が考えられる。民俗資料でいう、ヒッカケバリやモンドリなどの棹の機能をはたすものか。同様の木製品は、守山市赤野井湾遺跡^⑧や能登川町斗西遺跡^⑨で報告されている。本遺跡出土木製品の中でも、櫂、アカトリなどと共に出土数は多く、やはり湖に関係する木製品としておきたい。

A-2 型式 (212~215)

棒状木製品の片側端部に撥形の頭部を有するもので、孫の手のような形状を示すものである。完形品はなく、もう一方の端部の形状は不明である。(212)、(213)は端部がL字状に外反している。

A-3 型式 (211、216~220、222、224、229~231)

棒の片側端部が有頭をなすものであるが、完形品はなく、もう一方の端が不明なため、B-2型式になる可能性は充分考えられるものである。大半は断面が円形となる棒状であるが、(220)は半裁された材を用いており、断面も半円形となる。

B-1型式 (225、227)

両端部よりやや内側に、ていねいに削り込みを入れ、先付けをしたもので、その形状はチマキに似る。(225)は全長42.8cm、幅3.0cm、厚さ2.0cmを測り、断面は隅丸方形となる。(227)は同形を呈するが、一方は欠損しており、両側に削り込みがあったかは不明である。断面も丸味を帯びている。

B-2型式 (221、223、226、228)

両端部を削り込み、有頭としたもので、(226)の断面がいびつなものを除き、半裁の材を用い、断面は半円形となる。(221)は中央に削り込みを施した精巧品である。(221)は全長54.0cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm、(223)は全長49.2cm、幅3.2cm、厚さ2.5cm、(226)は全長36.4cm、幅2.0cm、厚さ2.0cm、(228)は全長28.8cm、幅4.0cm、厚さ1.6cmを測る。

b. 棒状木製品 (232~260)

(232)~(247)は小形の棒状木製品で、端部が尖がるもの(232)、(233)、(235)、(237)~(239)、(242)、(243)と、扁平になるもの(234)、(236)、(244)、(245)、(247)がある。特に(237)~(239)は細く鋭利に尖がっており、ヤスのような刺突具としての機能が考えられる。

(249)は自然木を半裁して用いており、一端を有頭状につくりだす。平坦面には一段の段を設ける粗製品。

(250)、(251)、(252)は棒状というより、細長い板状の木製品で、両端部側面から切り込みを入れ、有頭状を呈する。切り込みは粗雑である。(250)は現存長37.2cm、幅5.0cm、厚さ2.0cm、(251)は全長38.4cm、幅5.0cm、厚さ3.2cm、(252)は全長64.0cm、幅7.6cm、厚さ2.8cmを測る。

(248)は端部を有頭状とし、かつ有頭部の一方に切り込みを入れ、一段の段を有している。現存長53.2cm、直径5.2cmを測る。

(253)は半裁の材を用い、三方を多面的に削り、一方は平坦面をなす。削り込んで段を有しており、その部分の断面は半円形となる。

(254)は先端部が尖がっており、中心部の断面は円形、先端部は半円形となる。この断面の形状の異なる接点部分に、切り込みを入れている。

(255)は棒状木製品の中を含めたが、平面の形状、断面の形状から、経巻具、布巻具の可能性もある。両端部を棒状につくりだし、鎚をつけ、断面凸状としている。やや湾曲している。全長32.8cm、幅4.2cm、厚さ1.6~2.4cmを測る。

(256)は半裁した材を用いた棒状木製品で、断面は半円形をなす。現存長56.0cm、幅3.4cm、厚さ1.2cmを測る。

(257)~(260)は長大な棒状木製品で、端部は有頭をなしている。(259)、(260)は片側端部手前に、中央に向って一方向から切り込みを入れている。特に(259)の切り込みは2ヶ所におよんでいる。(260)は全長111.6cm、直径4.8cmを測る。

c. 柄頭状木製品 (261~266)

(261)、(262)は杖の柄の部分ではないかと考えられる。精巧な作りで、(261)は玉杖の柄とも考えられ、把手部を削り込んで作り出している。いずれも杖部とは別木であったようで、接合部に段をつくりだして、差し込んでいたと考えられる。(261)は現存長16.5cm、幅1.8~4.2cm、(262)は全長18.3cm、最大幅2.4cmを測る。

(263)は櫛の柄部ではないかと考えられる。『木器集成図録』では、留針として、被りものを髷にとめる木針として、類例資料(1936・1937)を載せている。身部は断面四角形の細棒につくり、頭部は一面のみに掘り込みによる文様を施文している。この施文は身部にもおよんでいる。

(266)は先端部が円形に広がり、もう一方には方形孔を穿ち、孔よりも端部に一段の段を設けている。おそらく、この段と孔によって、剝物や杓子のようなものを受けていたのであろうと考えられる。(264)、(265)は接合部が欠損しているが、先端部の形状より、(266)と同様に、柄の機能を有していたものと考えられる。(266)は全長30.2cm、柄部最大幅4.5cm、柄の厚さ1.95cm、先端部幅5.7cmを測る。

d. 板状木製品(箱材) (267~272)

(267)~(272)は平面の形状が台形となり、四枚組み合わせて、箱状の機能をもつものと考えられる。平城宮跡第146次調査では、組み合わされたものが出土している¹⁹⁾。しかし、その用途については不明である。

(267)は短辺19.2cm、長辺26.1cm、幅8.1cm、厚さ0.9cmを測るものである。端部で組み合わされるものではなく、長辺端部より7.5cm内側に斜位に溝を掘り込んでいる。他の2側面の板をこの溝にはめ込み、溝の内側の突起があて板の役目をはたしたのであろう。

(268)~(272)はやはり平面は台形となる。両端部は斜位に削り込み、側板との接合面をつくり出している。組み合わされた側板は、はずれないよう、端部に穿たれた円形孔に紐で結んでいたのであろう。いずれも容器としての箱材ではないらしく、(269)は上部に半円形の切り込みや方形孔が、(270)には下部に大きな方形の切り込みが、(271)には下部にV字の切り込みが、(272)には中央部2ヶ所に円形孔がそれぞれ設けられている。

e. 板状木製品(脚材) (273~274)

(273)、(274)は案などの台脚ではないかと考えられるものである。(273)は上部両端に楕円形の孔を穿ち、この部分に案のような板材の突起を差し込んだのではないかと考えられる。上部中央や下部中央の小孔は支木をはめ込むためのものであろう。器高23.7cm、幅12.9~16.2cm、厚さ0.6cmを測る。

(274)は、案部の板材に溝を掘り込み、その部分に差し込んだものと考えられる。下部には大きな半円形の透しをいれ、両端部でささえていたものであろう。器高18.6cm、幅33.9cm、厚さ1.8cmを測る。

f. 不明木製品(舟材か) (275~282)

(275)~(282)は用途不明の部材であるが、その形状から船舶に関わる部材と考えている。

(275)は舳部分と考えられる。舟底部を削りきかけはじめたところで、欠損している。ちょうど、この削りき部より前方側面を内側に掘り込んでおり、さらにその中央に径1.8cmの孔を穿つ。またこの掘り込みより前方に径4.2cmの孔を穿っている。おそらく掘り込み部には何かを差し込み、それを固定する孔と考えられる。また先端部の孔は、綱を通し、着岸部にゆわえたものと考えられる。全体的に小さなも

ので、一人程度しか乗ることはできなかつたであろう。あるいは低湿地における田舟的なもので、先端の孔に通された綱を引っぱっていたものとも考えられる。現存長45.0cm、船高最大部14.4cm、現存最大幅10.2cmを測る。

(276)も(275)とほぼ同様の形態を呈する。ただし掘り込み部および先端に穿孔は認められない。

(277)も舳部分と考えられる。舳部から舷側にかけて、大きく湾曲している。先端部に穿孔はあるが、掘り込みは認められない。舷側上部に2ヶ所の孔が穿たれているが、舟として機能していた段階のものか、再利用として穿たれたものかは不明である。

(278)は先の3例と異なる形状ではあるが、先端が切先状になっており、舳としておいた。舳部中央に上下に抜かれた方形の柄穴がある。

(279)～(282)は舳部から舷側部にかけての舟材であり、いずれも湾曲している。(280)、(281)には方形の柄穴が穿たれており、複材によって組み合わされてつくられていた可能性がある。

g. 不明木製品（容器の組合せ材）（283～288）

(283)～(288)は用途不明の部材であるが、その大きさから建築部材というハードなものではなく、容器などのソフトな部材と考えられる。

(283)は板材で、2ヶ所に柄穴をあけ、それぞれ、桜皮の紐を通してある。現存長42.6cm、幅5.4～7.5cm、厚さ2.4cmを測る。

(284)は2枚の板材を重ね合わせたもので、両方の板材に柄穴をあけ、桜皮の紐でゆわえている。現存長32.7cm、幅6.9cm、重なった厚さ1.5cmを測る。

(285)は板材で、中央部分が凸状につくりだされている。端部一方に円形孔が2ヶ所、もう一方は1ヶ所穿たれている。また長辺端部よりやや下がったところに長方形の柄穴があげられており、桜皮が現存している。このうち凸部の柄穴は外面に同寸の溝が掘り込まれており、桜皮の紐がずれないようになっている。全長31.8cm、現存幅8.4cm、厚さ1.2～2.4cmを測る。

(286)は長い板材で、端部は段をつくりだし、別材と組み合うようになっている。2列にわたり、ほぼ同寸の方形柄穴を、間隔をずらして、5ヶ所あけている。また中央部には大きな隅丸方形の柄穴もあけている。現存長85.2cm、幅14.4cm、厚さ2.4cmを測る。

(287)も長い板材で、2列にわたり、ほぼ同寸の方形柄穴を等間隔に、しかも2列の柄穴位置がずれるようにして、6ヶ所あけている。また一方の端辺にも柄穴と同規模の掘り込みを施している。現存長90cm、幅9.0cm、厚さ2.4cmを測る。

(288)も板材で、両端部の下方に突起をつくりだしている。突起部にはいずれも2つずつの小円孔があげられている。端部は斜位に切り込まれており、おそらく側板が密着して組み合うようにできている。長辺端部の一面には、釘穴とみられるものが5ヶ所ある。おそらく箱状容器の側板と考えられ、端部の釘穴は底板もしくは天井板をあてた痕跡と考えられる。全長38.1cm、幅9.6cm、厚さ1.35cmを測る。

h. 不明木製品（工具の部材か）（289～292）

(289)は、二又の枝を半裁した材で、断面半円形となる。端部は、頭部下を細く削り込み、先付けしている。用途は不明。福岡市那珂久平遺跡からは、形状の似た木製品が出土している^⑩。削り込みが又部直

下である点と、大きさはかなり相違する。那珂久平遺跡のものは建築材で高床式建物の側柱と考えられている。(289)は大きさから、とても側柱と考えられないが、小さな建材かもしれない。あるいは、同じ材をセットにして、間に横木をもたせる、背負子とも考えられる。

(290)は棒状木製品で、先端を切り込み、段を有し、さらに下方を丸味を持たせて、くぼませている。おそらくこのくぼみに工具を装着したと考えられる。ここでは工具の柄としておく。あるいは建築材で、くぼみに横木をわたしていたとも考えられる。

(291)は先端部が鋭利に尖っており、内部は空洞となっている。石突の形状に似る。

(292)は糸巻き状の形状を呈している。円柱に近い多面体の身部の両端に細長い棒をつくりだしている。両端の棒はいびつな6面体となっており、両端の棒は面がずれてつくりだされている。身の部分には敲打痕が認められるとともに、糸ずれの痕跡も認められる。用途は不明。現存長18.6cm、身長7.5cm、同径7.2cm、軸径2.4cmを測る。

i. 不明木製品（用途不明品）（293～304）

ここに報告するものは、いわゆる用途不明の木製品である。a～hも不明木製品であるが、その用途については、何らかの推定が可能であった。しかし、i類については、推定も困難なものを集めてみた。

(293)～(297)は、形状が酷似する。つまり、端部を凹状に切り込み、切り残された凸部が両足のようになっている。この足状の凸部は外側で斜位に削られている。

(293)は、頭部が丸く仕上げられており、身の中央部は船底状に削り込まれている。両側面に柄溝を切っており、この柄溝の内側に長方形の柄をあけている。これらの特徴から頭に浮かぶのは、大阪市久宝寺南遺跡出土の準構造船に伴う縦板（波切り板）であろう²⁹。その形状はおそろしく酷似している。ただし、久宝寺南遺跡出土の縦板の全長が170cmあるのに対し、(293)は約3分の1の60cmしかない。この大ききで準構造船の縦板とするには問題があるが、(275)の船材軸部に掘り込みがあったことと考えあわせると、小さな構造船も充分存在したのではないかと推定できる。おそらく(293)の柄溝に舷側板がはめ込み、それを固定するため、柄穴があげられたと考えられよう。全長60.4cm、幅24.0cm、厚さ5.4cmを測る。

(294)も(293)とほぼ同規模の破損品であるが、舷側板を固定する柄穴は円形となる、内面の削り込みのないことから、未完成品の可能性もある。

(295)、(296)も平面的な形状は同じであるが、規模はさらに小さくなり、とても人間が乗る船の縦板と考えることはできない。別の用途の部分材であるか、もしくは精巧な船形代の部材と考えられる。(295)は柄溝が片側にしか切っておらず、未完成品であろう。(269)も同様に柄溝が存在しないことから、未完成品であろう。

(297)も同じ平面形を呈するが、内側の削り込みが非常に深く、柄溝も存在しないところに目的があったのではないかと考えられる。身部には3ヶ所の柄穴があげられている。全長25.2cm、幅11.1cm、器高5.9cmを測る。

(298)は兜の前立状、あるいは牛の角状を呈するもので、先端部を鋭角に尖がらせている。用途に関しては全く不明である。

(299)は半裁の材を用い、断面が半円形となる。中央部に鋸歯文状のレリーフを施す。用途に関しては

全く不明。

(300)～(304)は長大な棒状木製品である。(300)は浮子を大型にした形状を呈している。軸部、身部ともに断面は円形となる。現存長34.8cm、身部幅4.2cm、軸幅1.3cmを測る。

(301)、(302)は杖状の棒状木製品で、(301)は端部を身部より太く作りだし、(302)は逆に端部が身部より短くつくられている。(301)は現存長67.2cm、身部径3.0cm、(302)は現存長87.0cm、身部径2.7cmを測る。

(303)は両端部を有頭につくりだした長大な棒状木製品である。半裁の材を用い、一面は平坦面となり、断面は半円形となる。全長124.8cm、幅2.4cm、厚さ1.8cmを測る。

(304)は、細い半裁の材を用いた、細長い棒状木製品である。断面の形状は半円形となる。両端部直下に、細い掘り込みを入れ、先付状とする。また身部自体にも5ヶ所の掘り込みを施している。掘り込みの間隔は図版の上部から、24.3cm、27.0cm、27.0cm、27.9cm、33.3cm、29.7cmとなる。全長178.2cm、幅2.7cm、厚さ1.8cmを測る精巧品である。用途については不明。

j. 不明木製品（小部材）（305～313）

(305)は、円板状の木製品の破片である。方形の柄穴があげられている。

(306)は先端の尖がる三角形の木製品に復元できる。先端部付近に掘り込みが認められる。また、もう一方の端部付近には方形の柄穴があげられている。

(307)は、刀形木製品の柄のような形状をなす。端部付近に円形孔があげられている。あるいは小机などの台脚とも考えられる。全長24.6cm、身中央幅2.6cm、厚さ0.9cmを測る。

(308)、(309)は、飛行機の垂直尾翼状の形状を呈するもので、(308)は長辺2辺とも、(309)は長辺の1辺を両側より斜位に削り込んでいる。いずれも長方形の柄穴を有している。転用材の可能性が大きい。(308)は器高11.1cm、底辺長11.4cm、厚さ1.8cmを測る。

(310)、(311)は短い円柱をミカン割りにしたもので、それぞれ外縁部側縁に方形の掘り込みをしたり、方形の突起をつくりだしたりしており、組み合わせさせて、機能したものと考えられる。いずれも中心に向かって、やや削り込まれており、白を転用したものではないかとみられる。

(312)は断面が隅丸方形になる棒の両端に脚状のものをつけたものである。脚部はいずれも外反し、厚さは底部に近づくにつれて、ぶ厚くなる。一方の脚部は、棒との接合部付近に棒と同方向の円形孔を穿つ。ほぼ完形品。全長78.4cm、棒部長41.2cm、同幅3.2cm、同厚さ3.0cm、脚部最大幅12.8cm、同最大厚さ8.8cmを測る。

(313)は端部が撥形にひらく板状木製品で、裏面に、一条の溝を掘り込んでいる。おそらくこの溝に脚部が組み合わせられ、案的な機能を有していた台と考えられる。もう一方の端部は斜位に切り込まれており、何かに転用したことがうかがえる。

k. 不明木製品（建築部材）（314～321）

(314)は、厚い板材で、その形状は現在のベッドの頭部側板のようである。両端部を下方から斜位に切り込み、上端部を切り残して、受部となしている。身部はこの受部よりやや下方まで平坦をなしているが、それより下は、中央より両端部に向かって斜位に削り込まれている。棺材や寝台などの側板であろうか。全長80.8cm、最大幅23.2cm、厚さ3.2cmを測る。

(315)は厚い板材で、断面台形を呈する溝を斜位に掘り込んでいる。方形の柄穴も認められ、おそらく、溝に別材をはめ込み、固定させるために、柄穴でゆわえたのであろう。片側端部は両側より切り込まれており、転用されている。全長44.0cm、幅17.6cm、厚さ6.4cmを測る。

(316)は端部を尖がらせ、もう片方の端部に柄を穿ち、受部をつくる。全長38.4cm、最大幅7.6cm、厚さ2.8cmを測る。

(317)は、端部を切り出して受部をつくり、その中央に方形柄穴をあけている。柱などにはめ込まれたものであろう。

(318)は柱状の木製品で、端部は孤状に切り込まれている。端部直下の側縁部は山形の隆起をつくりだしている。方形の柄穴が2ヶ所にあけられており、その間隔は中心間で63.0cmである。おそらく端部は左右対称となるのであろう。

(319)は柱材の一部と考えられる。大きな柄穴があけられ、一面は平坦とならず、段をもつ。幅12.8cm、厚さ7.3cmを測る。

(320)も柱材の一部と考えられる。現在二叉になっているが、元来は一木であったと思われ、二叉部に柄穴が分離している。この場合、自然に剥離したのではなく、転用した結果の可能性もある。同寸大の方形柄穴が2ヶ所あけられている。全面に鑿痕が顕著に認められる。

(321)は不定形な形状を呈しているが、端部は内外面より切り込みを施し、方形の差し込み部をつくり出している。縁辺部に1ヶ所円形孔が穿たれている。

1. 不明木製品（建築部材のうち柱、杭材）（322～328）

(322)～(328)は明らかに建築材のうち柱や杭とわかるものである。(327)、(328)は杭材で、端部を鋭利に尖がらせている。(322)も先端を尖がらせているが、長さから推定して、柱材と考えられる。(325)は柄があり、おそらく桁材の受け柱であろう。実測図を掲載していないので、各材の現存長を列記しておきたい。(322)は現存長128.0cm、(323)は現存長84.5cm、(324)は現存長89.7cm、(325)は現存長45.2cm、(326)は現存長77.0cm、(327)は現存長80.1cm、(328)は現存長70.1cmを測る。

第2表 木製品樹種一覧表

図版 番号	木器 番号	器	種	樹 種 名	備 考				
						28	41	柄 の 把 手	イヌガヤ
						28	42	柄 の 把 手	アカガシ亜属
12	1	広	鋏	アカガシ亜属		29	43	農具の柄(未完成品)	スギ
12	2	広	鋏	アカガシ亜属		29	44	農 具 の 柄	スギ
13	3	広	鋏	アカガシ亜属		29	45	豎	ツバキ
13	4	広	鋏	アカガシ亜属		29	46	豎	ツバキ
14	5	広	鋏	アカガシ亜属		29	47	豎	ツバキ
14	6	広	鋏	アカガシ亜属		29	48	豎	ツバキ
15	7	広	鋏(未完成品)	アカガシ亜属		29	49	豎	ツバキ
15	8	膝柄股	鋏	アカガシ亜属		29	50	豎	ツバキ
16	9	膝柄股	鋏	アカガシ亜属		29	51	豎	ツバキ
16	10	膝柄股	鋏	アカガシ亜属		30	52	豎	ツバキ
16	11	一木	鋤	アカガシ亜属		30	53	豎	ツバキ
17	12	組合せ農具(鋏)		アカガシ亜属		30	54	豎	ツバキ
17	13	組合せ農具(鋏)		アカガシ亜属		30	55	豎	ツバキ
18	14	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		30	56	豎	ツバキ
18	15	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		30	57	豎	ツバキ
19	16	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		30	58	豎	ツバキ
19	17	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		30	59	豎	ツバキ
20	18	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		30	60	豎	ツバキ
20	19	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		30	61	豎	ツバキ
20	20	組合せ農具(鋤)		アカガシ亜属		31	62	横	ヒノキ
21	21	えぶり		アカガシ亜属		31	63	横	ツバキ
21	22	えぶり		アカガシ亜属		31	64	横	ヒノキ
22	23	えぶり		アカガシ亜属		31	65	横	ツバキ
22	24	えぶり		アカガシ亜属		31	66	た	ヒノキ
23	25	えぶり		アカガシ亜属		31	67	た	ツバキ
23	26	えぶり		アカガシ亜属		32	68	弓	イヌガヤ
24	27	えぶり		アカガシ亜属		32	69	弓	イヌガヤ
24	28	えぶり		アカガシ亜属		33	70	弓	イヌガヤ
25	29	えぶり		アカガシ亜属		33	71	浮子	イヌガヤ
25	30	えぶり		アカガシ亜属		33	72	鞆	ヒノキ科
25	31	えぶり		アカガシ亜属		34	73	鞆	スギ?
26	32	農具の柄		イヌマキ?		34	74	鞆	スギ
26	33	農具の柄		イヌマキ?		34	75	鞆	スギ
27	34	農具の柄		スギ		34	76	鞆	スギ
27	35	農具の柄		スギ		34	77	鞆	スギ
28	36	柄の把手		クリ		34	78	鞆	スギ
28	37	柄の把手		アカガシ亜属		34	79	鞆	スギ
28	38	柄の把手		スギ		34	80	鞆	ヒノキ?
28	39	柄の把手		ムクロジ		34	81	鞆	スギ
28	40	柄の把手		サカキ		35	82	鞆	シイノキ

35	83	櫛	ス	ギ	48	127	高	杯	ケ	ヤ	キ							
35	84	櫛	ヒ	ノ	キ	?	49	128	脚	台	状	木	製	品	ヒ	ノ	キ	?
35	85	櫛	モ	ミ	49	129	脚	台	状	木	製	品	ヒ	ノ	キ			
35	86	櫛	ヒ	ノ	キ	50	130	脚	台	状	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科	
35	87	櫛	ス	ギ	50	131	脚	台	状	木	製	品	ス	ギ				
35	88	櫛	ス	ギ	51	132	脚	台	状	木	製	品	ス	ギ				
35	89	櫛	ス	ギ	51	133	底	板	ス	ギ								
35	90	櫛	ス	ギ	52	134	織	機	ス	ギ								
35	91	櫛	ス	ギ	52	135	織	機	イ	ヌ	マ	キ	?					
35	92	櫛	ア	カ	ガ	シ	亜	属	52	136	木	錘	ア	カ	ガ	シ	亜	属
36	93	ア	ヒ	ノ	キ	科	52	137	木	錘	カ	エ	デ	属				
36	94	ア	ス	ギ	53	138	木	錘	ツ	バ	キ							
36	95	ア	ヒ	ノ	キ	科	53	139	木	錘	ア	カ	ガ	シ	亜	属		
36	96	ア	ス	ギ	53	140	目	盛	板	ス	ギ							
37	97	ア	ス	ギ	53	141	目	盛	板	ス	ギ							
37	98	ア	ス	ギ	53	142	匙	イ	ヌ	ガ	ヤ							
37	99	ア	ヒ	ノ	キ	54	143	へ	ラ	状	木	製	品	ス	ギ			
37	100	ア	ス	ギ	54	144	へ	ラ	状	木	製	品	ヒ	ノ	キ			
38	101	ア	ヒ	ノ	キ	科	54	145	組	板(あるいは折敷)	ヒ	ノ	キ	科				
38	102	ア	ス	ギ	54	146	白	ト	チ	ノ	キ							
38	103	ア	ヒ	ノ	キ	科	55	147	白	ト	チ	ノ	キ					
38	104	ア	ス	ギ	55	148	椅	子	ミ	ズ	キ							
38	105	ア	ス	ギ	56	149	火	鑽	白	ス	ギ							
39	106	脚	ヒ	ノ	キ	科	56	150	鎌	の	柄	ア	カ	ガ	シ	亜	属	
40	107	脚	ケ	ヤ	キ	56	151	鎌	の	柄	ケ	ヤ	キ					
40	108	脚	ア	カ	ガ	シ	亜	属	56	152	刀	形	木	製	品	ス	ギ	?
41	109	脚	ス	ギ	56	153	剣	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科			
41	110	脚	ス	ギ	57	154	剣	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科			
42	111	脚	サ	ク	ラ	属	57	155	剣	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科	
42	112	脚	ス	ギ	57	156	刀	形あるいは剣形の柄	ア	カ	ガ	シ	亜	属				
43	113	脚	ス	ギ	57	157	鍬	形	木	製	品	ス	ギ					
43	114	脚	ス	ギ	57	158	円	板	状	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科		
44	115	箱	ヒ	ノ	キ	科	58	159	舟	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ		
44	116	箱	ヒ	ノ	キ	科	58	160	舟	形	木	製	品	ス	ギ			
45	117	箱	ス	ギ	58	161	舟	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ				
45	118	箱	イ	ヌ	ガ	ヤ	58	162	舟	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科	
45	119	箱	ス	ギ	59	163	舟	形	木	製	品	ス	ギ					
45	120	箱	ス	ギ	?	59	164	舟	形	木	製	品	ス	ギ	?			
46	121	箱	ス	ギ	?	59	165	舟	形	木	製	品	ス	ギ	?			
46	122	箱	ス	ギ	59	166	舟	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ	科			
47	123	箱	ス	ギ	60	167	舟	形	木	製	品	ス	ギ					
47	124	皿(盤)	ス	ギ	60	168	舟	形	木	製	品	ス	ギ					
47	125	皿(盤)	ス	ギ	60	169	琴	ス	ギ									
47	126	皿(盤)	ス	ギ	61	170	梯	子	ヒ	ノ	キ	科						

61	171	梯	子	ヒ	ノ	キ	科
61	172	梯	子	ヒ	ノ	キ	科
61	173	梯	子	ヒ	ノ	キ	科
62	174	井	筒	ス			ギ
62	175	井	筒	ス			ギ
63	177	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ科
63	178	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ科
63	179	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ科
63	180	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ科
63	181	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	182	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	183	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	184	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	185	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	186	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	187	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	188	有	頭	棒	ス		ギ
63	189	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	190	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	191	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	192	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	193	有	頭	棒	モ		ミ
63	194	有	頭	棒	ス		ギ
63	195	有	頭	棒	ス		ギ
63	196	有	頭	棒	ス		ギ
63	197	有	頭	棒	ス		ギ
63	198	有	頭	棒	モ		ミ
63	199	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	200	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	201	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	202	有	頭	棒	ス		ギ
63	203	有	頭	棒	ス		ギ
63	204	有	頭	棒	ス		ギ
63	205	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	206	有	頭	棒	ス		ギ
63	207	有	頭	棒	ス		ギ
63	208	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
63	209	有	頭	棒	ス		ギ
64	211	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	212	有	頭	棒	ス		ギ
64	213	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ科
64	214	有	頭	棒	ス		ギ

64	215	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	216	有	頭	棒	イ	ヌ	ガヤ
64	217	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	218	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	219	有	頭	棒	ス		ギ
64	220	有	頭	棒	イ	ヌ	ガヤ
64	221	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ科
64	222	有	頭	棒	イ	ヌ	ガヤ
64	223	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	224	有	頭	棒	イ	ヌ	ガヤ
64	225	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	226	有	頭	棒	ス		ギ
64	227	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	228	有	頭	棒	ス		ギ
64	229	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	230	有	頭	棒	ヒ	ノ	キ
64	231	有	頭	棒	カ		ヤ
65	232	棒	状	木	製	品	ヒノキ
65	233	棒	状	木	製	品	スギ
65	234	棒	状	木	製	品	ヒノキ
65	235	棒	状	木	製	品	ヒノキ
65	236	棒	状	木	製	品	ヒノキ
65	237	棒	状	木	製	品	スギ
65	238	棒	状	木	製	品	イヌマキ?
65	239	棒	状	木	製	品	針葉樹
65	240	棒	状	木	製	品	サカキ
65	241	棒	状	木	製	品	スギ
65	242	棒	状	木	製	品	ヒノキ
65	243	棒	状	木	製	品	スギ
65	244	棒	状	木	製	品	シイノキ
65	245	棒	状	木	製	品	ヒノキ
65	246	棒	状	木	製	品	スギ
65	247	棒	状	木	製	品	ヒノキ科
65	248	棒	状	木	製	品	サカキ
65	249	棒	状	木	製	品	イヌマキ?
65	250	棒	状	木	製	品	スギ
65	251	棒	状	木	製	品	モミ
65	252	棒	状	木	製	品	モミ
66	253	棒	状	木	製	品	エノキ
66	254	棒	状	木	製	品	イヌガヤ
66	255	棒	状	木	製	品	スギ
66	256	棒	状	木	製	品	ヒノキ
66	257	棒	状	木	製	品	ヒノキ
66	258	棒	状	木	製	品	ヒノキ?

66	259	棒状木製品	モ	ミ		74	292	不明木製品	ヒ	ノ	キ
66	260	棒状木製品	モ	ミ				(工具の部材か)			
67	261	柄頭状木製品	ヒ	ノ	キ	75	293	不明木製品	ス		ギ
67	262	柄頭状木製品	ヒ	ノ	キ			(用途不明品)			
67	263	柄頭状木製品	ヒ	ノ	キ	75	294	不明木製品	ス		ギ
67	264	柄頭状木製品	ス		ギ			(用途不明品)			
67	265	柄頭状木製品	ス		ギ	76	295	不明木製品	ス		ギ
67	266	柄頭状木製品	ス		ギ			(用途不明品)			
68	267	板状木製品(箱材)	ヒ	ノ	キ	76	296	不明木製品	ヒ	ノ	キ
68	268	板状木製品(箱材)	ス		ギ			(用途不明品)			
68	269	板状木製品(箱材)	ヒ	ノ	キ	77	297	不明木製品	ヒ	ノ	キ
68	270	板状木製品(箱材)	ス		ギ			(用途不明品)			
68	271	板状木製品(箱材)	ス		ギ	77	298	不明木製品	ス		ギ
68	272	板状木製品(箱材)	ス		ギ			(用途不明品)			
68	273	板状木製品 (脚材)	ス		ギ	77	299	不明木製品	ヒ	ノ	キ
69	274	板状木製品 (脚材)	ヒ	ノ	キ科			(用途不明品)			
69	275	不明木製品(舟材か)	ス		ギ	78	300	不明木製品	ヒ	ノ	キ
70	276	不明木製品(舟材か)	ス		ギ			(用途不明品)			
70	277	不明木製品(舟材か)	ス		ギ	78	301	不明木製品	イ	ヌ	ガヤ
70	278	不明木製品(舟材か)	ス		ギ			(用途不明品)			
71	279	不明木製品(舟材か)	ス		ギ	78	302	不明木製品	ヒ	ノ	キ
71	280	不明木製品(舟材か)	ス		ギ			(用途不明品)			
71	281	不明木製品(舟材か)	ス		ギ	78	303	不明木製品	イ	ヌ	ガヤ
71	282	不明木製品(舟材か)	ス		ギ			(用途不明品)			
72	283	不明木製品 (容器の組合せ材)	ス		ギ	78	304	不明木製品	ヒ	ノ	キ
72	284	不明木製品 (容器の組合せ材)	ス		ギ			(用途不明品)			
73	285	不明木製品 (容器の組合せ材)	ス		ギ	79	305	不明木製品(小部材)	ス		ギ
73	286	不明木製品 (容器の組合せ材)	ス		ギ	79	306	不明木製品(小部材)	ス		ギ
73	287	不明木製品 (容器の組合せ材)	ス		ギ	79	307	不明木製品(小部材)	ス		ギ
73	288	不明木製品 (容器の組合せ材)	ヒ	ノ	キ	79	308	不明木製品(小部材)	ス		ギ
74	289	不明木製品 (工具の部材か)	サ	カ	キ	79	309	不明木製品(小部材)	ス		ギ
74	290	不明木製品 (工具の部材か)	サ	カ	キ	80	310	不明木製品(小部材)	サ	ク	ラ属?
74	291	不明木製品 (工具の部材か)	針	葉	樹	80	311	不明木製品(小部材)	サ	ク	ラ属?
						80	312	不明木製品(小部材)	カ	エ	デ属
						81	313	不明木製品(小部材)	ヒ	ノ	キ
						81	314	不明木製品(建築部材)	ヒ	ノ	キ
						81	315	不明木製品(建築部材)	ヒ	ノ	キ
						81	316	不明木製品(建築部材)	ヒ	ノ	キ
						82	317	不明木製品(建築部材)	ス		ギ
						82	318	不明木製品(建築部材)	ヒ	ノ	キ
						82	319	不明木製品(建築部材)	ス		ギ
						82	320	不明木製品(建築部材)	ヒ	ノ	キ科
						82	321	不明木製品(建築部材)	ヒ	ノ	キ科
						83	322	不明木製品	ヒ	ノ	キ科

83	323	(建築部材のうち、柱、杭材) 不明木製品	イヌガヤ
83	324	(建築部材のうち、柱、杭材) 不明木製品	イヌガヤ
83	325	(建築部材のうち、柱、杭材) 不明木製品	ヒノキ科

83	326	不明木製品 (建築部材のうち、柱、杭材)	ク	リ
83	327	不明木製品 (建築部材のうち、柱、杭材)	モ	ミ
83	328	不明木製品 (建築部材のうち、柱、杭材)	イヌガヤ	

註

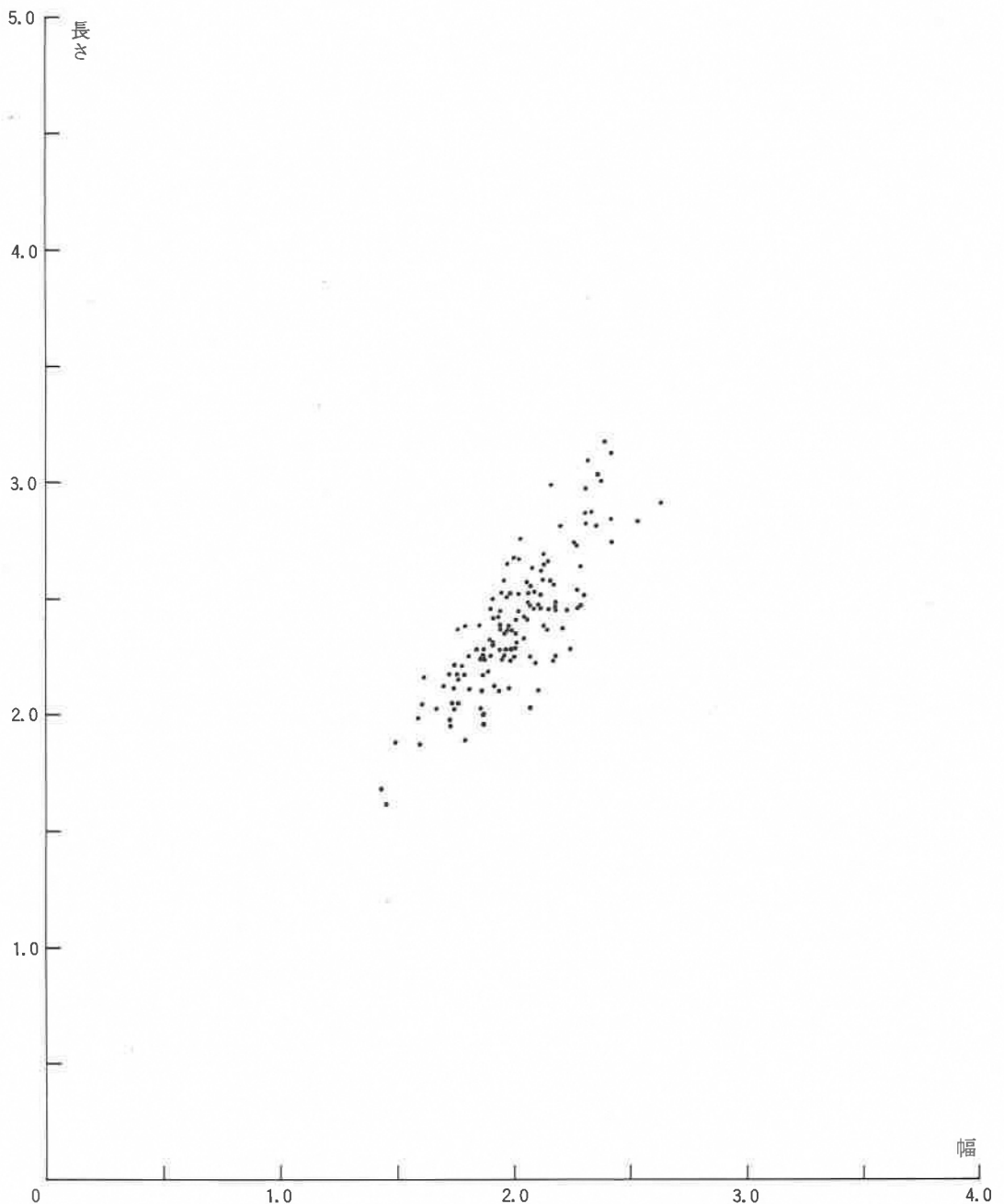
- ① 黒崎直「6. 農具1. くわとすき」(『弥生文化の研究』5 道具と技術I 1985)による。
- ② 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告X 古墳時代I』1980
- ③ 久々忠義「I木製品 D江上A遺跡」(『北陸自動車道遺跡調査報告——上市町木製品・総括編——』上市町教育委員会 1984)
- ④ 濱修『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1986
- ⑤ 兼康保明「機能よりみた木器研究における二、三の研究ノート」1983.8.6 滋賀県埋蔵文化財センター研究発表会要旨
- ⑥ 奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代編』1985
- ⑦ 小野久隆、奥野都『池上遺跡 第4分冊の1 木器編』(財)大阪文化財センター 1978
- ⑧ 註③に同じ。
- ⑨ 長谷川嘉和『滋賀県の民具 滋賀県有形民俗文化財収集調査報告書8』1988 滋賀県教育委員会
- ⑩ 渡辺誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」(『考古学雑誌』第66巻第4号 1981)
- ⑪ 中井 均『入江内湖遺跡発掘調査報告書—米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査—』1987 米原町教育委員会
- ⑫ 註⑥に同じ。
- ⑬ 赤木克視、一瀬和夫『久宝寺南(その2)——久宝寺・加美遺跡の調査——近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1987 (財)大阪文化財センター
- ⑭ 久保寿一郎「古代の船舶資料——舟形模造品資料集成——」(『九州考古学』第61号 1987)
- ⑮ 註⑭に同じ。
- ⑯ 註④に同じ。
- ⑰ 能登川町教育委員会 植田文雄氏の御教示による。
- ⑱ 奈良国立文化財研究所『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983
- ⑲ 力武卓治・大庭康時『那珂久平遺跡——福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集——』福岡市教育委員会 1987
- ⑳ 註⑬に同じ。

(5) 自然遺物

1. はじめに

このたび米原町教育委員会より調査の機会を与えられた、滋賀県米原町入江内湖遺跡行司町地区出土の自然遺物は、ほとんどが植物遺体であり、動物遺体はわずかに1点にすぎない。その所属時期は、古墳時代前期の布留式期である。

出土状態は、旧入江内湖湖岸の低湿地より、多くの人工遺物とともに出土したということであり、人為堆積と自然堆積の両者の可能性が含まれている。花粉分析は行われていない。



第18図 桃核のサイズ (単位はcm)

2. 植物遺体

検出された植物遺体の種名は、次の3種である。

1. くるみ科オニグルミ *Juglans mandshurica* subsp. *Sieboldiana* MAXIM.
2. とちのき科トチノキ *Aesculus trubinata* BLUME
3. ばら科モモ *Prunus Persica* BALSCH.

1・2は野生植物であり、3は弥生時代に渡来した栽培植物である。

これらの生態・遺存状態・数量などは、つぎのとおりである。

2-1) オニグルミ (図版八四上、同下左)

川沿いや適湿の地に群生する落葉高木で、核内の種子は脂肪に富み美味であり、9~10月に熟す。材も有用である。

75点出土している核の遺存状態は、次の4類に分類される。

- A. 完形の核……………17点 (22.67%)
- B. 割れた片方の核 ……34点 (45.33%)
- C. 完形で齧歯類などにかじられた痕のある核
……………8点 (10.67%)
- D. 破片 ……16点 (21.33%)

A・Cは自然堆積を示し、Bもその先端がとがったままのもののみであるから、本来Aに準じるものとみなされる。そしてDのみが人為堆積の可能性を含んでいる。

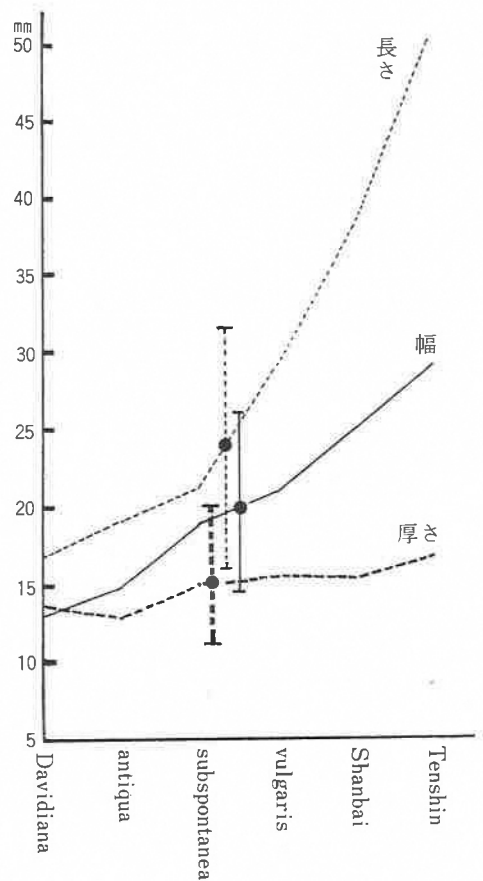
2-2) トチノキ (図版八四下-右上)

沢や川沿いに群生する落葉高木で、種子は9~10月に熟す。材も有用である。種子はアク抜きにより食用化できる。縄文時代中期以降現代に至るまで、程度の差こそあれ重要なデンプン源であった。滋賀県下においても、トチモチにその名残りを留めている。

出土数量は、わずかに種皮2点のみである。果皮や幼果はみられない。

2-3) モモ (図版八五)

落葉性の小高木で、果実を食用とする。果実は7~8月に熟す。



第19図 桃核サイズの比較 (小清水1963に加筆)

種核の出土数量は3種のなかでもっとも多く、142点出土している。このうち5点には齧歯類などにかじられた痕がある (図版八五下-右端)。

これらの計測値は、第3表および第18図に示すとおりである。長さは最小1.62、最大3.17cmで、平均2.38cm、幅は最小1.44、最大2.64cmで、平均2.02cm、厚さは最小1.15、最大2.04cmで、平均1.53cmである。

近畿地方においては、奈良県天理市布留遺跡・三島 (里中) 地区において、古墳時代および奈良・平

安時代の層序より、約5500点という膨大な桃核が出土している。これらのうち古墳時代資料の平均計測値については、長さ2.38cm、幅1.87cm、厚さ1.46cmと報告されている。これと本遺跡の場合とを比較すると、長さはまったく同じであるが、幅において0.15cm、厚さにおいて0.08cmだけ、本遺跡資料のほうが上回っている。

布留遺跡の報告者は、そのサイズからみて小清水卓二氏のいうノモモ(*Subspontanea*)・モモ(*Vulgaris*)に相当するとしている。そこに引用されている小清水氏の桃核の大きさ比較図に、本遺跡資料を加えたのが第19図である。これによって本遺跡資料の場合も同様に、小清水氏のいうノモモ・モモに相当するものとみなされる。

(3) 動物遺体 (図版八四下一右下)

代表的な淡水産貝類の1種であるイシガイ科イシガイ (*Unio*(s.s) *douglasiae nipponensis* MARTENS) が、1個体のみ出土している。

(4) 若干の検討

以上の大型植物遺体と動物遺体の堆積環境は、花粉分析などが行われていないため断定はできないが、人為堆積よりは自然堆積の可能性のほうが大きいと考えられる。しかし植物遺体の3者はいずれも食料資源として重要なものであり、本遺跡の生活復元に当っては不可欠の資料である。

オニグルミ・トチノキ・モモの3者のうち前2者は、縄文時代以来の伝統をもつものである。そしていずれも湿地を好む高木であり、現在湖東平野においてほとんど見ることはできなくなっている。その理由は、いうまでもなく弥生時代以来の水田の発達による環境の変化であり、古墳時代初頭に位置する本遺跡の場合は、その中間的な様相を示していると理解することができる。そしてそのことは景観の問題としてのみばかりではなく、食料の問題としても重視されることなのである。

特に現在湖西や湖北地方にしかその利用習慣が残っていないトチノキについては十分に注目する必要がある。この木は一たん伐採されると回復はきわめて困難であり、近世においても伐採禁止樹木とされていたほどである。

これらに対してモモは、稲作とともに園芸作物として大陸よりわが国にもたらされたものである。桃核の出土数量が多く、その品種改良の歴史的研究に一つの基礎資料を提示できたことは幸いである。

参考文献

太田三善、1982：出土果実および種子の同定Ⅰ。考古学研究中間報告。4頁。埋蔵文化財天理教調査団・天理。

小清水卓二、1959：古代日本の住居跡から出土する桃核について。近畿古文化論攷。559～568頁。東京。

謝辞

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった米原町教育委員会の中井 均氏、資料整理に御協力下さった名古屋大学考古学研究室学生の田中禎子嬢、および聴講生の吉本洋子さんに対し、衷心より謝意を表する次第である。

第3表 桃核計測値一覧表 (単位cm)

No.	長さ	幅	厚さ
1	1.62	1.46	1.24
2	1.68	1.44	1.28
3	1.87	1.61	1.28
4	1.88	1.50	1.32
5	1.89	1.80	1.66
6	1.95	1.74	1.39
7	1.96	1.88	1.51
8	1.98	1.74	1.32
9	1.99	1.60	1.15
10	2.00	1.88	1.47
11	2.02	1.68	1.37
12	2.02	1.75	1.33
13	2.03	1.87	1.45
14	2.03	2.08	1.76
15	2.05	1.62	1.33
16	2.05	1.75	1.37
17	2.05	1.77	1.49
18	2.10	1.87	1.32
19	2.10	1.95	1.56
20	2.10	2.11	1.75
21	2.11	1.73	1.37
22	2.11	1.82	1.59
23	2.11	1.99	1.64
24	2.12	1.71	1.26
25	2.12	1.93	1.51
26	2.15	1.77	1.20
27	2.16	1.62	1.16
28	2.17	1.73	1.21
29	2.17	1.76	1.41
30	2.17	1.80	1.35
31	2.17	1.88	1.33
32	2.19	1.90	1.51
33	2.21	1.75	1.37
34	2.21	1.79	1.32
35	2.22	2.10	1.47
36	2.23	2.00	1.53
37	2.23	2.18	1.69
38	2.24	1.87	1.34
39	2.24	1.88	1.44
40	2.24	1.96	1.52

41	2.25	1.81	1.42
42	2.25	1.88	1.53
43	2.25	1.91	1.56
44	2.25	2.01	1.72
45	2.25	2.08	1.62
46	2.25	2.19	1.73
47	2.26	1.97	1.54
48	2.28	1.85	1.45
49	2.28	1.88	1.42
50	2.28	1.95	1.50
51	2.28	1.98	1.51
52	2.28	2.00	1.56
53	2.28	2.25	1.60
54	2.29	2.01	1.54
55	2.30	1.92	1.32
56	2.31	1.92	1.40
57	2.31	2.02	1.48
58	2.32	1.91	1.35
59	2.33	2.05	1.53
60	2.35	1.97	1.57
61	2.35	2.02	1.53
62	2.36	1.98	1.41
63	2.36	2.00	1.38
64	2.37	1.74	1.28
65	2.37	1.95	1.49
66	2.37	2.15	1.57
67	2.37	2.21	1.73
68	2.38	1.80	1.16
69	2.38	1.86	1.43
70	2.38	1.95	1.38
71	2.38	1.95	1.62
72	2.38	1.99	1.60
73	2.38	2.14	1.60
74	2.41	2.02	1.41
75	2.41	2.07	1.44
76	2.42	1.93	1.47
77	2.42	1.94	1.25
78	2.42	2.06	1.52
79	2.45	1.95	1.57
80	2.45	2.03	1.41
81	2.45	2.03	1.47

82	2.45	2.16	1.48
83	2.45	2.24	1.51
84	2.46	1.91	1.55
85	2.46	2.09	1.62
86	2.46	2.12	1.49
87	2.46	2.19	1.67
88	2.46	2.28	1.65
89	2.47	2.08	1.53
90	2.47	2.12	1.41
91	2.47	2.30	1.72
92	2.48	2.07	1.37
93	2.48	2.19	1.78
94	2.50	1.92	1.55
95	2.51	1.98	1.52
96	2.52	1.99	1.36
97	2.52	2.03	1.77
98	2.52	2.12	1.69
99	2.52	2.31	1.78
100	2.53	1.96	1.54
101	2.53	2.08	1.50
102	2.53	2.10	1.62
103	2.54	2.28	1.70
104	2.56	2.08	1.47
105	2.56	2.18	1.83
106	2.57	2.07	1.46
107	2.58	1.97	1.48
108	2.58	2.14	1.54
109	2.58	2.17	1.78
110	2.62	2.12	1.51
111	2.63	2.09	1.62
112	2.64	2.29	1.78
113	2.65	1.98	1.63
114	2.65	2.14	1.62
115	2.66	2.15	1.43
116	2.67	2.03	1.57
117	2.68	2.01	1.45
118	2.69	2.14	1.61
119	2.73	2.28	1.71
120	2.74	2.27	1.69
121	2.74	2.43	1.67
122	2.76	2.04	1.55

123	2.81	2.21	1.69
124	2.81	2.36	1.66
125	2.82	2.32	1.65
126	2.83	2.54	1.99
127	2.84	2.43	1.93
128	2.87	2.32	1.73
129	2.87	2.34	1.68
130	2.91	2.64	1.85
131	2.97	2.32	1.69
132	2.99	2.17	1.64
133	3.00	2.38	2.04
134	3.03	2.37	1.87
135	3.09	2.33	1.76
136	3.12	2.42	1.53
137	3.17	2.40	1.93
平均	2.38	2.02	1.54
138	2.23	(1.18)	1.42
139	2.40	(1.80)	1.72
140	2.48	(1.61)	1.58
141	2.64	(1.64)	1.57
142	2.74	(1.29)	1.57
平均	2.50	—	1.57

第IV章 結 語

今回の調査は、従来周知されていた入江内湖遺跡の範囲外であったが、自然流路など、当時の環境の一端を知ることができた。自然流路は埋土内出土遺物から、おおよそ古墳時代前期後半に係るものと考えられよう。これまでの入江内湖遺跡の調査では西野遺跡の第2次調査以外では、遺構が確認されていなかっただけに、自然流路ではあるが、その検出意義は大きい。また、今回の調査により入江内湖遺跡の範囲がさらに広がることが確認できた。しかも調査地全域に堆積する暗褐色腐植土層（スクモ層）は調査地よりさらに広がって堆積することも確認できた。このスクモ層中には、保存状態も非常に良好な木製品が多量に包含されていた。スクモ層中および、自然流路埋土から出土した土器には時期差は見ることができない。つまり、洪水に近い流路が流れ去った直後、遺跡周辺が低湿地化していったと考えられよう。今回のスクモ層の検出高は、標高83.5m付近にほぼ水平に堆積していた。西野遺跡第1次調査では、古墳時代の遺構が84.6m付近で検出されており、その標高が内湖の範囲を示すものであり、以降において、内湖底に黒色スクモ層が堆積していた。今回検出したスクモがこれと同一のものとするならば、古墳時代の集落は、標高84.5m以上に求められよう。つまり、今回の調査で出土した木製品を使用していた集落は調査地よりさらに北方の微高地に求めることができると考えられる。

今回の調査地点の層位を順序だててみていくとすれば、標高83.0～83.5m付近で1度流水があり、それによって、縄文、弥生時代の遺物が流されてきたと考えられる。この流水は古墳時代以前で、古墳時代には、同層を切るかたちで、SD01という自然流路が一気に流れている。この流水後、周囲は低湿地となりスクモ層が堆積し、おそらく集落は営なまれなかったであろう。このスクモ層に堆積している土器片、木製品は集落から破棄されたものと考えられる。以後、入江内湖となり、順次盛土がなされ、明治26年測量2万分の1地形図をみるかぎり、完全に水田となり、従来知られていた入江内湖の外側になったのであろう。

次に遺物に目を向けると、木製品の多量出土が何といても注目されよう。破棄されたと前述したものの、完形のものも多く、あるいは、洪水で押し流されたとしたほうが適切かもしれない。しかも、その大半がおそらく同時期のものと推定できることから、これらを使用していた集落は相当の大集落であったといえよう。器種に関しては農耕具、狩猟具、運搬具、容器、紡織具が中心であり、当時の一般集落における木製品の姿を如実に示してくれている。それと共に、刀形、剣形、舟形あるいは弧文を施文したものなど、明らかに祭祀に用いたものも数多い。これは当遺跡が祭祀遺跡と呼びうるものではなく、一般集落における祭祀のあり方を示すものとして評価できるのではないだろうか。また、船材と考えられる部材、櫂などは、琵琶湖周辺に立地する当遺跡の生産基盤を示すものであり、同様に出土数の多い有頭棒の機能も琵琶湖との関わりに求めることができるのではないだろうか。

最後に、木製農耕具に関して若干気づいた点を列記して、まとめたい。

まず木製の鍬であるが、出土したすべての鍬が広鍬Fと呼ばれるもので^①、前面の頭部付近に補強材(あて板)を挿入したと考えられる「蟻じゃくり」の溝を有していることが特徴である^②。この「蟻じゃくり」

は断面が内広の台形状となり、上場幅が1.8～2.6cm、下場面が2.4～3.2cmを測る。つまり補強材は表からはめ込むことは不可能であり、側面より挿入したものと考えられる。もちろんこの補強板を挿入したのち、柄を差し込んだのであろう。これによって挿入された補強板は前後の打ち込み操作に対して非常にはずれにくいものとなった。ただし残念ながら現在出土木製鋏中、補強板が挿入された状態のものはなく、左右のふれに対して、どのような固定をしていたかは不明である。着柄角度はほぼ60°で均一化している。

富山県江上A遺跡や石川県近岡遺跡からはあて板（補強板）を挿入した状態での鋏が出土している。これらは舟形突起の両脇に孔を穿ち、その前面に補強板をあて、両脇の孔に木栓をさし込んで固定していたことが知られる。報告書によれば弥生時代後半に属する鋏である^③。この類の鋏は「蟻じゃくり」の溝にあて板をはめ込むのではなく、鋏前面の頭部が断面L字状に加工されており、その段部分にあて板があたるようになっている。この段をゲタと呼称している。県下に目を向けると、守山市赤野井湾遺跡で、このゲタに木栓であて板を固定する広鋏が出土している。この赤野井湾遺跡では広鋏が10点出土しているが、9点については当遺跡同様前面には「蟻じゃくり」の溝があり、断面L字状のゲタを有するものは1点であった。報告書によれば、「蟻じゃくり」の溝を有する広鋏は古墳時代、断面L字状のゲタを有する広鋏はそれらに比べてやや時代的に古いとされている。なおゲタにあて板をあて、木栓で固定する広鋏は江上A遺跡に代表される北陸地方の特有の広鋏であるとも記されている^④。

ここで弥生時代の広鋏の形態を観察してみると、中期後半まではゲタと呼ばれる形態で、断面L字状に段はつくが、舟形突起の両脇に孔の穿たれている例はない。一方この時期舟形突起の両脇に孔が穿たれるものには、逆に前面に段や溝は認められない。

「蟻じゃくり」の溝が出現するのは管見では京都府羽束師遺跡で弥生時代後半のものに認められる。古墳時代になると県下では守山市金ヶ森西遺跡^⑤、服部遺跡^⑥、大津市湖西線遺跡^⑦より出土している。奈良県下では纏向遺跡^⑧、平城宮跡下層^⑨、外山下田遺跡^⑩などから出土している。これらはいずれも「蟻じゃくり」の溝のみを有するもので、舟形突起両脇に孔は穿たれていない。ただし服部遺跡からは「蟻じゃくり」の溝と舟形突起両脇の孔を併用しているものが1点出土している。

これら広鋏の形態差は地域差と考えるよりは時間差と考えられ、弥生時代から古墳時代に至る広鋏の発達過程を考えるうえで重要な問題となろう。

入江内湖遺跡では膝柄股鋏と考えられる鋏を除いて、広鋏Fのみであるのに対して鋤にはスコップ状、長方形、ナスビ形などの着柄鋤と一本鋤などが存在し、形態が豊富である。これは、当時の農耕技術によるものであるのか、あるいは遺跡周辺の土地が低湿地であり、その土壌に対するものかは、今後の課題であろう。

次に農耕具中最も出土量で目立つのは、いわゆる“えぶり”である。これは広葉樹を薄く楕円形状に加工したもので、弥生時代の円鋏に似る。円鋏状で着柄孔の両脇に方形孔の穿たれるものが県下守山市服部遺跡^⑪、奈良県平城宮下層^⑫から出土している。これらは『平城宮発掘調査報告X』で、身に対して直交する柄がつき、その柄から斜に2本の支木がつき、孔に装着されると述べられている。当遺跡で出土したものは、円鋏状で頭部付近に着柄孔があり、刃部付近に長方形の孔を穿ち、ここに柄を補強する支

柄をはめ込んだと考えられる。このえぶりは完形品と考えられるが、同様の機能を持つものとして、頭部の断面が三角形になる突起を有するものがある。この類は断面三角形の突起にあて板（補強板）をあてる機能を有していたことはまちがいない。藤原宮下層などで出土していたが、¹³ その刃部の形状は不明であった。ところが近年、守山市の赤野井湾遺跡より完形品に近いものが出土し、その形態が明らかになった。¹⁴ その形態は前述の円鋏状のえぶりに類似するものであった。このことから、これら3種はいずれも同様の機能を有する農耕具であったことにまちがいない。服部遺跡や平城宮下層で出土したものは、身と柄が直交することや、当遺跡出土の楕円形のものや、赤野井湾出土の頭部断面三角形のものは、刃部直上に支木のくることから、ふりおろして使用する鋏や、ふみ込んで使用する鋤などではなく、田をならすために用いるものであろうと考えられる。頭部断面三角形になるものは、赤野井湾の報告書では丸鋏と報告されている。

また、『平城宮発掘調査報告X』では、身のヒビ割れを補修孔によって修理するものもこの具の特色であると報告されているように今回出土したえぶりのすべてに補修孔が認められる。特に問題になるのは、楕円形の円鋏状のものは、それを完形品と考えているが、頭部辺に補修孔が認められるため、あるいは完成形ではなく、上部にまだ部材が続き、赤野井湾遺跡で出土している頭部断面三角形のものになるのかもしれない。今後の類似資料の増加を待ちたい。

『平城宮発掘調査報告X』では鋸歯状の細い板のえぶりは苗代の整備や穀物を広げて乾かすときに用いるえぶりであるとし、身の高さが高いえぶりは荒代や中代など、土塊がまだよく砕けていない段階で用いたものとし、用途による機能の別を考えている。

以上、農耕具で問題となるものを列記してみた。これらはあくまで問題点であり、結論的なものではない。今回出土した木製品の大半は用途の不明なものである。そこには加工の精巧な完形品も多く含まれているが、その用途の糸口はつかめない。ここではこれらを含めて今後の課題を記して結びとしたい。

まず木製品の編年であるが、もちろん土器が考古学の編年の中心であるが、当遺跡をはじめとする、琵琶湖周辺の遺跡では、土器の出土量が極めて少ない場合、出土木製品そのもので遺跡の時代決定ができないかということである。鋏では、ゲタや「蟻じゃくり」など形態によって時間差の存在することは明らかであり、今後他の用途の判明する木製品についても形態変化による編年が可能となろう。

不明木製品については前述したように、加工技術に精巧なものが認められるが、用途についてはまったく不明のものが大半を占める。膝柄股鋏にしても、鋏の着柄にしてもそうであったように、何らかの状況で、使用途中のものが出土しないかぎり、その解決はつかないと思われる。しかし一方では積極的に民俗学からのアプローチも必要であろうし、いま一つは樹種の鑑定も不可欠なものとする。ある特殊な樹種のみを用いる場合（例・弓——イヌガヤ）、不明部材の樹種から本来の機種や用途を求めることは可能になるのではないだろうか。

註

- ① 黒崎直「6. 農具 くわとすき」(『弥生文化の研究』5 道具と技術 I 1985)
- ② または「蟻みぞ」とも呼ばれている。
- ③ 久々忠義「I 木製品 D江上A遺跡」(『北陸自動車道遺跡調査報告——上市町木製品・総括編——』上市町教育委員会 1984)
- ④ 濱修『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書2 赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1987 および濱修『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1986
- ⑤ 大橋信弥、谷口徹、大橋美和子『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書——湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書II——』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1980
- ⑥ 『埋蔵文化財研究会 第14回研究集会資料テーマ 木製農具について』
- ⑦ 湖西線関係遺跡発掘調査団、田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1973
- ⑧ 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会 1976
- ⑨ 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告X 古墳時代I』1980
- ⑩ 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『大和を掘る：1984年度発掘調査速報展』1985
- ⑪ 前註⑥に同じ
- ⑫ 前註⑨に同じ
- ⑬ 前註⑥に同じ
- ⑭ 前註④に同じ

入江内湖遺跡行司町地区出土木製品の樹種の調査結果について

(財)京都市埋蔵文化財研究所 岡田 文男

表 1 木製品の樹種

樹 種	学 名	点数
針 葉 樹		
カ ヤ	<i>Torreya nucifera</i> Sieb.et Zucc.	1
イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K.Koch f.drupacea Kitamura	17
イヌマキ	<i>Podocarpus macrophyllus</i> D.Don	5
モ ミ	<i>Abies firma</i> Sieb.et Zucc.	11
ス ギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	115
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	95
不 明		2
常 緑 広 葉 樹		
シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	2
アカガシ亜属	<i>Quercus</i> sp. (Subgenus <i>Cyclobalanopsis</i>)	42
ユズリハ属?	<i>Daphniphyllum</i> sp.?	1
ツバキ	<i>Camellia japonica</i> L.	15
サカキ	<i>Cleyela japonica</i> Thunb.pro parte emend.Sieb.et Zucc.	7
落 葉 広 葉 樹		
ク リ	<i>Castanea crenata</i> Sieb.et Zucc.	2
エノキ	<i>Celtis sinensis</i> Persoon	1
ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i> Makino	3
ムクロジ	<i>Sapindus mukurossi</i> Gaerth.	1
サクラ属	<i>Prunus</i> sp.	3
カエデ属	<i>Acer</i> sp.	2
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	2
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsley	1

合計 328

学名は『原色日本植物図鑑木本編 I・II』による。

私の順位は『牧野新日本植物図鑑』による。

米原町入江内湖遺跡行司町地区木製品の樹種調査

入江内湖遺跡行司町地区で出土した328点の木製品の樹種同定をおこなった結果について報告する。木製品の保存状態は良好で、すべて水漬けで保存されているので、安全カミソリで木口、柾目、板目面の薄片を作成し、顕微鏡観察をおこなった。木製品は、木々の幹や枝、節などを利用して作られており、木取りもさまざまである。さまざまな部分を利用しているための木材の特徴が十分つかめず、なかには同定の精度を高めるために繰り返し薄片を作成した資料もあるが、それでも確信の持てないものには？

をつけた。結果は別表の通りである。観察点を以下に示す。

針葉樹

カヤ

仮道管内壁に対になるらせん肥厚があり、樹脂細胞を持たないものをカヤとする。資料ではらせん肥厚がほとんど消えている。

イヌガヤ

仮道管内壁にらせん肥厚があり、樹脂細胞を持つものをイヌガヤとする。放射組織の細胞高は低い。

イヌマキ

イヌガヤに組織が似るがらせん肥厚がない点でイヌマキとする。放射組織の細胞高が低いことを一つの根拠としたが、32・33・249は資料が枝材であり特徴がはっきりしない部分もあるので？付とする。

モミ

仮道管と放射柔細胞からなる。放射柔細胞は壁が厚く、じゅず状末端となる。資料には枝材でできたタモもあるが、いずれもモミ属でこれらをモミとする。

スギ

構成要素は仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる。木口面の晩材部の幅は広い。放射組織は単列で分野壁孔がスギ型のものをスギとする。分野壁孔が不鮮明なものには？をつけた。

ヒノキ

構成要素は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。木口面の晩材部は幅はせまい。放射組織は単列で、分野壁孔がヒノキ型のものをヒノキとする。以上の特徴のうち分野壁孔の不鮮明なものをヒノキ科ないしは？付とする。

不明

仮道管を持ち針葉樹であることは確認できるが、アテ材で分野壁孔が観察できなかったものを不明とする。

常緑広葉樹

シイノキ

環孔性の放射孔材で、孔縁部は道管は単独で大きい。道管は単せん孔を持つ。放射組織は大部分単列で一部集合状になっているものをシイノキとする。

アカガシ亜属

放射孔材で、広放射組織と単列放射組織を持ち、放射組織が同性であるものをアカガシ亜属とする。

ユズリハ属？

散孔材で道管は均一に分布する。道管の径は小さい。放射組織は1－3列幅で異性である。道管は階段せん孔を持ちバー数は非常に多いものをユズリハ属？とする。

ツバキ

散孔材で均一かつ緻密な材である。道管の径は小さく、木繊維の壁が厚い。放射組織は異性で、直立細胞のなかにシュウ酸石灰を含みダルマ状にふくらむものをツバキとする。

サカキ？

散孔材で道管は均一に分布する。道管の径は小さく、木繊維の壁は厚い。放射組織は異性で単列のものが多く、道管は階段せん孔でバー数は多いが、ユズリハほどには多くないものをサカキ？とする。

落葉広葉樹

クリ

環孔材で、孔圏部の大道管と孔圏外の火炎状に配列する小道管からなる。道管は単せん孔を持ち、放射組織は単列で同性であるものをクリとする。

エノキ

環孔材で孔圏部の道管は大きく、小道管は多数集まる。柾目面の道管内にシュウ酸石灰の結晶を認める。放射組織は異性であるものをエノキとする。

ケヤキ

環孔材で大道管が1列にならぶ。小道管の側壁にはらせん肥孔があるものをケヤキとする

ムクロジ

環孔材で柔細胞は幅広い帯状配列をする。放射組織は2-3細胞幅で同性であるものをムクロジとする。

サクラ属

散孔材で道管は均一に分布する。道管は単せん孔でらせん肥厚を持ち、放射組織は異性で辺縁部のみ方形細胞からなり、放射組織の幅が2細胞程度のものをサクラ属とする。

カエデ属

散孔材で放射組織は5細胞幅をこえる。放射組織は同性であるものをカエデとする。

トチノキ

散孔材で放射組織は単列である。明瞭なリップルマークが肉眼で観察できるものをトチノキとする。

ミズキ

散孔材で放射組織は5細胞幅までである。放射組織は異性で階段穿孔を持つものをミズキとする。

木製品の用材

個々の木製品とその樹種については別表の通りである。(第2表)以下に簡単に木製品の特徴的な点についてふれる。

農具

すべてアカガシ亜属である。

農具の柄

イヌマキ？、スギの針葉樹である。

柄の把手

樹種は一定していない。

竪杵

ツバキ、サカキの均一で緻密な材と、アカガシ亜属からなる。ツバキ、サカキは芯持ち材でアカガシ

亜属は割材を加工したものである。

横槌

樹種は一定していない。

たも

出土したたもは2例ともモミである。遺跡から出土しているたもは大部分カヤ材で、現在でもたもはカヤの枝を用いるのが普通である。たもにカヤを用いることが多いのは、カヤの枝が対生（対に枝がでること）であるためその性質を利用して作りやすいからで、そういう意味ではたもにモミを用いた例は極めてまれである。

弓

出土した弓材は3例ともイヌガヤである。狩猟用具である弓の出土は報告例が多く、それによれば弓材はイチイ科のカヤ、イヌガヤ科のイヌガヤが多い。（古文化財の科学26松田）

櫂

スギ、ヒノキ、モミの針葉樹である。

アカトリ

スギ、ヒノキの針葉樹である。

脚付浅鉢

スギ、ヒノキの針葉樹とアカガシ亜属、ケヤキ、サクラ属の広葉樹がある。

箱形容器(槽)

イヌガヤ、スギ、ヒノキの針葉樹である。

高杯

ケヤキである。

脚台状木製品

スギ、ヒノキの針葉樹である。

木錘

樹種は一定していない。

臼

トチノキである。

有頭棒

カヤ、イヌガヤ、モミ、スギ、ヒノキの針葉樹である。木取りは大部分が割材からの加工品であるが一部芯持ちの枝材もある。

建築材

イヌガヤ、スギ、ヒノキ、モミの針葉樹とクリがある。

参考文献

- 島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』地球社 1982
- 北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編Ⅰ・Ⅱ』1978
- 牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』1977
- 米原町教育委員会『入江内湖発掘調査報告書』米原町教育委員会 1987
- 伊東隆夫・林昭三・島地謙「北白川追分町遺跡出土の樹種」
『京都大学埋蔵文化財調査報告3』京都大学埋蔵文化財センター 1985
- 小林弥一・須藤彰司『木材識別カード』日本林業技術協会 1960
- 山内 文「材の解剖学的識別法および発掘された丸木舟・弓・木棺の用材について」
『古文化財の科学』26号 古文化財科学研究会 1981
- 松田隆嗣「遺跡より発掘された木製遺物の樹種について」『古文化財の科学』26号 古文化財科学研究会 1981
- 島倉巳三郎「木製遺物の同定と、それから考えられること」『考古学と自然科学』12号 1978
- 松田隆嗣「木製遺物の樹種について」『池上・四ツ池遺跡』第六分冊自然編 財団法人大阪文化財センター 1980

付論 2.

入江内湖遺跡行司町地区出土の サヌカイト製石器、剥片の石材産地分析

京都大学原子炉実験所 藁科 哲男、東村 武信

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で15年前から、蛍光X線分析法により研究を始めた。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{1・2・3)}。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができ、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

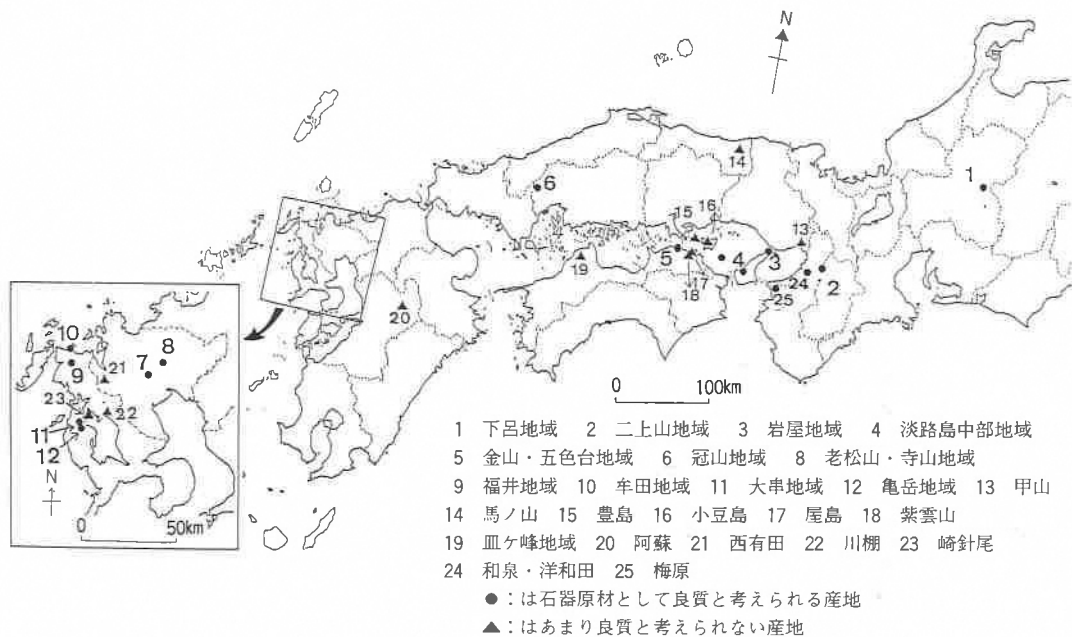
入江内湖遺跡から出土したサヌカイト製遺物の中で、産地分析を行った遺物は第VIII層暗灰色粘土層上面より出土した19点である。これら遺物の産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、励起用の⁵⁵Fe、¹⁰⁹Cdの放射性同位元素とSi(Li)半導体検出器を組み合わせたエネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。⁵⁵Fe線源で励起したとき、K、Ca、Tiが、¹⁰⁹Cd線源で励起したとき、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの元素がそれぞれ分析される。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地など、合わせて25ヶ所の調査を終えている。図1にそれらの地点を示す。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると31の原石群に分類できる。その結果を表1に示した。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの



第1図 サヌカイトの原産地

表1 各サヌカイト原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地 原石群名	分析 個数	K/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Zr/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$
岐阜県 下呂	56	1.475±0.0041	0.248±0.010	0.745±0.011	0.283±0.005	0.029±0.005	0.442±0.010	0.040±0.008
奈良県 二上山	57	0.243±0.009	0.227±0.010	4.389±0.145	0.212±0.008	0.055±0.010	0.582±0.016	0.180±0.010
大阪府 和泉	15	0.433±0.011	0.337±0.011	3.741±0.074	0.299±0.007	0.075±0.010	0.659±0.007	
兵庫県 岩屋	第一	17	0.576±0.018	0.249±0.009	3.559±0.096	0.369±0.006	0.056±0.010	0.800±0.023
	第二	19	0.482±0.017	0.269±0.007	3.399±0.070	0.337±0.007	0.044±0.008	1.038±0.023
香川県	五色台 国分寺	32	0.408±0.016	0.259±0.008	3.558±0.061	0.304±0.009	0.040±0.011	0.937±0.026
	蓮光寺	20	0.418±0.013	0.255±0.009	3.541±0.060	0.303±0.007	0.043±0.013	0.941±0.022
	白峰	57	0.486±0.015	0.267±0.007	3.349±0.070	0.339±0.009	0.041±0.012	1.033±0.023
	法印寺	34	0.349±0.013	0.244±0.009	4.590±0.121	0.283±0.011	0.066±0.013	1.105±0.026
	金山 金山西	34	0.367±0.014	0.223±0.009	4.691±0.124	0.291±0.010	0.064±0.008	1.035±0.023
金山東	37	0.437±0.016	0.230±0.006	4.469±0.050	0.320±0.012	0.064±0.009	1.133±0.030	
	*五色台	57	0.785±0.031	0.129±0.008	2.015±0.052	0.495±0.014		0.148±0.025
広島県	冠山 冠高原	58	0.564±0.023	0.534±0.020	2.940±0.068	0.188±0.006	0.025±0.010	0.421±0.011
	冠山東	38	0.266±0.016	0.385±0.033	1.497±0.043	0.047±0.005	0.004±0.007	0.357±0.043
	飯山	34	1.067±0.114	0.523±0.034	2.018±0.066	0.259±0.007	0.019±0.007	0.483±0.012
佐賀県	多久 第一	53	0.734±0.045	0.417±0.011	4.696±0.194	0.503±0.026	0.051±0.010	0.807±0.020
	第二	23	0.726±0.051	0.420±0.018	5.235±0.372	0.531±0.045	0.061±0.017	0.815±0.029
	第三	8	0.811±0.040	0.369±0.013	5.270±0.200	0.635±0.016	0.069±0.015	0.788±0.039
	老松山	26	0.624±0.029	0.320±0.011	5.255±0.137	0.538±0.027	0.051±0.010	0.637±0.019
	寺山	22	0.564±0.022	0.319±0.008	5.525±0.101	0.484±0.014	0.051±0.012	0.597±0.014
西有田	17	0.387±0.017	0.352±0.006	6.728±0.154	0.306±0.014	0.172±0.0384	0.480±0.021	
長崎県	大串	13	0.943±0.034	0.142±0.006	1.674±0.014	0.246±0.004	0.023±0.006	0.432±0.009
	亀岳	17	0.976±0.038	0.157±0.007	1.675±0.017	0.244±0.004	0.017±0.006	0.441±0.006
	牟田 第一	29	0.697±0.086	0.375±0.017	4.617±0.151	0.824±0.119	0.215±0.028	0.679±0.049
	第二	13	0.531±0.044	0.354±0.018	7.530±0.387	1.068±0.091	0.334±0.034	0.942±0.060
	川棚	38	0.436±0.017	0.310±0.006	4.190±0.089	0.219±0.007	0.081±0.007	0.739±0.029
	福井 第一	15	0.563±0.013	0.344±0.009	7.578±0.141	1.163±0.032	0.356±0.013	0.996±0.024
	第二	25	0.460±0.010	0.334±0.008	7.106±0.100	0.916±0.018	0.286±0.010	0.845±0.016
	崎針尾 第一	45	0.337±0.026	0.255±0.009	4.037±0.123	0.171±0.012	0.053±0.007	0.383±0.018
第二	12	0.553±0.110	0.407±0.028	5.299±0.672	0.340±0.040	0.079±0.010	0.610±0.059	
熊本県 阿蘇	9	0.889±0.070	0.559±0.031	2.693±0.164	0.294±0.013	0.093±0.008	0.996±0.038	

*: ガラス質安山岩 \bar{X} : 平均値 σ : 標準偏差値

地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分けられ、サヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にはほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが、金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区から、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表3に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。表4は示す和歌山梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡ら10個以上の遺物を分析し、表2、3のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表3のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

表2 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
〃	5	8	国分寺群に一致
〃	4	6	蓮光寺群に一致
〃	3	5	金山東群に一致
〃	2	3	和泉群に一致
〃	4	6	不明(どこの原石群にも属さない)

表3 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	〃
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明(どこの原石群にも属さない)

表4 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	〃
	10	48	不明(どこの原石群にも属さない)

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を表5に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、表5の試料番号18286番の遺物ではK/Caの値は0.239で、二上山群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、 0.243 ± 0.009 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.4σ 離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.4\sigma$ のずれより大きいものが65ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.4σ 以上離れる確率は65%であると言える。だから、二上山群の平均値から 0.4σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値か

表5 入江内湖周辺遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果

試料番号	元 素 比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
18283	0.402	0.230	0.311	1.105	4.502	0.119	0.076	0.081
18284	0.403	0.223	0.321	1.118	4.568	0.081	0.064	0.023
18285	0.557	0.287	0.373	0.721	3.872	0.057	0.072	0.045
18286	0.239	0.226	0.193	0.589	4.628	0.102	0.058	0.042
18287	0.232	0.219	0.239	0.578	4.437	0.137	0.054	0.019
18288	0.246	0.224	0.222	0.585	4.689	0.046	0.061	0.000
18289	0.276	0.220	0.206	0.528	4.765	0.064	0.064	0.652
18290	0.240	0.216	0.221	0.563	4.679	0.064	0.055	0.121
18291	0.232	0.215	0.206	0.552	4.510	0.061	0.061	0.029
18292	0.273	0.224	0.206	0.575	4.544	0.078	0.067	0.118
18293	0.241	0.221	0.233	0.553	4.600	0.060	0.062	0.097
18294	0.241	0.218	0.203	0.567	4.524	0.051	0.079	0.014
18295	0.243	0.218	0.241	0.585	4.811	0.131	0.077	0.000
18296	0.240	0.222	0.204	0.592	4.622	0.059	0.061	0.070
18297	0.240	0.220	0.233	0.587	4.576	0.114	0.061	0.015
18298	0.321	0.226	0.208	0.566	4.498	0.050	0.065	0.058
18299	0.236	0.219	0.187	0.587	5.033	0.071	0.044	0.000
18300	0.243	0.223	0.241	0.565	4.632	0.074	0.059	0.000
18301	0.235	0.216	0.228	0.539	4.529	0.065	0.074	0.020

らの隔たりは、約 12σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 12σ 以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に65%、金山東群に百億分の一の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、二上山群の原産地だけとなり、二上山産地または和泉・岸和田原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯一の変量だけでなく、前述した7ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4・5)}。入江内湖遺跡行司町地区より出土した遺物の産地推定の結果を表6に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料、例えば0.6cmとすると、原石試料との面積比は1/25になる。このため原石試料と同じ測定精度で、遺物から元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

原石産地(確率)の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えては、間違いないと判断されたものである。

入江内湖遺跡行司町地区出土の19点のサヌカイト製遺物の中で、信頼限界の0.1%に達した遺物は11点で、マハラノビスの距離 D^2 の値によって判定した遺物は8点であった。これら産地の明らかになった19点の遺物の中で、16点に二上山産原石が使用され、僅か2点であるが金山東群の原石が、1点に岩屋第一群の原石がそれぞれ使用されていることが明らかになった。しかし、二上山群、金山東群に属する原石が用いられているからといっても、それぞれ、二上山、金山に産出するサヌカイト原石を用いていると結論するのは早計である。というのは、淡路の岩屋原産地および和泉・岸和田原産地からも、金山・五色台地域の白峰、法印谷、国分寺、蓮光寺、金山東、金山西の諸群のいくつかの原石と極めてよく似た原石を産出しているからである。したがって、今のように金山東群に帰属される原材から作られた遺物が得られた場合、この遺物の石材産地は帰属された原石群の金山原産地の他に岩屋原産地および和

表6 入江内湖周辺遺跡出土のサヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

(滋賀県坂田郡米原町下多良)

試料番号	名称・位置・層位	時代(伴出土器)	原石産地(確率)	判定	遺物品名	備考	試料提供者
18283	No.1 第Ⅷ層暗灰色粘土層上面		金山東 (0.2%)	金山	剥片		
18284	2 "		" (27%)	"	"		
18285	3 "		金山西 (0.3%) 岩屋第1群 (D ² =82)	岩屋	"		
18286	4 "		二上山 (D ² =35)	二上山	"		
18287	5 "		" (D ² =100)	"	"		
18288	6 "		" (47%)	"	"		
18289	7 "		" (D ² =36)	"	"		
18290	8 "		" (31%)	"	"		
18291	9 "		" (35%)	"	"		
18292	10 "		" (0.5%)	"	"		
18293	11 "		" (8%)	"	"		
18294	12 "		" (81%)	"	"		
18295	13 "		" (D ² =96)	"	"		
18296	14 "		" (48%)	"	石 鏃		
18297	15 "		" (D ² =52)	"	"		
18298	16 "		" (D ² =98)	"	"		
18299	17 "		" (D ² =49)	"	剥片		
18300	18 "		" (0.5%)	"	石 鏃		
18301	19 "		" (3%)	"	"		

泉・岸和田原産地からの原材である可能性をも考慮しなければならない。これら三地域の原産地のうちどちらの産地の原石を使用したかの判定は、一つの遺跡より出土した多数の遺物を分析して、遺物が岩屋原産地および和泉・岸和田原産地に関係した諸群に帰属される頻度を求めて、この頻度分布と表2、3、4に示した岩屋原産地、和泉・岸和田原産地および和歌山市梅原原産地のサヌカイト原石の分類結果の頻度分布とを比較して行なう。すなわち、これらの遺物が、もし岩屋原産地および和泉・岸和田原産地から原材を採取して作られたものならば、分析の結果は、表2、3に近い頻度分布で、各原石群が現われるはずである。分析した入江内湖遺跡行司町地区出土の遺物の中に、和歌山市梅原原産地および和泉・岸和田原産地で比較的多く採取される和泉群原石が1点も見られないということは、本遺跡へサヌカイト石材が供給された原産地として、二上山地域原産地が考えられ、また岩屋第一群、金山、五色台地域の諸群に帰属される原石が見られる岩屋原産地が考えられる。岩屋原産地から金山東群1点を採取する確率は5%で、20回に1回起こるような出来事で、和泉・岸和田原産地では、1%で100回に1回の出来事で、2点を採取する確率は、岩屋原産地で0.25%、和泉・岸和田原産地では0.01%になる。2点を採取する場合の確率はかなり低くなり、したがって、少なくとも、本遺跡の金山東群に帰属された遺物の

どちらか1点には、金山産原石が使用されていると推測される。結果をまとめると、入江内湖遺跡行司町地区の第Ⅷ層暗灰色粘土層上面より出土した19点には16点に二上山産原石、2点に金山産原石、1点に岩屋産原石がそれぞれ使用されている。この事は、本遺跡が二上山原産地地域との交流の他に、金山、岩屋産原石の伝播は本遺跡が金山、岩屋原産地地方の情報を得ていたという傍証になる結果で、これら原石の使用頻度が高いほど、この原産地地域との交流が活発であると言えるであろう。多数の試料について、本遺跡で行われた様に無作為に選択された試料から、各原産地の原石使用頻度を定量的にもとめることは、交易とか交流を定量的に考察する際の貴重な資料を考古学の分野に与えるであろう。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8：61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学、10、11：53-81：33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59-89
- 4) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77-90
- 5) 東村武信 (1980)、考古学と物理化学。学生社

入江内湖遺跡(行司町地区)出土の

木製品の文様について

宇佐 晋一、斎藤 和夫

I. はじめに

入江内湖遺跡(行司町地区)から多数の木製品が検出されたなかに、注目すべき文様の彫刻を施した数点の遺物がある。それらは近年各地に類例の増しつつある弥生時代から古墳出現期にかけての直弧文関連文様の新例としてだけでなく、直弧文の成立にかかわる一時期を画するものとして、形式学的編年に資するところもまた大きいと思われる。

II. 資 料

いずれも木器に描かれた線刻文様で、つぎの2器物における4資料である。

資料1. 脚付容器——浅鉢(写真106)の表面A端の文様。短辺に平行して引いた線を軸として、やや傾いたまさかり状とも見えるばち形文を背中合わせに描いている。そのうちA端に近いばち形文は基部に近い部分に屈曲が見られ、中心線とおぼしい線もまた一層明瞭に直角に折れている。それに対して、対称図形のように描かれた他方のばち形文には屈曲も中心線も見られない。ほかに隣接して複線やすこし湾曲した角状の文様を描いているが、相互の関係は緊密でなく、まとまりは見られない。これらの文様の外側に連弧文状の太い彫りこみ線があるが、文様との関連は認められない。

資料2. 同一容器の表面B端の文様。端部に平行に引いた線と端部とのあいだに、背中合わせにした2個のばち形文を入れている。両者を平行線内に端整におさめ、それぞれのばち形文に人字形の2~4本からなる分割線を入れるが、中央側の外郭の2線はあたかも2個のばち形文を1個と見なしたように描かれ、全体が“かなとこ状”になっている。しかしばち形文の背中合わせの接合部には端部短辺に平行した1本の直線帯が短く描かれている。この2個のばち形文と外側長辺とで限られた空間を埋めるように湾曲した2本の角形図形の入組み文が描かれている。

これらの文様に隣接して、もう1段ばち形文が、浅鉢の窪みのほうに底辺を向けて描かれるが、底辺が端部短辺に平行していたらしい痕跡が見られる。このばち形文も3本の分割曲線を入れているが上部には短辺に平行した2本の帯が描かれ、さらにその上に接して同一方向の長い1本の帯が基準線にそってのびている。その帯の外側への延長上に外向きの人字形の、やや深い彫り込みがあるが、資料1のように連弧文を形成してはいない。

資料3. 同一容器のA端の裏面の文様。端部の短辺に平行した5本の帯(6線帯)が走り、その一部からばち形文が生じたかのように帯の分岐と屈曲によって、ばち形文の外側縁が形づくられている。ば

ち形文は脚部のほうに底辺を向けて外向きに傾いており、その傾きが資料1のばち形文と表裏趣きをひとしくしている。人字形の分割線は左右各3本あり、端部の6～7線帯と分割幅がほぼひとしいため力づよい文様構成をみせている。これに比べると資料1は輪郭や文様内部の印象だけを写しえたにすぎず、また資料2は一段と端整に再構成して、装飾性を増しているのが認められる。

資料4. 円板状木製品(写真158)の文様。直径54～57mm、厚さ4mmの薄い小円板の表面のみ周辺をわずかに面取りをし、平面部分いっぱいには帯状構成の円形文様をレリーフ表現で彫出した精巧な作品である。構図の基本は上下に背中合わせに接合したばち形文で、あたかも分銅形に見える。その縦割りの中心線で分けられたばち形文の左右を、さらにそれぞれ1本の分割線を入れて3線帯のようにあしらい、中央部上段では左から、下段では右から横位に走る3線帯が、ばち形文基部の半側を覆って他の半側の下に入りこんでいる。このため中央部は美しい組み編み文を形成し、緊密な構成を見せている。周縁には3線帯がドーナツ状にめぐり、ばち形文の部分では透視的に重ね書きをあえてし、その一部(上段では中心線の右に接する部分、下段では中心線の左に接する部分)ではばち形文の上に現れている。また上段の横帯の右への延長が右側の周縁3線帯と接する部分(下段では横帯の左への延長が接する部分)では、両者がまるでつながった1本の帯であるかのように屈折して表現され、その折り目の部分に窪みさえみられる。

この円形文様の上記の構成は、ことごとく点対称をなしており、すべての文様要素が相互に組み編まれたり、つながったりして、複雑かつ緊密に結びついているという特色がある。それはレリーフ表現である点も加えて、さながら籠を編む技法を思わせるものがある。

III. 考 察

1. 文様の性質

まず挙げるべき特色は全資料を通じてのばち形文の優性である。資料3において、もっとも整美な姿を見せており、左右各3帯と真中の人字形とで多線構成の富士山形をなしているのは、底辺が外向きに反ることとあわせて奈良県桜井市纏向の弧文円板(図2-5)との近さを思わせる。その多線構成はA端短辺に平行な6線帯の趣きに一致し、かつばち形文の容器長辺側の2本の帯状部分は6線帯の一部に融合し、外側から2本目の帯は屈曲してばち形文の上部を抑えるようにのびて行く。これは奈良県宇陀郡大宇陀町沢(戸石辰巳前)の木製高杯の文様構成(図2-8)に共通しており、ひいては纏向の弧文円板の原単位図形の甲乙両図形のうちの甲図形からのびる帯が乙図形側に屈曲していく構図につながるものと思われる。このばち形文上部の帯の屈曲は資料1においても輪郭線と中心線にはっきりと表現され、資料2においては痕跡的に描かれている。資料4では屈曲こそしないが、ばち形文どおしの接合部に左右から入りこむ横帯になっており、上下のばち形文の半側とのあいだに組み編み文を形成している。ばち形文といい、組み編み文といい、両者ともに直弧文の成立期ないしその直後の古い段階にあらわれる要素で、いずれも纏向の弧文円板に源を発している。ばち形文は弧文円板の甲乙および丙丁両図形に由来し、それぞれ甲と乙、丙と丁のあいだに別の帯がはさまっていることが、甲図形の上ののびる帯が屈曲することと相まって、ばち形文上部の帯の屈曲を作り出していったものと考えられよう。資料1～4と

沢の木製高杯の文様のみに認められ、弧文円板との近縁性を示している。また組み編み文は弧文円板以外では纏向の直弧文彫刻石板（図2-6）、岡山県倉敷市の楯築墳丘墓の旋帯石（図1-8）、岡山・百間川・原尾島遺跡の器台形土器（図1-5）などにのみ認められ、レリーフ状の平面的な構成のものに限られており、のちに盛行する立体表現の直弧文には絶えて見られないものである。資料4の組み編み文が古段階にあることを示唆するものにほかならない。

2. 初期直弧文関連文様として取扱う対象の範囲

弥生時代に遡ることが明らかになった直弧文関連文様は、現在どのような基準によって取扱われているかを明確にしておきたい。もと熊本県下の装飾古墳の文様の研究に端を発し、1917年に浜田耕作博士の命名による直弧文^①は、鹿角製刀剣装具の彫刻文様を祖形とする一種の組帯文とみられていた。その後1947年大阪・紫金山古墳から直弧文の彫刻のある2個の貝輪が見出され、その α 面の文様の分析によって、われわれは直弧文の原単位図形を抽出することができた^②。この原単位図形は底辺を共有する末広がりの二者一対の図形で、上部は相寄る帯が x 状になり、下方に拡った部分では、一方に棘状の突起を2か所にもち、他方にはそれがない、という特徴的なものである。1975年に奈良・纏向の石塚古墳の周濠から弧文円板が検出されると、そこにも直弧文の原単位図形が構成単位として用いられており、より古い形態のばち形文であることが認められたばかりでなく、原単位図形の構成によってできた孔の形が勾玉形や三角形などを呈して、吉備地方の特殊器台形土器の透かし孔の形に共通することから、弧文円板は一挙に古い直弧文と吉備の特殊器台の文様とを結びつける接点を果すことになった^③。一方吉備地方の楯築遺跡の石製品の彫刻にみられる带状文様を近藤義郎教授は弧帯文と呼び^④、同じ弥生時代の特殊器台や各種の土器にみられる文様を宇垣匡雅氏もまた弧帯文と称して、それを直弧文の源流とみなしている^⑤。また豊岡卓之氏は弧帯文の出自を明らかにし、弧帯文から直弧文への飛躍を論じている^⑥。

このように近年弥生時代の弧帯文から直弧文への流れを大勢において認めようとする傾向があり、この両者に関係のあるものを現段階での直弧文関連として取扱うことにしたい。

3. 古い時期の直弧文関連文様

① 佐賀・惣座遺跡出土器台形土器の文様（図1-1）〔図の出典は後記、以下同じ〕

器台の透かし孔のあいだの横帯文様で、上縁は低く垂れ下り、中央の太鼓橋状の文様をはさんで上下左右に複線からなる短い带状の図形を配し空間を満たしている。（弥生後期）

② 愛媛・姫塚遺跡出土壺形土器の文様（図1-2）

壺形土器の口縁の上面に描かれたもので、まず中央で縦に切半された分銅形の図形が目立っているが、そのほかにも末広りのばち形文がくり返し描かれている。分銅形のは上下とも末広がりになる部分に、広がりに応じた分割線を1～2本入れている。（弥生末期）

③ 愛媛・宮前川遺跡出土壺形土器の文様（図1-3）

大型の壺形土器の肩部に描かれたばち形文で、斜左下方に向かって広がりをみせており、数本の末広りの分割線をいれている。すぐ上方に接して4線帯の屈曲したようにも見える三角文がある。（弥生後期）

④ 岡山・上東遺跡（亀川調査区包含層下層）出土不明土製品の文様（図1-4）

高さ4.3cmの扁平台形土器の一方の側面に多線構成の上向きの末広がり凶形が、持送り状に左右から交互に3段重ねに描かれ、背面には右側を折返し部分にした流水文的な多線帯がみられる。（弥生後期初頭）

⑤ 岡山・百間川原尾島遺跡（新田サイフォン調査区H-1）出土器台形土器の文様（図1-5）

6～8線帯の組み編み文と、周縁に向う多線帯の端が末広がりになって作ったばち形文からなる。二つのばち形文を接続する際に隣りあう両者の側縁をつないで円形に近い文様を形成し、そのために一方の多線帯を屈曲させるという注目すべき技法を生み出している。（弥生後期後葉）

⑥ 岡山・百間川原尾島遺跡（左岸用水調査区1-H-5）出土器台形土器の文様（図1-6）

多線帯がループ状をなし、そのループの接線に直角の方向にも多線帯が接している。出土地点はことなるが、⑤と同一個体の一部とみられている。（弥生後期後葉）

⑦ 岡山・百間川兼基遺跡（第3微高地）出土器台形土器の文様（図3-7）

短冊形の透かし孔に関係なく、ループ状の9～10線帯を接続させている。（弥生後期後葉）

⑧ 岡山・楯築神社旋帯石（神体石、通称亀石）の文様（図1-8）

11～14線帯が18個の渦状部を形成し、それらをつなぐ多線帯が顔面部を除く全面をおおっている。渦状部はほぼ正円にちかく、2～3本の帯の湾曲部分を合わせて形成されるが、そのために帯に極端な屈曲をしている。また帯の両側縁はとくに溝を斜めに深く片切り彫りにして整えている。多線帯の一部に中心線をことさら太く表現したものもある。（弥生後期後葉）

⑨ 岡山・楯築遺跡出土弧帯石の文様（図1-9）

楯築墳丘墓の主体部の木槨のうえに細片となって埋められていたもの。渦状部とばち形文が目立ち、全面に5～10線帯をめぐらしている。渦状部は⑧の旋帯石ほど正円にちかくはないが、2～3本の帯の湾曲部で渦状部を形成しようとする点は⑧と同じである。帯は側縁も中心線もないが、2ヶ所のばち形文（そのうちのひとつは図示されていない）は、ともにその中央部に、左右を分けるような割れ目状の深い溝が、意識的に彫りこまれているのが注目される。（弥生後期後葉）

⑩ 岡山・原遺跡壺形土器の文様（図1-10）

口辺の立ち上り部外側の文様帯の中段に横帯、下段に鋸歯文を連続し、上段に上向きの、両端が極端に左右に広がったばち形文を、横に接続して描いている。ばち形文は中心線のほかに左右各2本の細分線を入れ、隣接するばち形文との接合部は反転して中段の横帯に接している。（古墳時代初頭）

⑪ 岡山・立坂遺跡出土特殊器台形土器の文様（図3-10）

15線帯2本の横位入組み連続文を主体とし、その交叉部の上下に小さな5線帯を青海波のようにのぞかせているもの(a)と、それを縦位にして両側に平行した帯と青海波文を加えたもの(b)とがある。いずれも練達の細い線で入念に描かれている。横位のもは帯と帯のあいだに凸レンズ形の透かし孔があり、その下縁にはさらに切れこみが縁の半分まで加えられており、勾玉形の孔の変形とみられる。（弥生後期後葉）

⑫ 岡山・黒宮大塚特殊器台形土器の文様（図1-11）

2本の15線帯の縦位の入組み文で、⑪の(b)と同様に両側に平行した直線的な帯と青海波文を描きそえている。⑪の(b)は中心に透かし孔はないが、本例には凸レンズ形の左側に切れこみ部分のある孔をあけ

ている。その精緻な線刻表現は⑪にひとしい趣がみられる（弥生後期後葉）

⑬ 岡山・中山遺跡出土特殊器台形土器の文様（図2-1）

(a) 8線帯2本の横位入組み連続文で、⑪の(a)を簡略化したもの(図2-1上左)、(b)魚のひれ状に先端の広がる多線帯を斜めに配列し、斜め上向きのもので斜め下向きのもので交互に編むように入組ませたもの(同図上右)で、その間にばち形文を左向きに配置している。その部分にあたかも6と9を合成したような透かし孔を、文様に関係なく入れており、さらに同一個体とみられる4線帯を波状にあしらった部分には勾玉形の孔をあけている(同図右端)、(c)2本の6線帯の縦位入組み文で、⑪の(b)や⑫と同様に両側に平行した直線的な帯と青海波文を描きそえ、中心の凸レンズ形の透かし孔には一部切れこみをもつことも、横位の(a)とともに同様である(同図下中央)、(d)曲玉形の透かし孔を中心に斜線帯をめぐらし、その帯の上部と下部で(同図下左端のものは上部のみ)入組ませたもの(同図下両端)、右端のものは斜線帯の右側にそって、やや太い斜線帯をめぐらし、その右中央部と下部に、それぞれ内側の斜線帯に頂点を接合させた二等辺三角形を重ねて描き、なかを斜線でうずめている。この構図は中央の勾玉形の孔をめぐって帯の入組み文がみられることから、縦位の入組み文(c)の変化と認められる。(弥生後期後葉)

⑭ 岡山・酒津遺跡出土壺形土器の文様（図2-2）

口縁外側に上向きのばち形文を描き、頸部には2峰の山形曲線と底辺とからなる単位図形を縦位に配しながら横方向に接続して頸部の周囲にめぐらしており、一見文様帯のようであるが厳密には帯状をなしていない。(古墳時代初頭)

⑮ 徳島・黒谷川郡頭遺跡溝1出土土器の文様（図2-3）

(a) 外反した壺形土器の口縁部内面に描かれたもので、2本の帯が逆時計回転の方向に、たがいに他の帯の下に入組んでいる。口縁に接するほうの帯は中心線をもつ3線帯であるが、他方は中心線のない2線帯である。この入組文の右側に続く2本の中の広い帯の直交するかのような文様があるが、単純ながら弧帯の連続文様を形成していた可能性もある。(弥生V様式後半の古い段階、黒谷川I式)

(b) 同様に外反した壺形土器の口縁部内面に描かれており、9とその反転図形の弧帯文が連続している。ループ状の2つの弧帯にはさまれた部分にばち形文とも見られる文様が描かれている。(庄内式古段階、黒谷川II式以前)

(c) 算盤玉形の径3.5cmの球状土製品の両面に描かれた文様。鋭利な極細の線で、一方の面には2線帯の渦状文、他方の面には象の鼻形の2線帯が2個、たがいに巻込むような形で向いあい、その一方の図形は奈良・纏向石塚の弧文円板における直弧文原単位図形の丁に似た趣があり、2線帯の1側は直線で、先端は斜に台形のようにになっている。その図形の広い部分には複線で波状曲線を入れている。その図形の下には1本の線が通り、文様を構造化している。(同上)

(d) 高環形土器の柄部に描かれており、上下に多線帯を入れた間に、原単位図形の先端を思わせるようなものを組み合わせ、その一部は几形状をなしている。ほかに数本の線が図形間にひかれ、文様の構造化が見られるのは上記の(c)に共通している。(古墳時代初頭)

⑯ 奈良・唐古・鍵遺跡出土壺形土器の文様（図2-4）

2線帯をループ状にした文様の外側に、帯でない小区画が附属して描かれる。ループを形成した帯は右回りにその帯の下に入りこんでいる。(弥生時代畿内第V様式後葉初め)

⑰ 奈良・纏向石塚古墳周濠出土弧文円板の文様(図2-5)

外周第1段に最古段階の直弧文原単位図形と、左右に分かれたばち形図形を交互に4組配列し、第2段にはそれらの裏返しを図形を組み上げている。(第3段は中心部をなす構図であるが不明であって、この復原図では円形中心部をもつものと想定して描いてある)

その配列と構成には法則性があり、⑤や⑧に見られた組み編み文が随所に使われていて、緊密な構図を形成している。その結果として8か所に勾玉形の孔が、原単位図形の突起によって必然的に生じ、他の三角形の孔とともに吉備地方の特殊器台の透かし孔の形や文様との密接な関係を示している。(古墳出現期)

⑱ 奈良・纏向遺跡(東田大塚南方溝)出土弧文石の文様(図2-6)

弧文円板に似た組み編み文をもつ側縁付きの帯で構成されるが、法則性は見られず、文様凝縮の度がいちじるしい。(古墳時代初頭)

⑲ 奈良・纏向遺跡(巻野内)出土弧文板の文様(図2-7)

平行して走る2本の帯の外側に、底辺を外に向けた原単位図形を同一方向に連続させたもので、図形部分以外は透かし孔にしており、裏面もほぼ同一文様が彫られた精巧なものである。原単位の配列や平行した2本の帯にからむ状態は、あたかも弧文円板の第1段を思わせるが、原単位図形の甲の上方への棘状突起が上方の帯の縁に接するまで持ち上げられている。甲と隣の図形の乙とが重ね書きされる部分は、屋根の千鳥破風状に彫られている。(纏向3~4式期)

⑳ 奈良・沢(戸石辰巳前)遺跡出土木製高杯の文様(図2-8)

杯部内面と側面をばち形文で飾る精緻な彫刻で、内面は3つのばち形文を外向きに裾広がりになるように配列して、全体を円形におさめている。側面は狭い連続ばち形文帯を形成するが基本構図に変わりはない。ばち形文は明瞭に左右に分かれ、一方は同心円状の10線帯が外方へ屈曲したように表現される。その下をくぐる同心円状の4線帯の下から、もう一方のばち形文が12線帯の裾広がり形で出て来るといふ構図である。ばち形文の片側の上部が屈曲して多線帯につながる性質は、入江内湖遺跡の資料1~3に通ずるものがあり、ひいては纏向の弧文円板にもつながる要素と見られよう。(古墳時代初頭)

㉑ 滋賀・福満遺跡出土高杯形土器の文様(図3-1)

ラップ状脚部外面に繊細な沈線でばち形文を2段に入れている。下段のものは左半分が⑳と同様に屈曲し、横に走る5線帯となっており、右半分は裾広がり6線帯であるが、左右の図形の切半された間から斜に4線帯が右下に伸びて下縁で終わっている。上段は裾広がりばち形文の裾が左右に4線帯となって伸び、次の図形の裾に接している。(弥生時代後期後半~古墳時代初頭)

㉒ 大阪・亀井遺跡出土壺形土器の文様(図3-2)

肩部に描かれた5線帯の両端が巻上ってループ状をなしている。(弥生時代畿内第V様式初頭)

㉓ 石川・畝田遺跡出土木製品の文様(図3-3)

表は端正な浮彫り様に、裏は線彫りで表現されている。弧状のくり込みに沿って文様帯を配し、右型

原単位図形の甲乙両図形が明確に認められる。周縁に複線縁をもち、甲図形の上部に突出した棘部が上方に持上げられ、おそらく横帯に接していたと思われる点や、多線帯状の細い分割線が失われて、中心線が帯部では1本になり、甲図形では中心線の屈曲部以下と、中心線を離れた先端寄りの部分に人字形の図形分割線を入れた部分とは複線になっている。この図形分割線の人字形は、原単位図形の上部を走る横帯の端部が屈曲する部分にも同様に見られて、ともに図形をばち形文化しようとする意図を見せている。(古墳時代初頭)

㉔ 三重・納所遺跡手あぶり形土器の文様(図3-4)

4個の直弧文原単位図形の上部を中心にあつめて、裾部をそれぞれ上下左右に向けて配したものであるが、下のはかなり正確に右型原単位を描き、右のはやや簡略化し、上のは原単位特有の突起を失ってばち形文となり、左のはばち形の両端が錨状に巻上っている。これらの原単位合成文様の左下から左斜上方に3線帯が逆S状に立上っており、その先端のややくたびれた部分から先は蛇の頭部状になっている。(古墳時代初頭)

㉕ 愛知・旧紫川遺跡出土土器の文様(図3-5)

巾13mmの底辺をもつ小さな2個の原単位図形を近接して描き、左のは右型原単位をかなり正確に、他方は突起を省略し、ばち形文として表現している。前者の先端に接して巾8mmの5線帯があり、また下方にも接する帯の一部が認められる。現在知られている最小の原単位資料である。(弥生時代後期山中式期～欠山式期～古墳時代元屋敷式期)

㉖ 愛知・見晴台遺跡出土土器の文様(図3-6)

6cmほどの小片に3～8線帯が縦横に、湾曲したり屈曲したりしながら重なり接続している。そこに法則性は見出せないが、一部に上方に広がるばち形文があり、そのなかに分割線を入れているので原単位図形であった可能性がある。この例でもばち形文の上部の左半側だけが下部で右に屈曲して3線帯となり、平行して走るもう1本の3線帯に接している。(弥生時代後期)

㉗ 愛知・三ツ山古墳群2号墳盛土出土土器の文様(図3-7)

多線構成の文様のなかに右型原単位の一部を思わせる2線表現の曲線と直線が認められる。(古墳時代初期)

㉘ 愛知・朝日遺跡出土小型壺形土器の文様(図3-8)

四角形をなす台座の長方形のスペースに、右型原単位図形の輪郭を描き、その上部に接して上向きの末広がりばち形文を描いて、どちらにも輪郭にそった数本の線を内側に加えている。(古墳時代初頭)

㉙ 静岡・三和町遺跡出土壺形土器の文様(図3-9)

右型原単位図形を多線表現で描き、その上部に多線帯を水平に配して第1段とする。その多線帯を原単位図形の右側の突起のある甲図形のうしろから左側の末広がり乙図形のまえを通すとともに、甲の上部の帯をさらに水平多線帯に沿ったもう1本の多線帯にくぐらせて、不完全ながら組み編み文を形成している。その部の右に接して、乙を伴わない甲だけの原単位を描き、うしろに多線帯をやや右上りに配して第2段とする。弧文円板の第1段と第2段の關係に、裏返しではあるが酷似している。本例は直弧文原単位図形の分布の東限をなすものである。(古墳時代初頭)

IV. 本遺跡の文様との関係

このように近年類例の増した古い時期の直弧文関連文様を通観して、本遺跡の木器の文様との間にどのような関係が見出されるであろうか。まずなによりも本遺跡の資料1～4のすべてに共通して見られるばち形文の検討が中心的課題になるであろう。

1. ばち形文の発生

徳島・黒谷川郡頭において弥生V様式後半の古い段階とされる広口壺形土器内面の文様(図2-3、b)に、ループ状をなす二つの弧帯文の間に、ばち形に細線を配した部分が認められる。これはループ状弧帯文という“図”に対する“地”の部分を細線で埋めた部分の一部と見られ、明確にパターン化したばち形文とは思われない。

明瞭なばち形文は奈良・纏向の弧文円板(図4-1)の直弧文原単位図形の甲乙(図4-2)に伴う丙丁(図4-3)において、いちじるしく裾広りの、かつ寄り添うような二者一対の姿で現れる。弧文円板は纏向石塚の周濠からの出土遺物であるために、伴出した纏向1式土器と同年代とみることに對して、十分な賛同がえられていなかった。しかし最近、纏向(巻野内地区)遺跡からの弧文板(図2-7)や石川・畝田遺跡の不明木板(図3-3)などの庄内期(纏向2～3式期)の原単位系文様の検出によって、様式上それらよりすべての文様要素が先行することが明らかになったので、弧文円板が纏向1式期の所産であることが確定した。この期において丙丁は、原単位図形甲乙と交互に配置されて弧文円板の周縁を形成し、主要な構成要素として甲乙に準ずる扱いのもとに出現したとみることができる。それは上方にのびて弧帯に連るとはいえ、丙丁の本体はもっとも弧帯の端末らしからぬ形状を示し、むしろ特異な形態的特徴をもつ原単位甲乙にのっとり、簡略化されたパターンであると見るのが妥当であろう。弧帯文が弥生後期初頭に現れるにしても、纏向1式期までの間に原単位甲乙が新たに創作されてはじめて法則性をもった構成力が発揮され、石野博信氏の指摘のようににわかに特殊化へと進んだのである^⑦。

一方吉備地方においては、直弧文関連文様としては、もっとも古く位置づけられて弥生後期初頭(百間川後期1=鬼川市1)とされる岡山・上東遺跡(亀川調査区包含層下層)の小さな不明土製品の文様(図1-4)が問題になる。側面の文様とあきらかに区別して、それまでに例をみない持ち送り状の文様を左右から交互に3段に描き、下方のものを上方のもの裏側に組みこむかのような構成や、多線表現で上端が広がるばち形的要素をもっていることなど、のちに現れる吉備の弥生後期後葉の多線帯グループへの要素的なつながりの否定できない注目すべき性質のものである。しかしその裏面はまったく異なる流水文に似た横位文様を配することや、両面とも空間充填的で、“図”と“地”の区分が不明瞭なことなどから、おそらくまだ文様のパターン化が不十分で、表現のルールが定まらなかった段階を示すものと見られよう。

これにつくものは楯築遺跡の弧帯石(図4-5)の彫刻文様である。そこには明確にパターン化したばち形文が3ヶ所(図には2ヶ所)に認められる。全面を覆う弧帯の優性からみて、弧帯以外の要素の介入の余地がないように見えるため、帯の端末の表現とする高橋護氏の見解^⑧のあるのもっともなこと

である。しかし詳細に見ると右下部において、右のばち形文に続く山形文様があり、弧文円板と比較すると、それが原単位甲乙の右裾と右隣の丙丁の左裾との描き重ね部分を写したものであることが容易によみとれる。とすれば、右のばち形文は帯の端末表現ではなくて原単位甲乙の転写であることがわかる。その左側のばち形文も同じ弧文円板の原単位甲乙を再度写したものであることは、その中央やや右寄りの深く巾広い彫り込みが甲乙の間の小さな三角形の孔に相当し、右下部を右上方から限る多線帯が弧文円板第2段の丙丁の左下へのびる先端の帯状部分に相当することを見ても明瞭である。さらにこれら二つのばち形文が、ともに左に傾いた表現をとることも、弧文円板の甲乙の傾きに一致しているという事実を見れば、両者の親近性はけっして偶然だとして見過しえないであろう。

さらに楯築弧帯石の左側の渦状にめぐる帯の中心の窪みの部分は、一見円形のように見えるが実は横長のもので、その左半側は楕円形であるが、右半側は下部に切れ込みのある凸レンズ形をしている。これは弧文円板の甲乙の左側と、左隣の丙丁の右側とで必然的にできた勾玉形の孔の形を意図的に写しとった結果であるとしか考えようがない。立坂型特殊器台(図1-11、図1-12、図2-1・a)における多線帯入組み文の間にあけられた“切れ込みのある凸レンズ形”の透かしの源流がここにあることがわかると同時に、吉備の特殊器台の第1段階である立坂型において、すでにその透かしの形状が、文様のあり方に関係なく“切れ込みのある凸レンズ形”であり、立坂型に属する中山遺跡の特殊器台(図2-1・b・c)では、その形の孔のほかに勾玉形の孔も伴うという事実は、この時期において、もはや形式学的痕跡となっており、大和の弧文円板の強い影響のもとに新しい吉備的文様が創作されていったことが知られるのである。そこには、文様の展開ははなやかであっても直弧文の原単位図形は見出せず、文様構成上の法則性が認められないことから、大和の弧文円板の、吉備の文様に対する先行性は、不可逆性をもって定まるのである。現在のところ、楯築の弧帯石をも含めて、吉備の弥生後期の文様から弧文円板が生まれなければならない必然的な理由は、到底見出しがたいといわざるをえない。

ひるがえって、吉備における弥生後期後葉の墳墓遺跡や集落遺跡の土器の相互関係は、ほぼエビ東＝黒宮Ⅱ＝立坂・楯築＝鬼川市Ⅲと考えられ、中山がその直後に続くを見て大過はないであろうが、それらの大和の土器との併行関係については、大和の弥生直後の「纏向1式と鬼川市Ⅲ式が併行する可能性^⑨」のあることや、「黒宮Ⅱの時点が纏向1式ときわめて近い時期^⑩」であることなどの指摘がなされている。豊岡卓之氏によれば、纏向石塚古墳と楯築墳丘墓の時間差は、よしんば後者の出現がわずかに早いとしても、さほど問題にしくなくてもよさそうである^⑪。このうえに立って、弧文円板が原単位図形の厳密な法則性による構成であるのに対して、楯築の弧帯石が原単位図形をもたず、弧文円板の写し崩れと見られる形式学的痕跡を3ヶ所にもっていること——①弧文円板で甲乙の右端と丙丁の左端を重ねがきにしたときに生じた山形図形が、弧帯石では右側のばち形文の右下に遊離して描かれている。②弧文円板の甲乙の間の小さな三角形の透かし孔が、弧帯石の左側のばち形文の中央やや右寄りに深く巾広い彫り込みに変化して写されている。③弧文円板の甲の左側の突起のある輪郭と左に隣接する丁の曲線とでできる勾玉形を、弧帯石では切れ込みのある凸レンズ形ないし楕円形の窪みとして転写している——などから弧文円板の弧帯石に対する形式学的先行性は否定しえないので、弧文円板の出現時期は石塚古墳の造営時期と無関係に、むしろ楯築遺跡の古さによって、より先行的に規定されねばならない。

2. ばち形文の性格

弧文円板にあらわれた甲乙に対する丙丁のあり方は、けっして従属的でなく同等の扱いを受けて準用されている。このことは丙丁に由来するばち形文が、甲乙を描きやすく簡略化したものであることを示している。整美な奈良・沢（石戸辰巳前地区）の木製高杯（図4-4）において、明瞭な左右のばち形文の表現の違いが見られ、右側の上部は屈曲して環状帯の一部を形成しているが、左側との間に細い帯をはさんで、その下へ上部をくぐらせている。これは弧文円板の原単位甲乙の上部の組み編み文の趣を写していると見られよう。同様のことは入江内湖（行司町地区）の4つの資料（図4-9～12）のすべてに共通して認められ、相近い滋賀・福満の高坏形土器（図4-13）にもはっきりと似た表現を見ることができ

る。それに対して三重・納所の手あぶり形土器（図4-18～21）においては、最初下方に右型原単位図形（右側に甲のあるもの、図4-18）を描き、つぎにその右上にやや簡略化した同図形（図4-19）を描くが、上方のになるとばち形文に変わり（図4-20）、左方では最終的に極端に底部の外湾した錨形のばち形文（図4-21）に変形している。また愛知・旧紫川の土器（図4-23）では右に右形原単位、左にばち形文を並べて描いている。この2例をもってしても、ばち形文が原単位甲乙の簡略形として、まったく同じ性質をもち、準用されたものであることが理解できる。

直弧文原単位図形が纏向1式期の弧文円板から纏向2～3式期（庄内式期）の纏向（巻野内）の弧文板（図2-7）や石川・畝田の不明木板（図3-3）などへと、かなり明確に甲乙の全形を表現しながら発展していくのと軌を一にして、ばち形文もつねに全形を見せていて、他の図形に覆われることがないのも一つの共通した特色である。そのために他の図形に連続しない単独のばち形文さえも表現が可能であった。岡山・中山の特殊器台（図4-7）や同・酒津の壺形土器（図4-15）の口縁では、裾広がり部分のみが他から遊離して描かれる。中山にはさらにばち形文が上下に広がりをもせる分銅形のものもあり、同類は愛媛・姫塚の壺形土器（図16-16、17）にも描かれて、左右の分離表現が原単位図形からの由来をよく伝えている。また岡山・原の壺形土器（図4-6）の口縁においては、ただ上向きのばち形文のみが左右に接続して横帯を形成する。愛媛・宮前川の壺形土器（図4-14）に至っては完全な単独表現である。しかし、本来ばち形文が弧文円板に起源をもつという系譜を考えれば、入江内湖（行司町地区）の資料3（図4-10）のように同じ一箇のばち形文でも多線帯に連るのが由緒正しい表現に違いない。同資料1（図4-11）、同資料2（図4-12）において複雑な構図をもち、また同資料4（図4-9）において緊密な組み編み文の構成をもつことは、岡山・百間川原尾島（新田サイフォン調査区H-1）の器台形土器の複合ばち形文（図4-8）とともに弧文円板への近さ、すなわち文様の古さを示すものといえよう。

本遺跡の資料4（図4-9）はまたもう一つの特色をもつ。それは円形文様の上下が点対称をなしているという注目すべき事実である。直弧文では従来わずかに大阪・安福寺石棺蓋の側縁文様のみが、円形ではないが、5本の横位平行線内に描かれた上下一対の原単位図形からなる点対称の例として知られていたに過ぎない。本資料4が多線帯を用いず、ばち形文も左右それぞれに1本の分割線を入れるだけであるのは他の資料1～3と異なる性質で、それだけ資料4の後出性を示す要素と見てよさそうである。

つぎに、ばち形文が他のどの文様要素と親和性があるかについて見ると、まず直弧文原単位図形、多

線帯、屈曲表現、入組み連続文、組み編み文、斜位多線帯交差文（図4-7）、また透かし孔では切れ込みのある凸レンズ形、6と9の合成形、その変形とみられる三叉形などがあげられる。それに対して、けっして同時に描かれない文様は、X軸のある定型直弧文、側縁のある5線帯、その折返し表現である几状形、象の鼻形文、人字形文、鍵手複合文、その対称文、 θ 形文、鍵手文などであり、特殊器台では向木見型以降のS字状連続渦文、わらび手文などが親和性をもたない。このことは、ばち形文の直弧文定型化以前の要素的先行性を示すものである。

なお施文対象の選択性については現段階では認められない。

3. ばち形文の起源

さきにはち形文の発生が直弧文原単位図形に由来するものであることを証明したが、それでは溯って原単位図形の起源はなにかと問われるならば、形態的な類似からスিজガイの下端の2本の突起と周辺部の裏面を写したものと見るのがわれわれの解答である。弥生時代後期初頭以来の弧帯文のなかに、大和において直弧文原単位が誕生する背景には、よほどの事情があったのであろうが、ともかくそれを期に直弧文の体系の明確な中心となるべきものが纏向に誕生した意義は大きい。この原単位を踏まえて直弧文起源論に、あらたに橋口達也氏がゴホウラの貝輪起源説を提起している⁹⁾。ゴホウラの貝輪を製作する際に、横断面に巴形が生じそれに続く外唇部の断面が、あたかも原単位図形の甲に似た形態を示すことによるものであるが、文様的に最古段階の弧文円板において原単位の外側に巴形（勾玉形）が生じた成りたちを考えれば、ゴホウラの断面の、内側に巴形のあるものをもって原単位の起源とするわけにはいかないであろう。

4. ばち形文の分布と変容

ばち形文は東は静岡・三和遺跡、西は愛媛・姫塚ならびに宮前川遺跡に及ぶ広汎な地域に分布している。東へはおもに原単位系の文様である三重・納所（図4-18~21）、愛知・朝日（図4-22）、同・旧紫川（図4-23）、静岡・三和（図4-25）どの例のように、それぞれの原単位図形に随伴して、そのなかの構成要素として描かれている。愛知・見晴台（図4-24）もその可能性が大きい。畿内と並んで原単位図形がよく伝えられていることは、纏向遺跡における土器数のほぼ15%を占める外来系搬入土器のうち、東海系のものが約半数に及ぶ事実¹⁰⁾とも考え合わせる必要がある。

畿内においては、もっとも特色あることとして、ばち形文自体が構造化されている点をあげなければならぬ。それは単に左右対称に描かれるのでなく、左半と右半とが態度を異にして組合って表現されているという構成の事実である。本遺跡の資料（図4-9~12）はもとより、滋賀・福満（図4-13）においてかなり複雑に、また奈良・沢（戸石辰巳前）（図4-4）ではきわめて整美な姿で構造化されている。このことは弧文円板からの近さ、したがって古態を示すものである。

西の吉備においても岡山・百間川原尾島（図4-8）のように、しっかりとした組み編み文を示して、弧文円板との要素的つながりの濃いものがある。しかし楯築の弧帯石をはじめとして多くは緊密な構成に欠け、ばち形文自体に構造をもたないばかりでなく、ばち形文だけが単独に遊離化する傾向がある。

岡山・原（図4-6）においては、ばち形文だけが横帯をなして連続し、岡山・中山（図4-7）や同・酒津（図4-15）ではそれぞれまったく単独に出現する。愛媛・姫塚（図4-16・17）や同・宮前川（図4-14）には帯の意識はまったくなくて、まるで紋章のように描いている。ただ姫塚（図4-16・17）において背中合わせに上下に接合したばち形文を切半して、左右を別べつに描くのは異例の表現であるが、本遺跡の資料4に通ずる上下対称の分銅形に近い構成を見せ、古い要素をのぞかせている。

5. ばち形文の下限

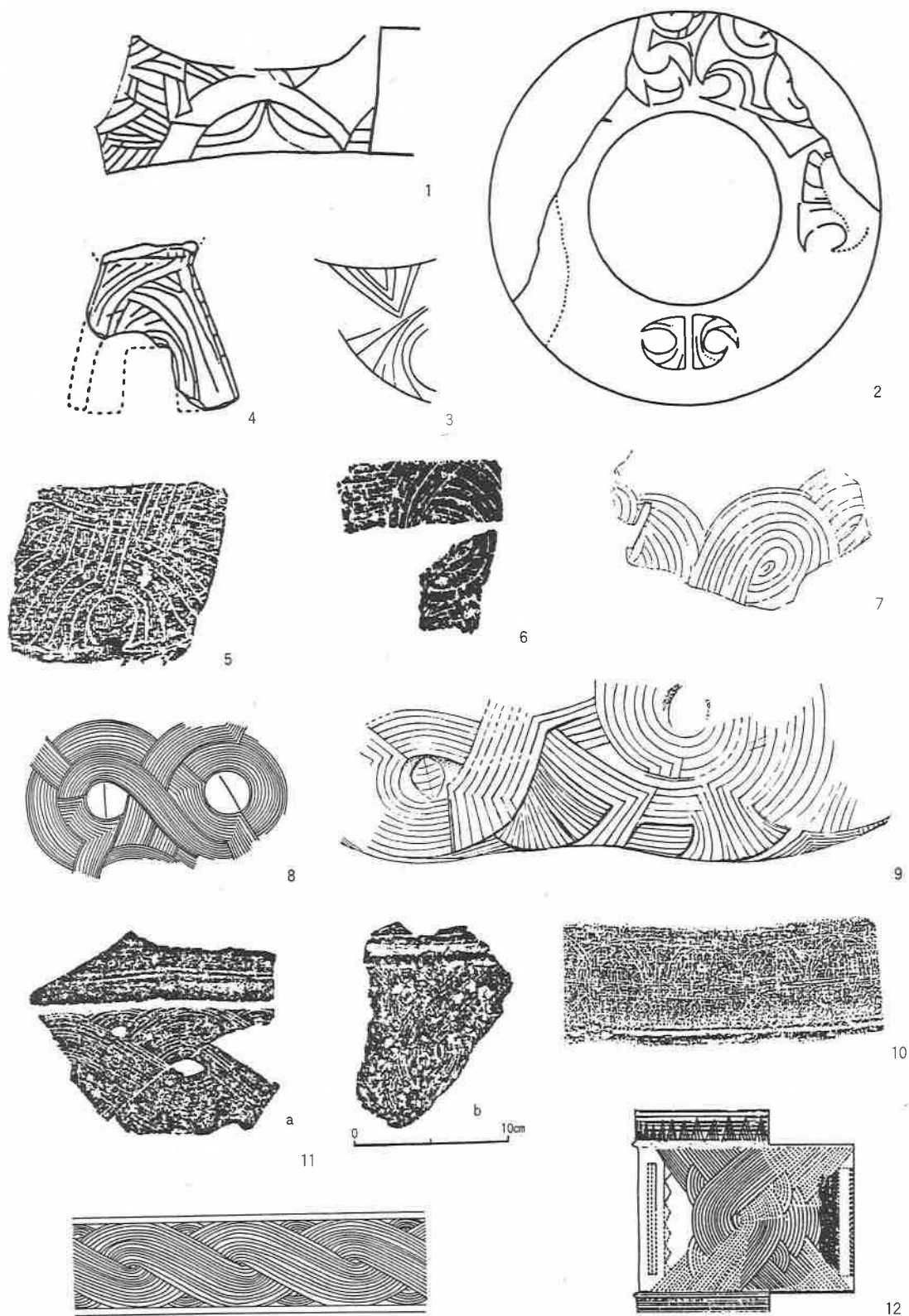
直弧文は大阪・紫金山古墳の貝輪 α の文様の成立を契機に凝縮し、解けない文様へと神秘性を深めて、変革の時期を迎える。先にのべたばち形文と親和性のない文様要素群は、すべてこの布留式期（纏向4式期）以降のもので、この時期以後にばち形文を見ることはない。およそばち形文の下限は、紫金山 α の直前のところに比定されねばならないであろう。

V. おわりに

本遺跡の資料1～4は、その施文対象においてと同様にばち形文自体も独自の形態と構成をもち、ユニークな存在である。同じ器物のうえに3種の変容を試み、また円形のスペースに点对称のばち形文という新しい優れたデザインを案出して、浮彫り的な表現までも加えるのは、ばち形文の基本に習熟して、そのうえに創作をしないではおられなかった人の手になることを思わせるに十分である。他の例に見られるような基本形を守るだけの表現にはあきたらなかった相当な達人の作である。

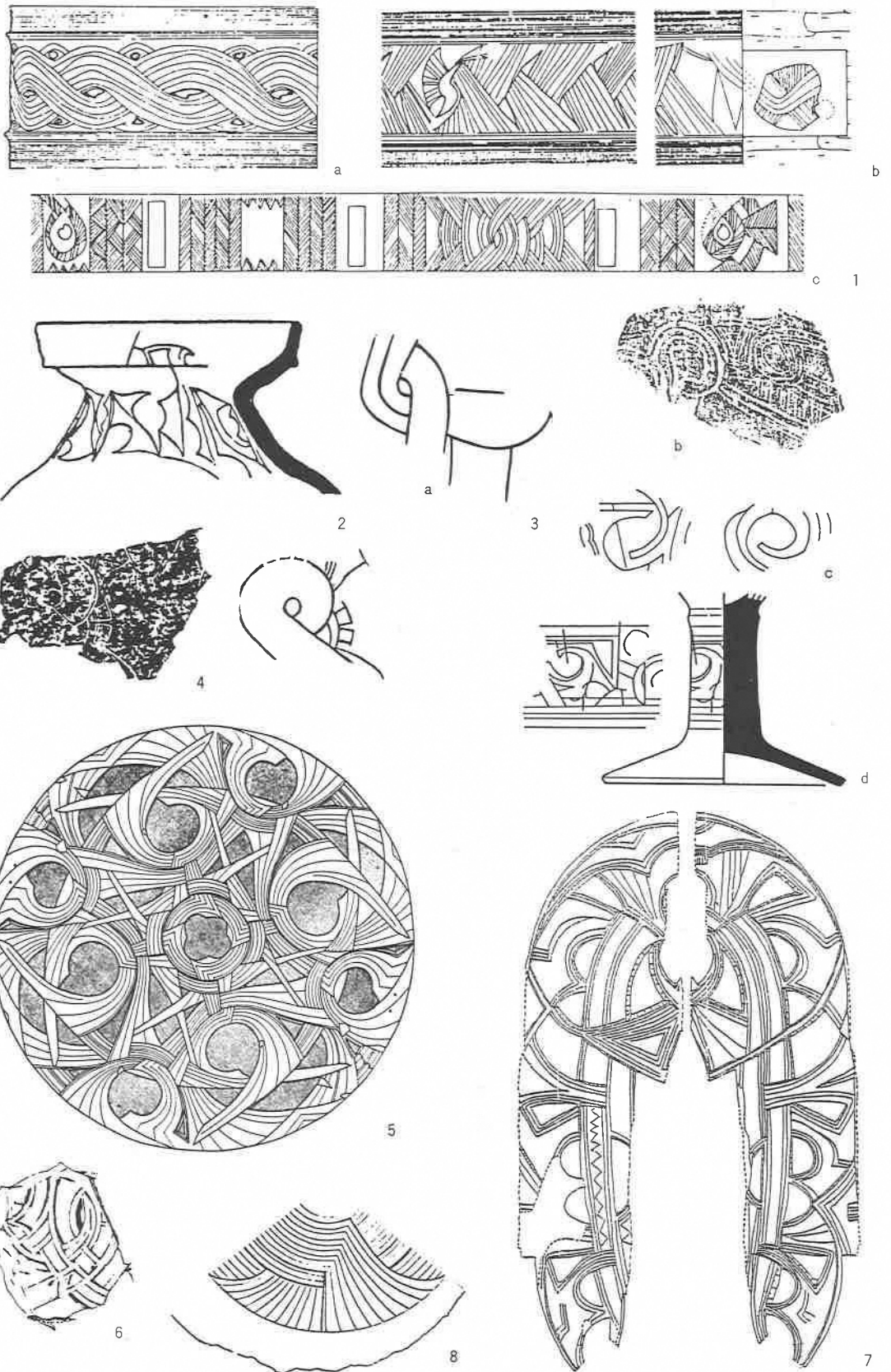
かなり飾られ、手の込んだ作風のばち形文が、纏向1式期の弧文円板のあとを受けて、本遺跡で庄内式期（纏向2・3式期）のころ盛行しただけでなく、広く遠江から伊予にまで及ぶ地域に、ほぼ同時期に拡大して、さまざまな器物に描かれていった。そこには弧文円板の余香が種々な程度に保たれているが、本遺跡の例のようにばち形文だけで十分に原単位図形にひとしい意義が信じられたとすれば、もはや原単位図形にこだわることなく、新しいばち形文が1人歩きして、新たな創作的展開が可能になったのであろう。弧帯文の一般化がひろくこの種の文様をシンボル・デザインとして人びとに意識されたとき、そのなかに登場した特殊な原単位図形がその不可解さのゆえに尊ばれた神秘の力とはべつに、より理解しやすいその簡略形であるばち形文が、同じ力を願う人びとの期待にこたえて明快な文様として目立つ存在となった。原単位図形の力の、より顕在化したシンボル・マークとしてのばち形文が、この庄内期に一世を風靡したのである。それは、この象徴に寄せられた共感性のとりもつ連帯感が、明確な文様の中心である大和に結びついていたことを示唆している。ひとしい思想の拡大が、この文様をめぐって、諸地域の大和への集団同一性による肯定の意識となり、東西に広く基本的な信頼が古墳発生期前後にかもし出されて来たことが知られるのである。

本稿が成るに際して調査担当の中井均氏のほか森浩一、石野博信、伊藤久嗣、前川要、野沢則幸、萩原儀征、豊岡卓之、高島忠平、井上義光の各氏に多大のご便宜をいただいた。記して深く感謝するものである。



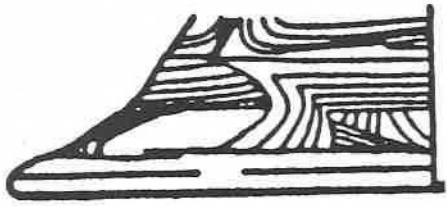
1. 佐賀・惣座遺跡・器台形土器 2. 愛媛・姫塚遺跡・壺形土器 3. 愛媛・宮前川遺跡・壺形土器 4. 岡山・上東遺跡(亀川調査区包含層下層)・不明土製品 5. 岡山・百間川原尾島遺跡(新田サイフォン調査区H-1)・高環形土器文様 6. 岡山・百間川・原尾島遺跡(左岸用水調査区1-H-5)・器台形土器 7. 岡山・百間川兼基遺跡(第3微高地)・器台形土器 8. 岡山・楯築遺跡・旋帯石(神体石・亀石) 9. 岡山・楯築遺跡・弧帯石 10. 岡山・原遺跡・壺形土器 11. 岡山・立坂遺跡・特殊器台 12. 岡山・黒宮大塚・特殊器台

図1. 古い時期の直弧文関係の文様①—九州・四国・中国(縮尺不同)

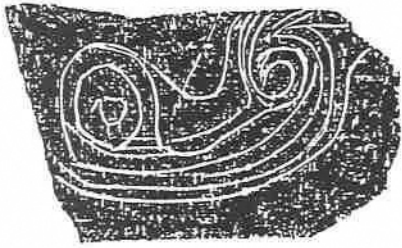
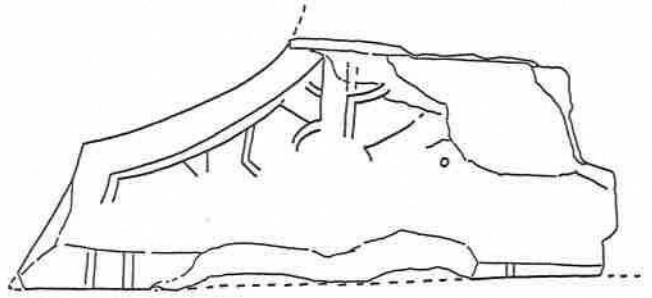


1. 岡山・中山遺跡・特殊器台 2. 岡山・酒津遺跡・壺形土器 3. 徳島・黒谷川郡頭・a. 壺形土器, b. 壺形土器 c. 算盤玉形球状土製品 d. 高坏形土器 4. 奈良・唐古鍵遺跡・壺形土器 5. 奈良・纏向遺跡(石塚古墳周濠)・弧文円板 6. 奈良・纏向遺跡(東田大塚南方溝)・弧文石 7. 奈良・纏向遺跡(卷野内)・弧文板 8. 奈良・沢(戸石辰巳前)・木製高杯

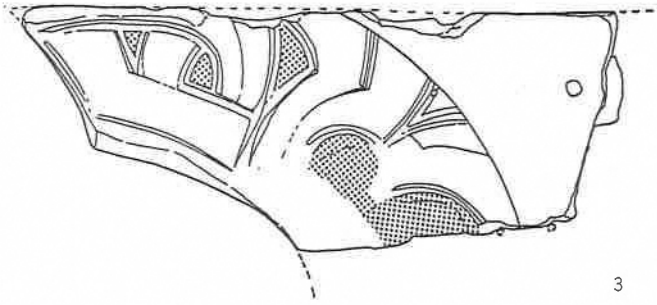
図2. 古い時期の直弧文関係の文様②—中国・四国・近畿(縮尺不同)



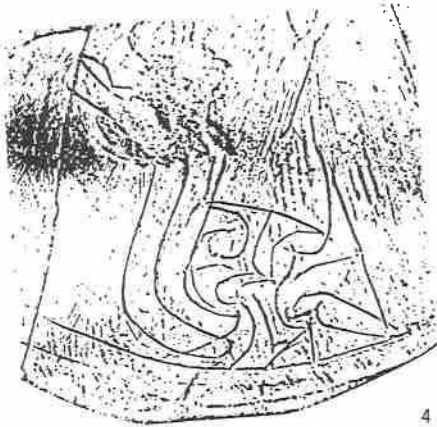
1



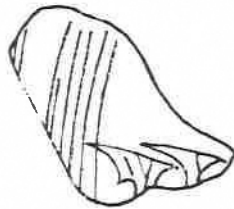
2



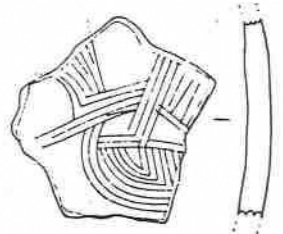
3



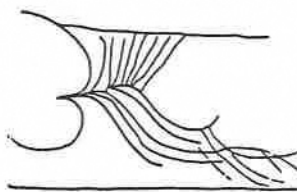
4



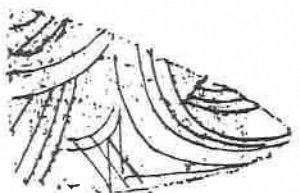
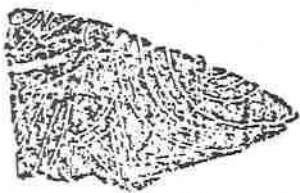
5



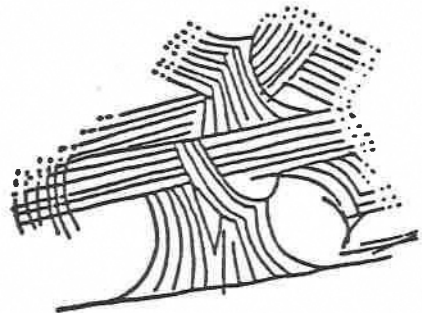
6



8



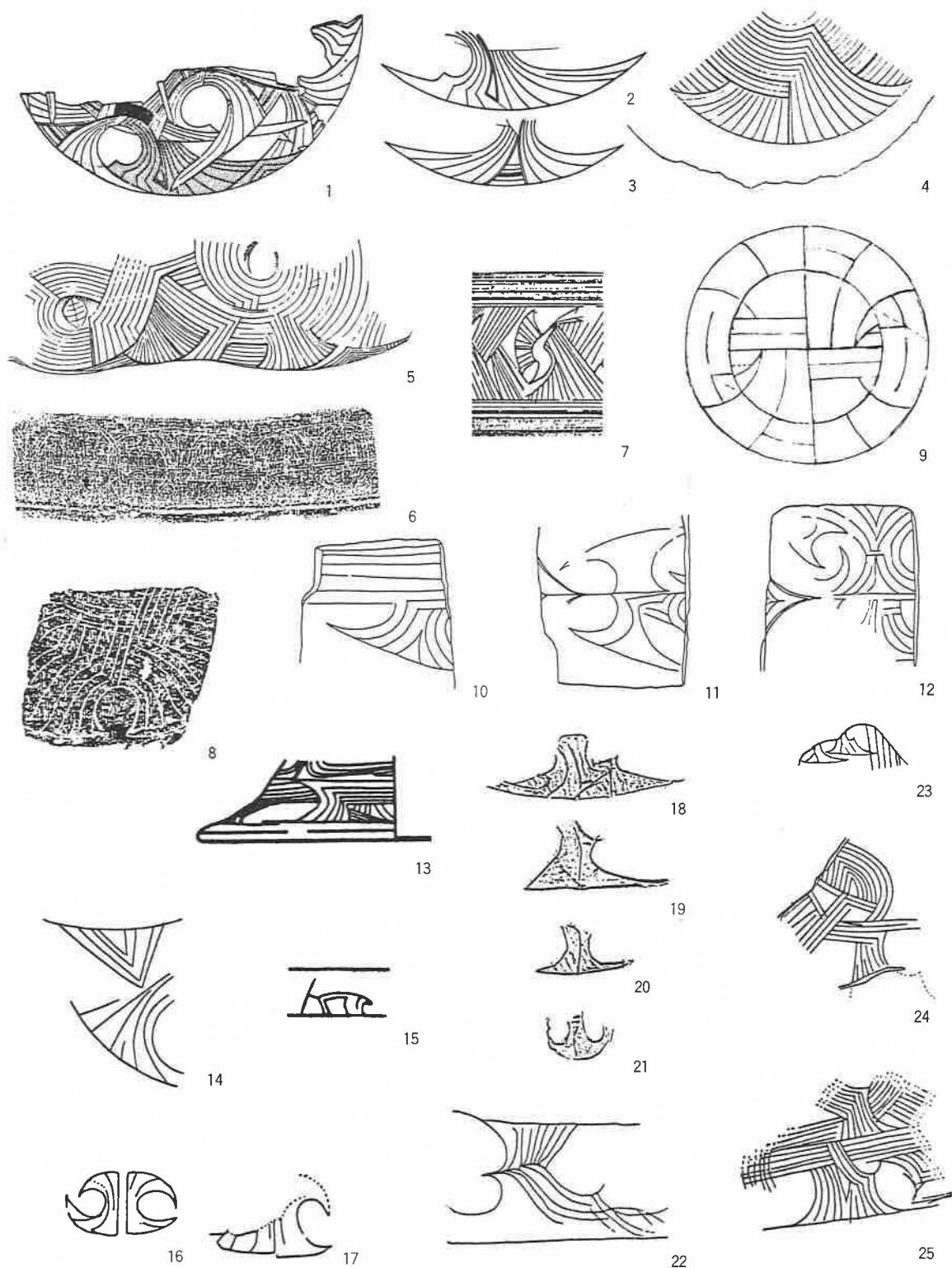
7



9

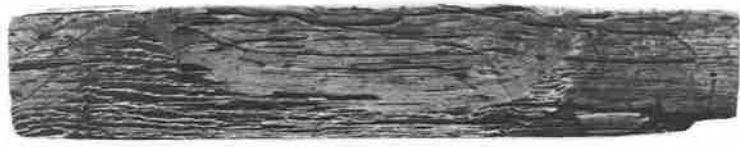
1. 滋賀・福満遺跡・高環形土器 2. 大阪・亀井遺跡・壺形土器 3. 石川・畝田遺跡・不明木板 4. 三重・納所・手焙形土器 5. 愛知・旧紫川遺跡・不明土器 6. 愛知・見晴台遺跡・不明土器 7. 愛知・三ツ山古墳群2号墳盛土・不明土器 8. 愛知・朝日遺跡・壺形土器 9. 静岡・三和町遺跡・壺形土器

図3. 古い時期の直弧文関係の文様③—近畿・北陸・東海(縮尺不同)

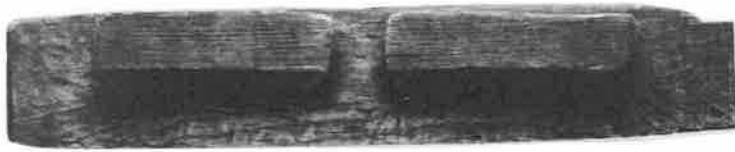


1. 奈良・纏向石塚弧文円板 2. 同・原単位図形甲乙 3. 同・準原単図形丙丁 4. 奈良・沢(戸石辰己前地区)・木製高坏 5. 岡山・楯築・弧帯石 6. 岡山・原・壺形土器 7. 岡山・中山・特殊器台 8. 岡山・百間川原尾島(新田サイフォン調査区H-1)・高坏形土器 9. 滋賀・入江内湖(行司町地区)・木製円板 10~12. 同・木製浅鉢(10. B端下面 11. 同上面 12. A端上面) 13. 滋賀・福満・高坏形土器 14. 愛媛・宮前川・壺形土器 15. 岡山・酒津・壺形土器 16. 愛媛・姫塚・壺形土器 17. 同 18~21. 三重・納所・手あぶり形土器 22. 愛知・旭・壺形土器 23. 愛知・旧紫川・土器 24. 愛知・見晴台・土器 25. 静岡・三和町・壺形土器〔9は模式図〕

図4. ばち形文集成(縮尺不同)



106表面



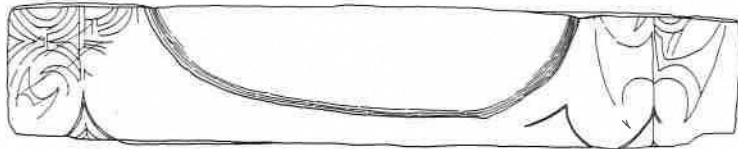
106裏面



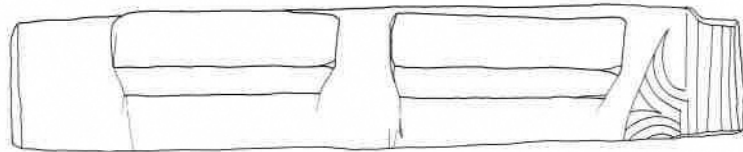
158表面



158裏面



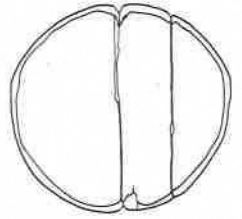
106表面実測図



106裏面実測図



158表面実測図



158裏面実測図



106表面拓本



158表面拓本

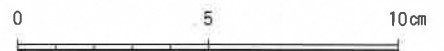
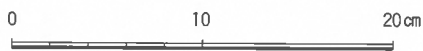


图5 入江内湖遺跡行司町地区出土弧帯文木製品

註

- ①浜田耕作・梅原末治「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」(『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』1、1917年)
- ②斎藤和夫・宇佐晋一「直弧文の研究」1、2、3 (『古代学研究』6、7、11、1953、1955年)
- ③宇佐晋一・斎藤和夫「纏向石塚古墳南側周濠から出土した弧文円板の文様について」(『纏向』奈良県桜井市教育委員会、1976年)
- ④近藤義郎『楯築遺跡』(山陽カラーシリーズ3、山陽新聞社、1980年)
- ⑤宇垣匡雅「特殊器台形土器に関する型式学的研究」(『考古学研究』第27巻第4号、1981年)
- ⑥豊岡卓之「弧帯文の性格とその分布」(同志社大学考古学シリーズII『考古学と移住・移動』1985年)において弧帯文の始源を、その出自が吉備地域にあると考えるよりも、近年の調査から最古の弧帯文が弥生時代中期末から後期初頭の大和・河内にあることを指摘している。
- ⑦石野博信「弥生から古墳へ」帝塚山考古学談話会第300回記念講演(1985年12月7日)において、弧文円板に至る文様の特殊化は吉備でなく大和で行われたであろう、という見解を示された。
- ⑧高橋 護「組帯文の展開と特殊器台」(『研究報告』5、岡山県立博物館、1984年)
- ⑨石野博信「古墳出現期の具体相」(『古墳文化出現期の研究』1985年)
- ⑩間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」(『倉敷考古館研究集報』第13号、1977年)
- ⑪豊岡卓之「大和の特殊器台—弧帯文の歴史」(『明日香風』19、1986年)
- ⑫橋口達也「貝輪源流の文様論」(『日本民族・文化の生成』1、永井昌文教授退官記念論文集、1988年)
- ⑬石野博信・関川尚功『纏向』(奈良県桜井市教育委員会、1976年)

〔図1の出典〕

1：「西日本新聞」昭和58年8月19日号から作成。2：正岡陸夫・十亀幸雄『日本の古代遺跡22・愛媛』保育社、1985年。3：大滝雅嗣・野口光比古・谷若倫郎「宮前川遺跡とその時代」(『文化愛媛』第10号 1985年) 4：「山陽新幹線建設に伴う調査II(岡山以西)」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集、岡山県文化財保護協会、1974年。5：「旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査1」百間川原尾島遺跡1、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39、岡山県文化財保護協会、1980年。6：同上。7：「山陽新聞」昭和54年9月6日号から作成。8：藤田憲司・間壁葎子「楯築神社の立石と神体の石」(『倉敷考古館研究集報』第10号、1974年)等から作成。9：近藤義郎『楯築遺跡』山陽カラーシリーズ3、山陽新聞社、1980年。10：岡山県埋蔵文化財発掘調査報告54、岡山県文化財保護協会、1983年。11：近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』第13巻第3号)1967年 12：間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」(『倉敷考古館研究集報』第13号 1977年)

〔図2の出典〕

1：『中山遺跡』岡山県落合町教育委員会、1978年。2：間壁忠彦「倉敷市酒津及び新屋敷出土の土器」(『瀬戸内考古学』12、1958年) 3-a：『黒谷川郡頭遺跡II』徳島県教育委員会、1987年。3-b・c：菅原康夫「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」(同志社大学考古学シリーズIII『考古学と地域文化』1987年) 3-d：菅原康夫『日本の古代遺跡37・愛媛』保育社、1988年。4：藤田三郎『唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』1983年。5：石野博信・関川尚功『纏向』奈良県立橿原考古学研究所編、奈良県桜井市教育委員会、1976年。6：「毎日新聞」1984年1月24日号から作成。7：『桜井市巻野内・纏向遺跡発掘調査概報』桜井市教育委員会、1987年。

8 : 「毎日新聞」昭和61年6月10日号より作成。

〔図3の出典〕

1 : 「福満遺跡・城南保育園改築に伴う福満遺跡第4次調査」彦根市埋蔵文化財調査報告第13集、彦根市教育委員会、1987年。2 : 中西清人ほか『亀井』大阪文化センター、1983年。3 : 伊藤雅文「金沢市畝田遺跡出土木製品」石川県立埋蔵文化財センター所報「拓影」第26号、1988年。4 : 三重県教育委員『納所遺跡』同会、1979年。5 : 「旧紫川遺跡」(『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要』II、旧紫川遺跡調査会、1984年) 6 : 立松彰「岡本君から示された一片の土器」(『岡本俊郎遺稿追悼集・見晴台のおっちゃん奮闘記』1985年) 7 : 愛知県土木部・小牧市教育委員会『三ツ山古墳群発掘調査報告書』同部・同会、1980年。8 : 榊原芳久「愛知県朝日遺跡出土の線刻画土器」(『考古学雑誌』第67巻第1号、1981年) 9 : 佐藤由紀男「浜松市三和町遺跡出土の線刻文土器について」(『考古学雑誌』第67巻第1号、1981年)

〔図4の出典〕

すべて再掲につき省略。

入江内湖遺跡行司町地区出土木製高杯の保存処理

中川 正人

はじめに

滋賀県坂田郡米原町の入江内湖遺跡は、旧内湖といった地理的環境を反映し、古墳時代前期の遺物包含層を中心とした遺跡でとくに木製品を多く包蔵している遺跡である。同遺跡から出土した木製品のなかでとくに腐朽の著しかった木製高杯について、米原町教育委員会から恒久的な保存処理の依頼があり、滋賀県埋蔵文化財センターにおいて保存処理を実施した。小稿において、木製高杯の保存処理を中心に高杯の製作技法についての若干の考察をまじえ報告する。

木製高杯の材質と技法

木製高杯は腐朽が著しいことから周囲の土とともに取り上げて保管されていた。当初、この木製品の脚部が土中に埋没した状態であったため木盤あるいは皿状の木製品と考えられていた。その後、保存処理のため当センターへ搬入し、水洗いを行ったところ高杯であることがわかった。遺物を傷つけることなくやや広い範囲で土ごと取り上げていたことが幸いし、脚部を大きく欠くものの杯部は6割程度残る木製高杯であることがわかった。

樹種鑑定の結果、用材の樹種はケヤキであることが判明した。ケヤキを横木取りとし鉄斧などの工具で杯の概形を削りだしたあと、轆轤で挽いて素地としている。杯部の裏面には、口縁をほぼ均等に五分割する扇形の彫り込みをいれている。また、脚部との接合箇所とおもわれる位置には、周囲をほぼ均等に五分割した溝ないし穴をやや荒く彫り込んでいる。

杯の口縁から約5cm内側に一条の突帯を轆轤で挽き出しており、それより内側に赤色顔料が塗られた跡があり、蛍光X線分析の結果、使用された赤色顔料は酸化鉄であることがわかった。杯部内面は赤漆、杯部外側および脚部はその塗膜をほとんど残していないが、黒漆で仕上げたと思われる。杯部口縁の直径約42cmを測り、この時代の轆轤使用の高杯の出土例としては大型の類に属する。こうした大型の木製高杯の出土例としては、奈良県纏向（まきむく）遺跡の大型高杯があり、この高杯も残念ながら脚部を欠いているが、意匠的に類似した点がいくつかみられる。

保存処理の方針

木製品の恒久的な保存処理方法として、P. E. G.（ポリエチレングリコール）含浸法を採用した。この保存処理の実施によって、木製品に含まれた水が合成樹脂に置換され形状の安定化がなされる。また、折損した個々の断片の接合も可能となる。

樹脂含浸処置に引き続き各断片の接合、欠損部の補填および彩色を行い、さらに木製高杯の保管および活用の面から脚部の復元を試みた。

木製高杯の保存処理と復元

1. P. E. G. 含浸処理

処理中に破損の生じることのないように、個々の断片を丁寧に不織布で梱包し他の木製品とともにP. E. G. 含浸槽に入れた。約1年間かけて徐々にP. E. G. 水溶液の濃度を上げてゆき100%となった時点で含浸処理を終えた。含浸タンクから高杯の断片を取り出し固化させた。

2. 表面処理と接合

含浸タンクから高杯の断片を取り出し固化させた。P. E. G. 含浸法で処理された高杯断片の表面に残ったポリエチレングリコールを、溶剤（トリクレン）で洗い流した。つぎに各断片をエポキシ系接着剤（アラルダイト・ラピッド）を用いて接合した。

3. 脚部の復元

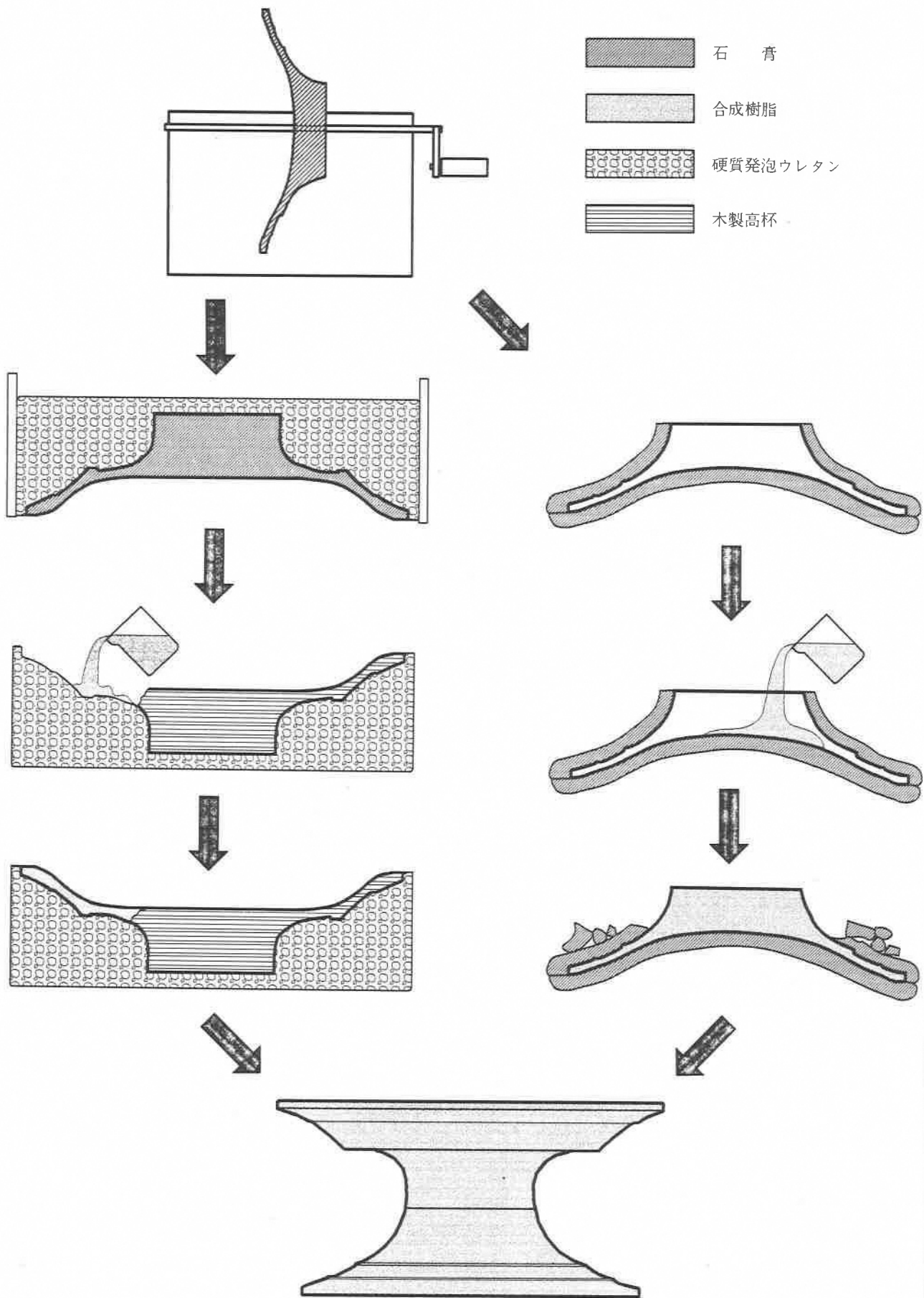
この木製高杯は杯部のみ遺存していたため、復元していくにつれ独立して立たせることができず不安定となった。このため将来の展示などの活用も考慮して脚部の復元をあわせて実施することにした。（以下、挿図および写真を参照）

- a. 木製高杯の実測図などから脚部の形態を想定した。つぎにその断面をアクリル薄板で切り抜き、ロクロを使って石膏による脚部の復元をおこない、これを高杯脚部復元のための石膏原型とした。
- b. 高杯の脚部を合成樹脂で復元するため、上記のロクロで挽いた石膏原型をもとに石膏で凹型を造った。
- c. この凹型に離型剤を塗布して組み合わせ、合成樹脂を流し込み硬化させた。なお、使用した合成樹脂は、エポキシ系接着剤を主剤とし、マイクロバルーン（中空ガラスの微粒子）と木屑粉を混合したものである。これらの混入によって、硬化後の加工がある程度可能となりまた重量も軽減される。また、型に流し込むため適度の流動性が必要であったため、混合物の添加量は容量比で約2倍とした。
- d. 合成樹脂が硬化したあと石膏の凹型を外し、表面を研磨するとともに継目に残るバリを取り除いた。
- e. 高杯の杯部の欠損部の復元は、脚部と同様ロクロで挽いた石膏の凸型をさらに発泡硬質ウレタン樹脂で型どり、その型に高杯の杯部を合わせて欠損部を合成樹脂で充填した。樹脂が硬化したあと型を外し、さらに杯部にみられる亀裂の充填を行い全体の調整を行った。
- f. 彩色および補彩については、アクリル系絵の具（リキテックス）を使用した。全体の色調を考え艶消しの淡い褐色とした。

まとめ

この木製高杯の復元において問題となった点は、まずこうした木製高杯の出土例が少なく比較検討する資料が皆無であったことがあげられる。とくに杯の底部にみられる5ヶ所の溝あるいは透かし穴？の存在は、脚部との継ぎ方に関係するものかどうか不明である。また、復元した脚部の形態については想像の域をでないのが実状である。

杯の内側および外側にそれぞれ一条の突帯が作り出されていることから、この木製高杯の成形には轆



木製高杯の復元工程

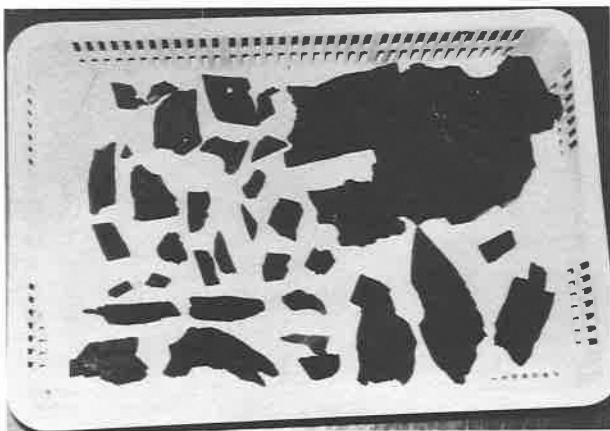
轆の使用が認められる。当時の轆の存在を肯定的に考えたとしても、その形態や使用法などは現在のところ全く不明である。いずれにしても、当時これほど大型の木製品を轆で挽く技術があったことは驚異的である。これら種々の問題点は将来の検討課題であり、類例や関連遺物の出土が期待される。

木製品の劣化状態は、それぞれ遺跡の環境に左右され多様をきわめる。とくに腐食が進み脆弱化した木製品は、その保管に万全を期すとともに早急に保存処置をとる必要がある。保存処理が実施された木製品は安定化し、個々の断片は接合が可能となり展示などの活用の面も開けてくる。

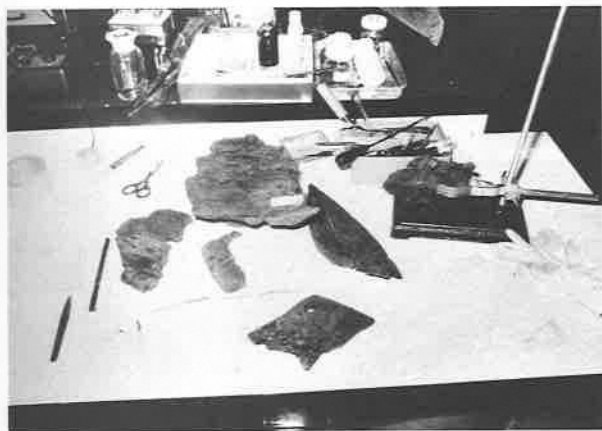
木製高杯の恒久的な保存処理実施にあたって、保存処理および復元について適宜指導と助言を得た奈良国立文化財研究所、工楽善通、沢田正昭、肥塚隆保の各氏に文末ながら謝意を表します。



1 保存処理前の木製高杯(搬入時)



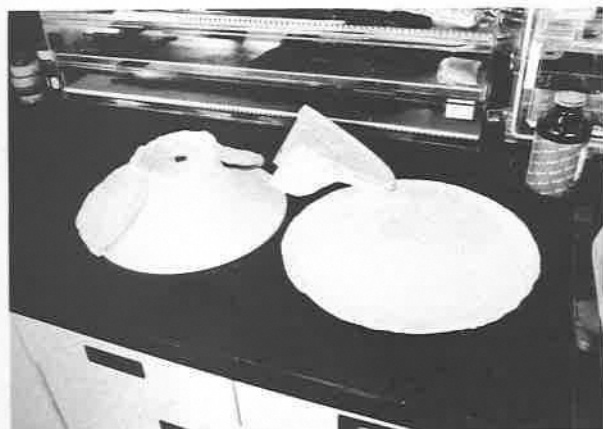
2 木製高杯断片の接合作業



3 高杯脚部の石膏原型から凹型の作成



4 P.E.G.含浸処理後(表面処理前)



5 高杯脚部の復元(石膏原型の作成)



6 凹型へ合成樹脂を流し込む



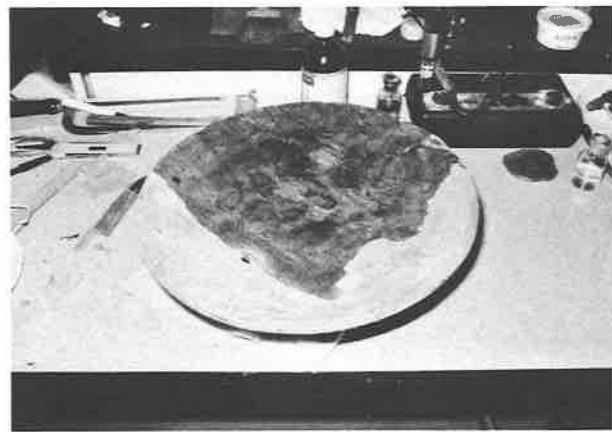
7 高杯脚部の取り出し



8 高杯脚部の接合および充填作業



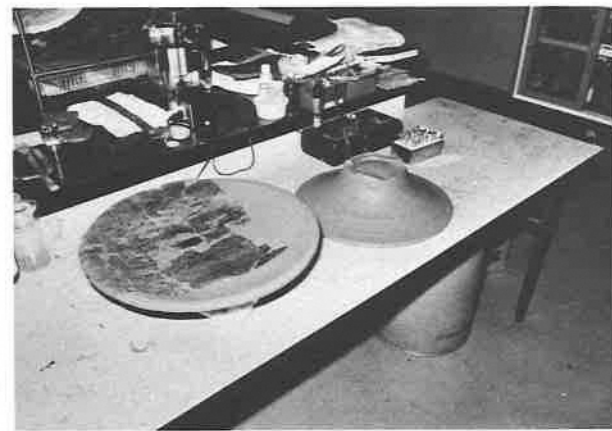
9 高杯杯部の補彩



10 高杯脚部の彩色



11 杯部の仕上げ作業



12 高杯(保存処理後の杯部と脚部)

版 圖



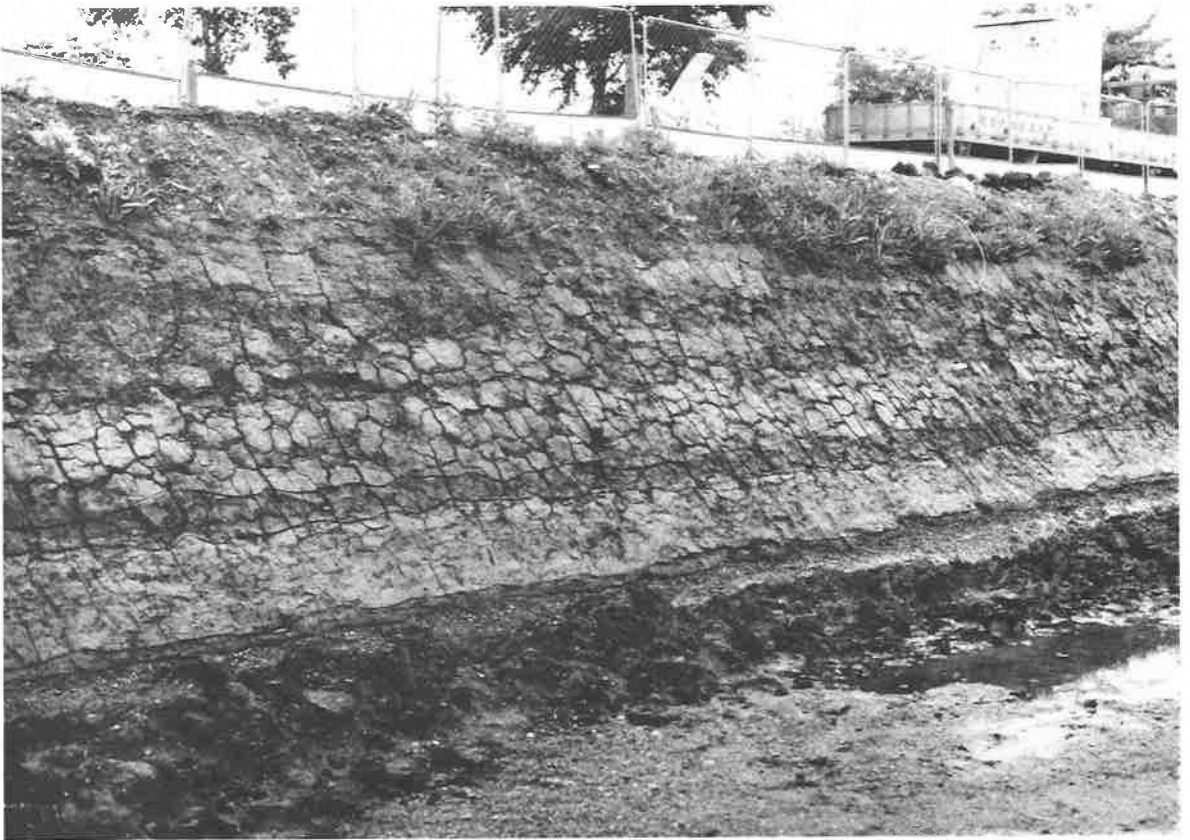
(1) 調査地全景 (南東より)



(2) 調査地全景 (北より)



(1) 調査風景



(2) 土層堆積状態 (北壁)



(1) S D01 (北東より)



(2) S D01 (北西より)



(1) S D01 (西より)



(2) S D01埋水状態 (北東より)



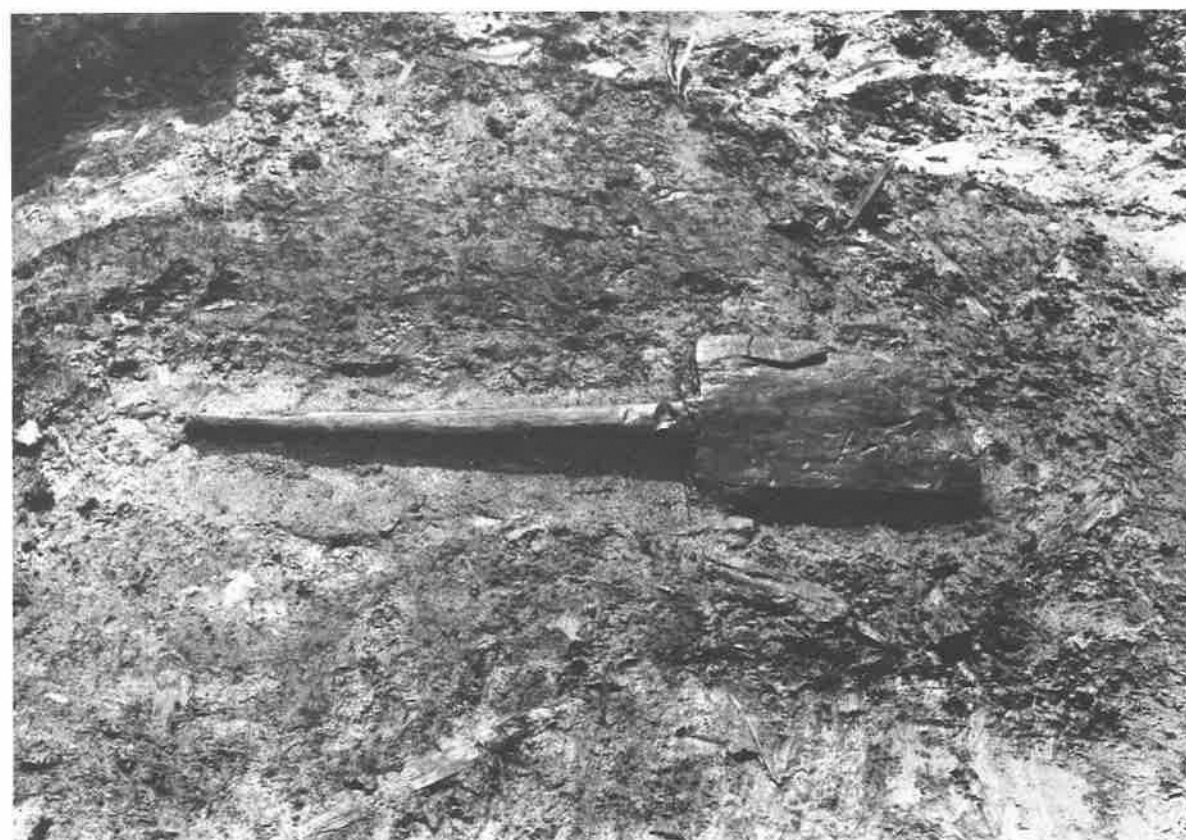
(1) S D01土器出土狀態



(2) S D01土器出土狀態



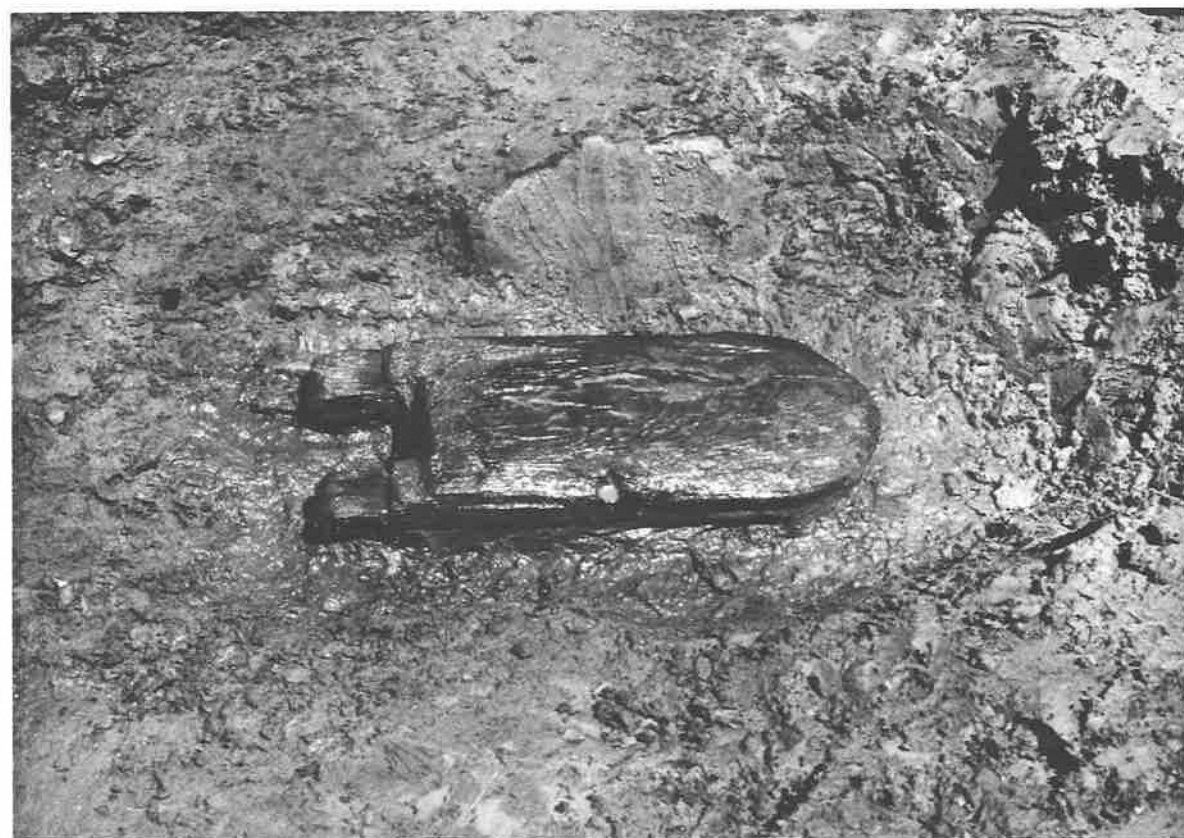
(1) 土器出土狀態



(2) 一木鋤出土狀態



(1) 鍬出土状態



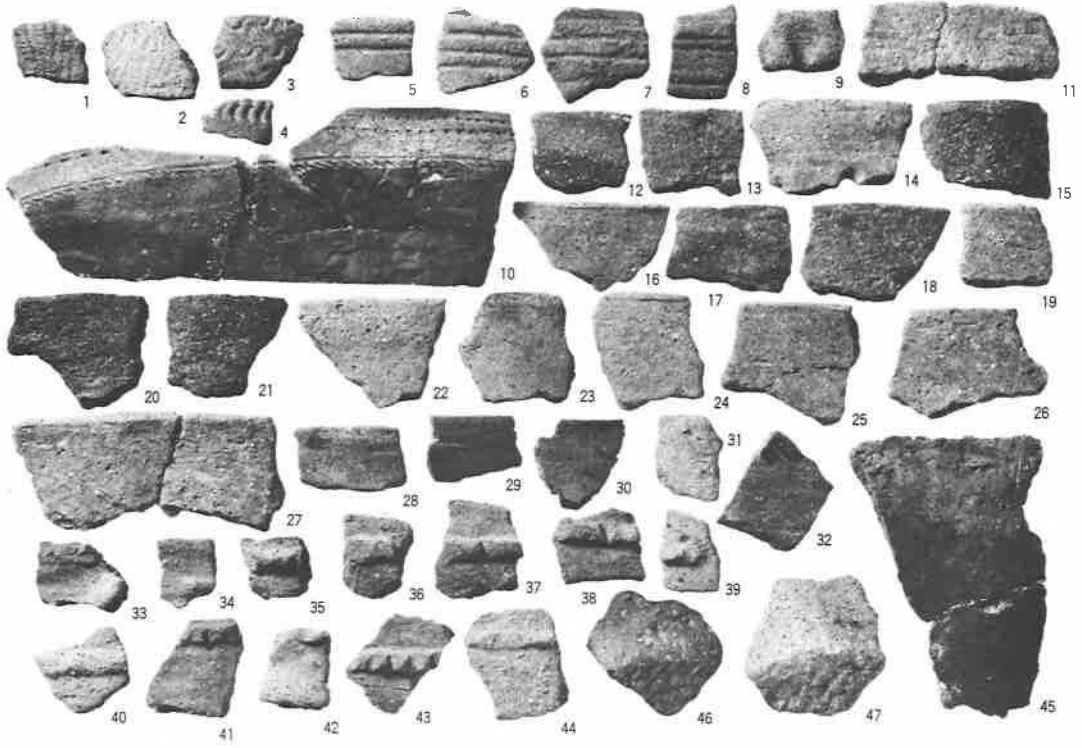
(2) 木製品出土状態



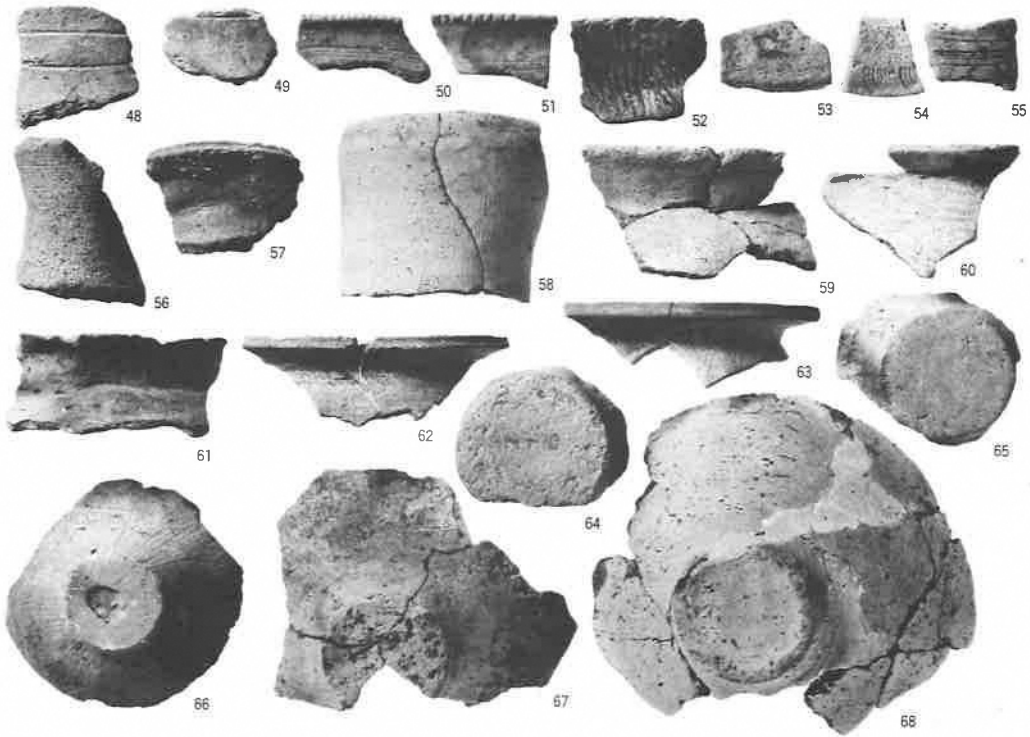
(1) 劍形木製品出土狀態



(2) 高杯出土狀態



(1) 繩文式土器



(2) 弥生式土器



69



72



70



73



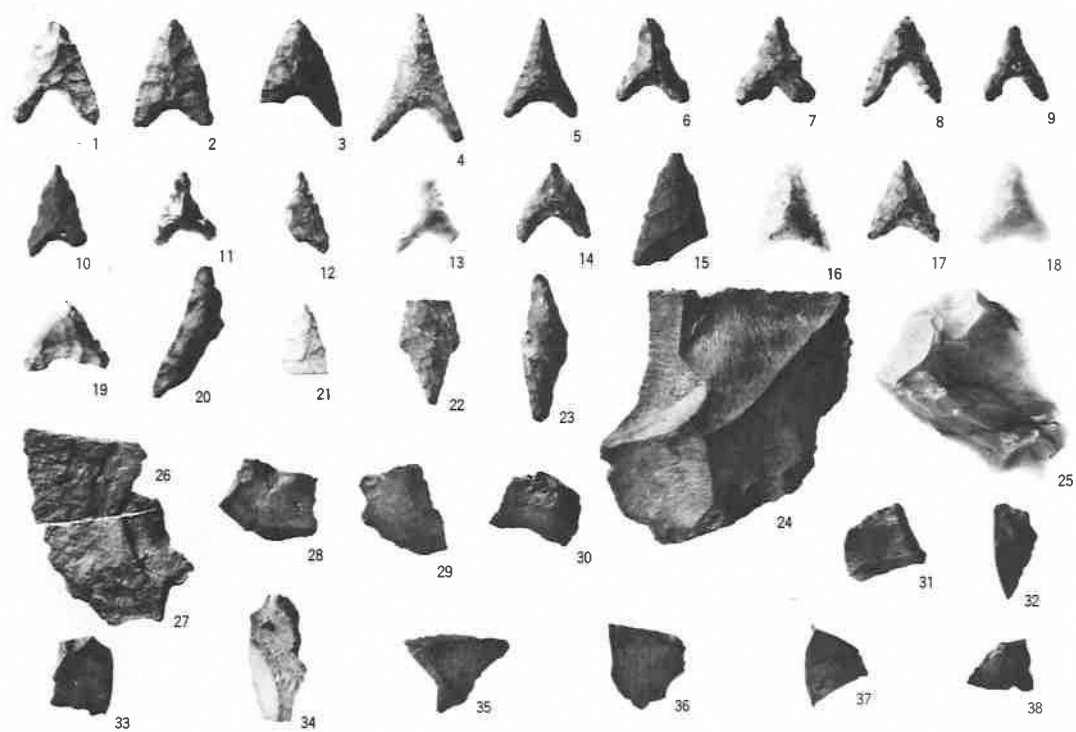
71



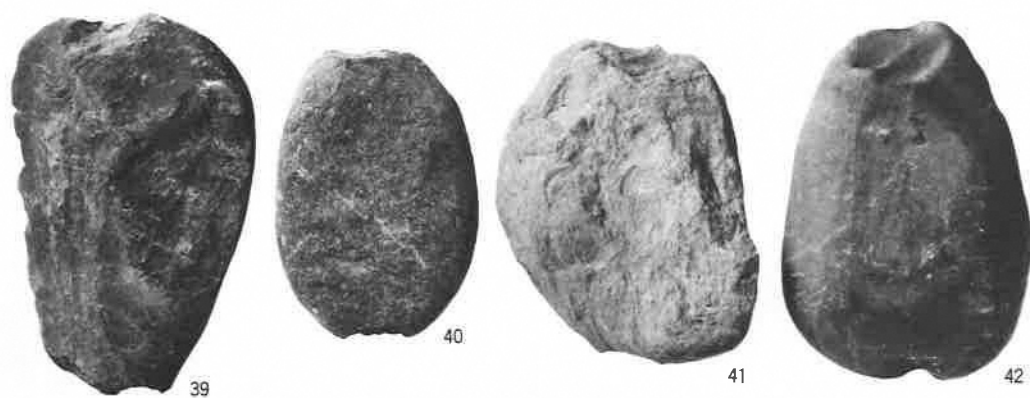
75



74



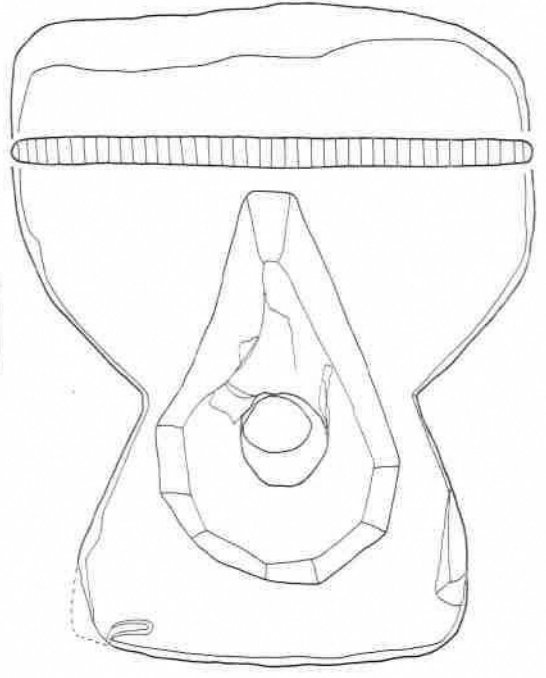
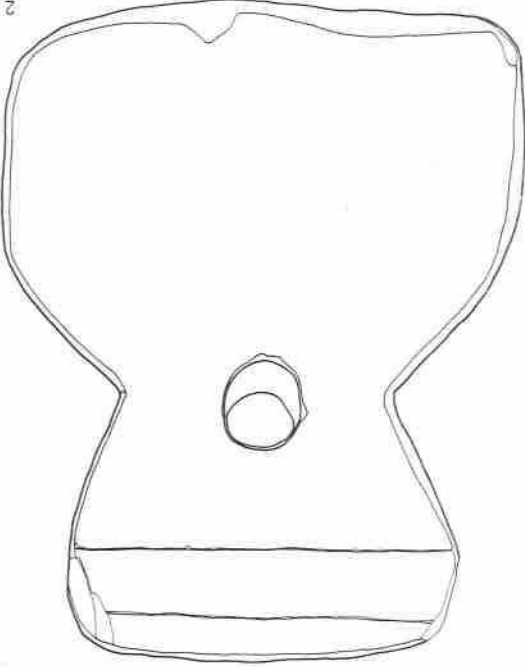
(1) 石鏃・剝片



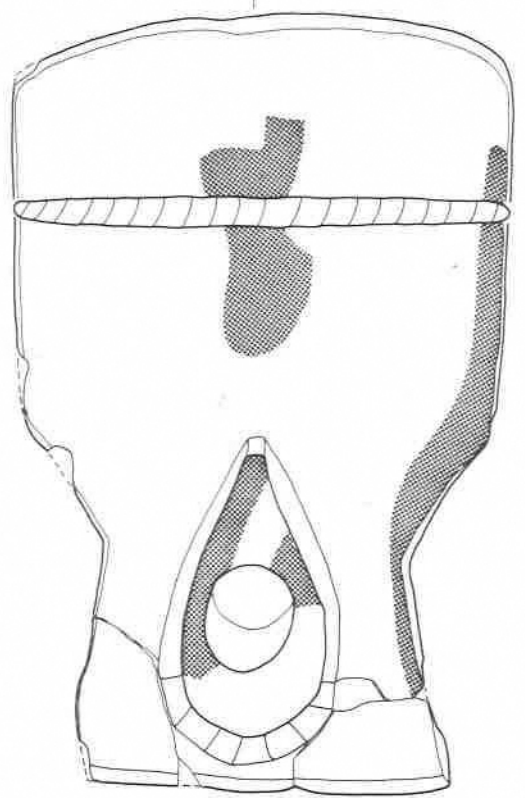
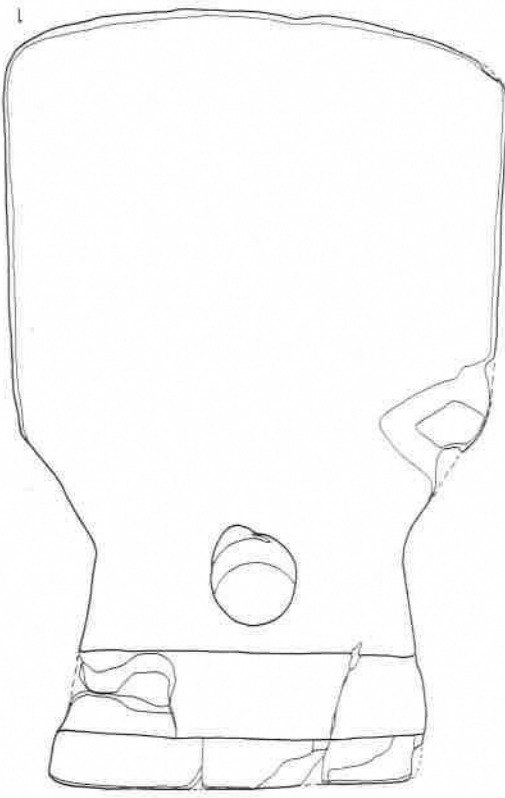
(2) 石錘

0 10 20cm

2



1

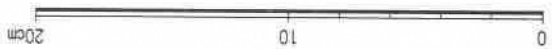




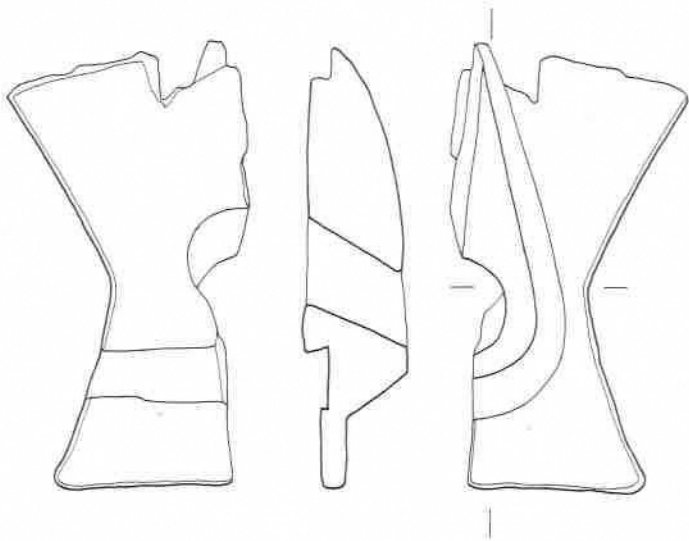
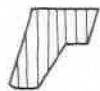
1



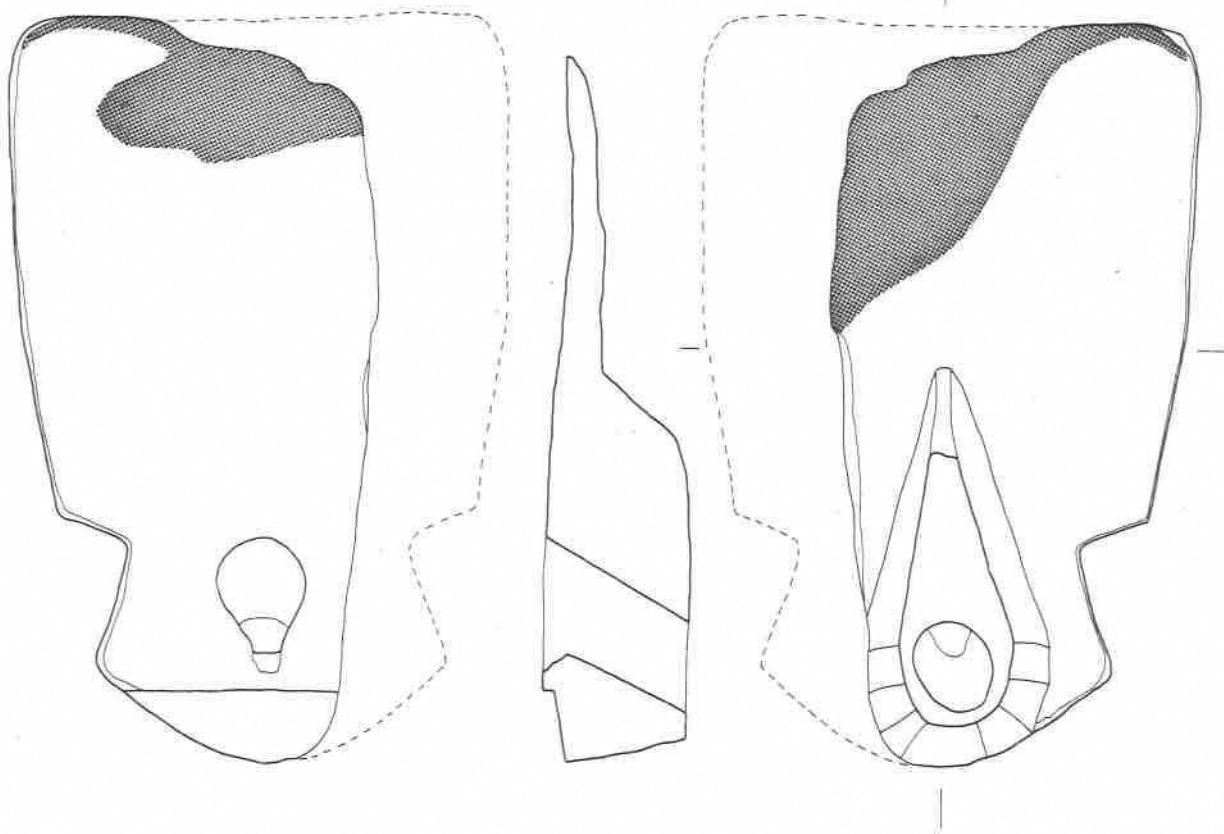
2



4



3

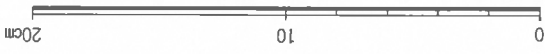




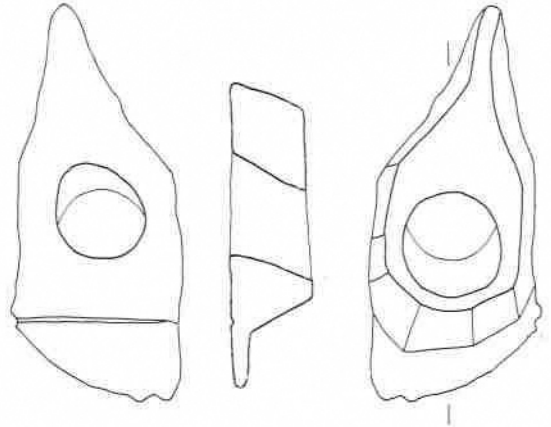
3



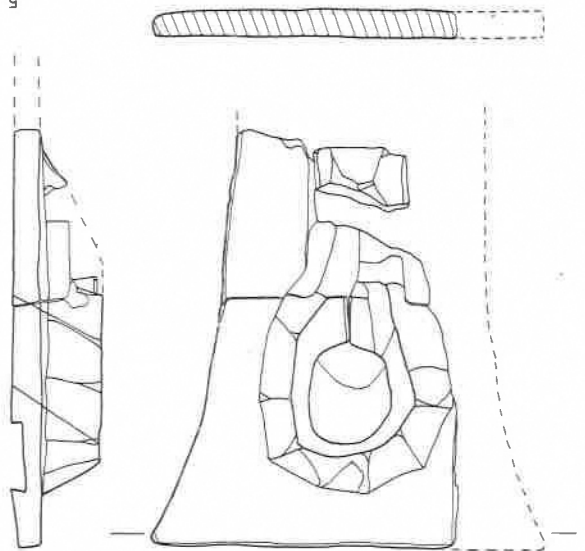
4

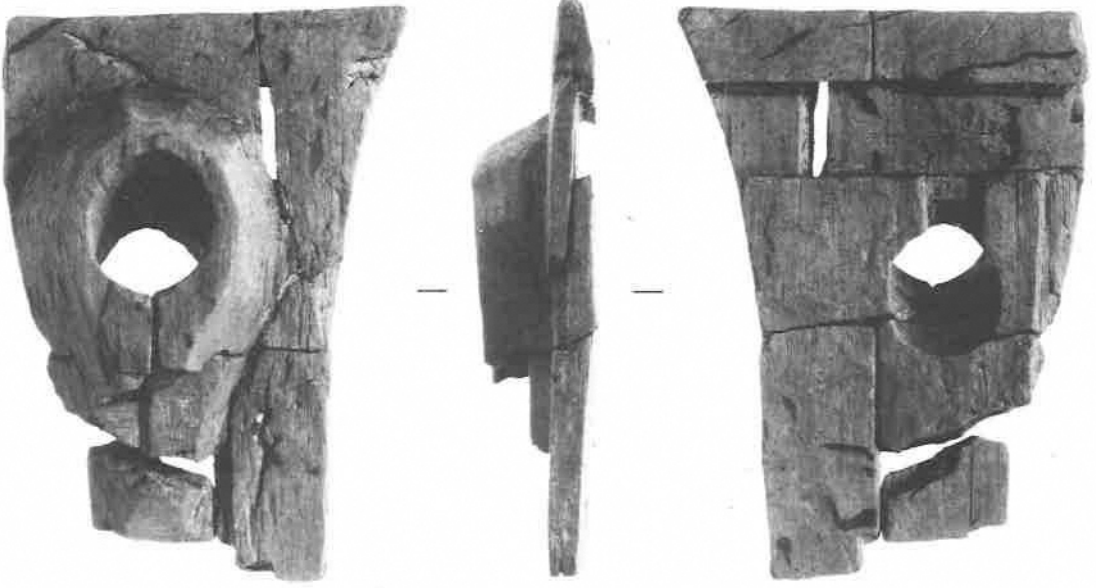


6



5





5



6



(1) 広 鍬（未完成品）

7

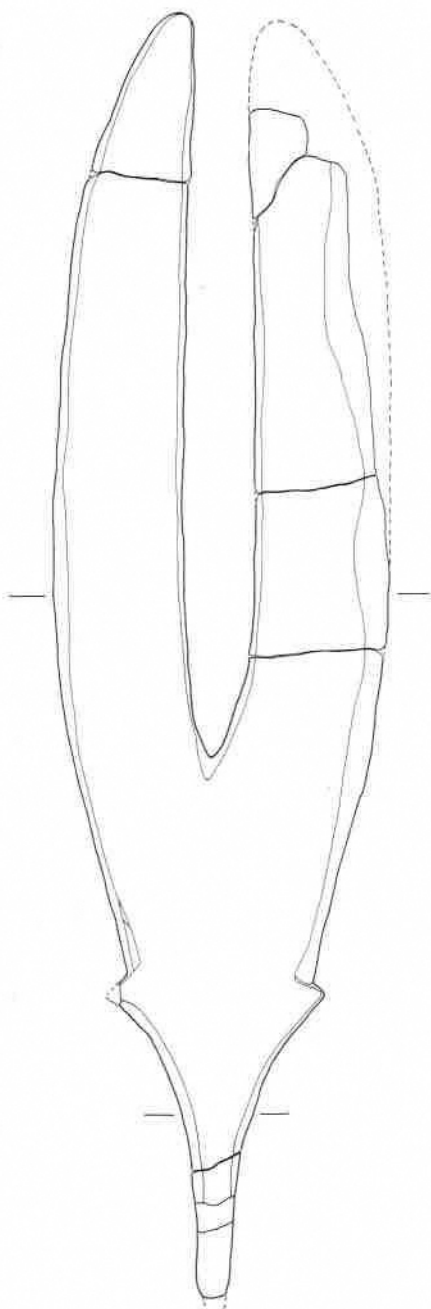
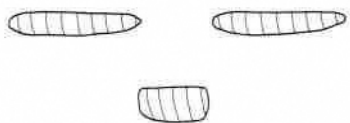


(2) 膝柄股鍬

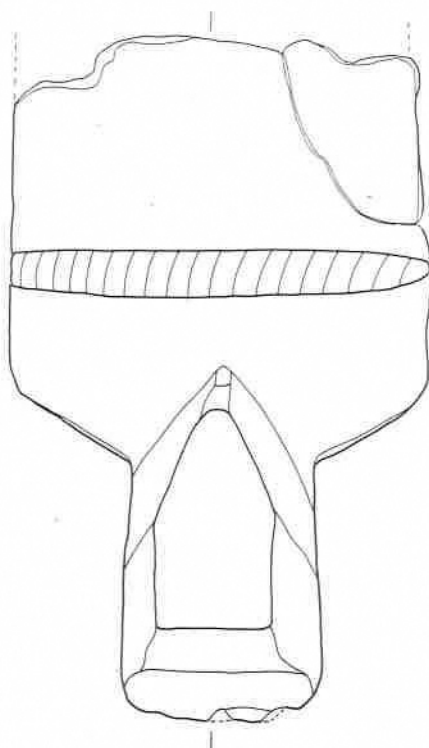
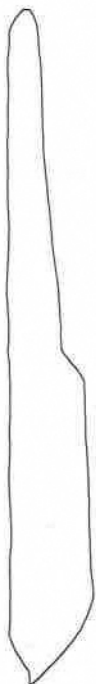
8

0 10 20 30 40cm

8



7





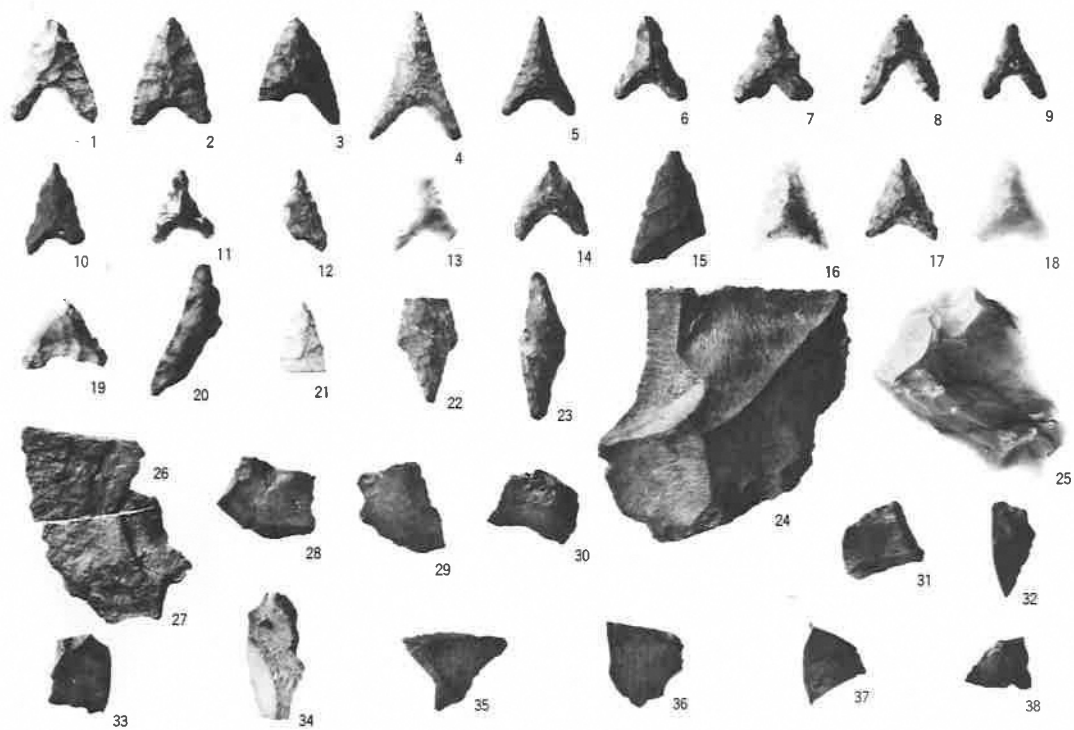
(1) 広 鍬 (未完成品)

7

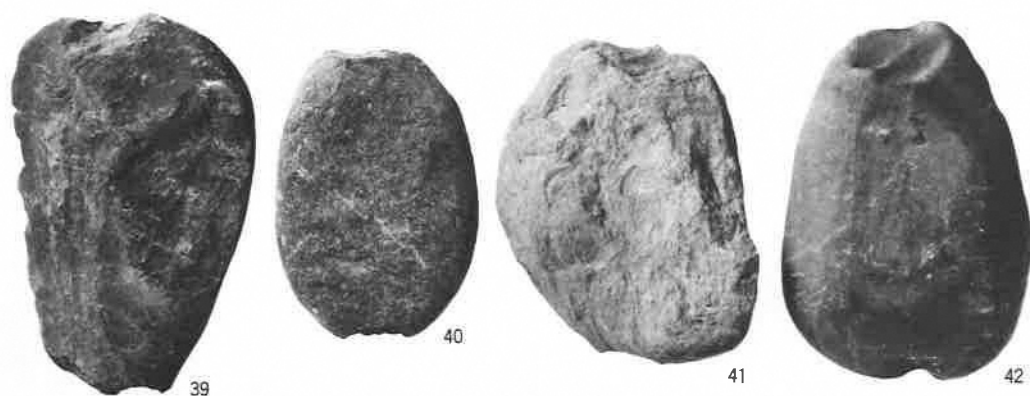


(2) 膝柄股鍬

8



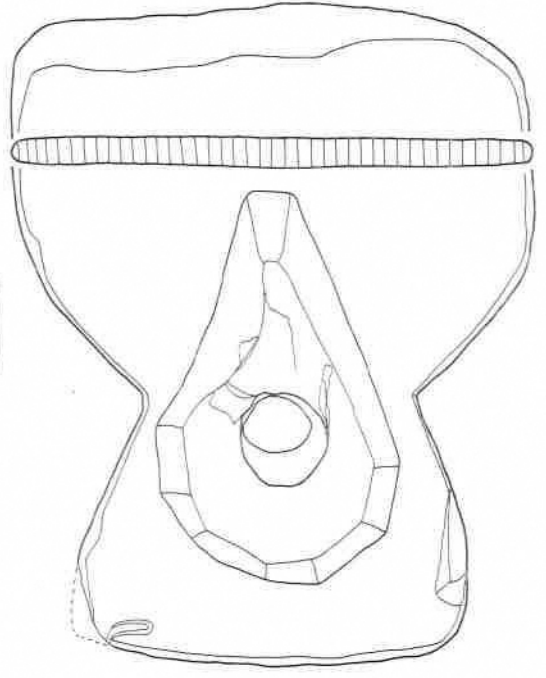
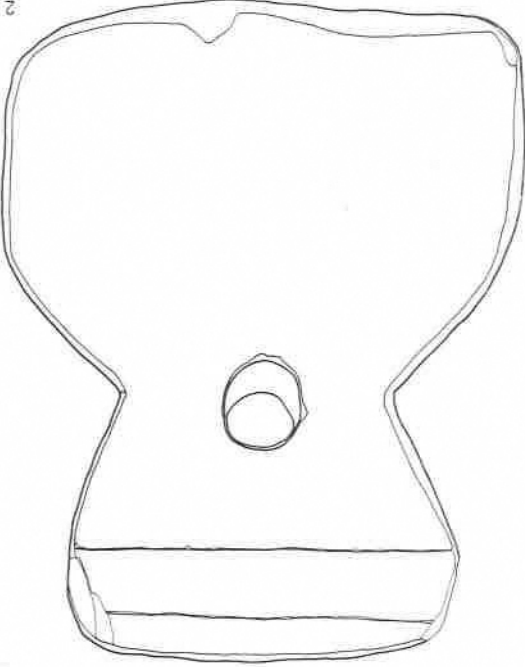
(1) 石鏃・剝片



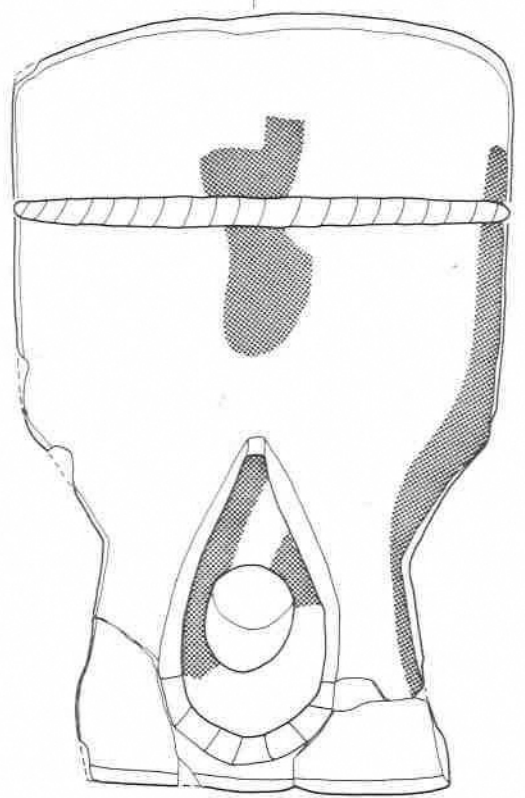
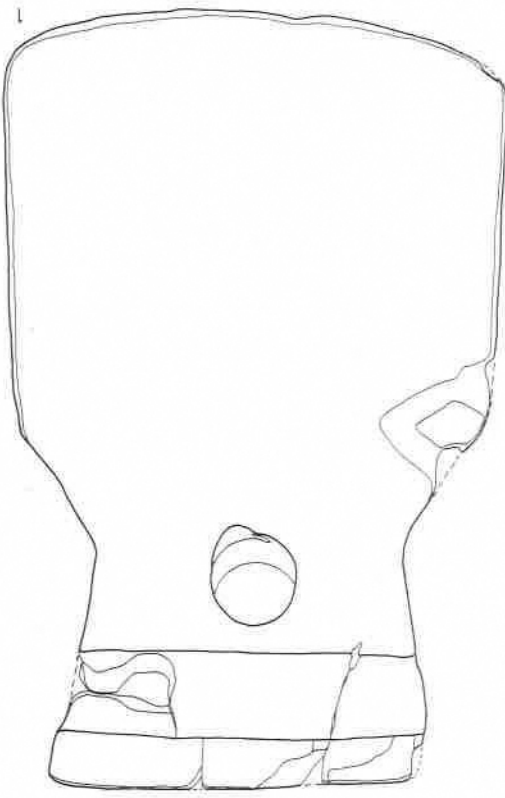
(2) 石錘

0 10 20cm

2



1

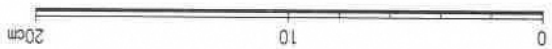




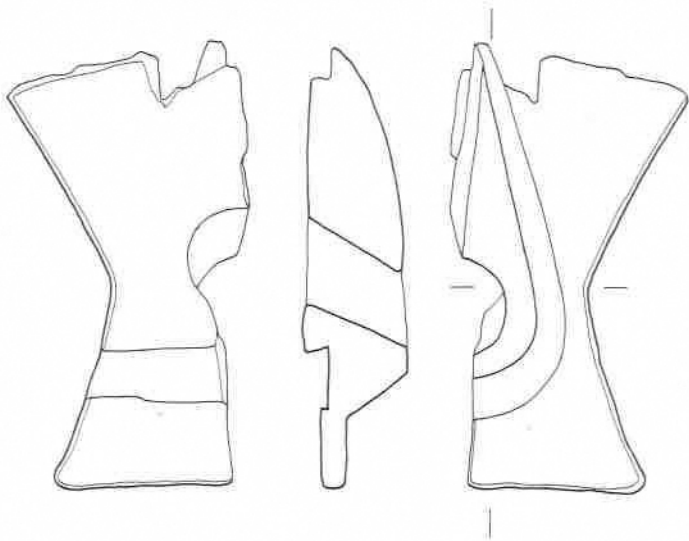
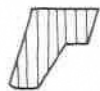
1



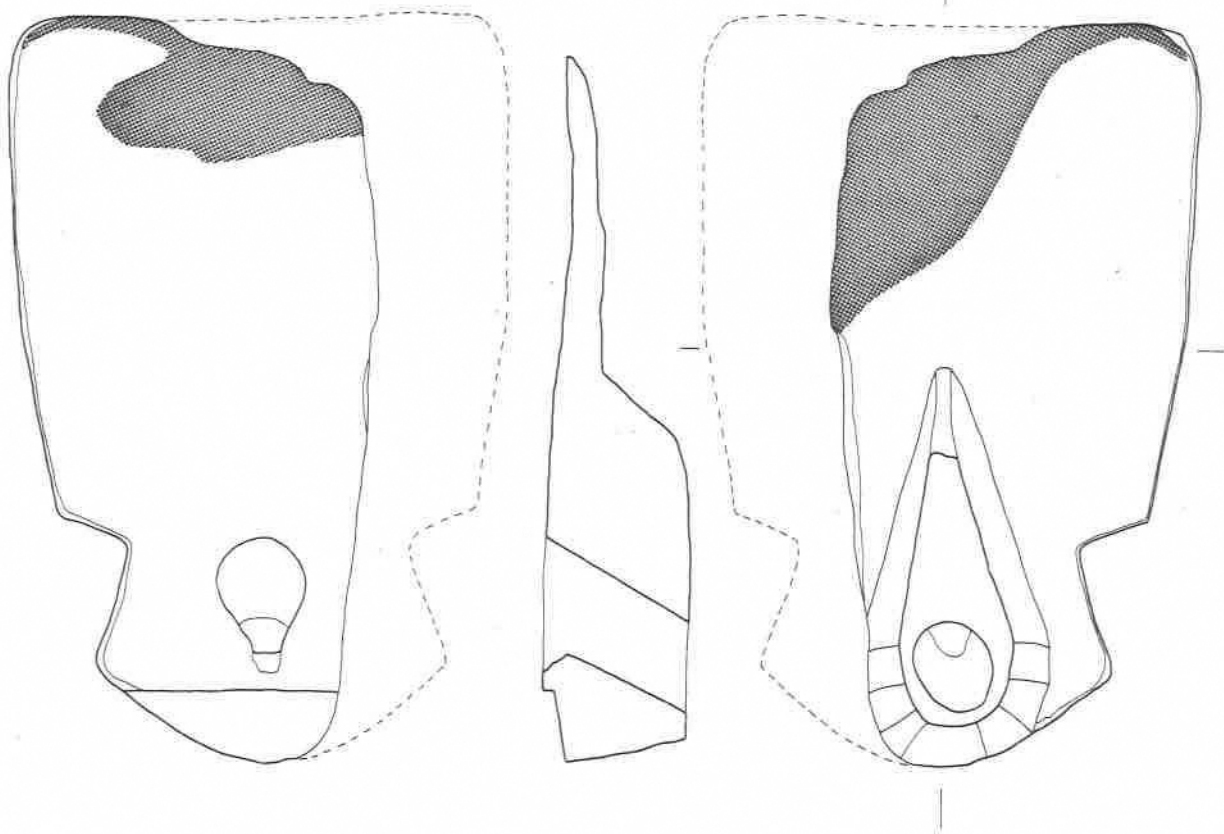
2



4



3

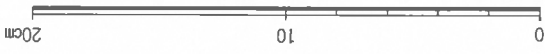




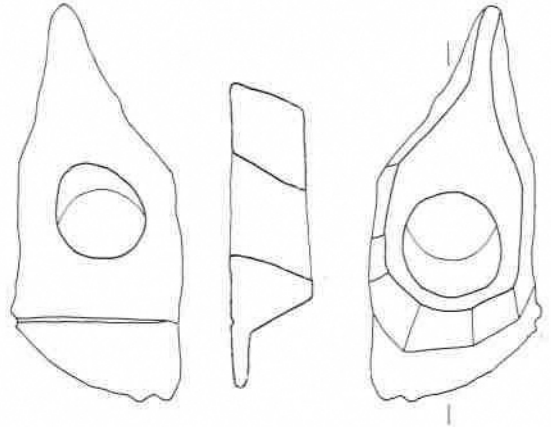
3



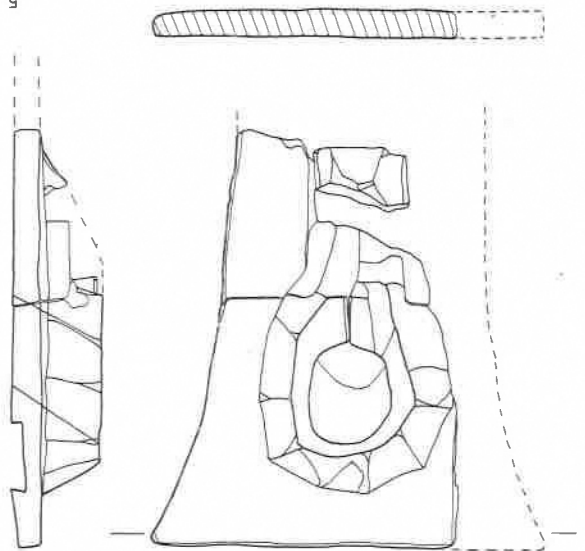
4

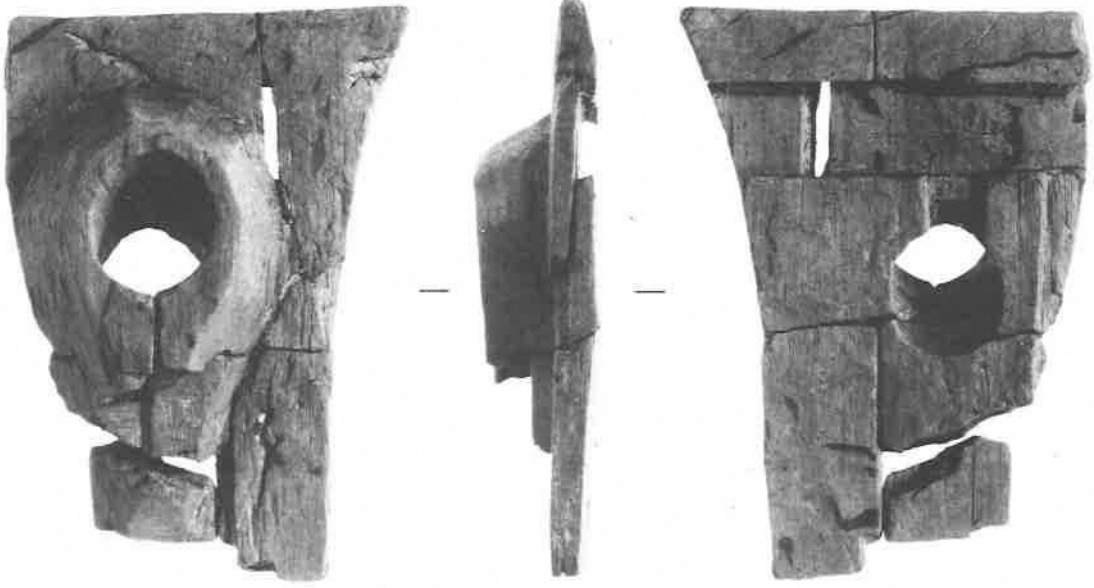


6



5





5



6



(1) 広 鍬 (未完成品)

7

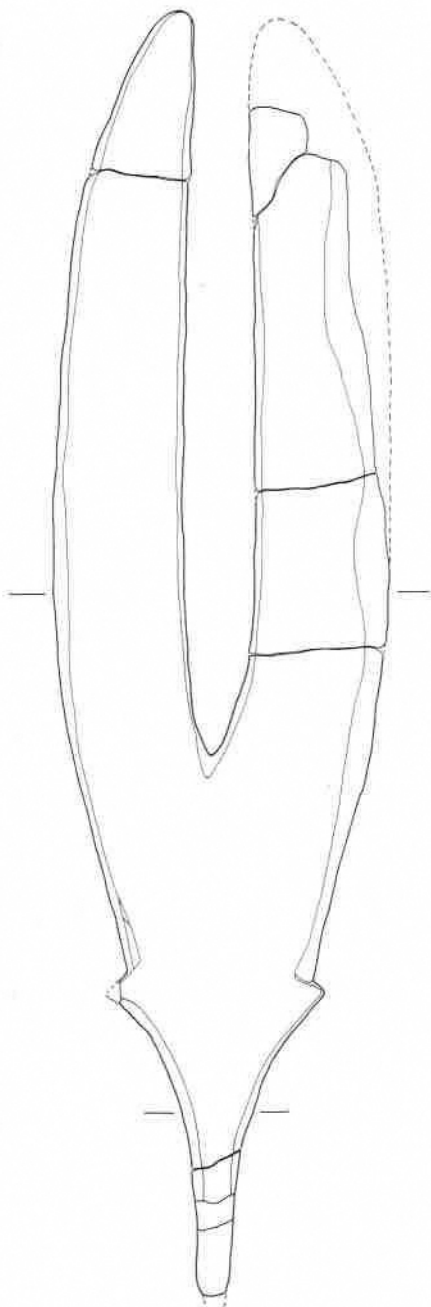
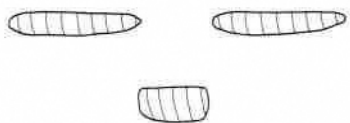


(2) 膝柄股鍬

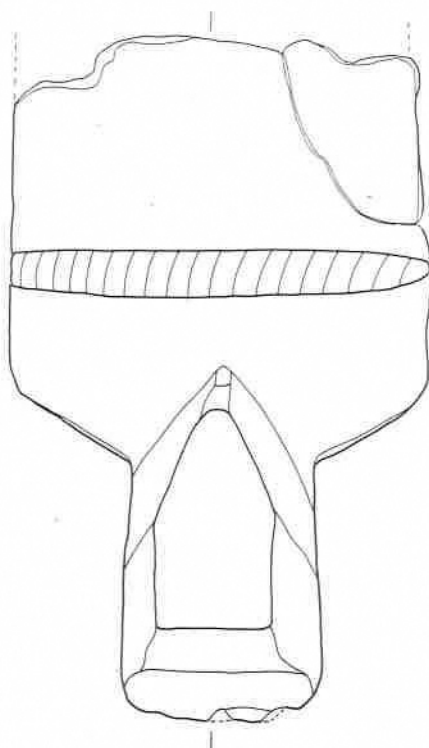
8

0 10 20 30 40cm

8



7





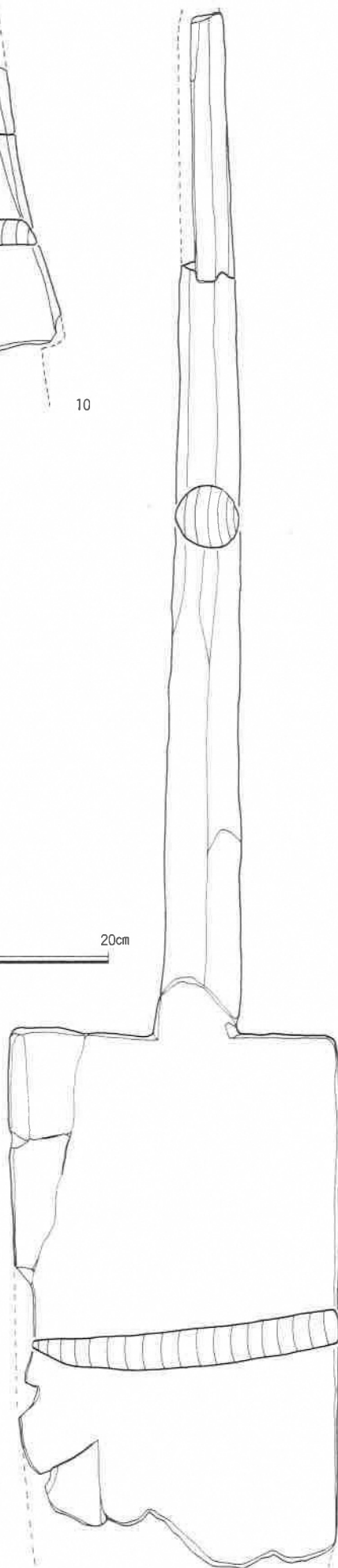
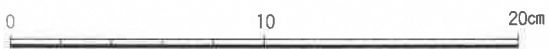
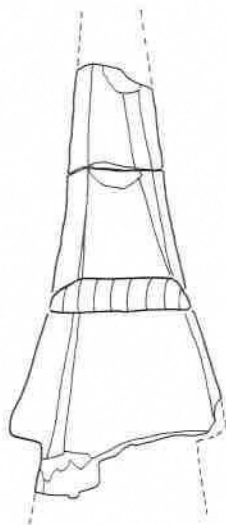
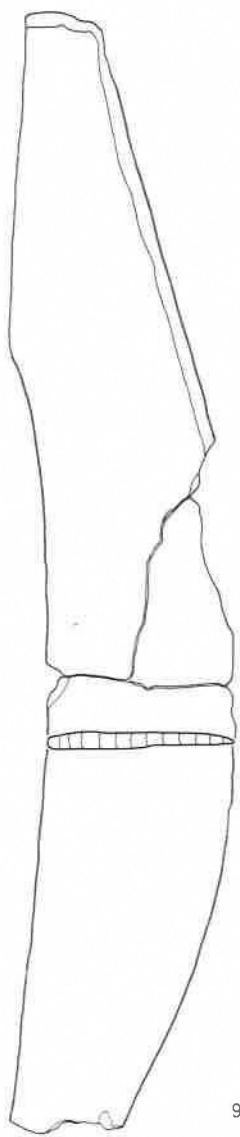
(1) 広 鍬 (未完成品)

7



(2) 膝柄股鍬

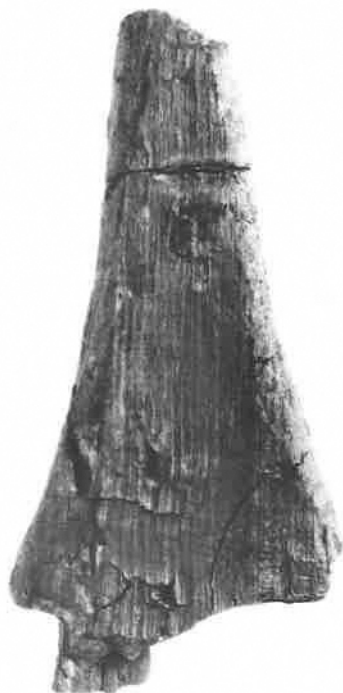
8





9

(1) 膝柄股鍬



10

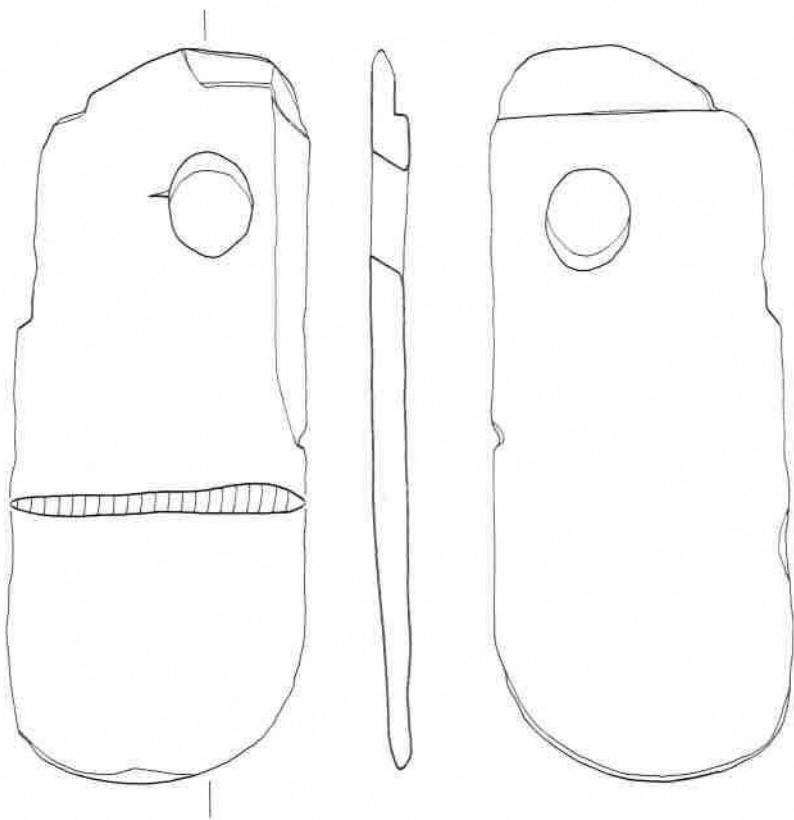
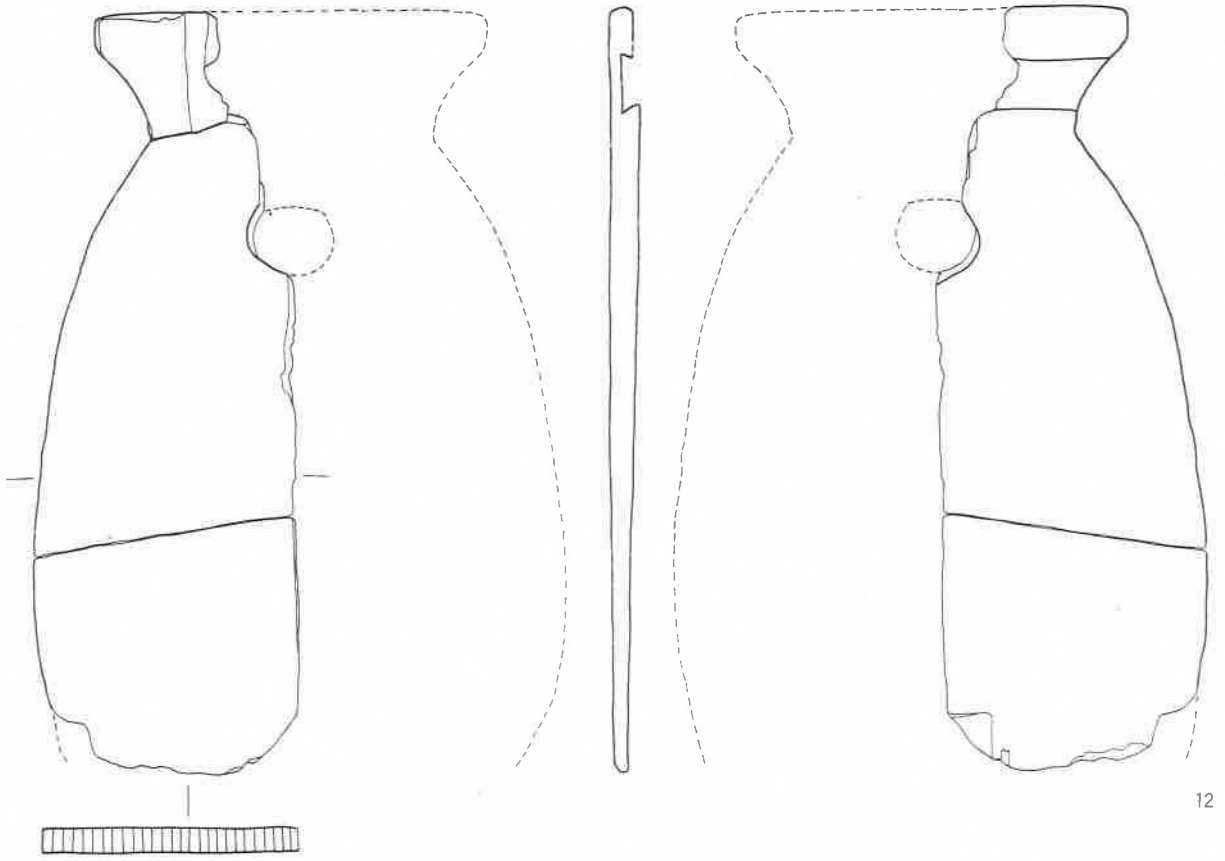
(2) 膝柄股鍬



(3) 一木鋤



11



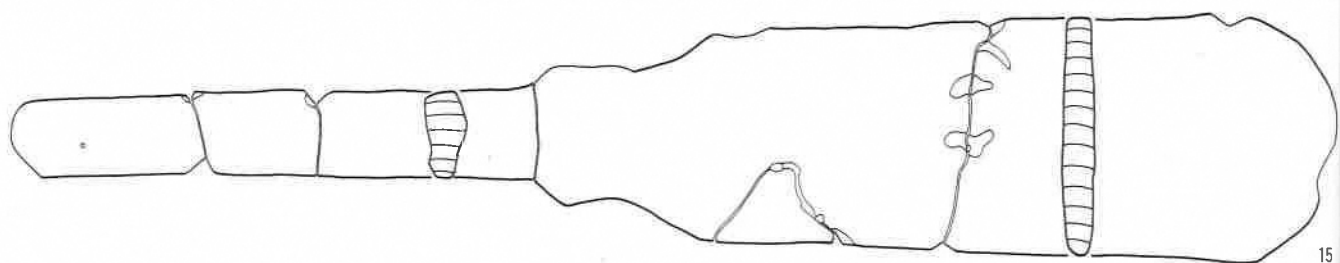
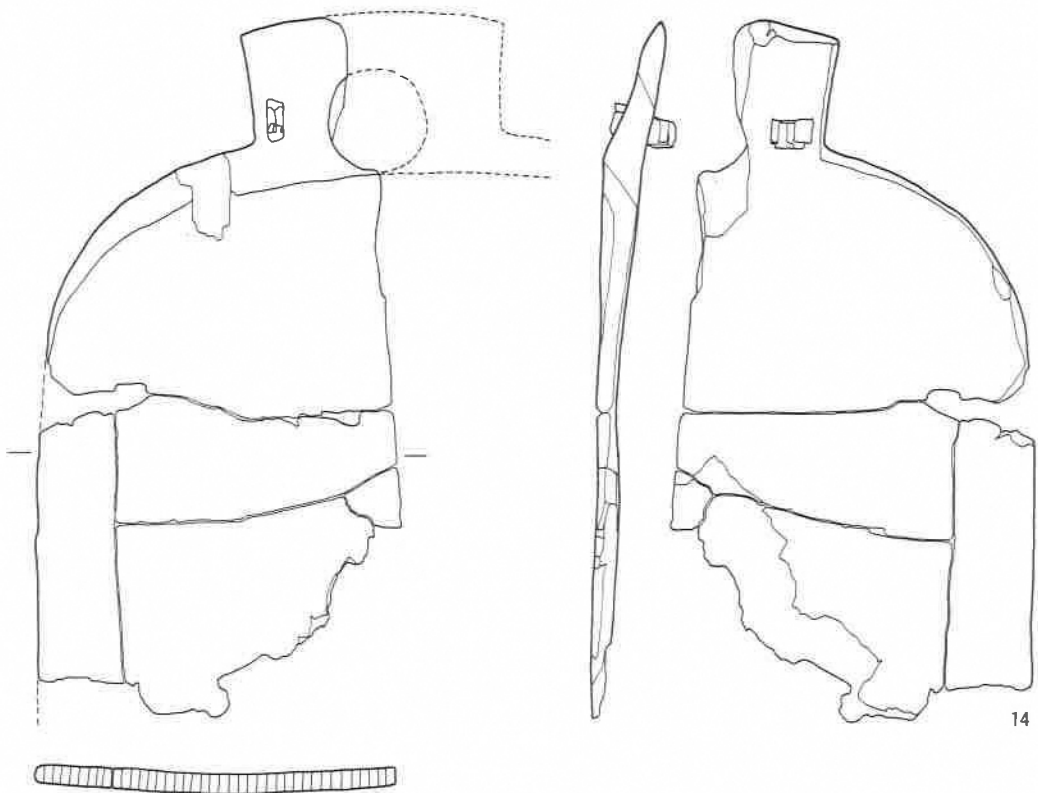
0 10 20cm



12

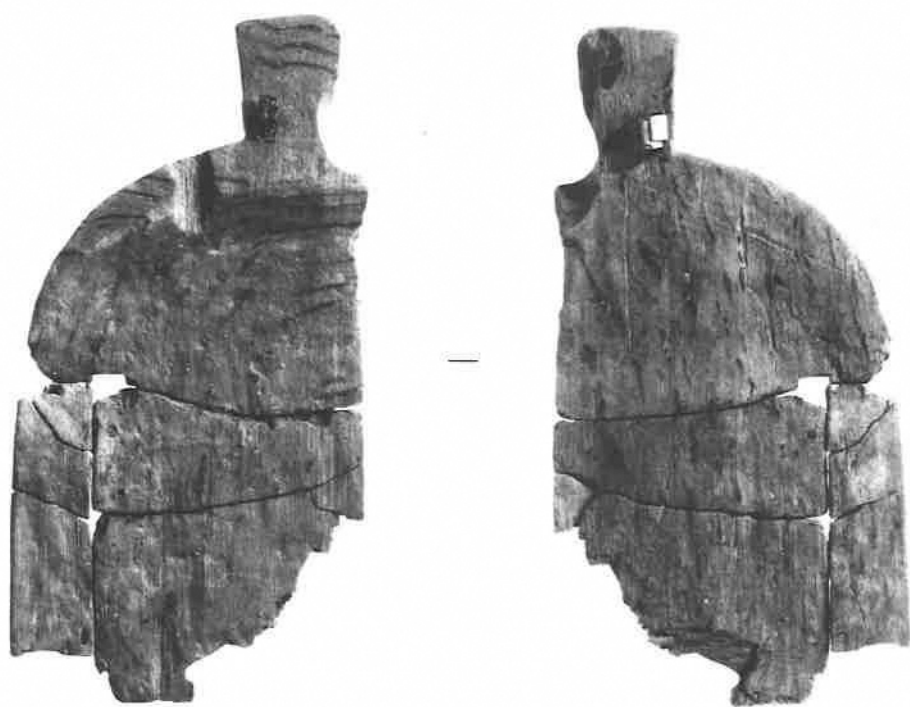


13



0 10 20cm

A horizontal scale bar with markings at 0, 10, and 20 cm.

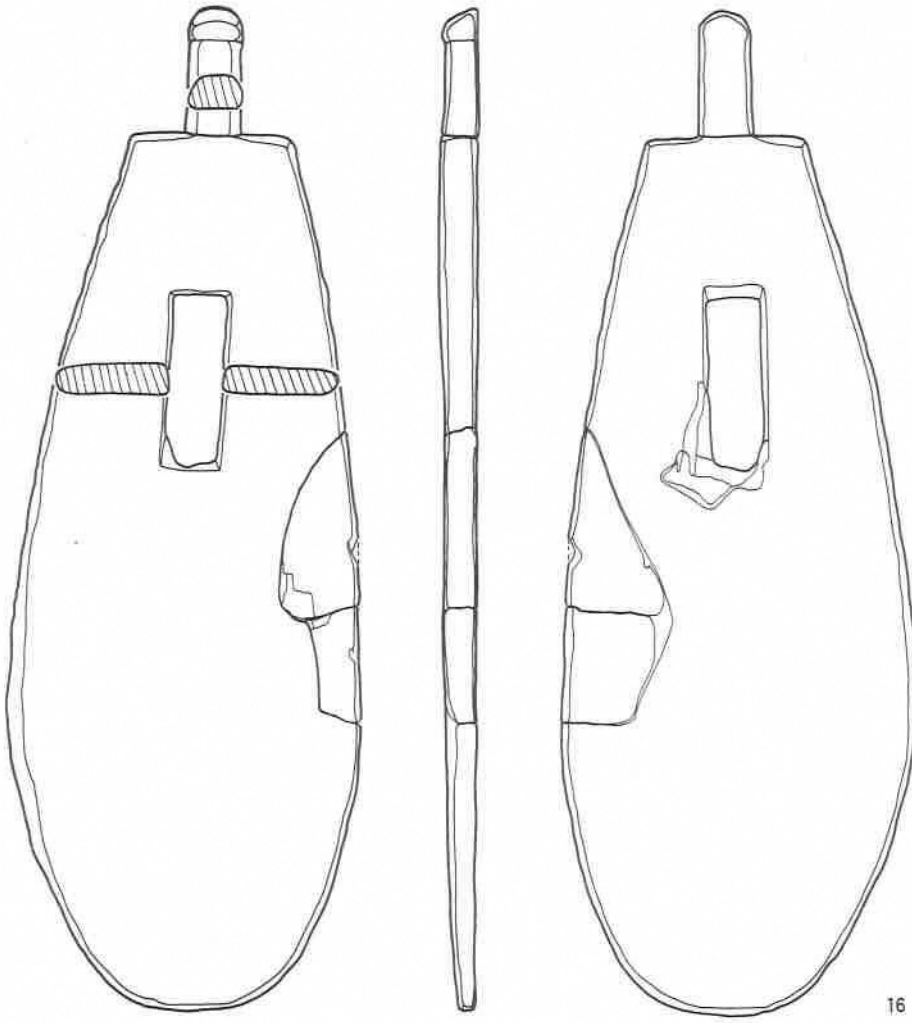


14

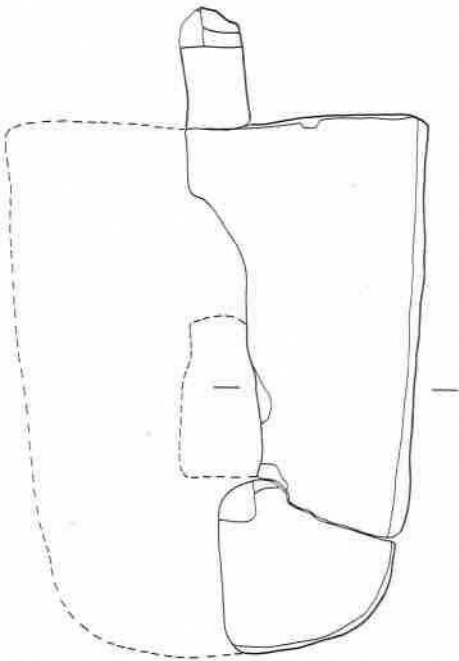


15

組合せ農具 (鋤)



16



17



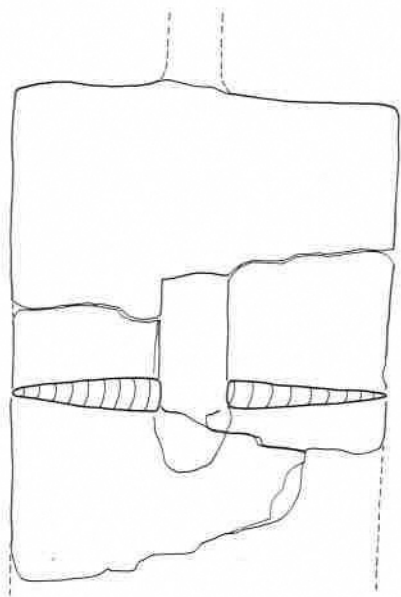


16

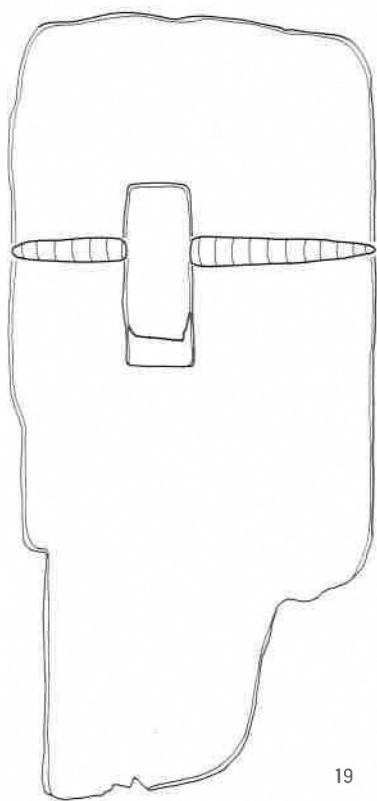


17

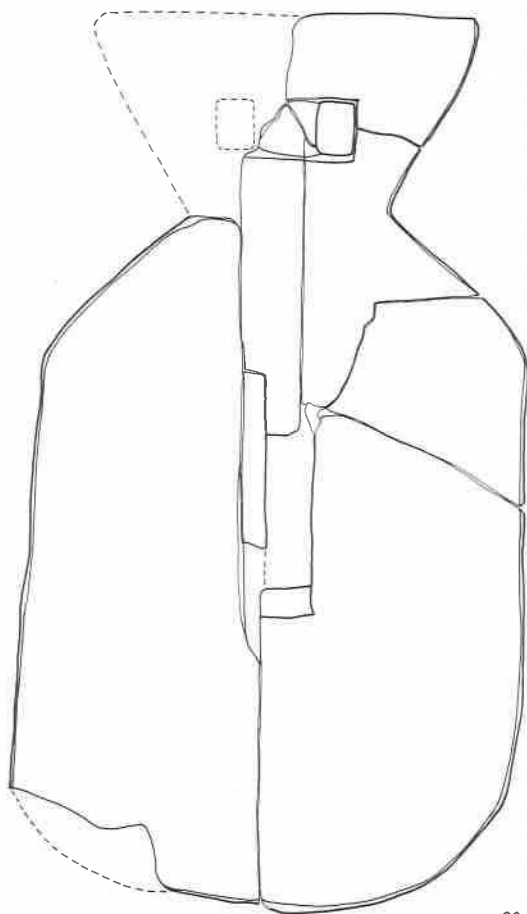
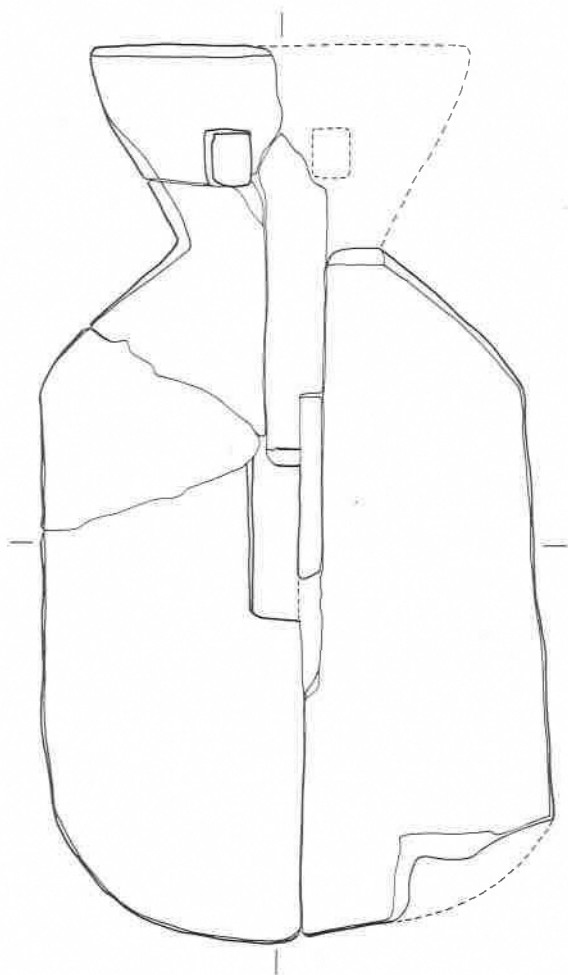
組合せ農具(鋤)



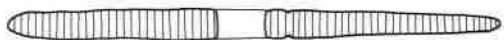
18



19



20



0 10 20cm



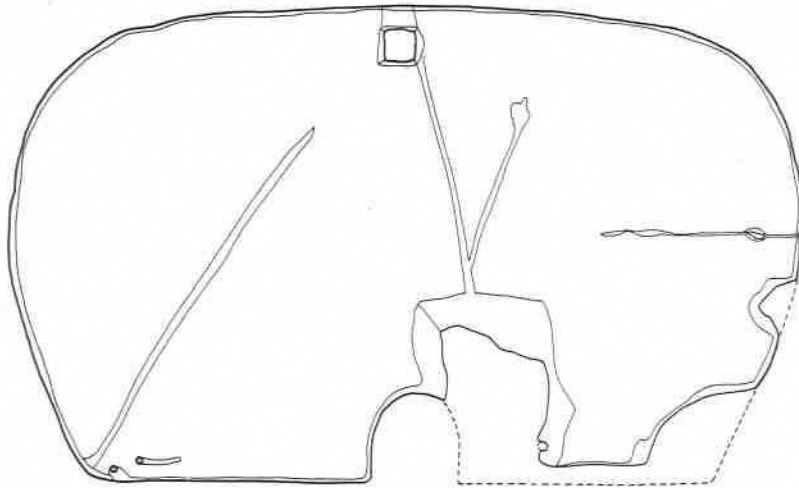
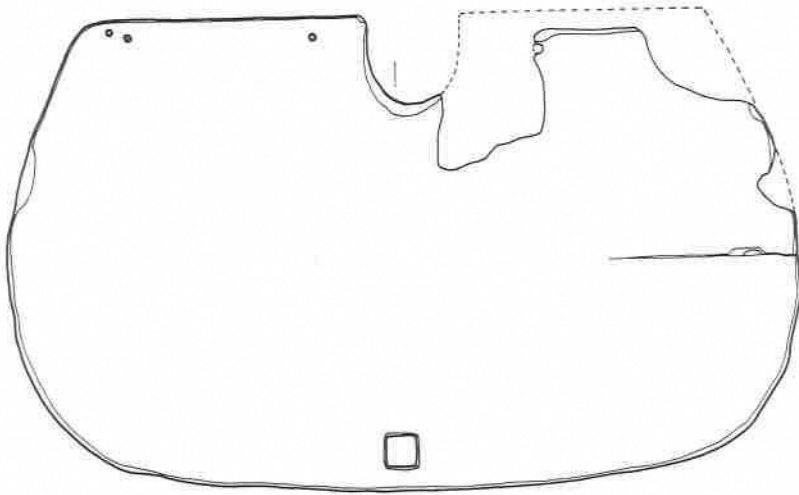
18



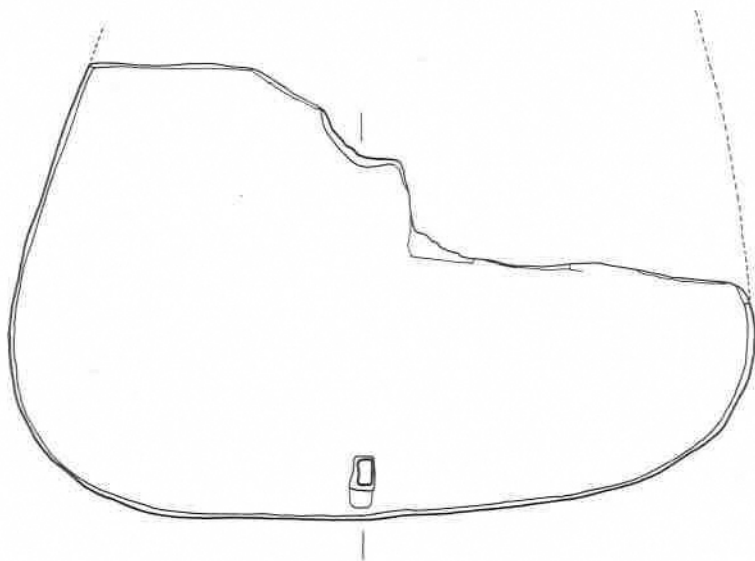
19



20

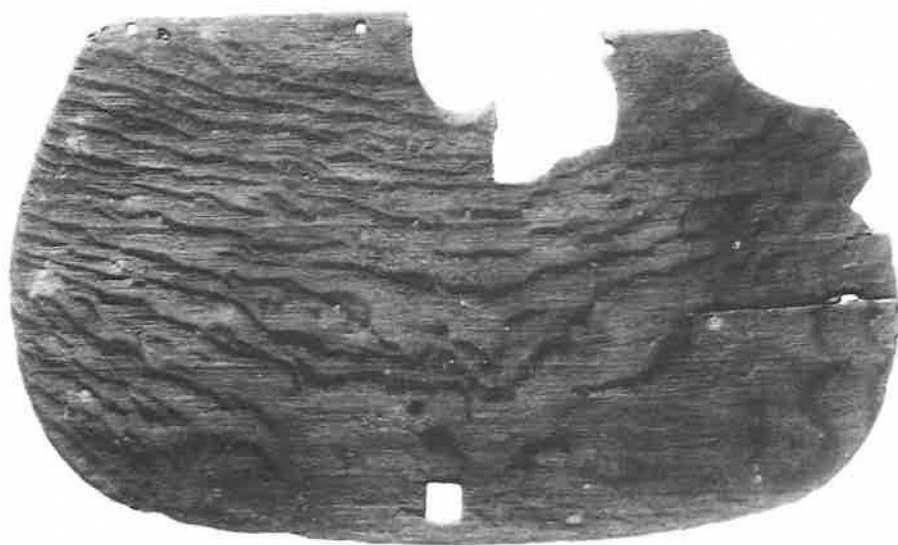


21



22

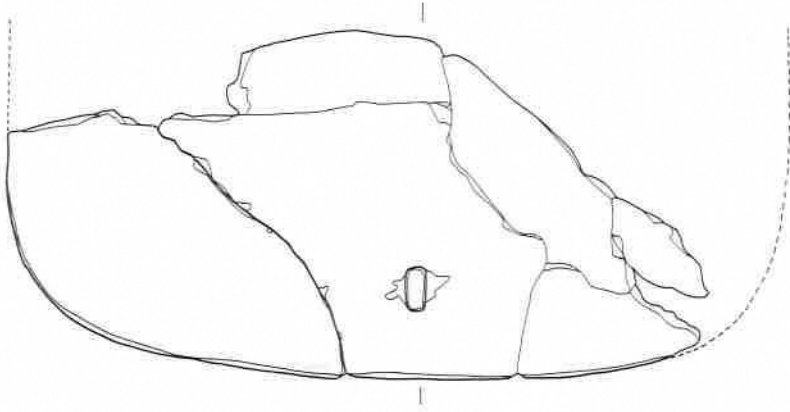
0 10 20cm



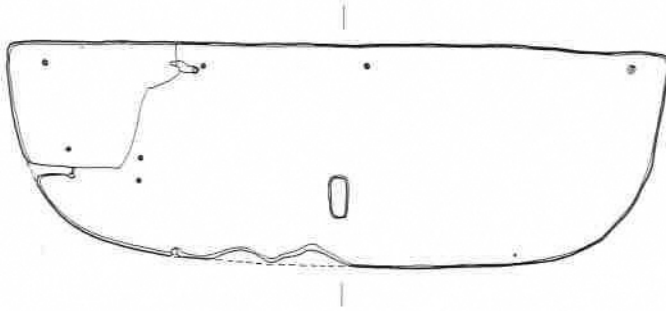
21



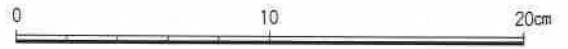
22



23



24

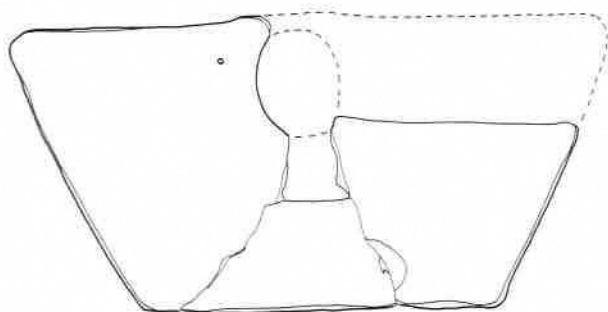
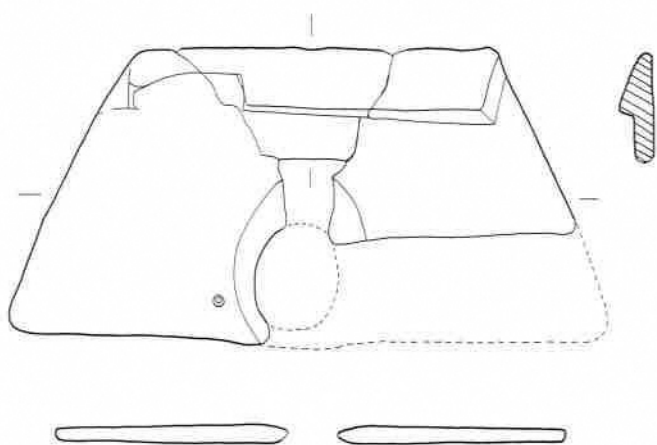
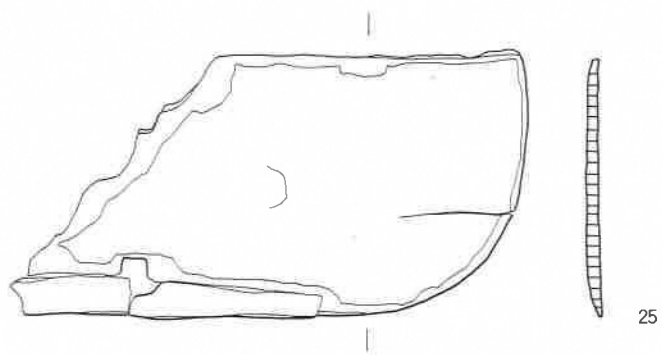




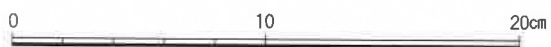
23



24

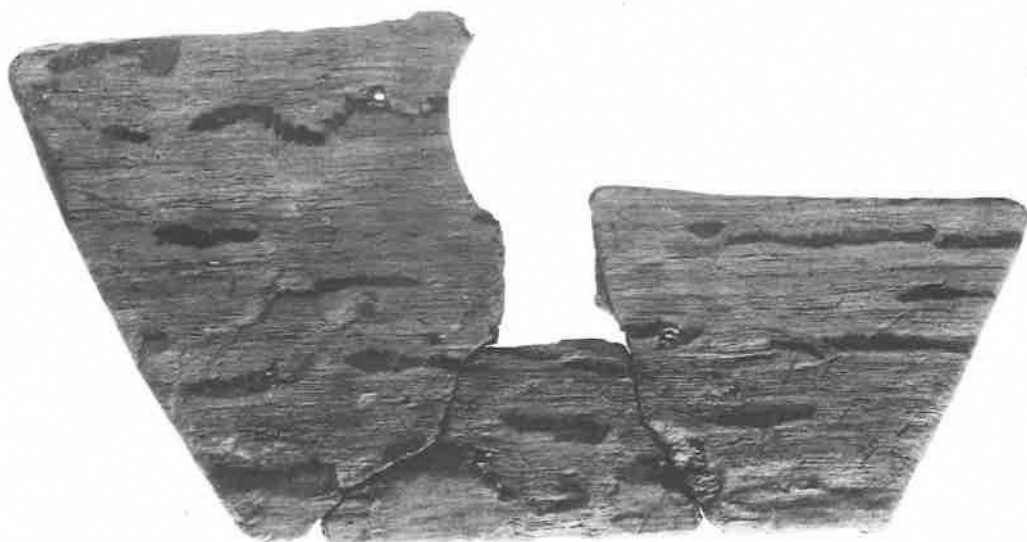


26

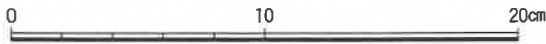
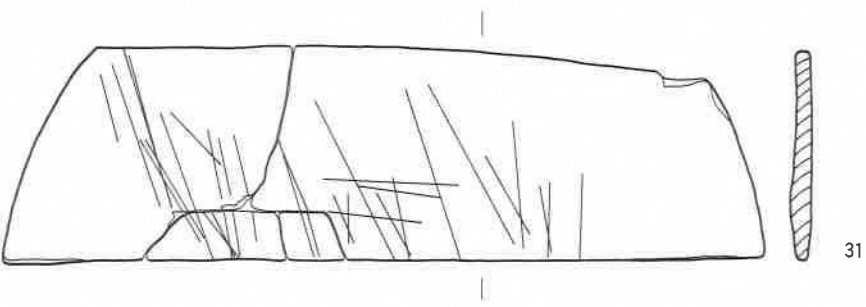
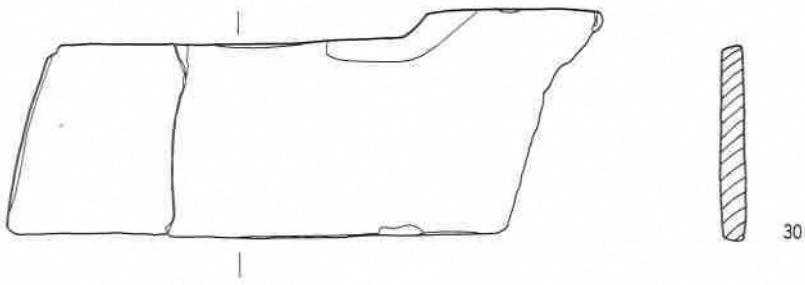
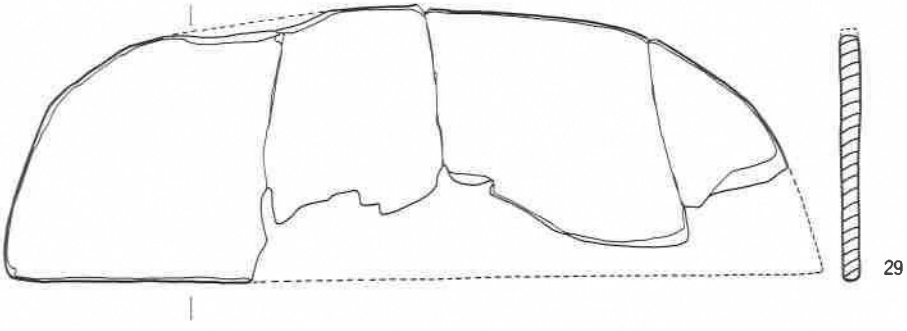




25



26





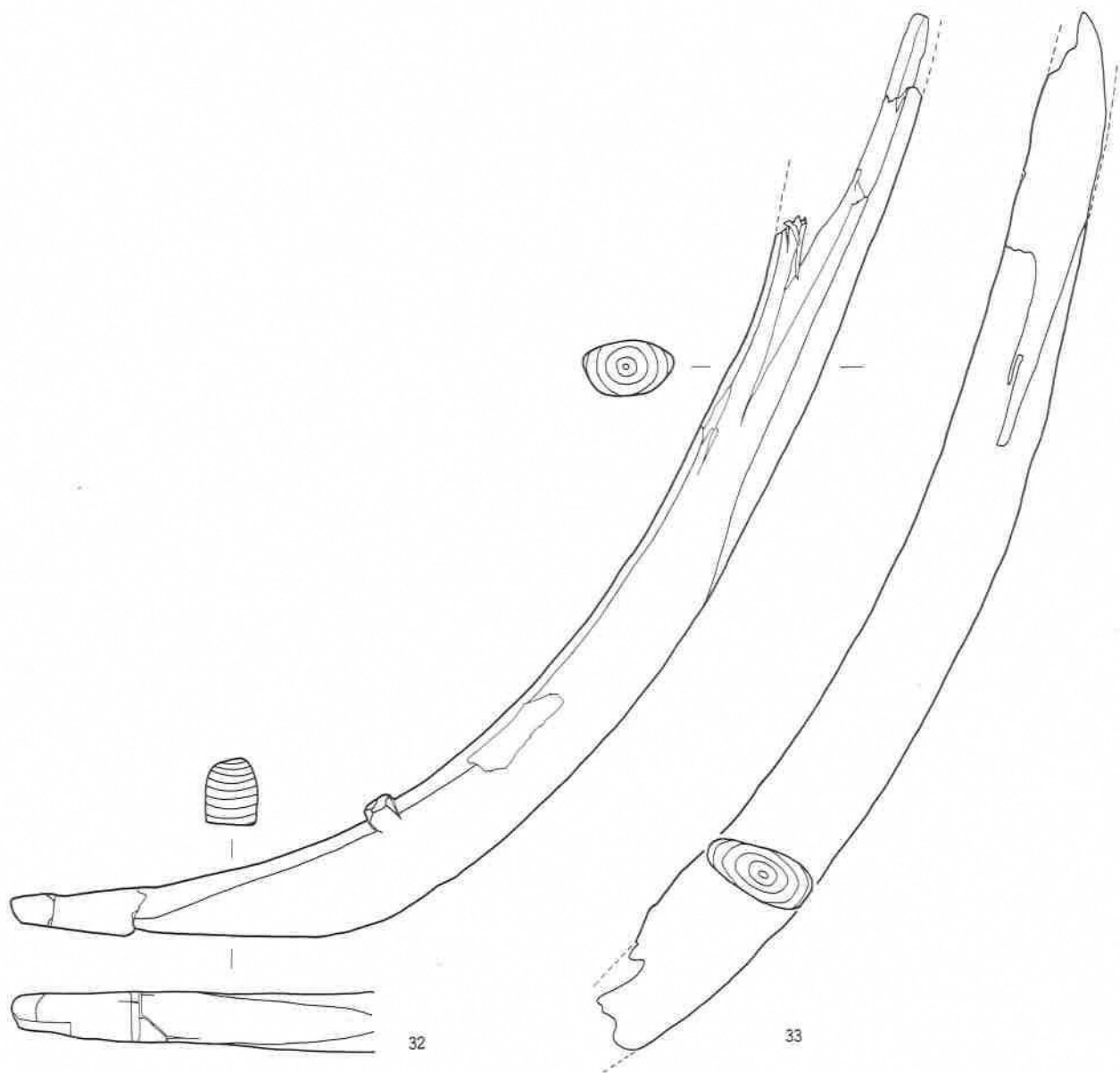
29



30



31



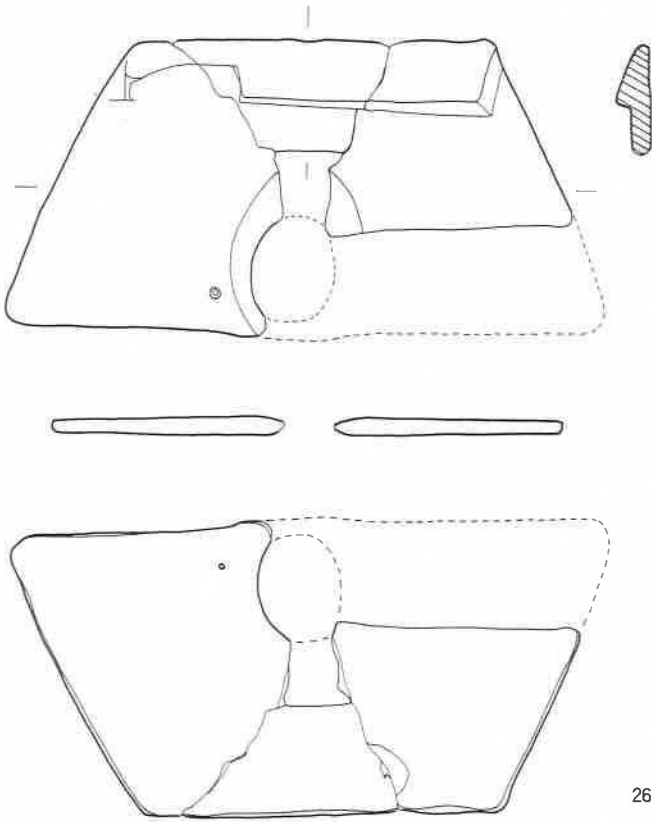
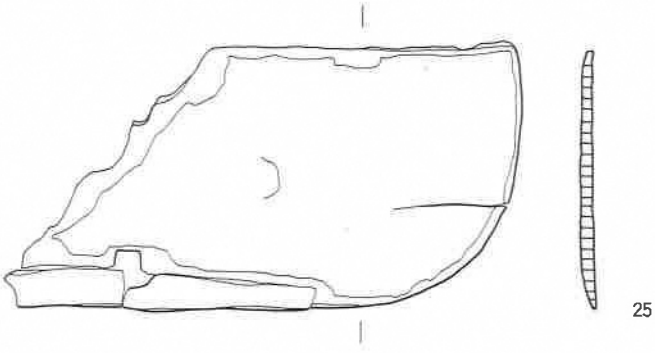
0 10 20cm



32



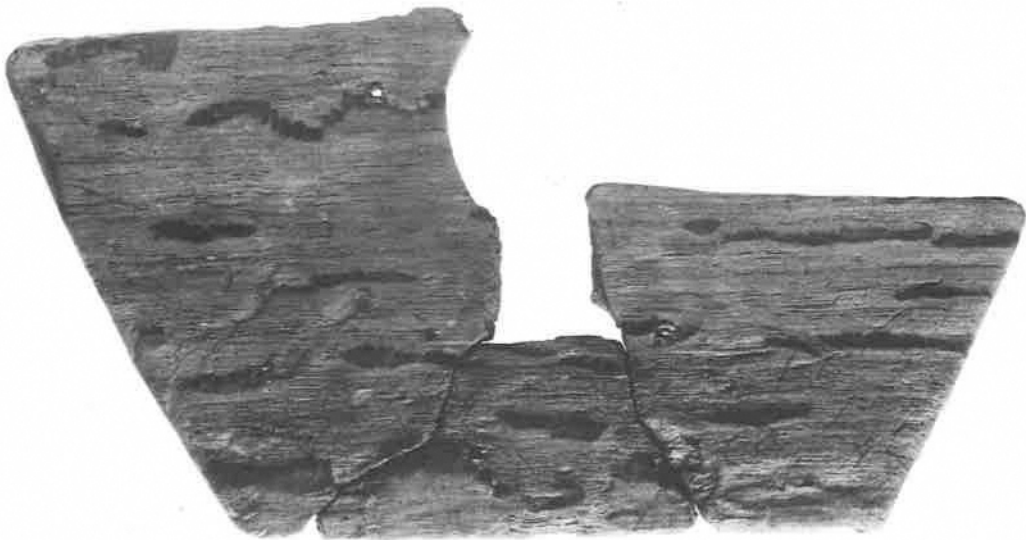
33



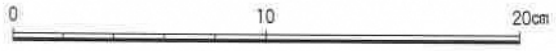
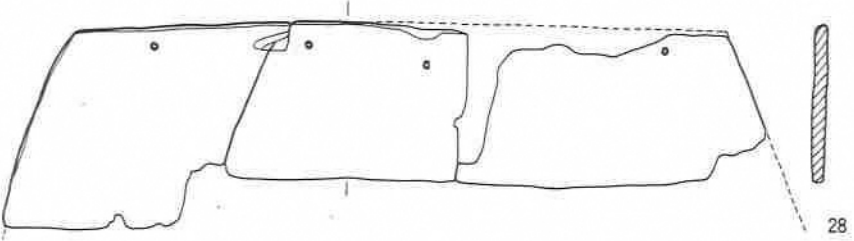
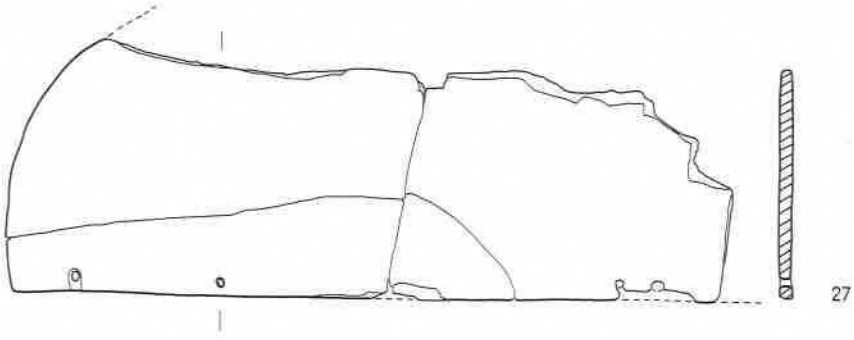
0 10 20cm



25

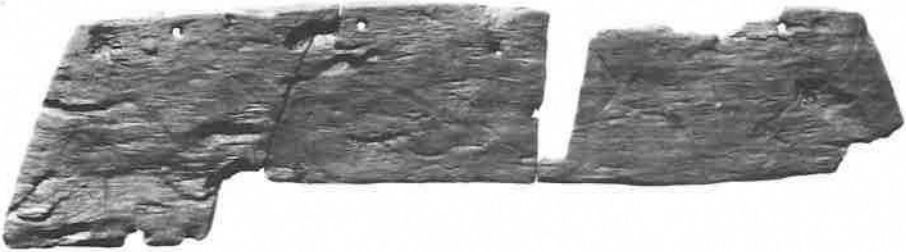


26

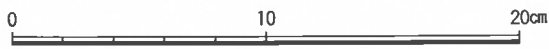
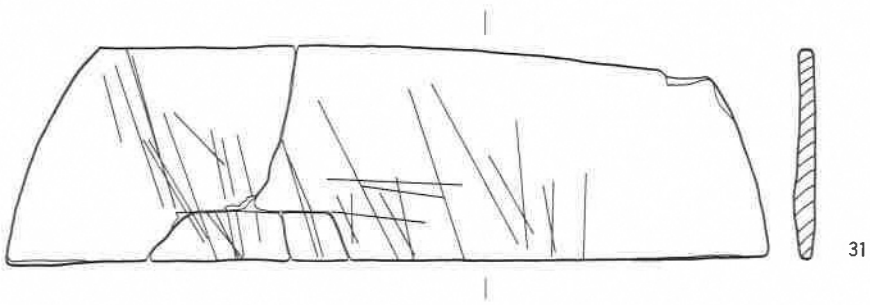
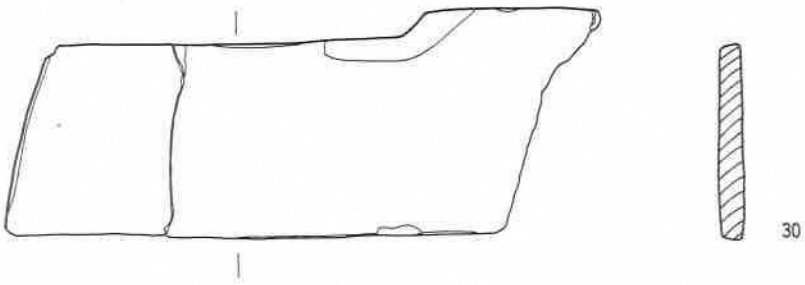
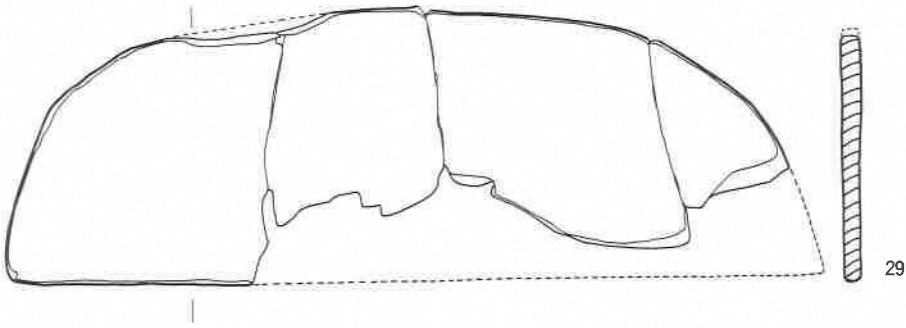




27



28





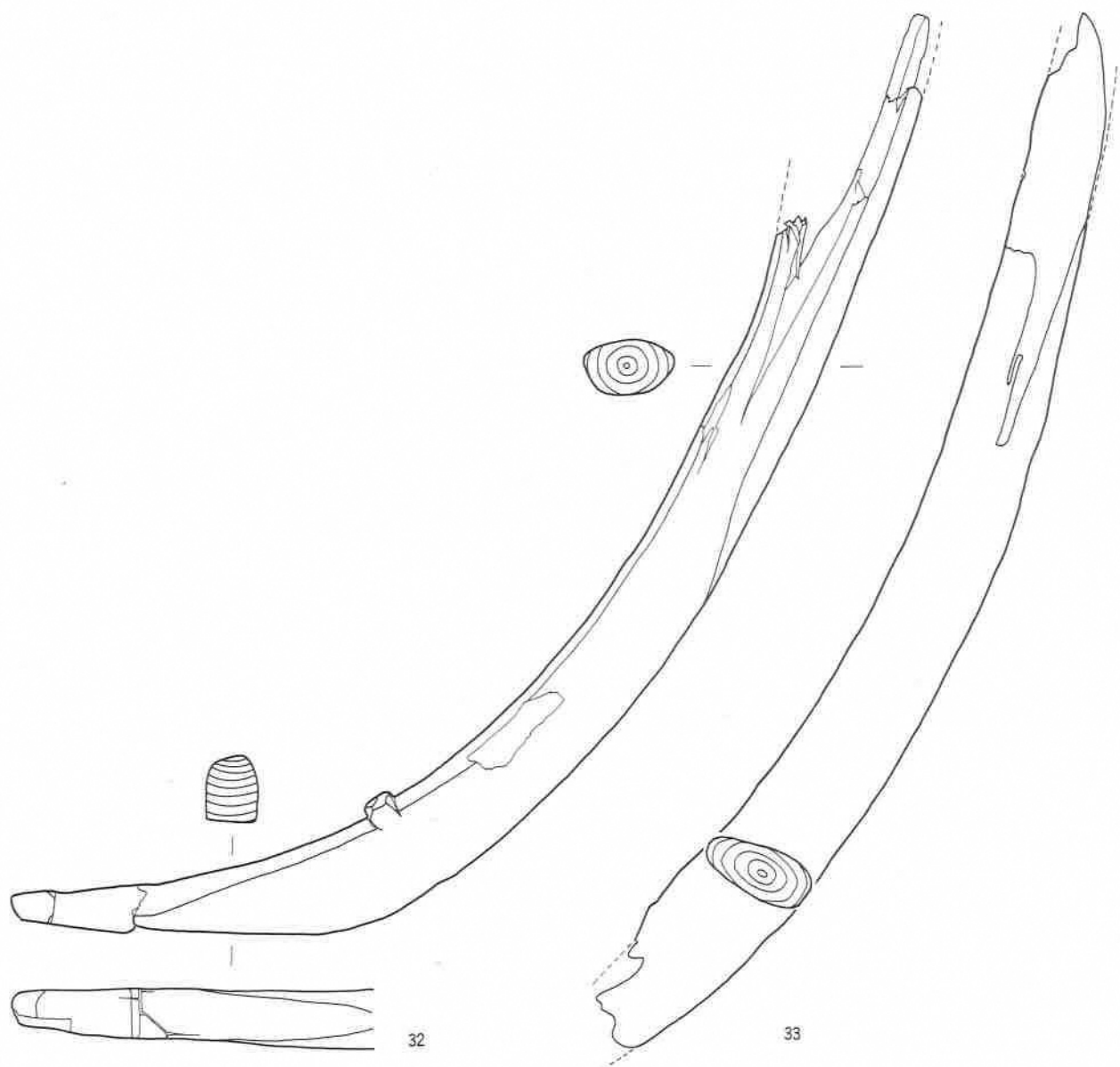
29



30



31



32

33

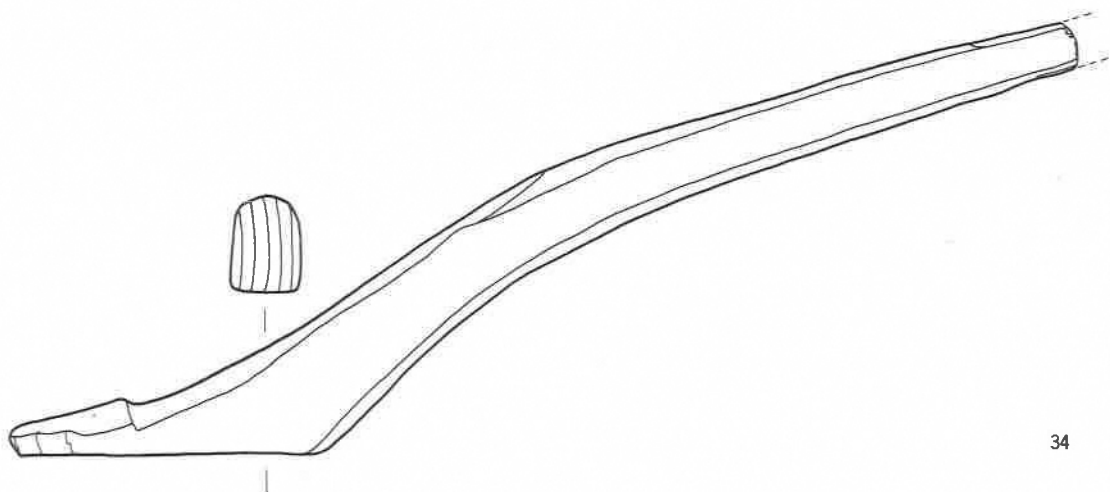
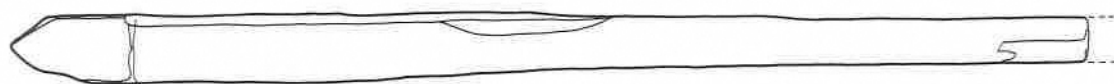
0 10 20cm



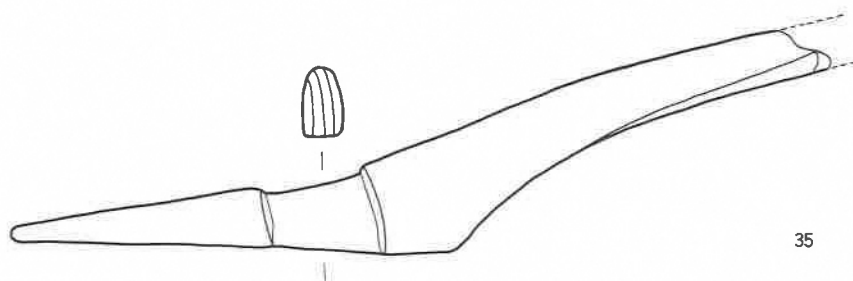
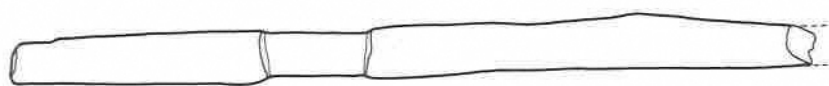
32



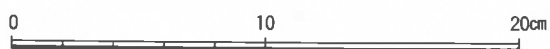
33



34



35

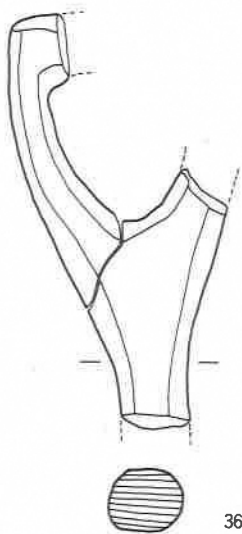




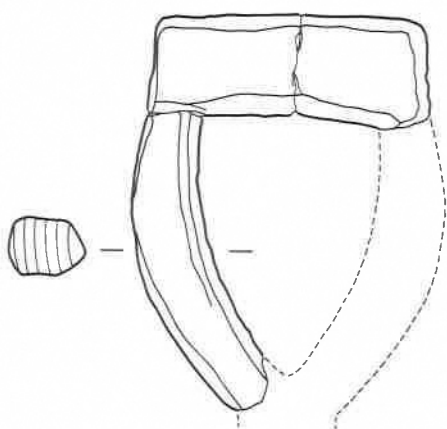
34



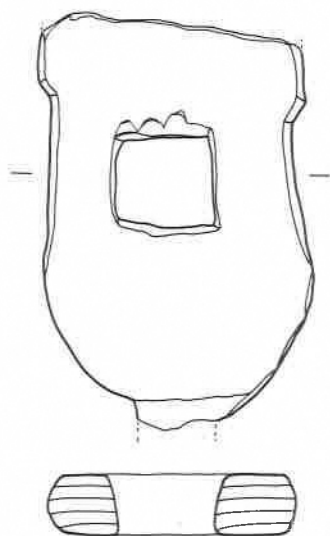
35



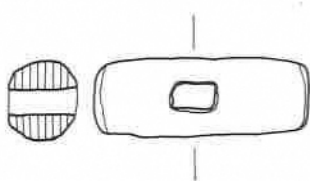
36



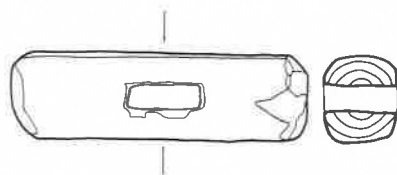
37



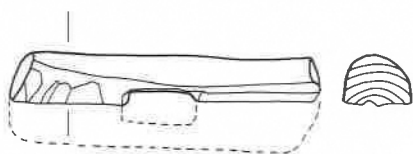
38



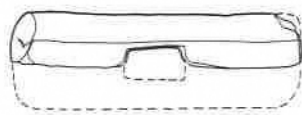
39



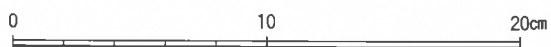
40



41



42





36



37



38



39



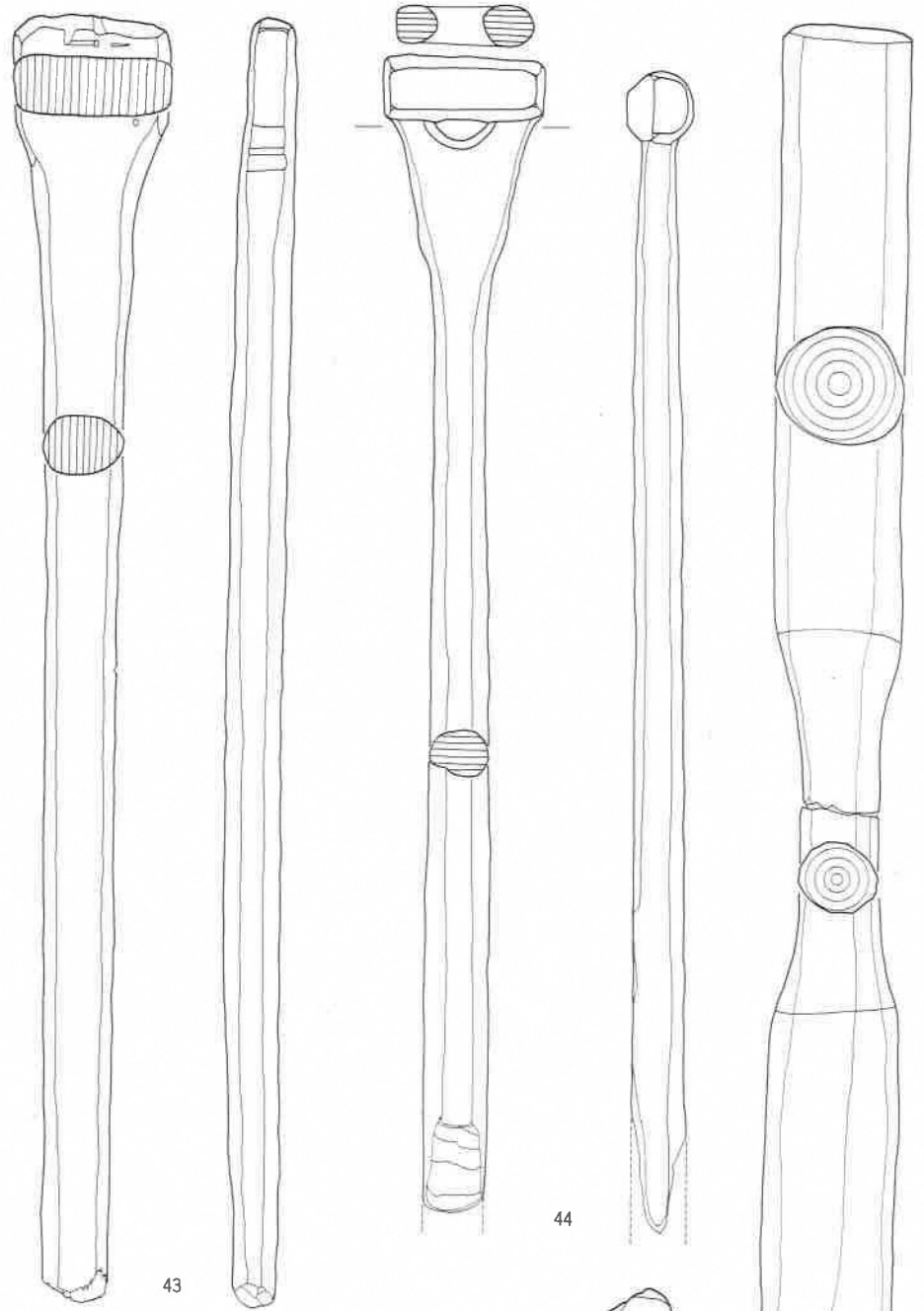
40



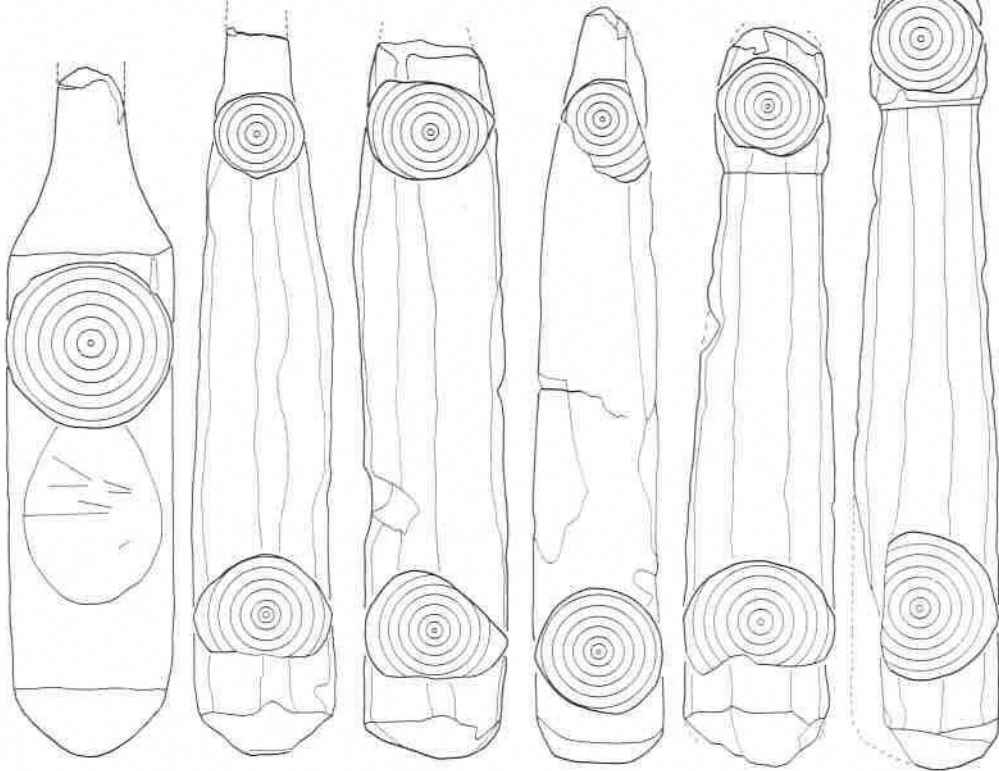
41



42



0 10 20 30 40cm



46 47 48 49 50 51



43

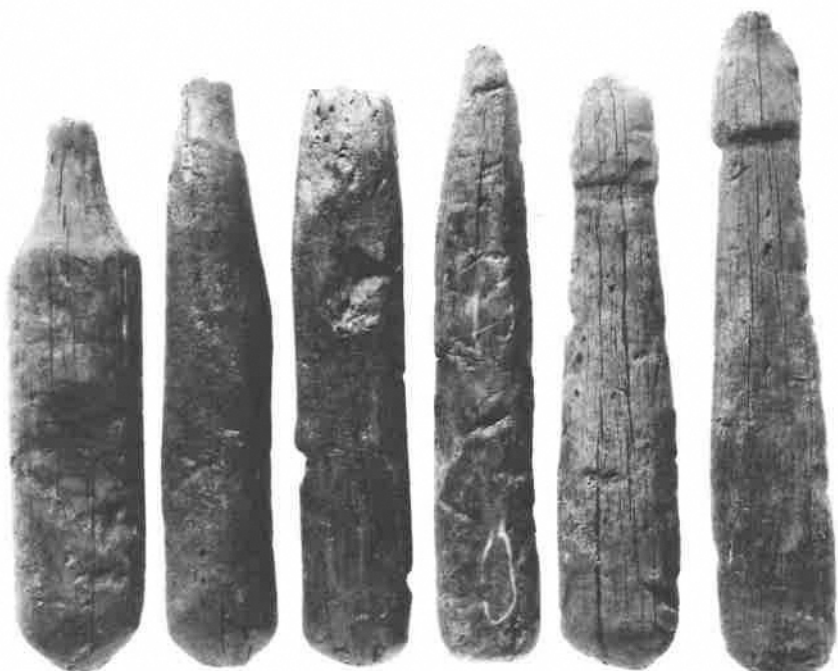
44

(1) 農具の柄



45

(2) 豎 杵



46

47

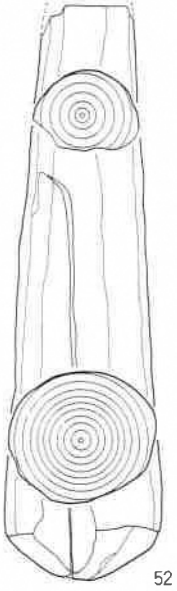
48

49

50

51

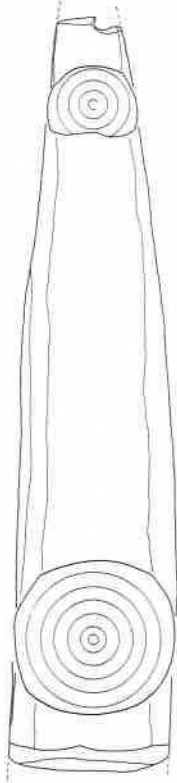
(3) 豎 杵



52



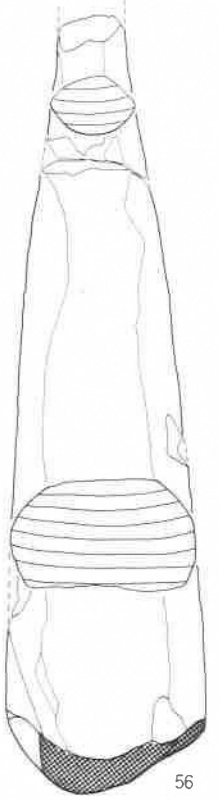
53



54



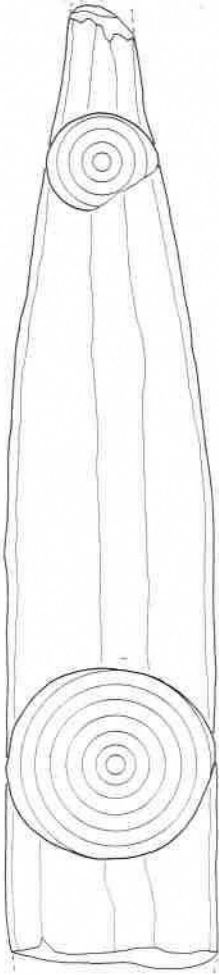
55



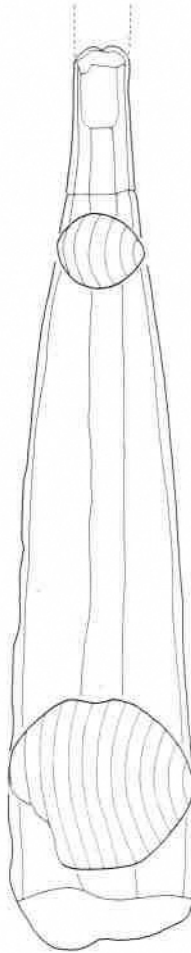
56



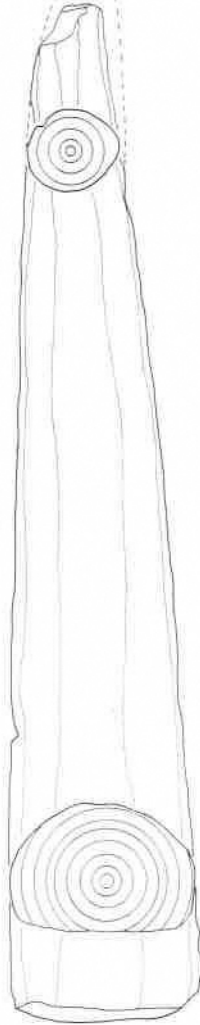
57



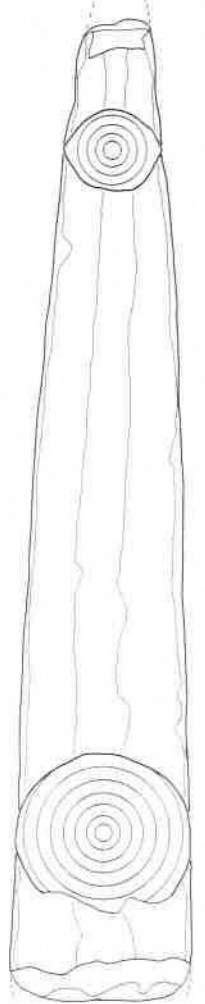
58



59

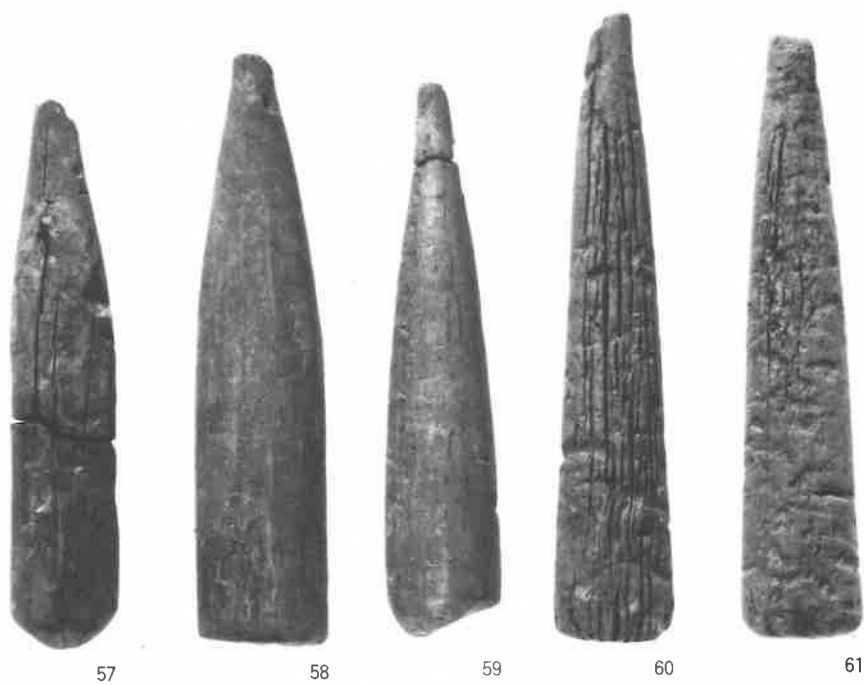
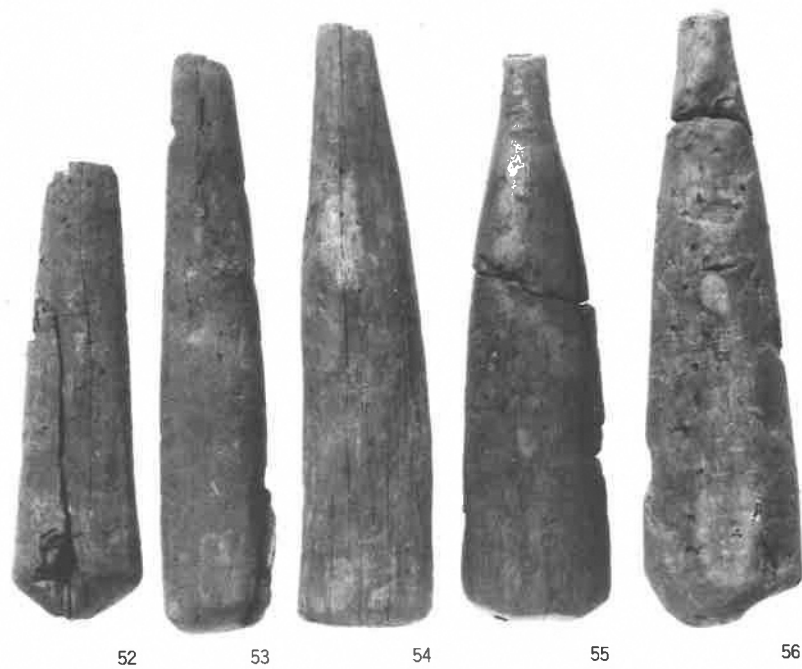


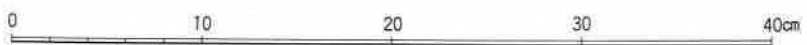
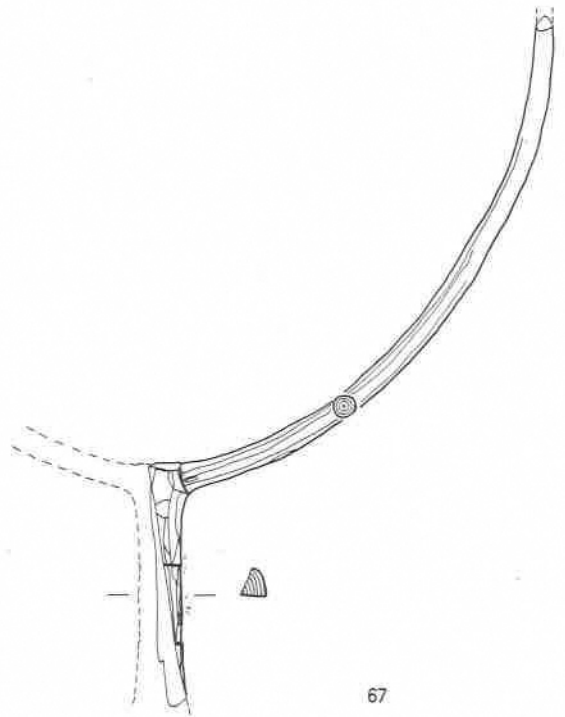
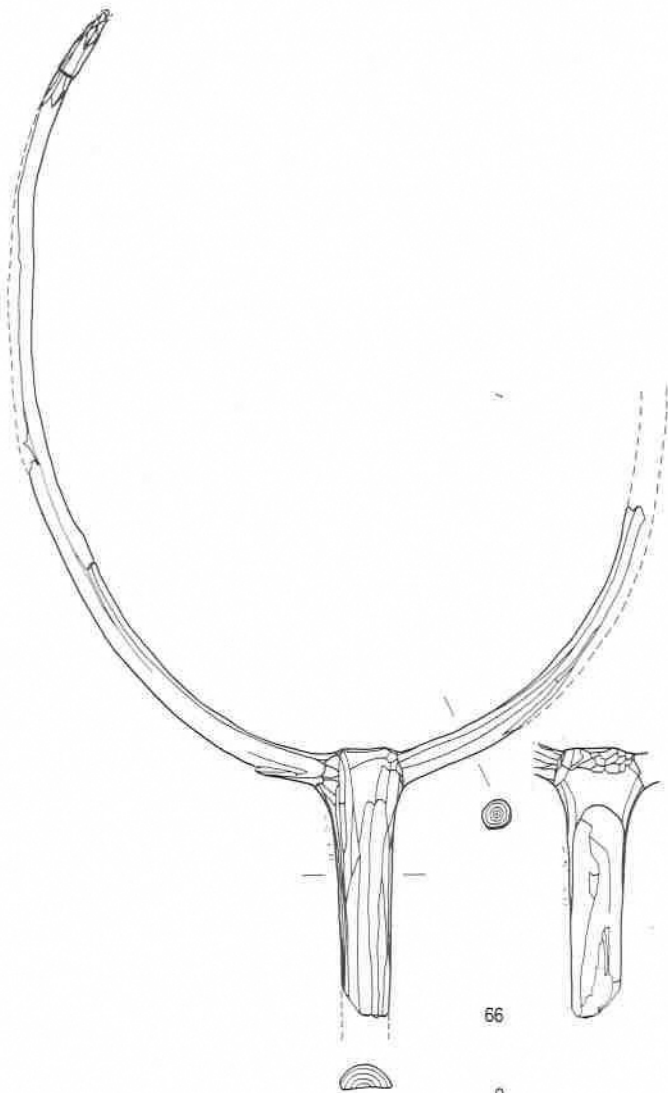
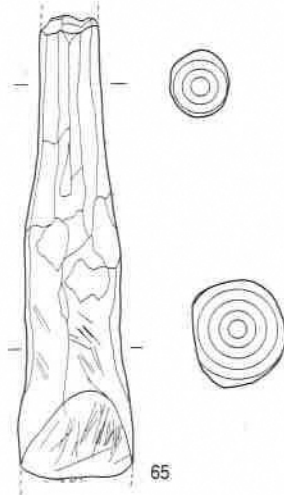
60



61









62



63



64



65

(1) 横 槌

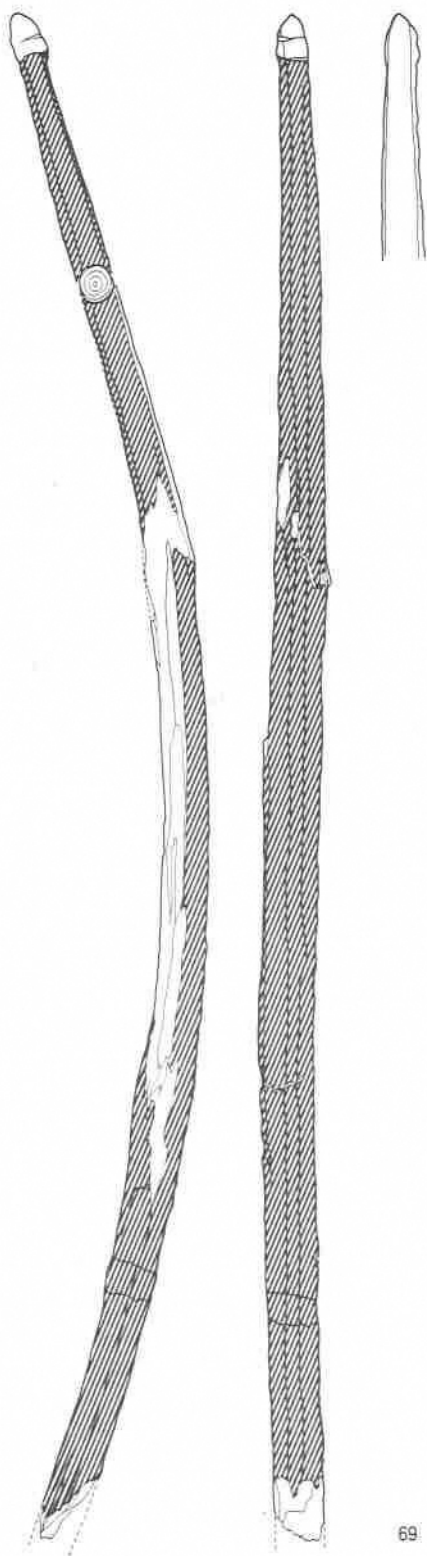
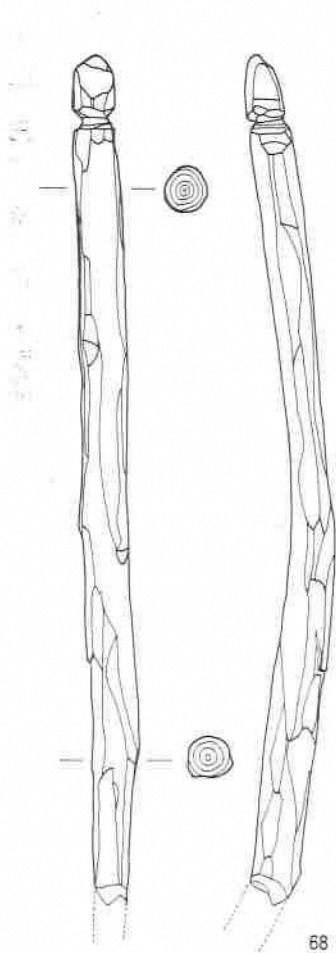


66



67

(2) た も



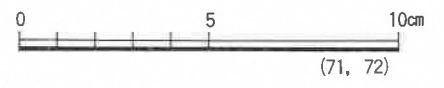
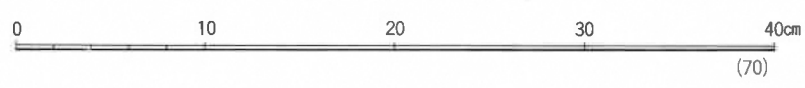
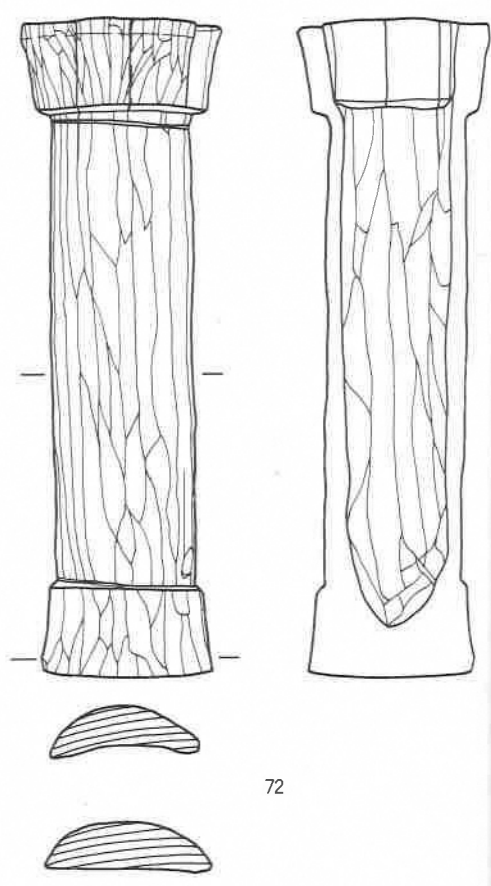
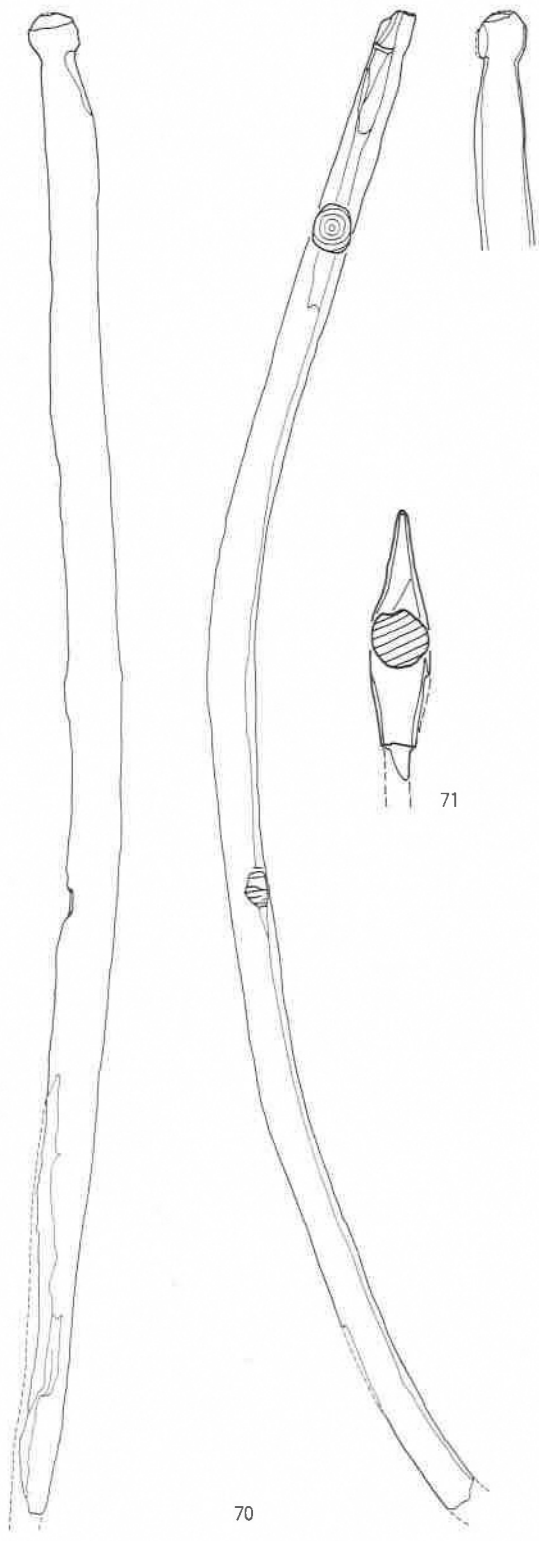
0 10 20 30 40cm



68



69





(1) 弓

70



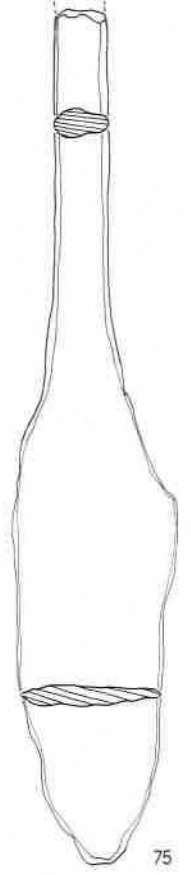
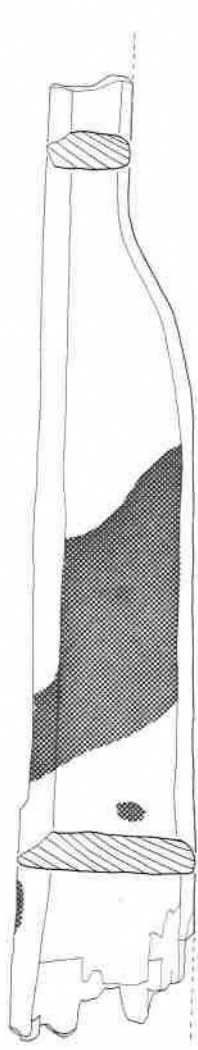
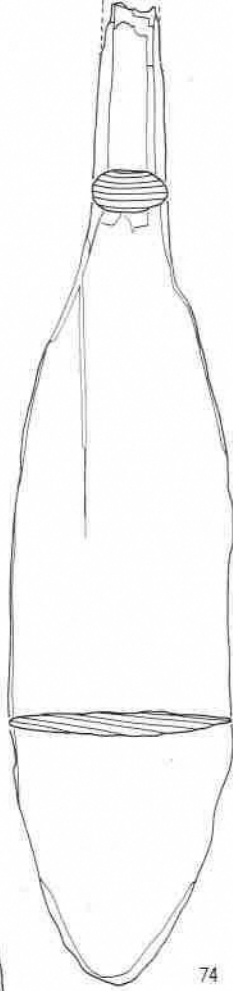
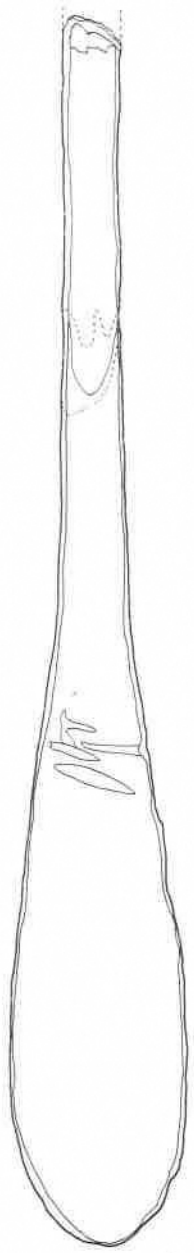
(2) 浮子

71



(3) 鞘

72

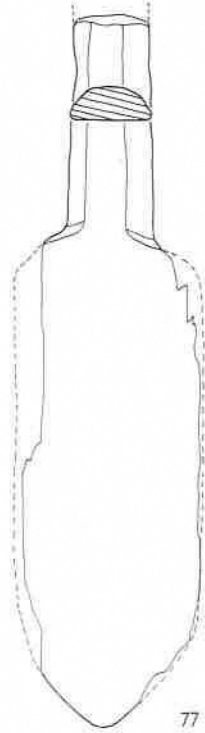


74

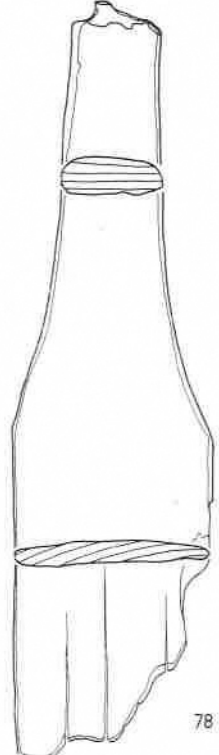
76

75

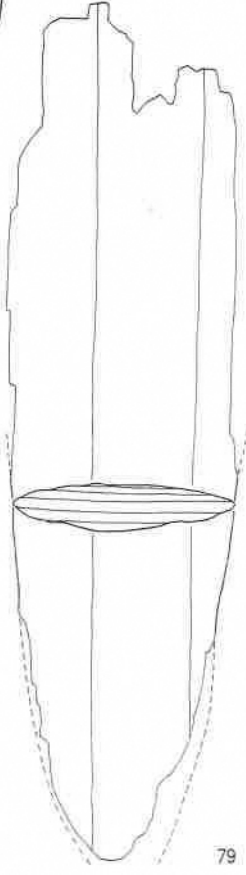
73



77



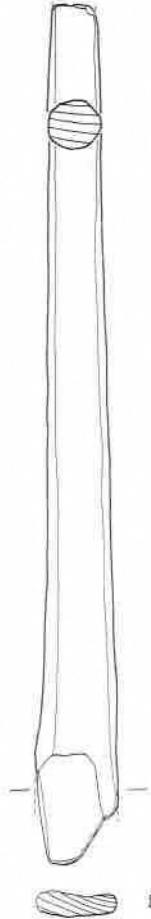
78



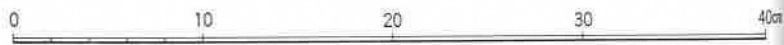
79



80



81





73



74



76



77



77



78



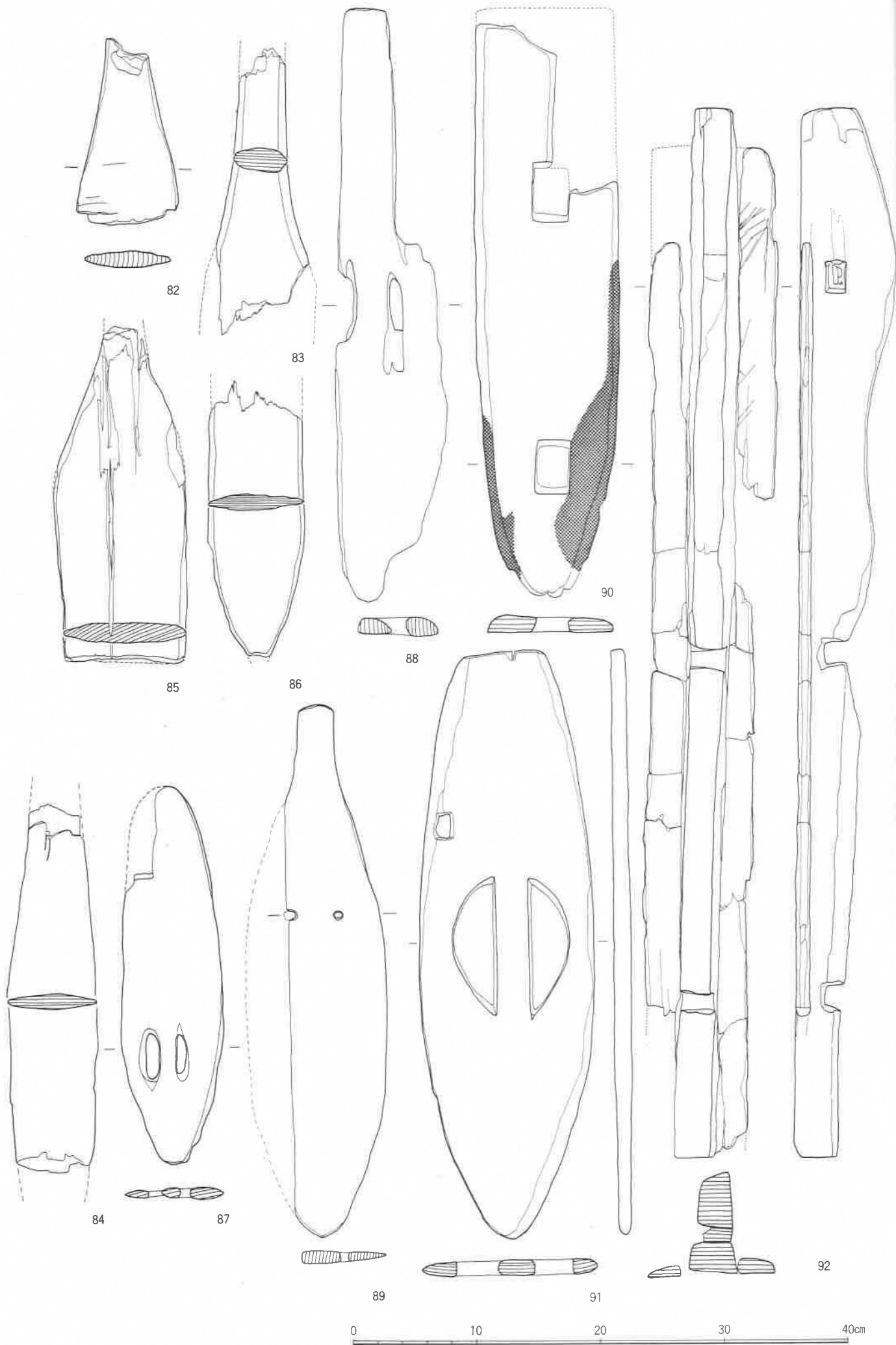
79

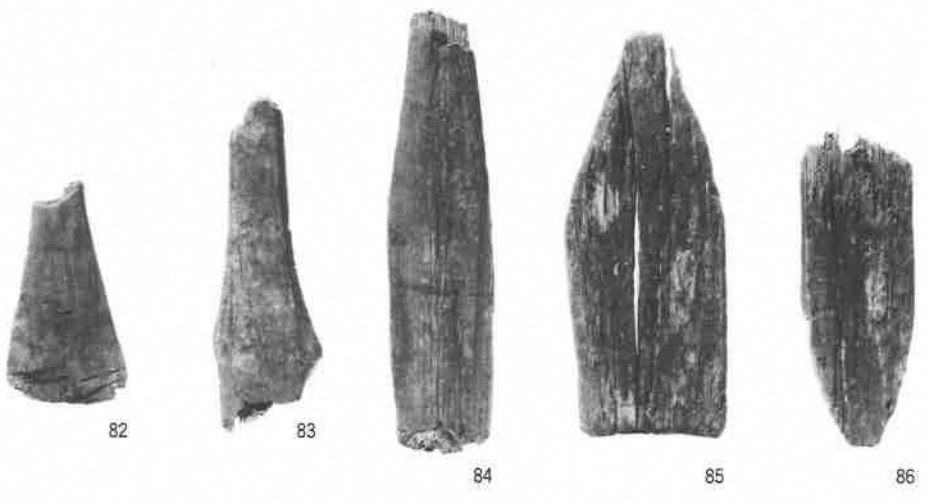


80

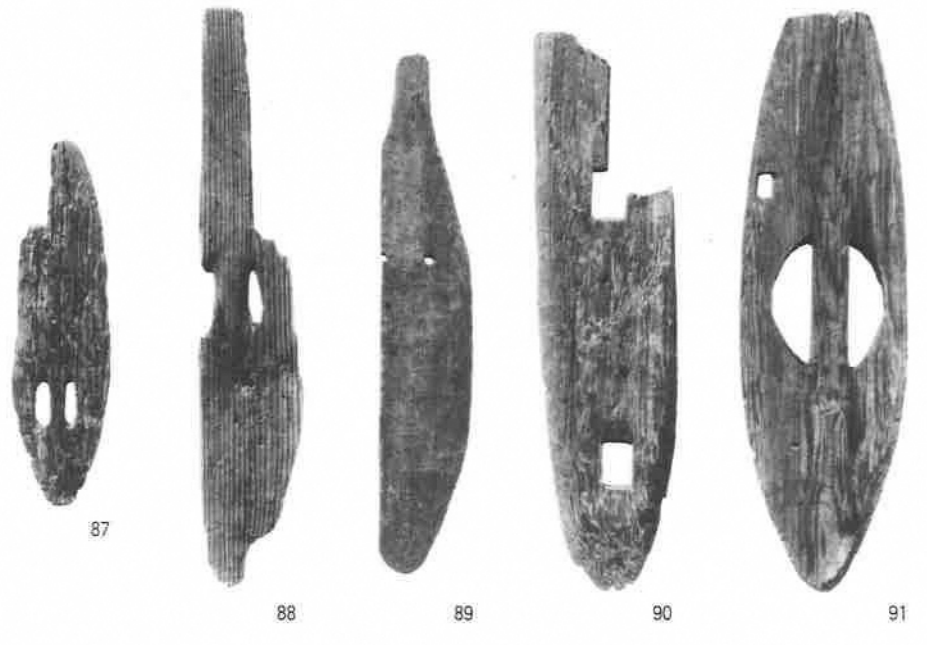


81





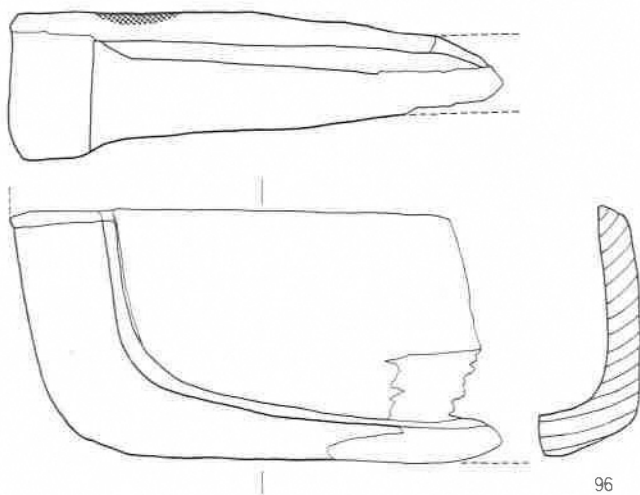
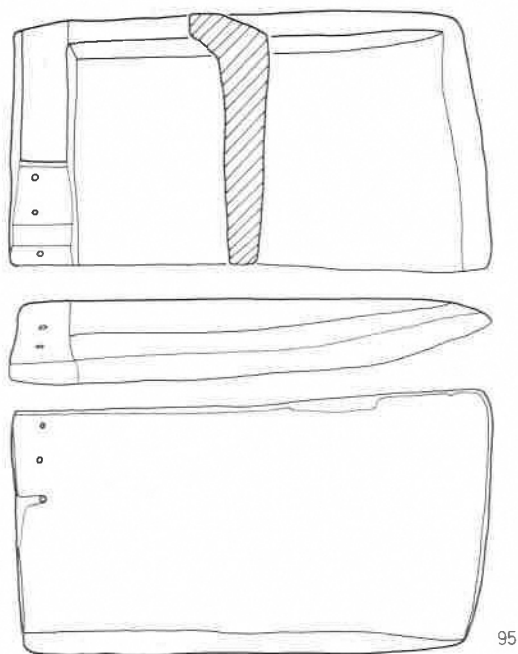
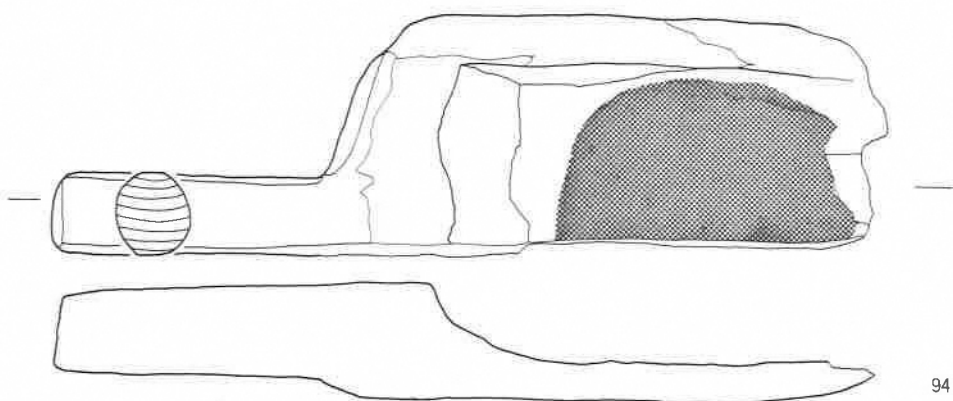
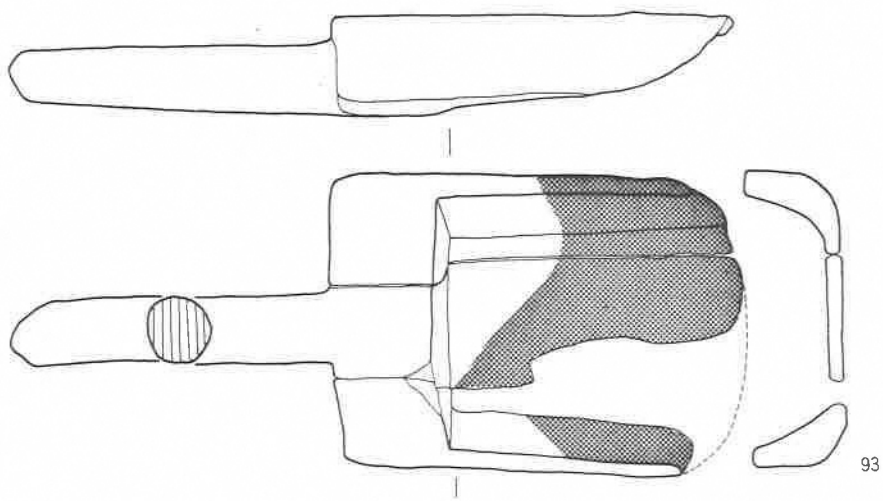
(1) 權



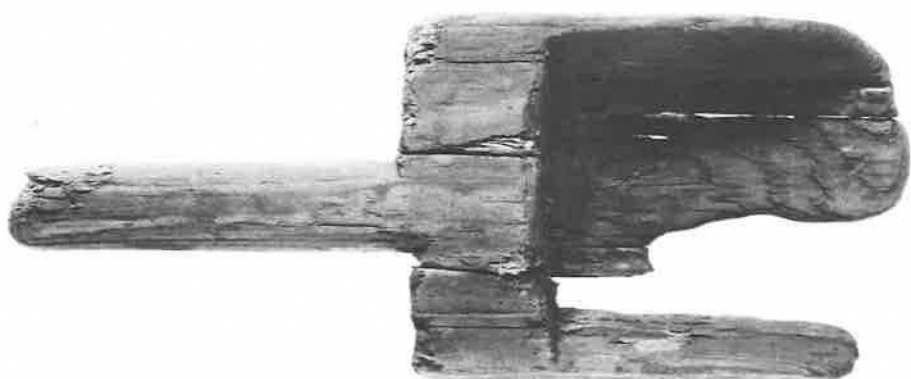
(2) 權状木製品



(3) 橈状木製品



0 10 20cm



93



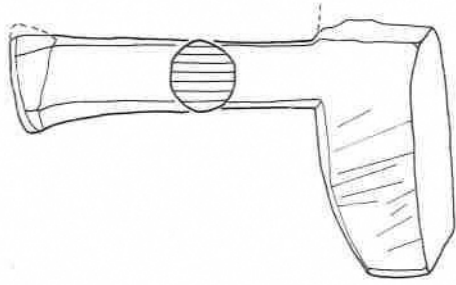
94



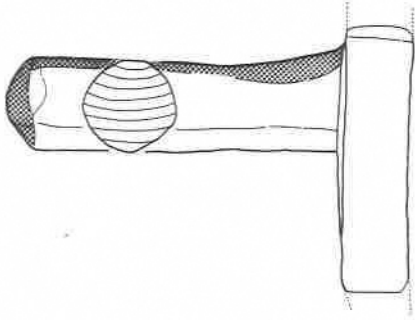
95



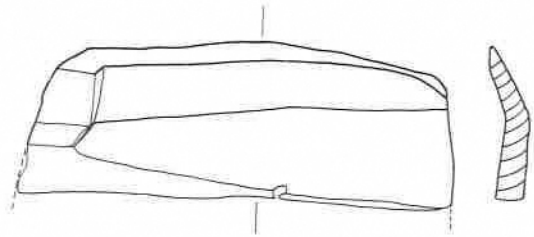
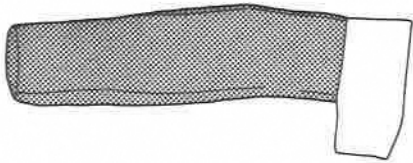
96



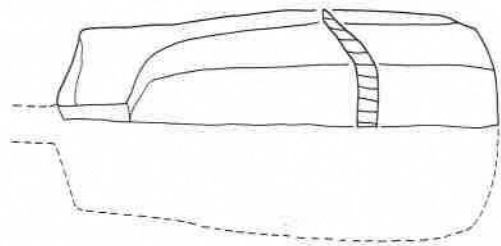
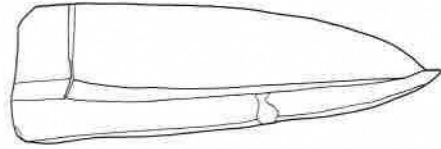
97



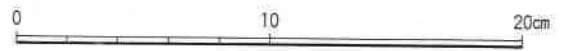
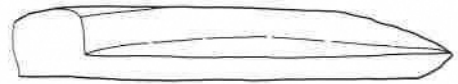
98



99



100

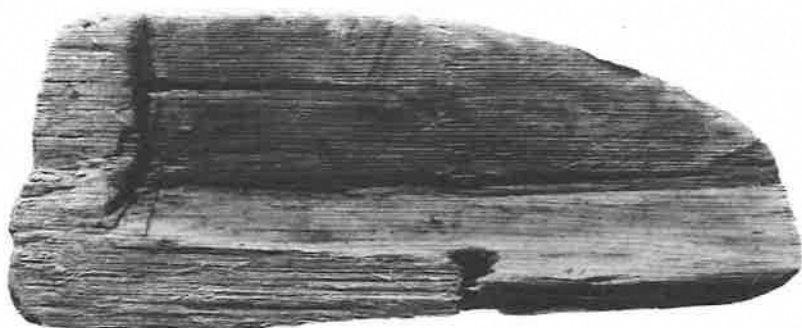




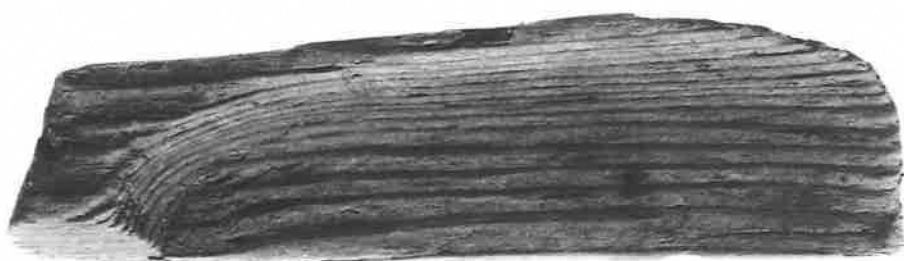
97



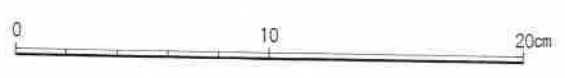
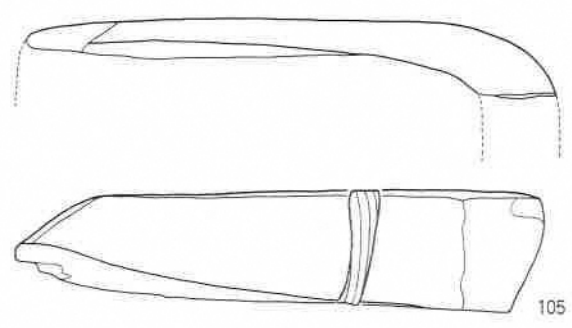
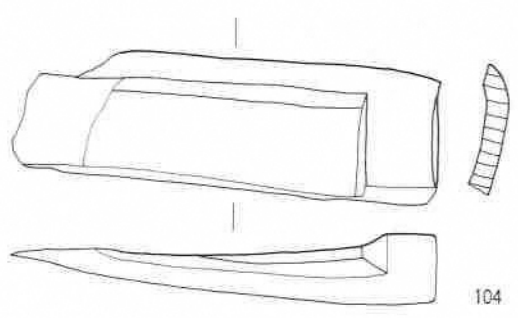
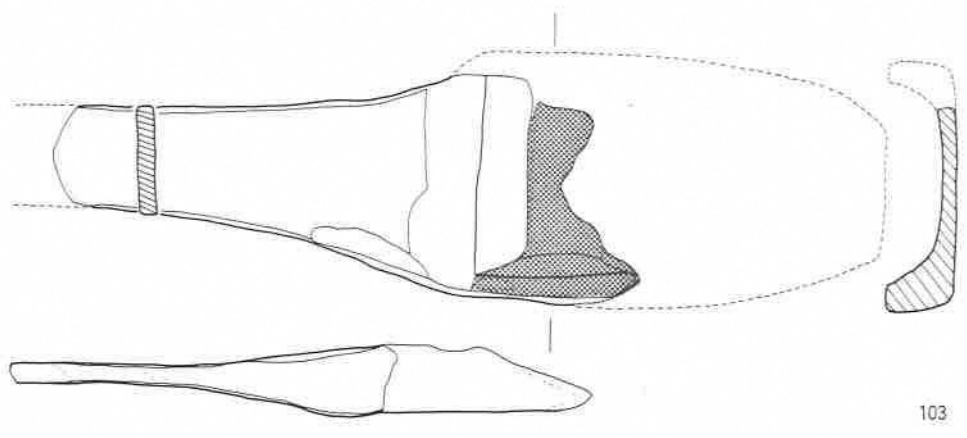
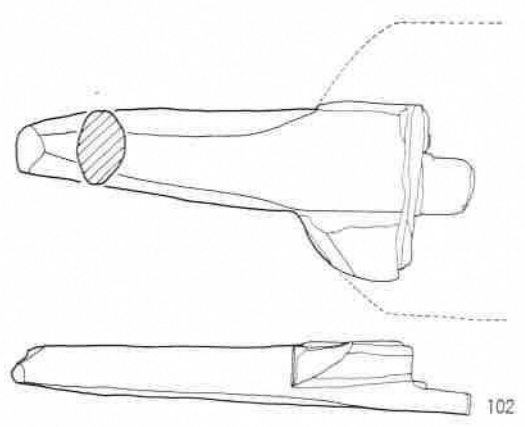
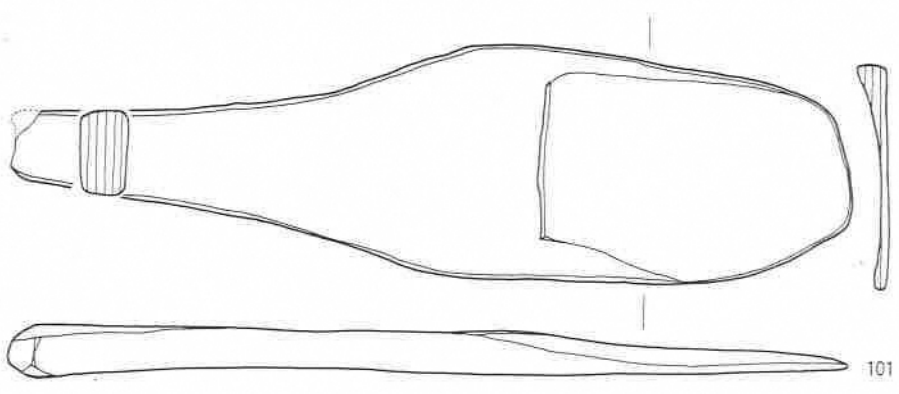
98

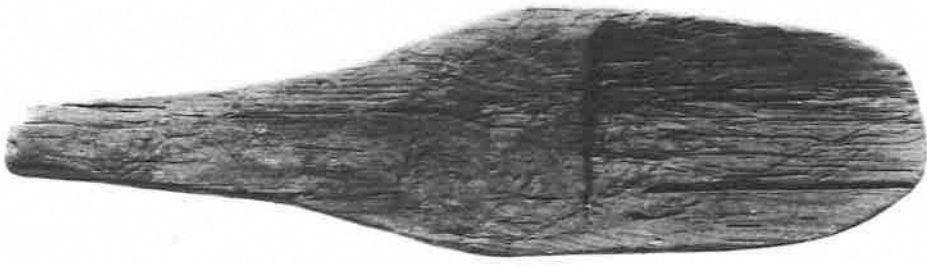


99



100





101



102



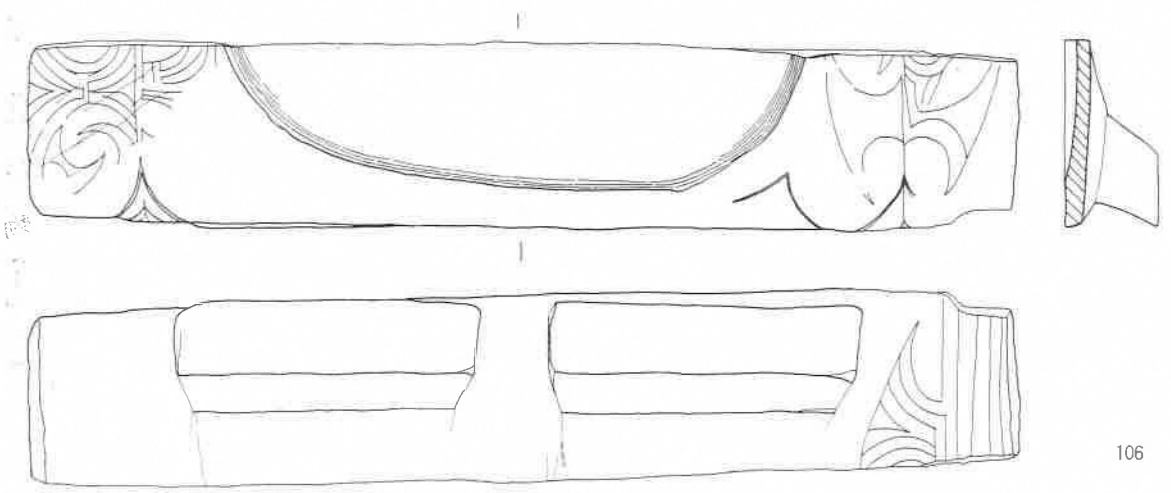
103



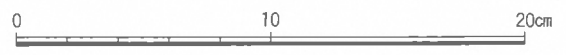
104

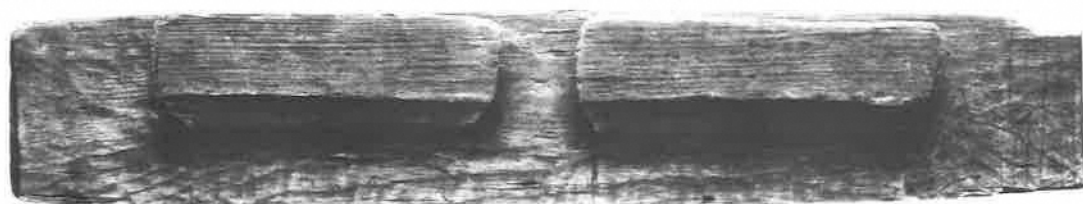
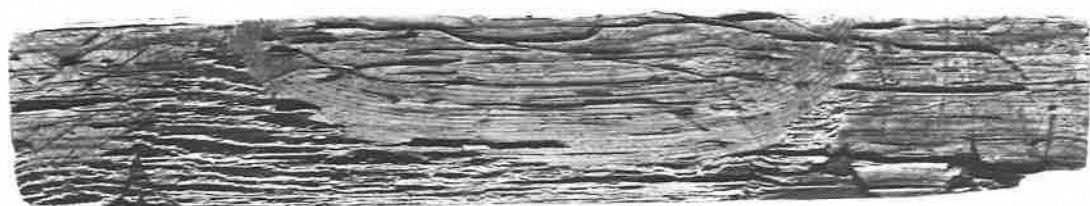


105



106





106

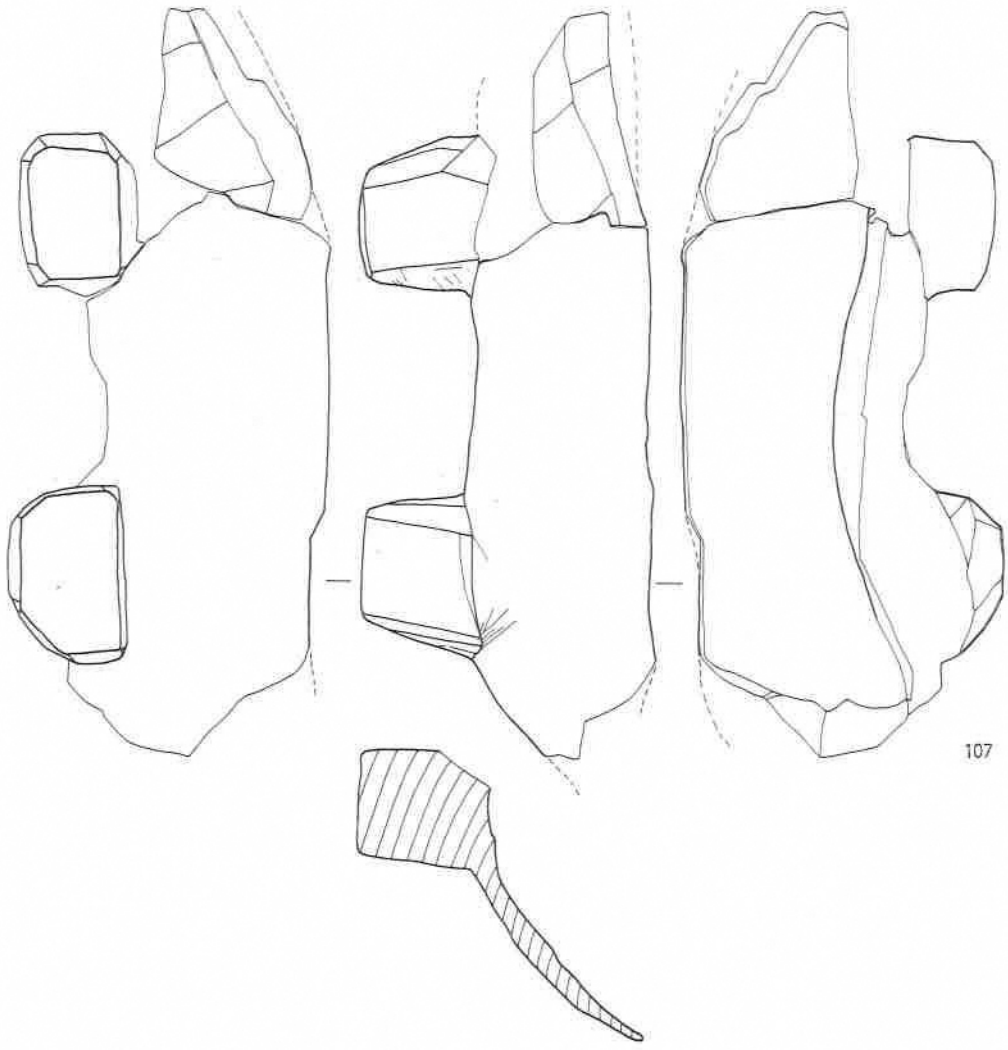
拡大

拡大

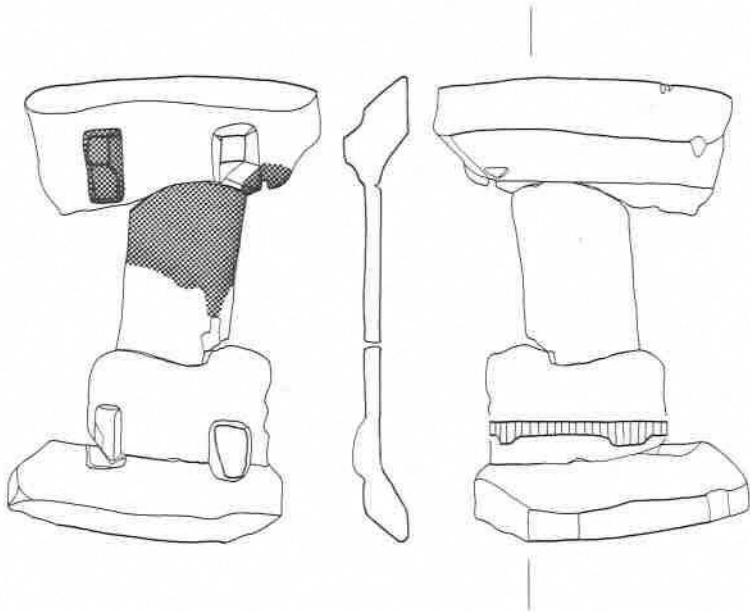
拡大



脚付浅鉢



107

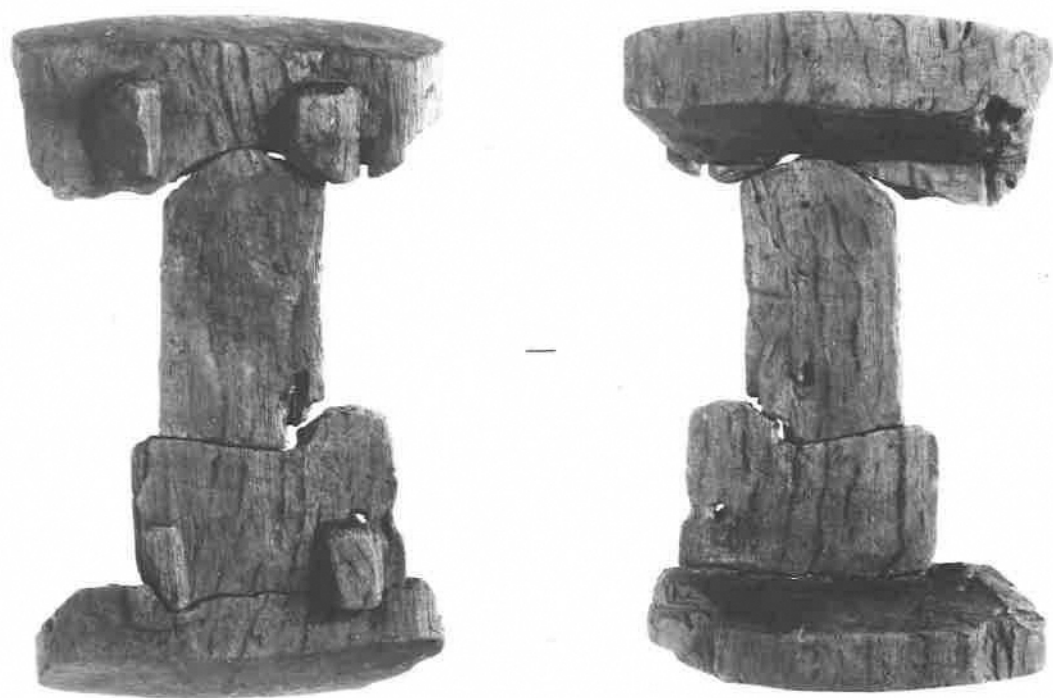


108

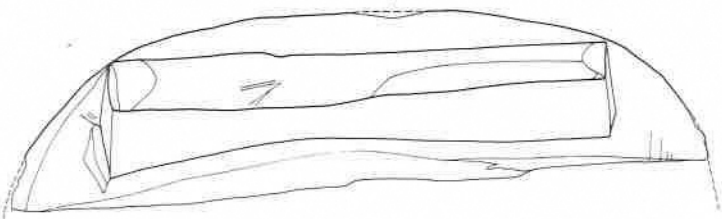
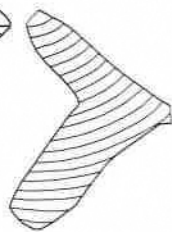
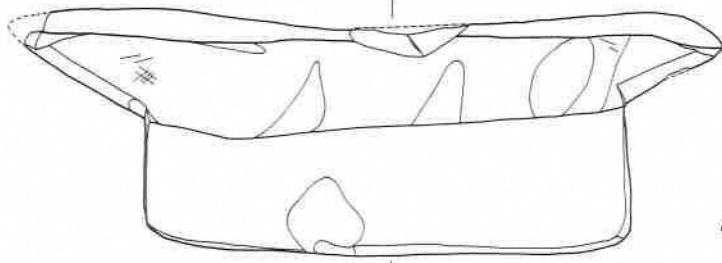
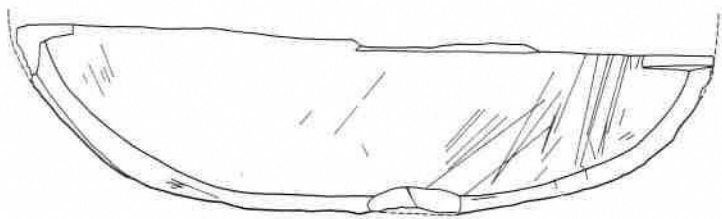
0 10 20cm



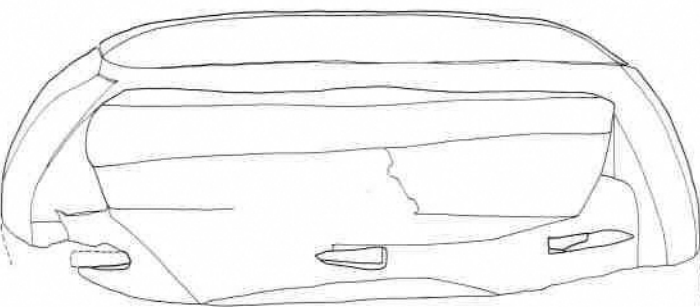
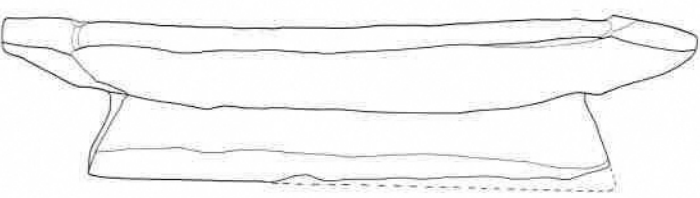
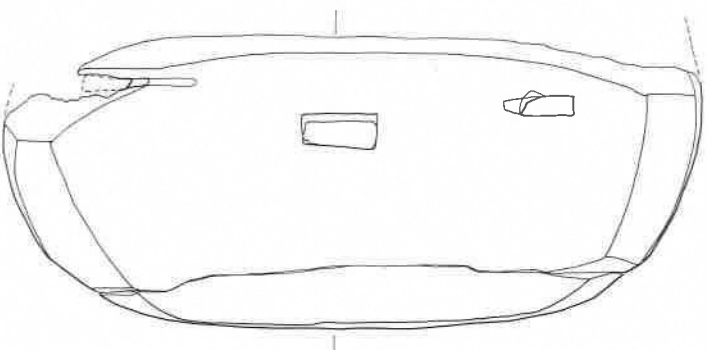
107



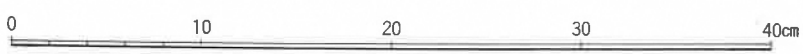
108



109

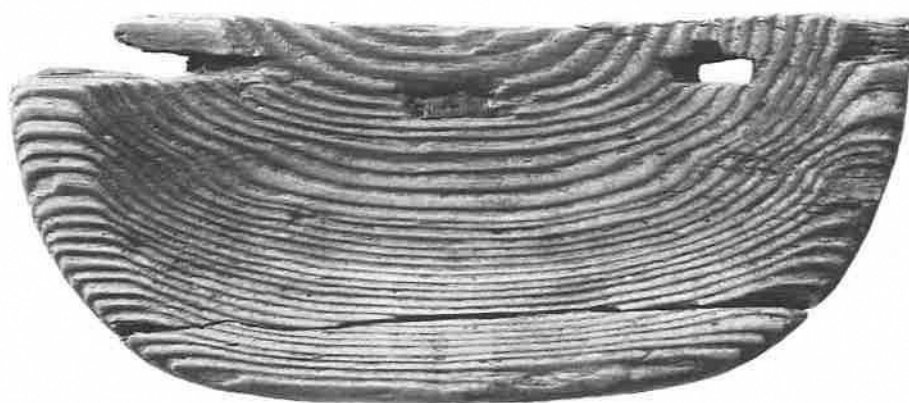


110

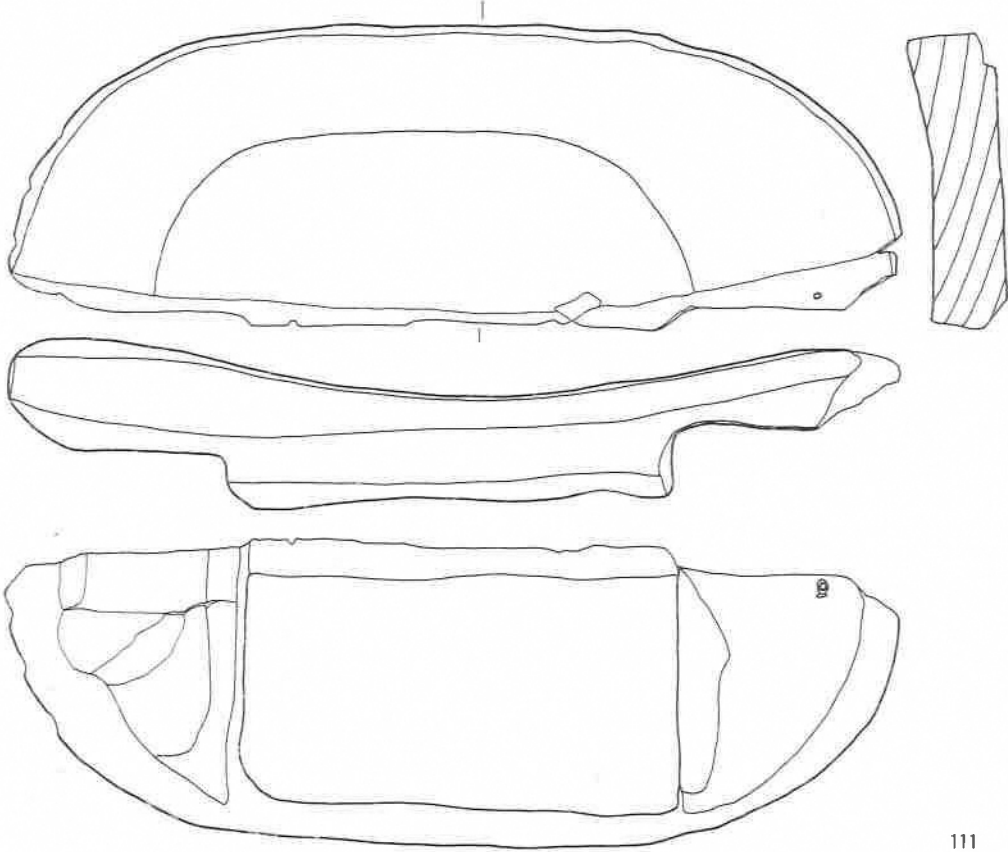




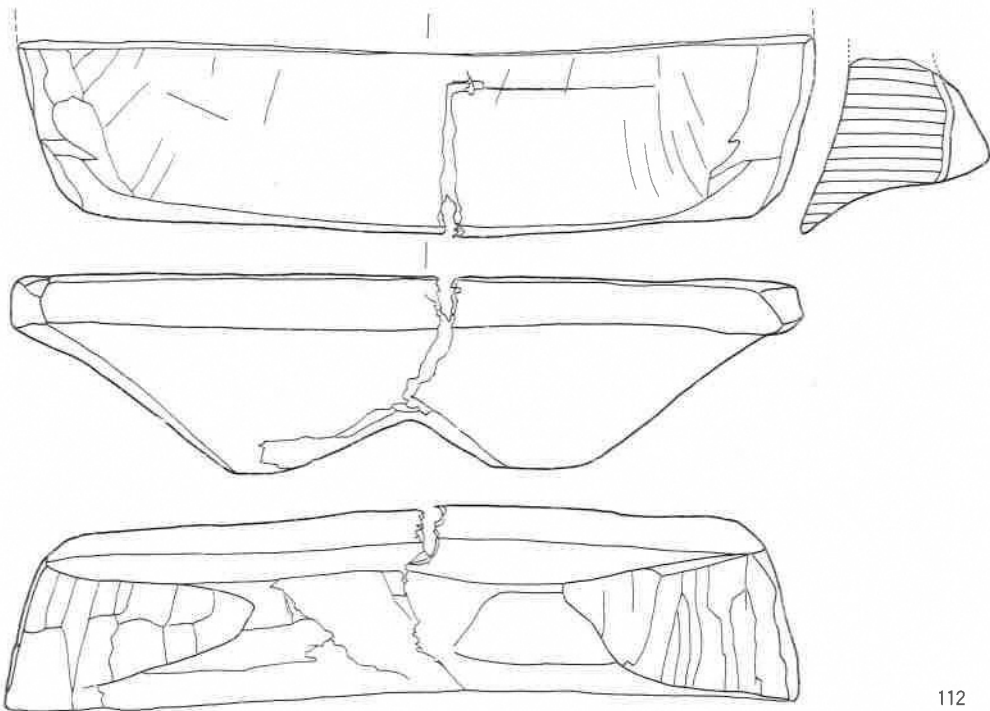
109



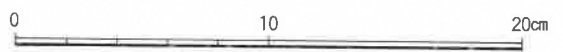
110



111

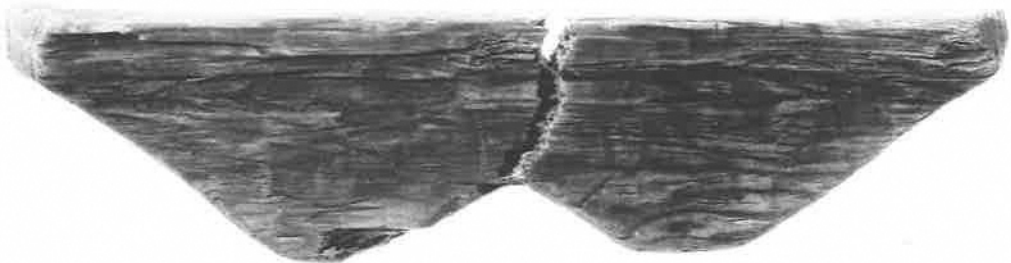


112

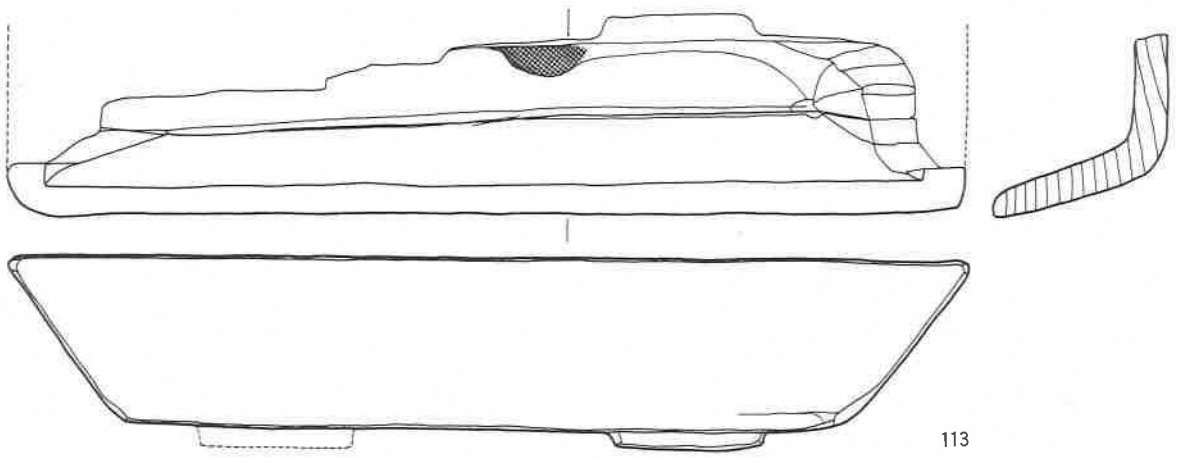




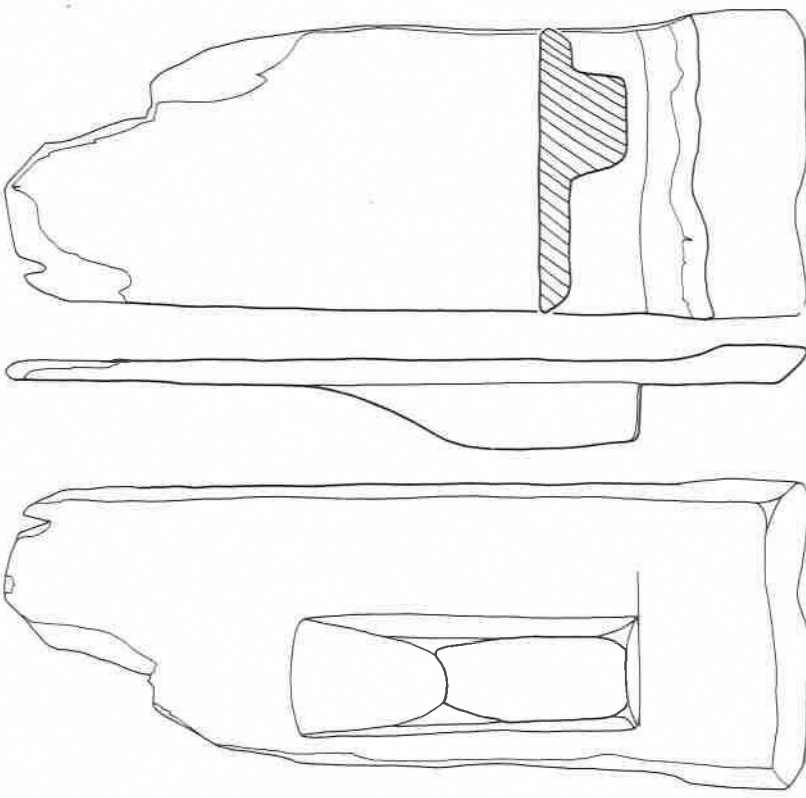
111



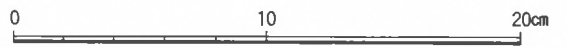
112



113

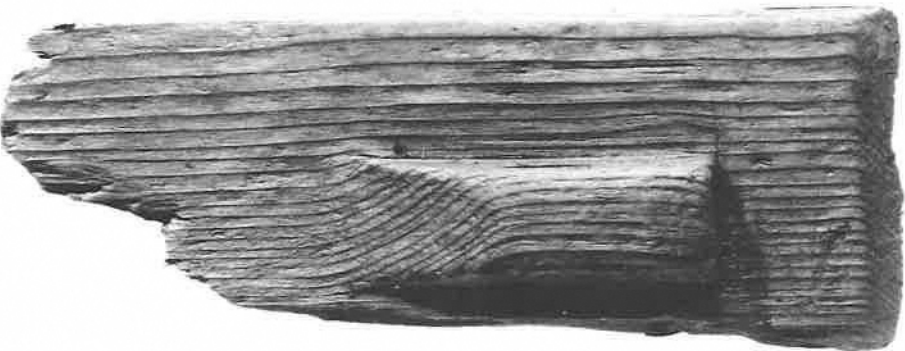
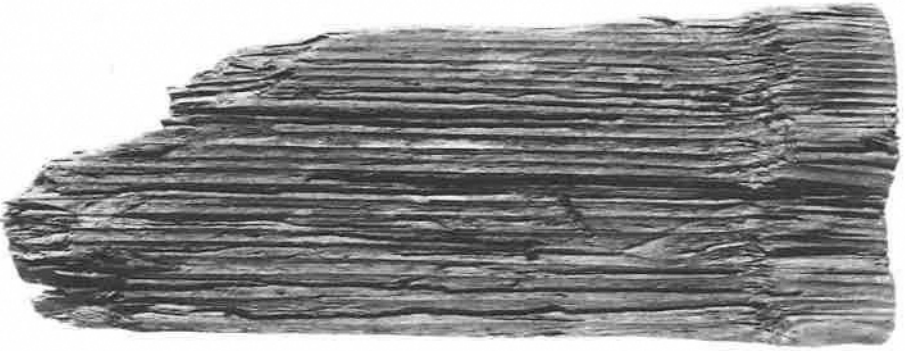


114

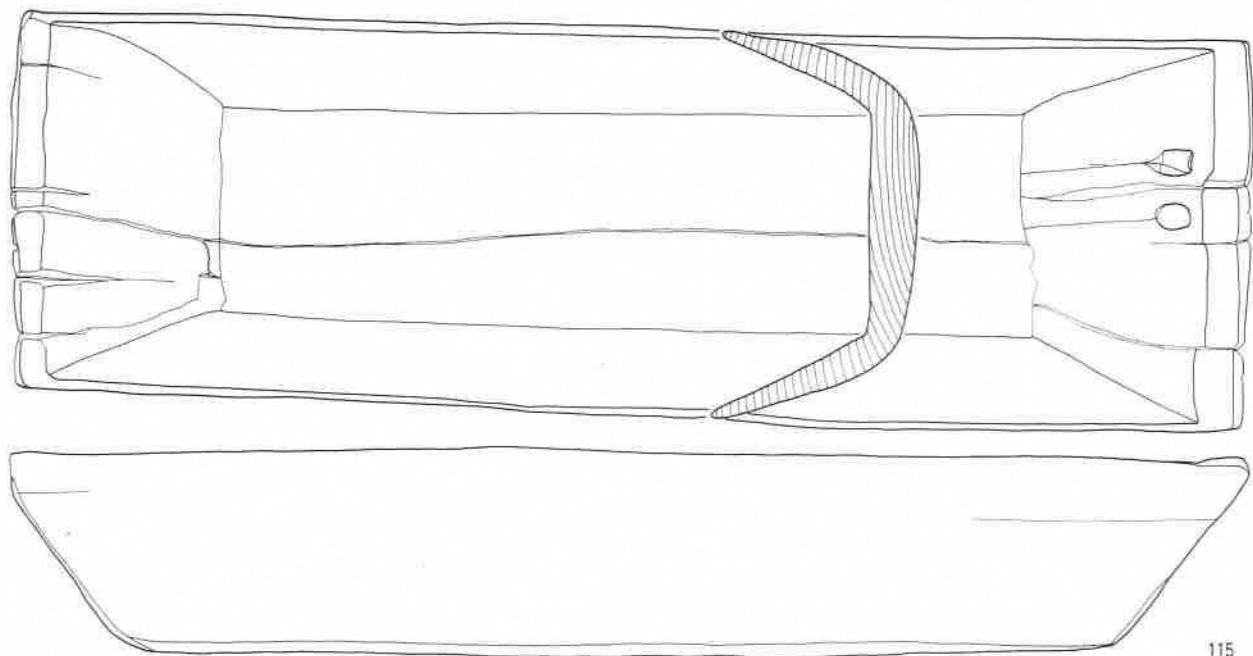




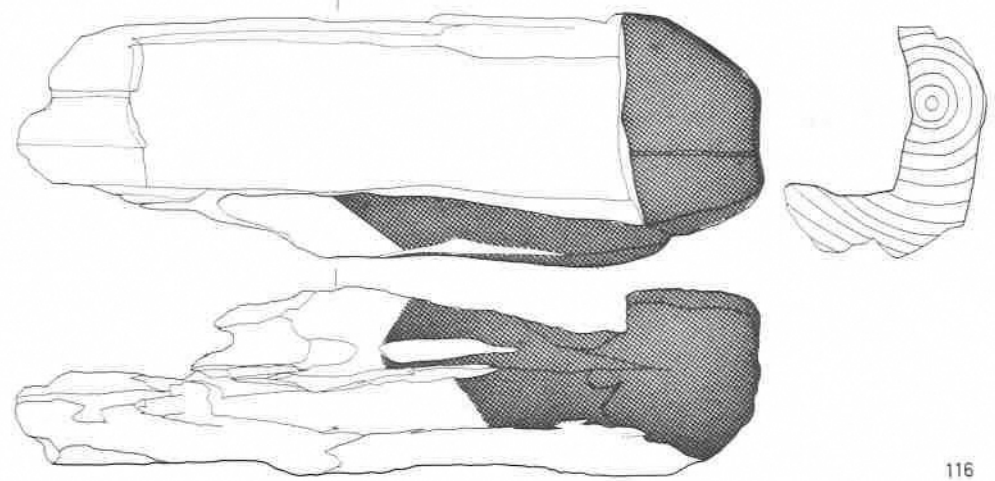
(1) 脚付槽



(2) 脚付盤

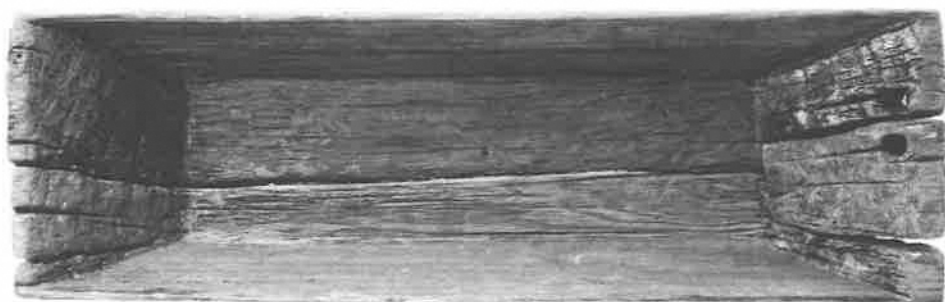


115



116



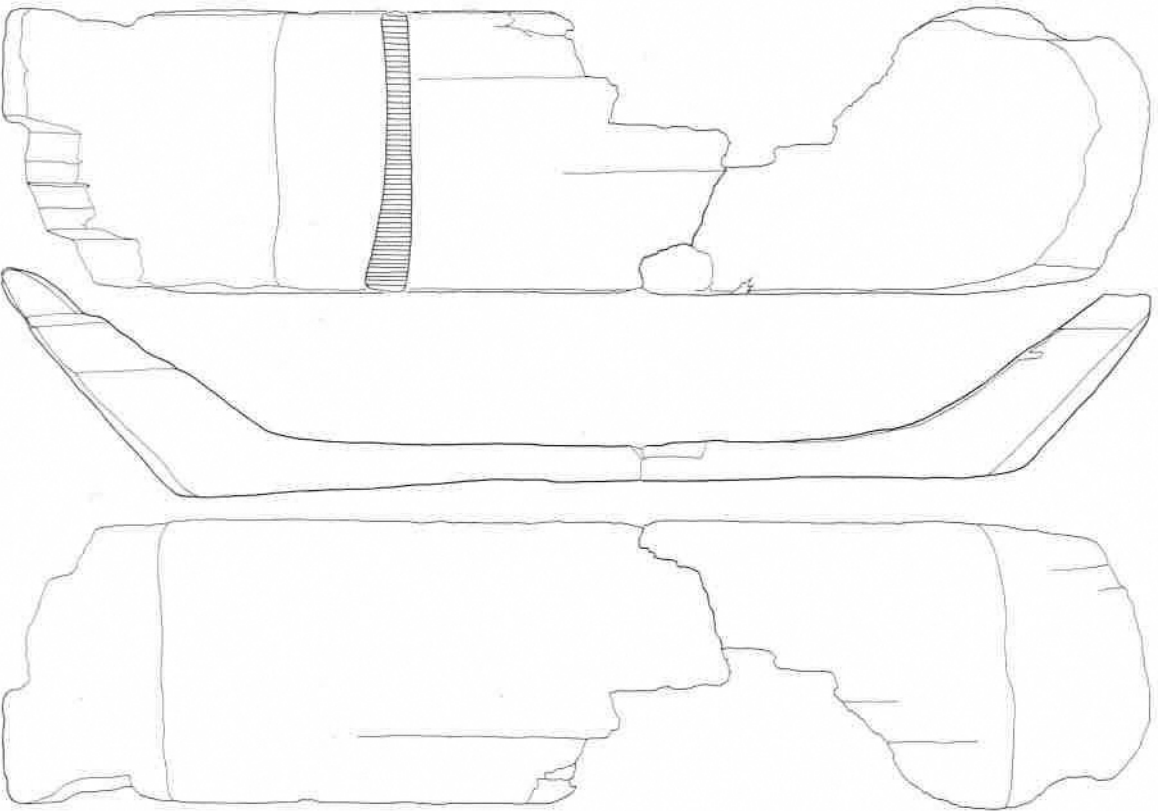
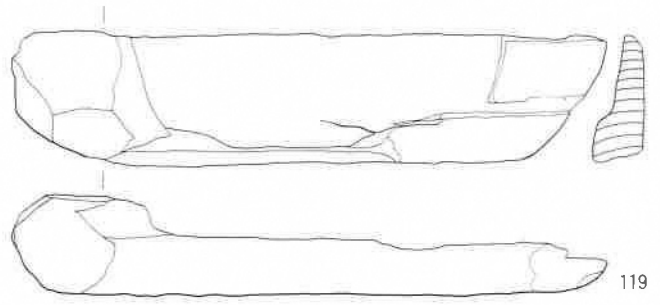
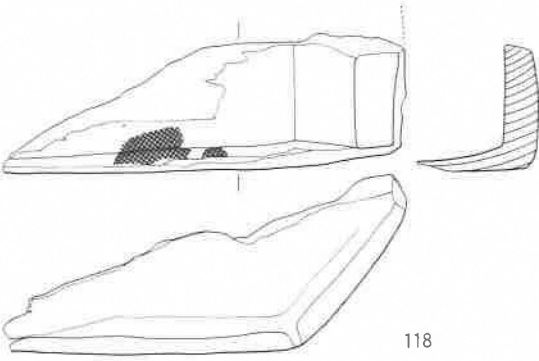
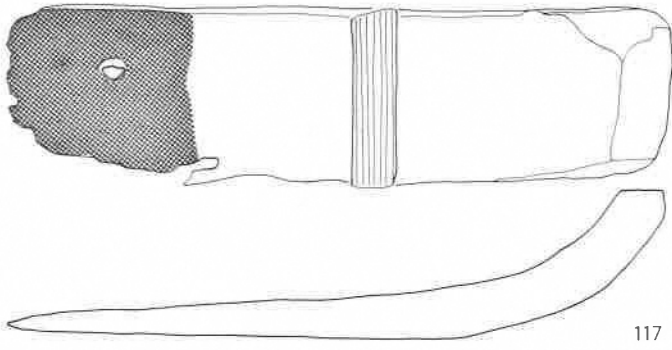


115



116

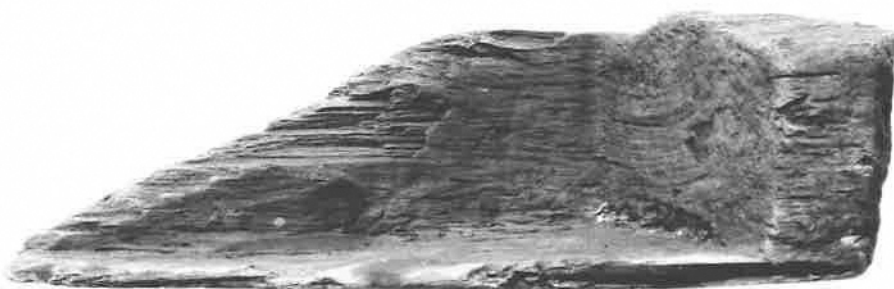
箱形容器 (槽)



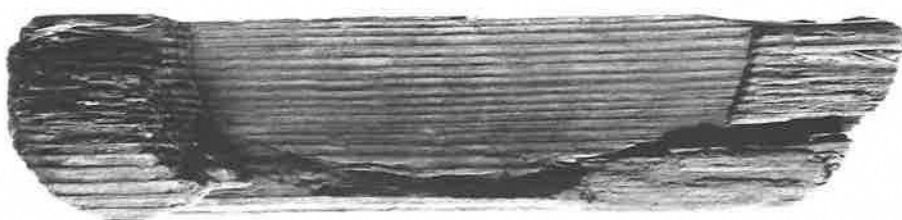
0 10 20 30 40cm



117



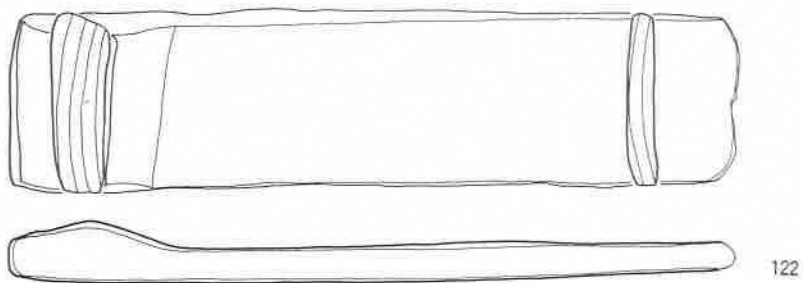
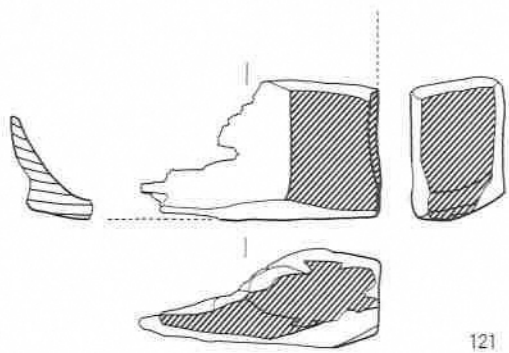
118



119



120

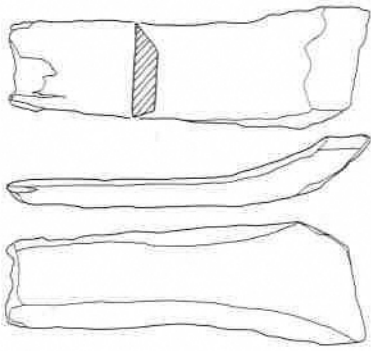


0 10 20cm

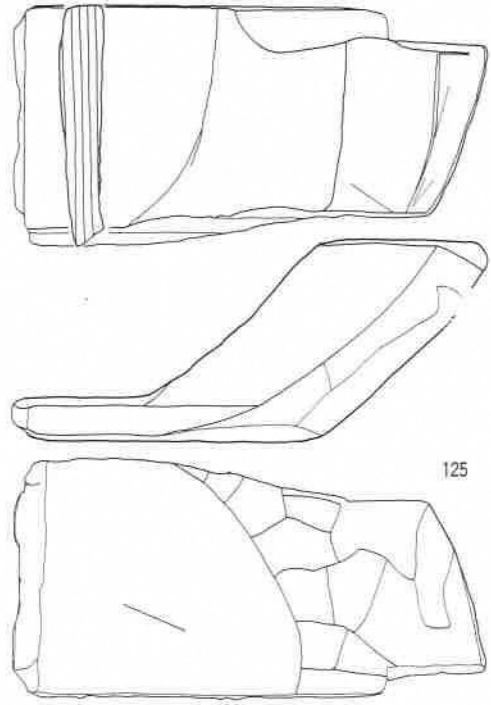


121

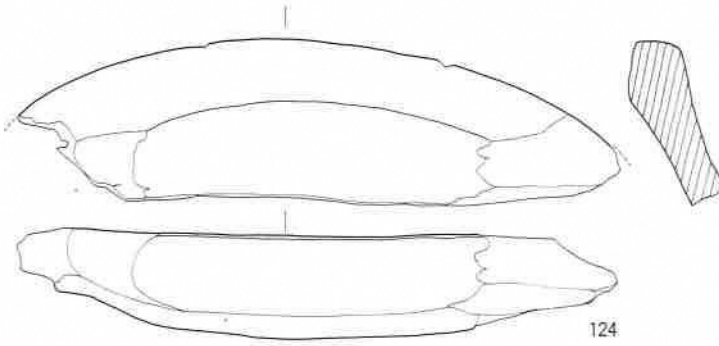
122



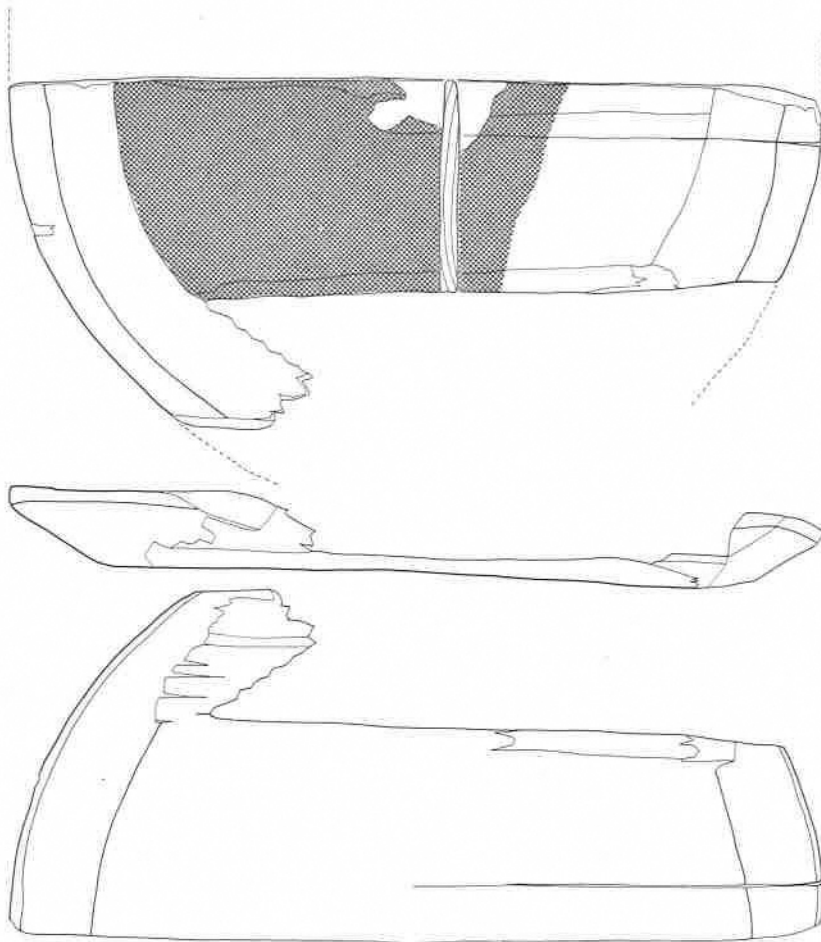
123



125

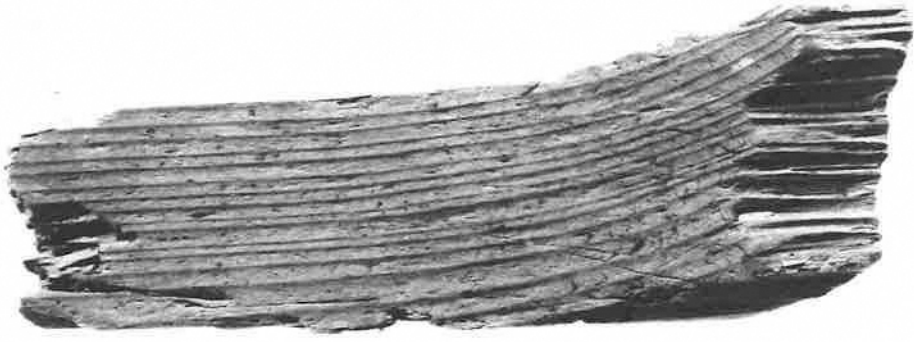


124



126

0 10 20 30 40cm

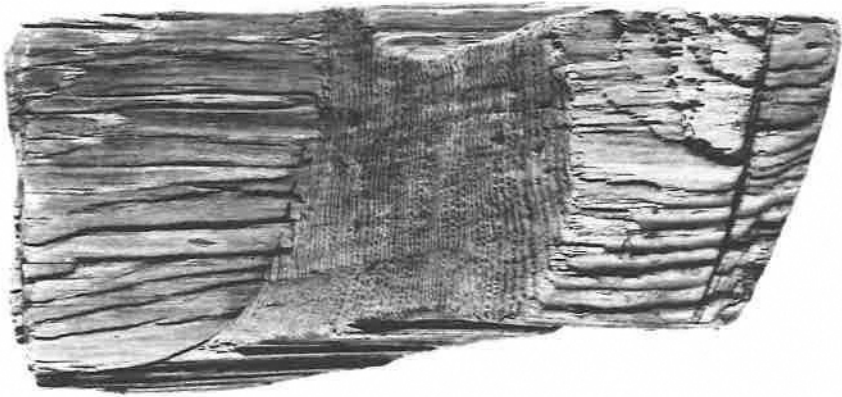


123

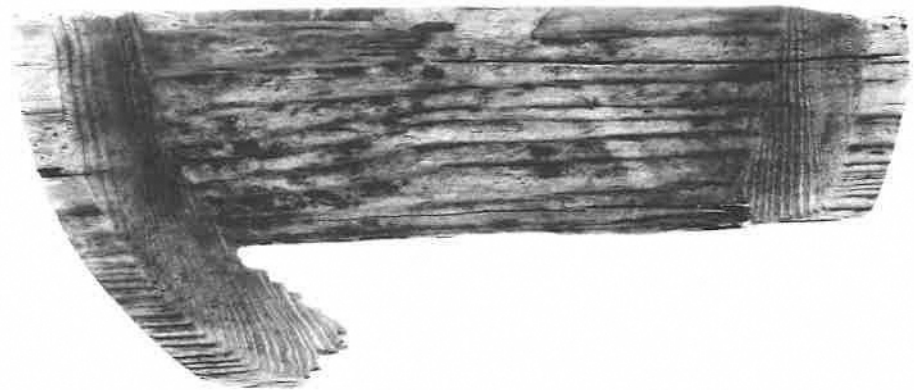
(1) 箱形容器(槽)



124

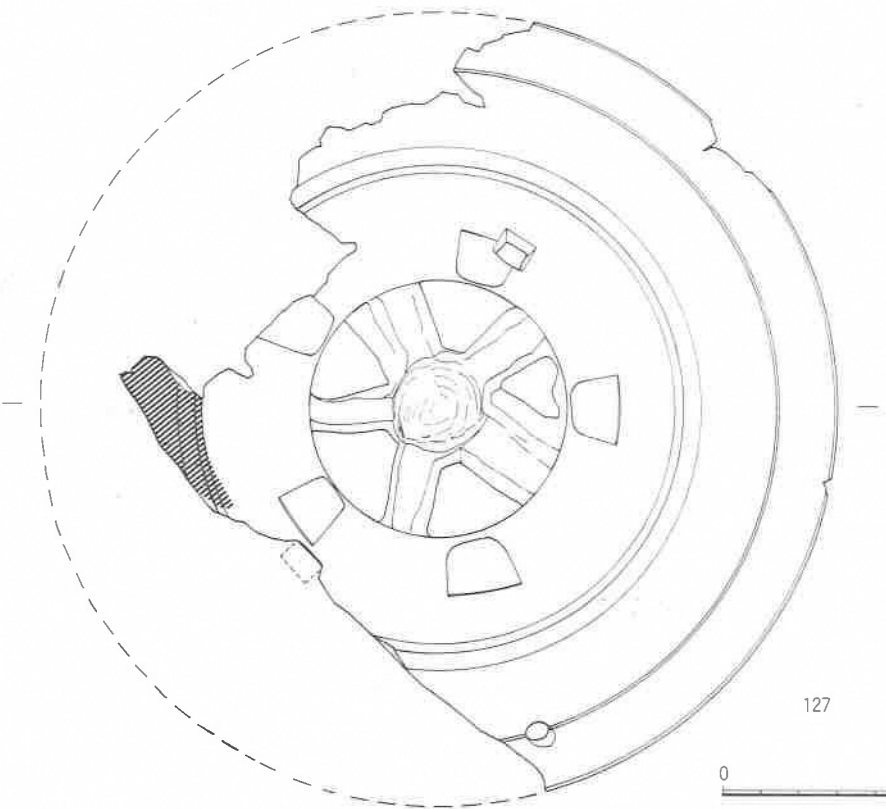
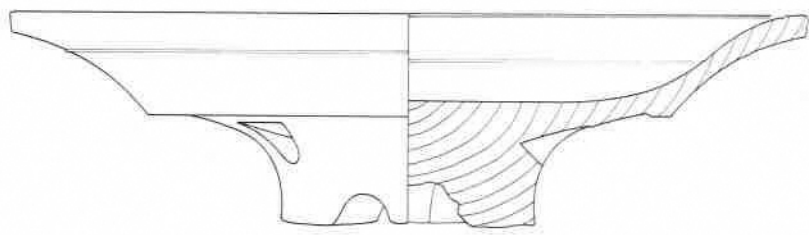
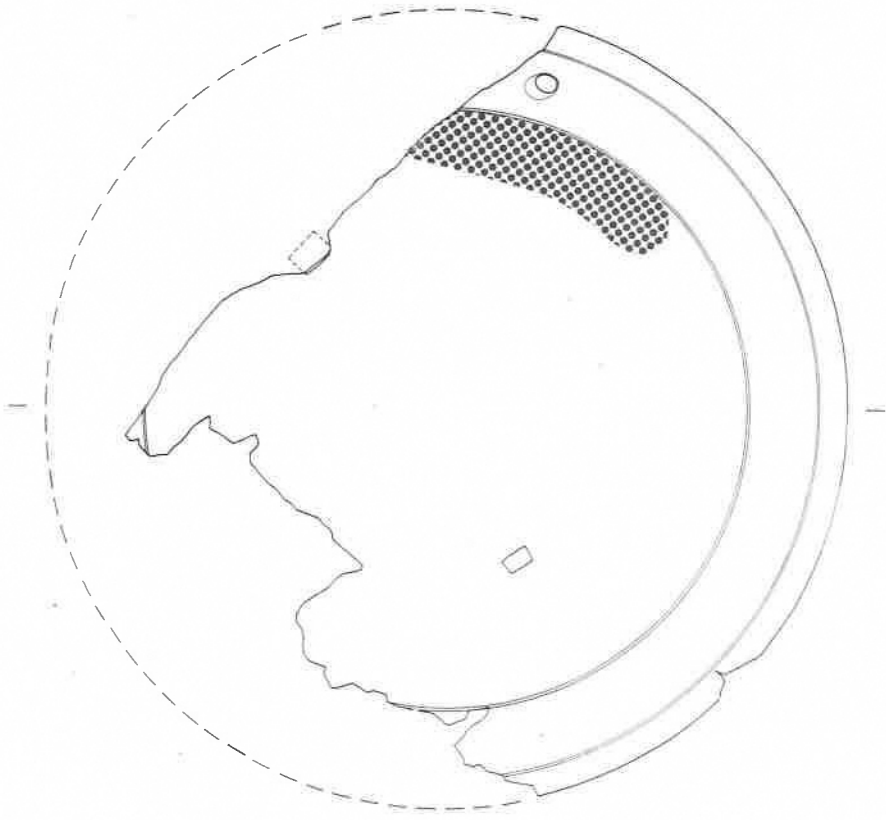


125



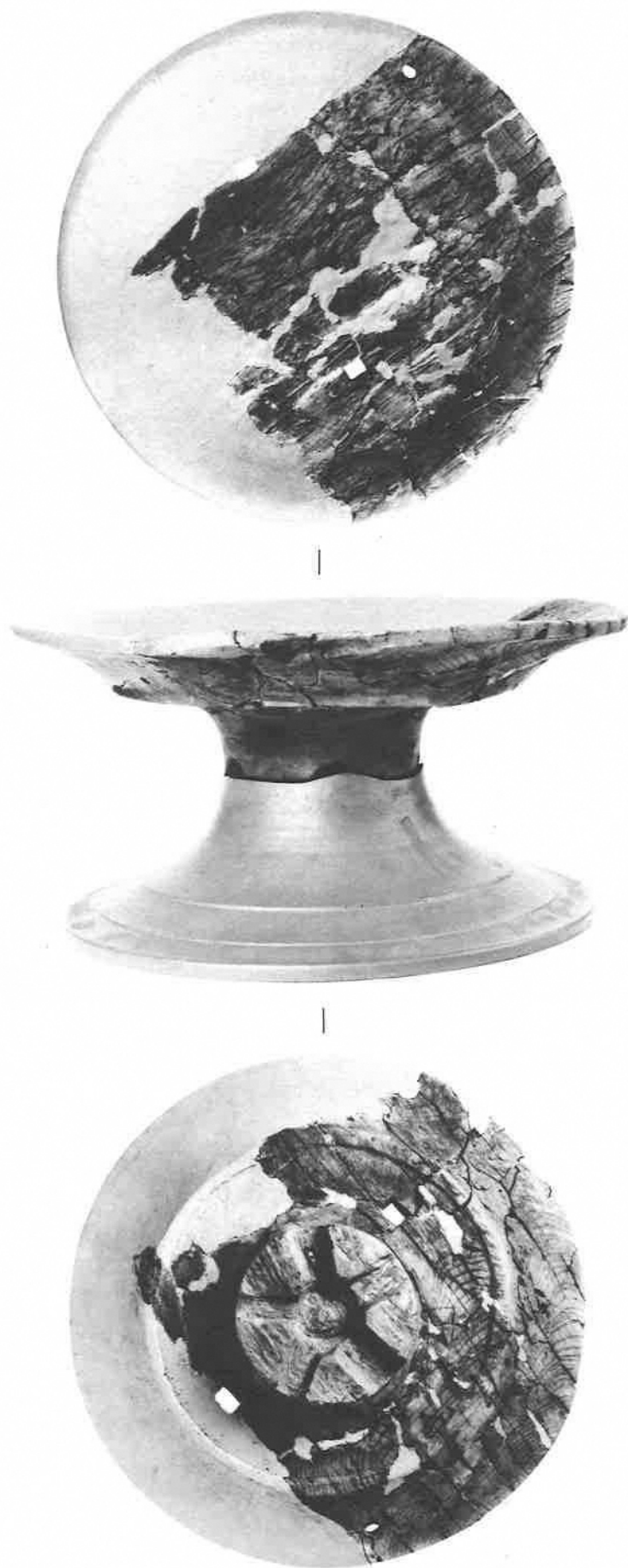
126

(2) 皿(盤)

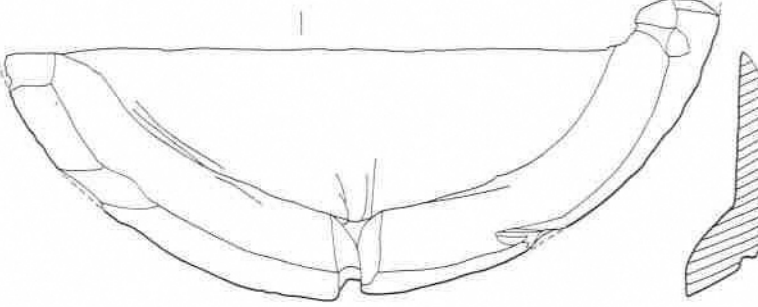
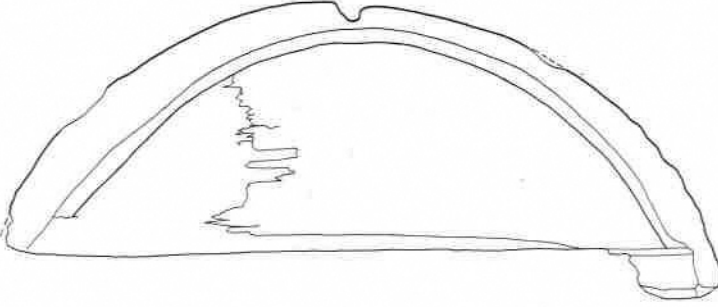
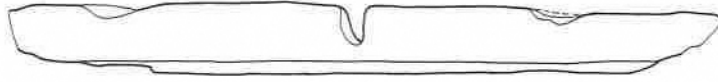


127

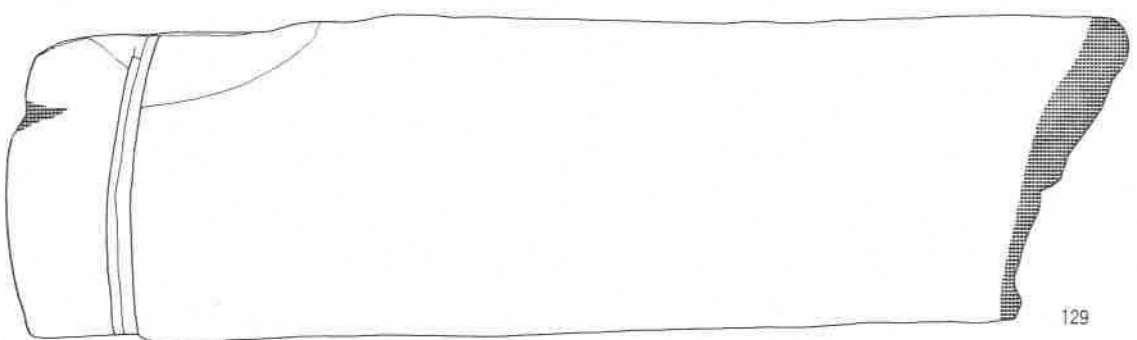
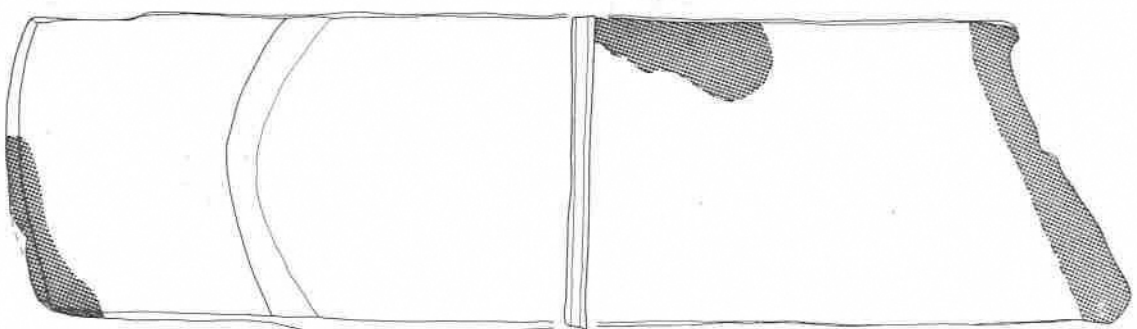




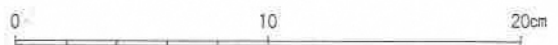
高 杯

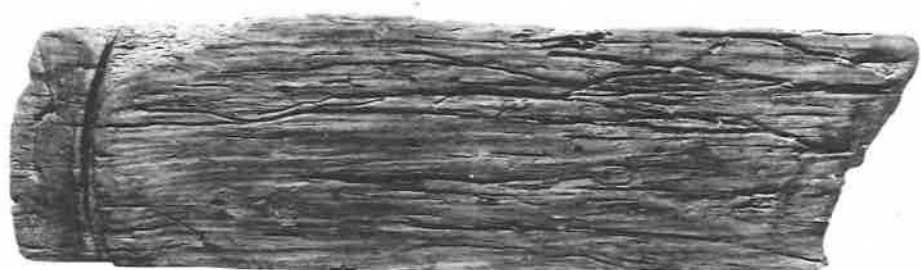
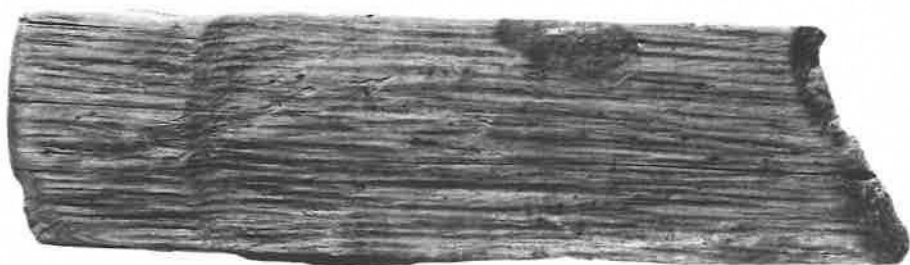
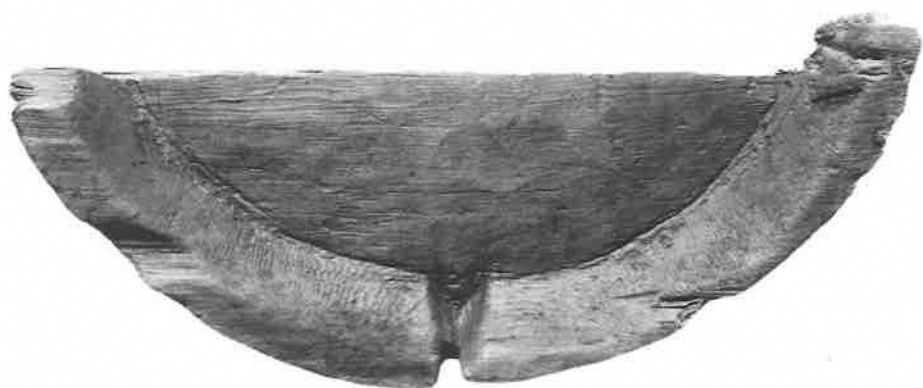
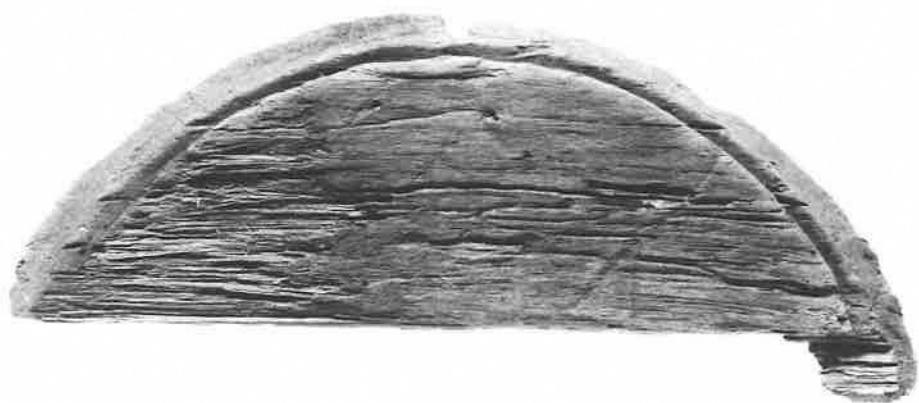


128



129

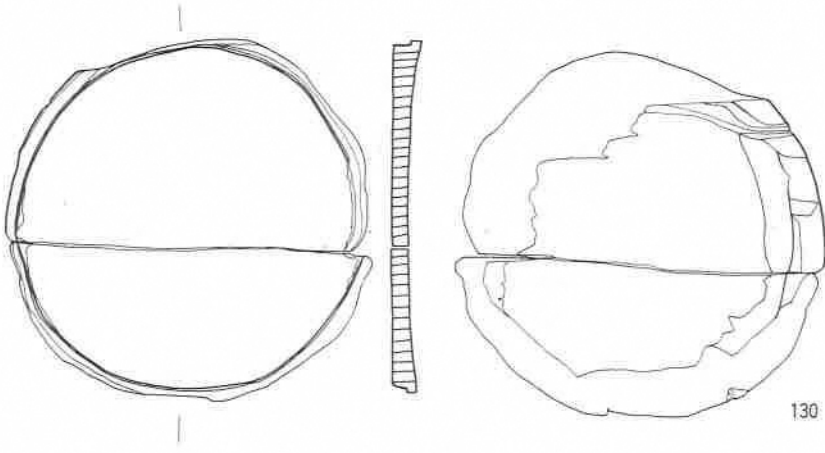




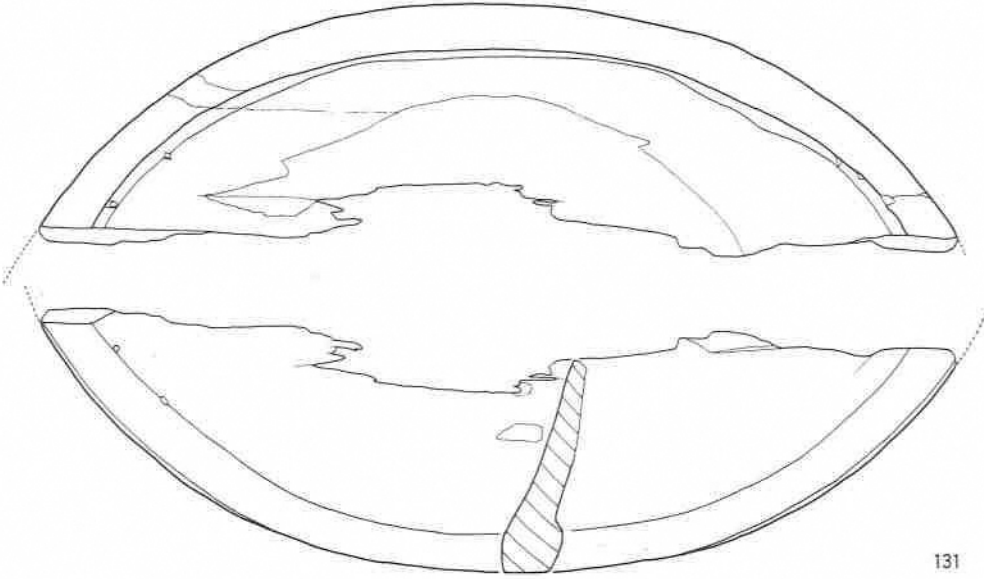
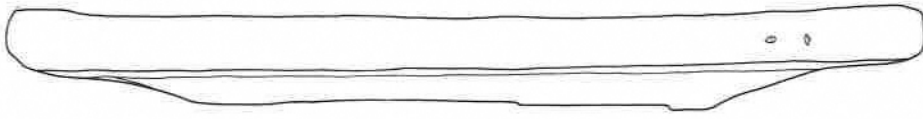
128

129

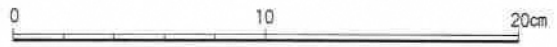
125000 125000 125000

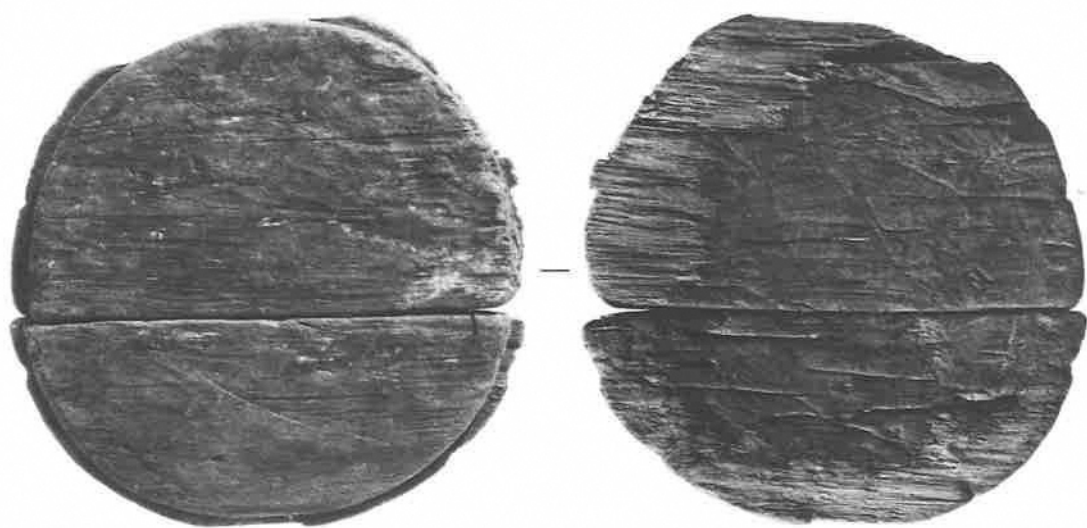


130

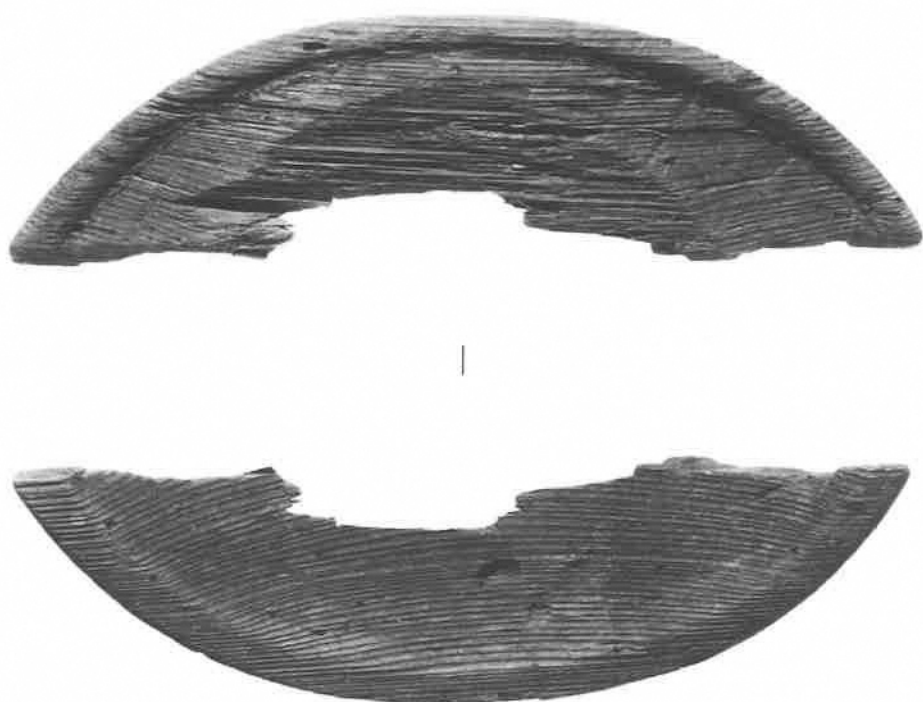


131



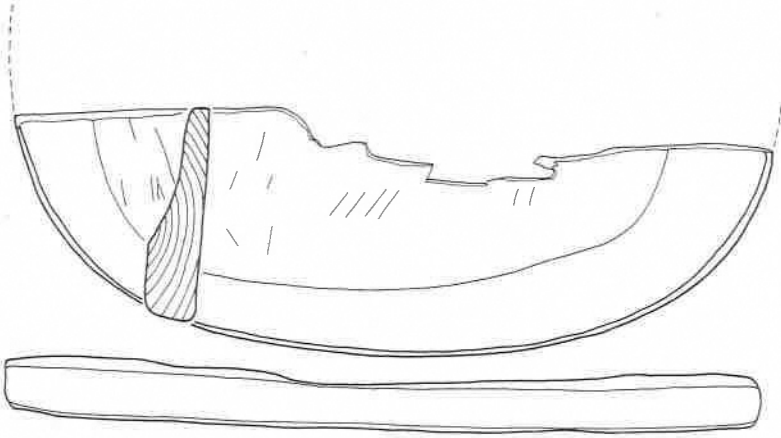


130

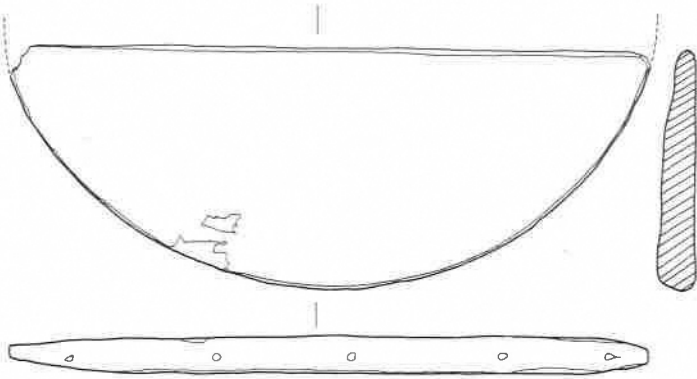


131

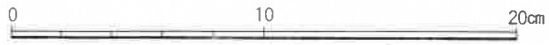
脚台状木製品



132



133





|



(1) 脚台状木製品

132

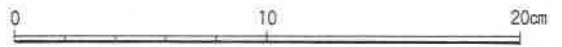
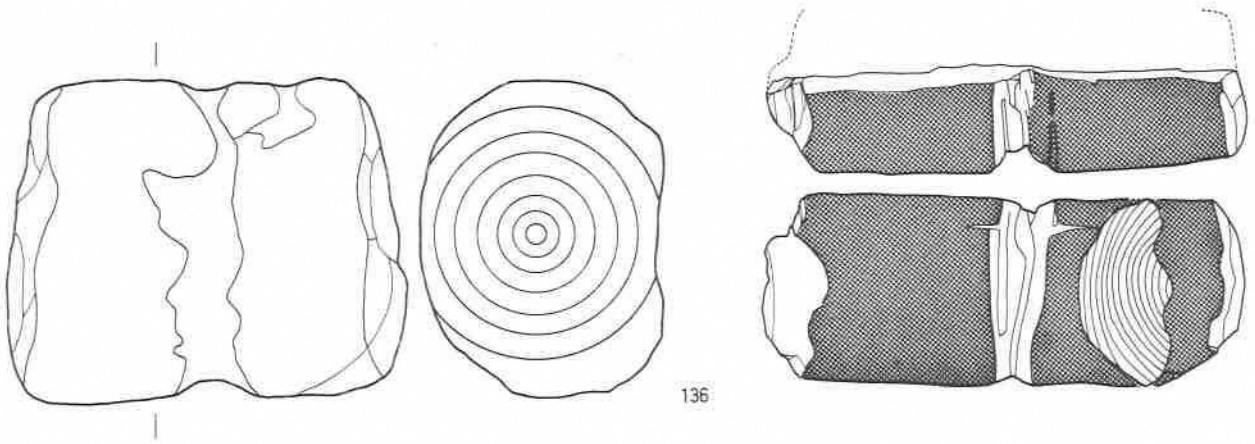
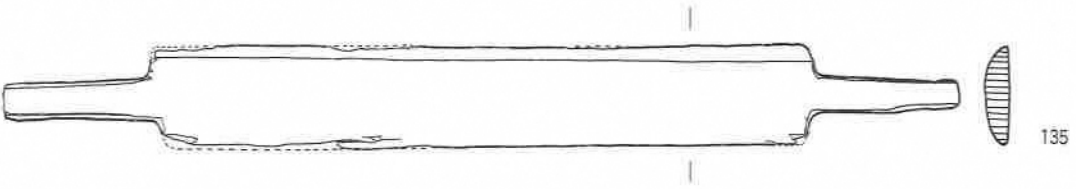
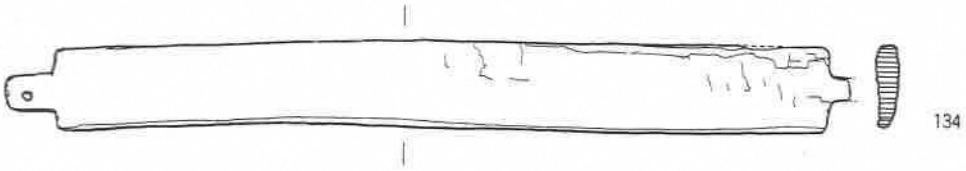


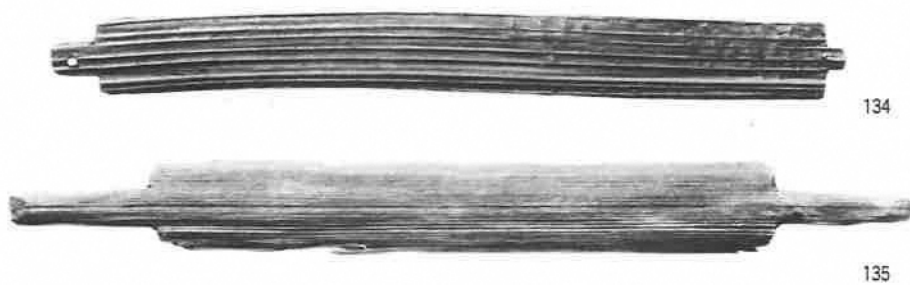
|



(2) 底板

133



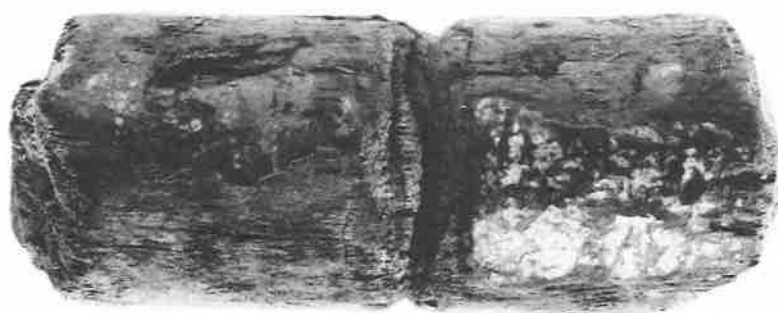


(1) 織 機



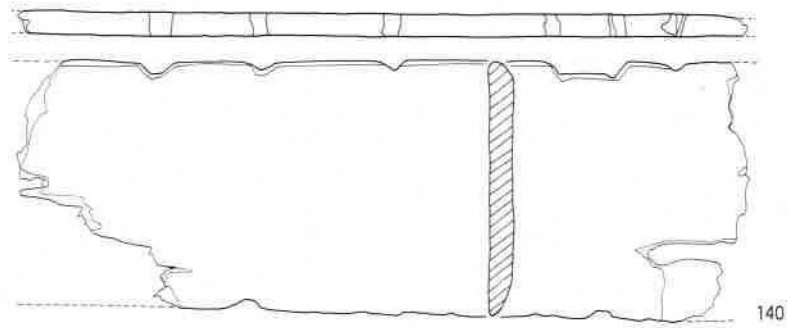
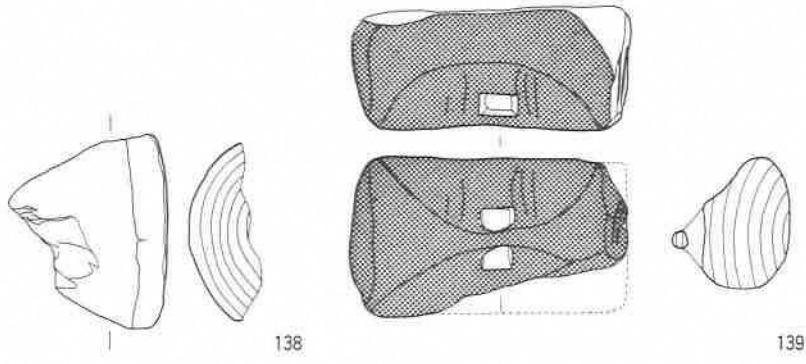
136

(2) 木 錘

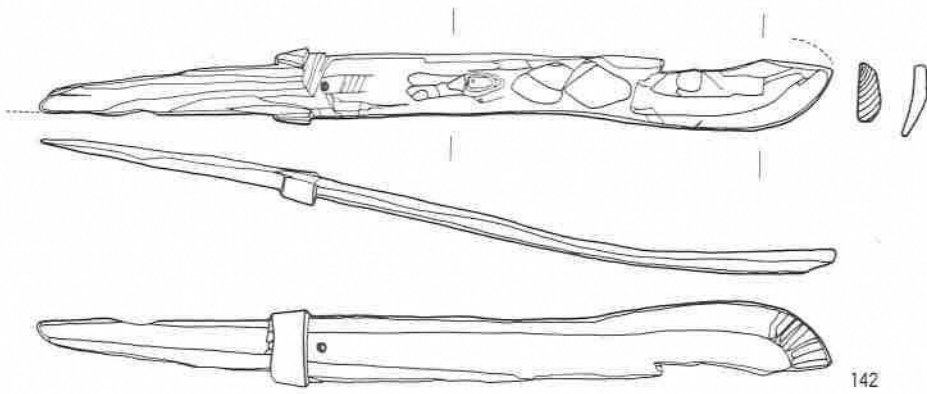


137

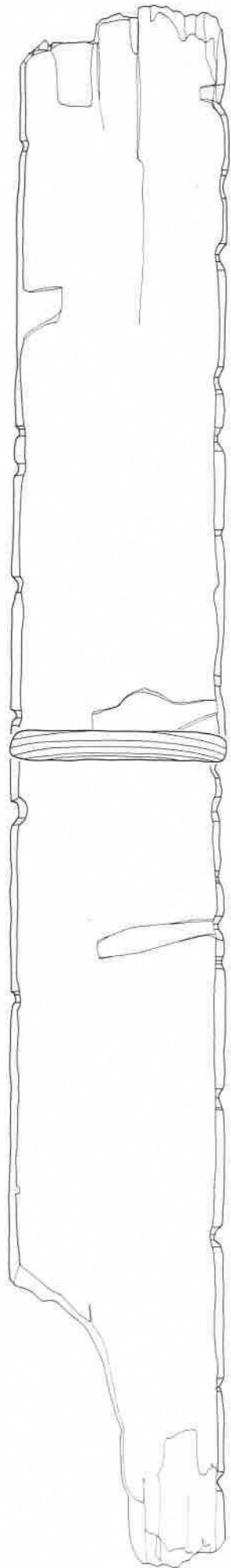
(3) 木 錘



0 10 20 30 40cm
(138~141)



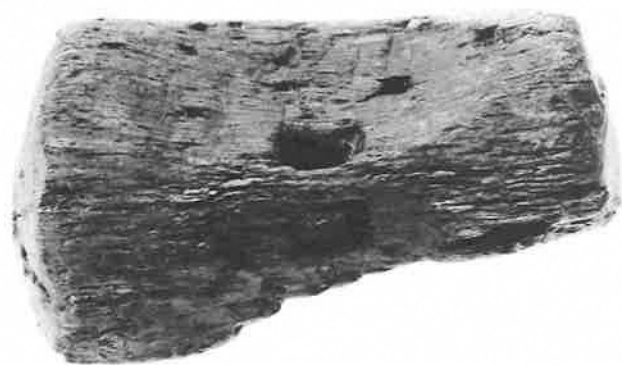
0 10 20cm
(142)





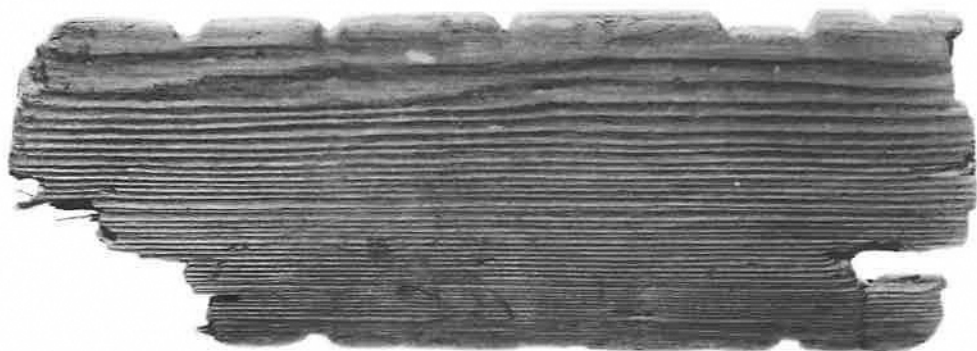
138

(1) 木 錘

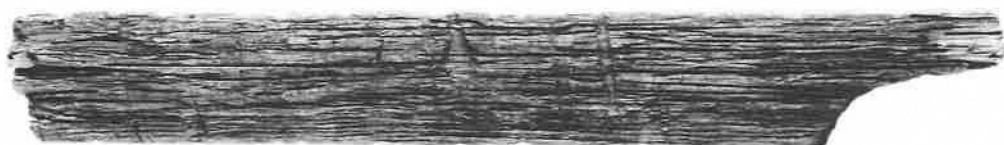


139

(2) 木 錘



140



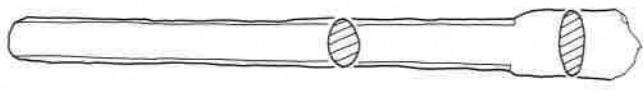
141

(3) 目 盛 板

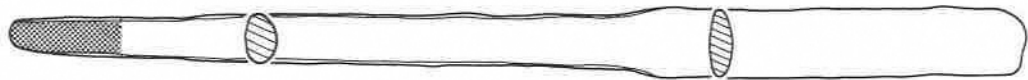


142

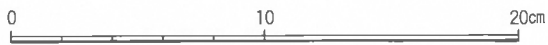
(4) 匙



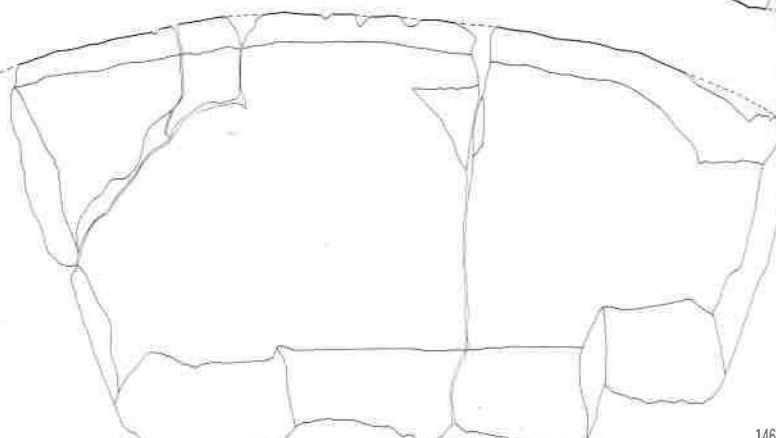
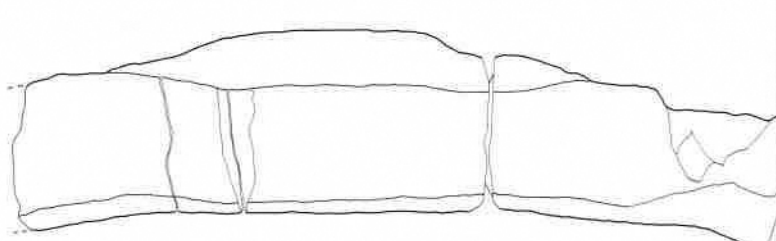
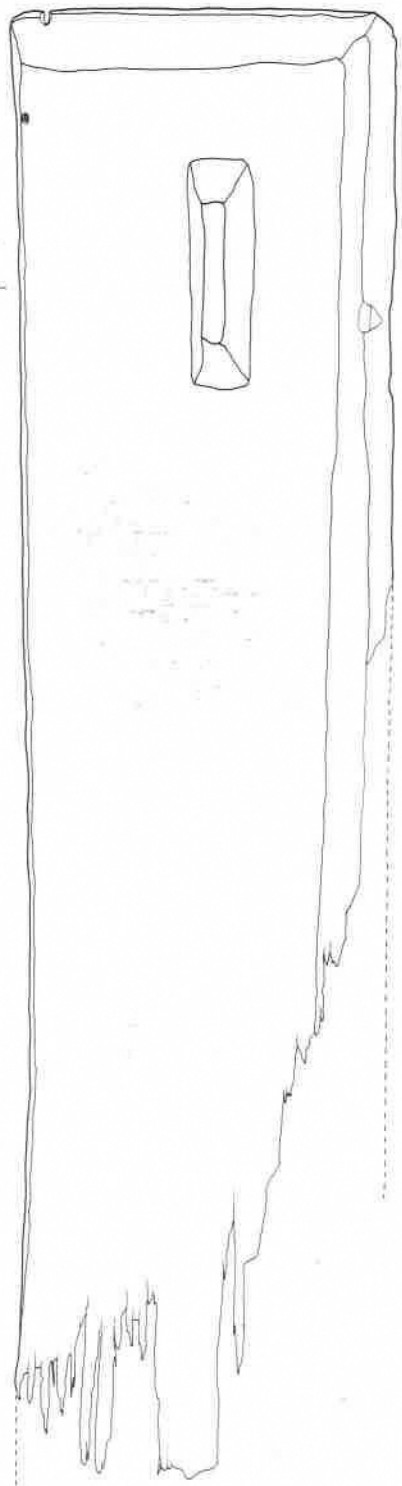
143



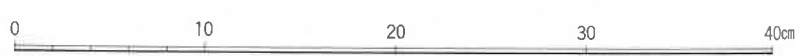
144



(143, 144)



146



(145, 146)



145

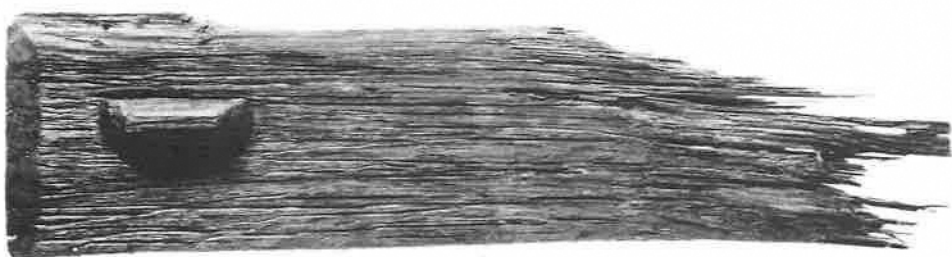


143



144

(1) ヘラ状木製品



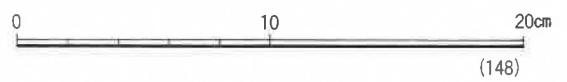
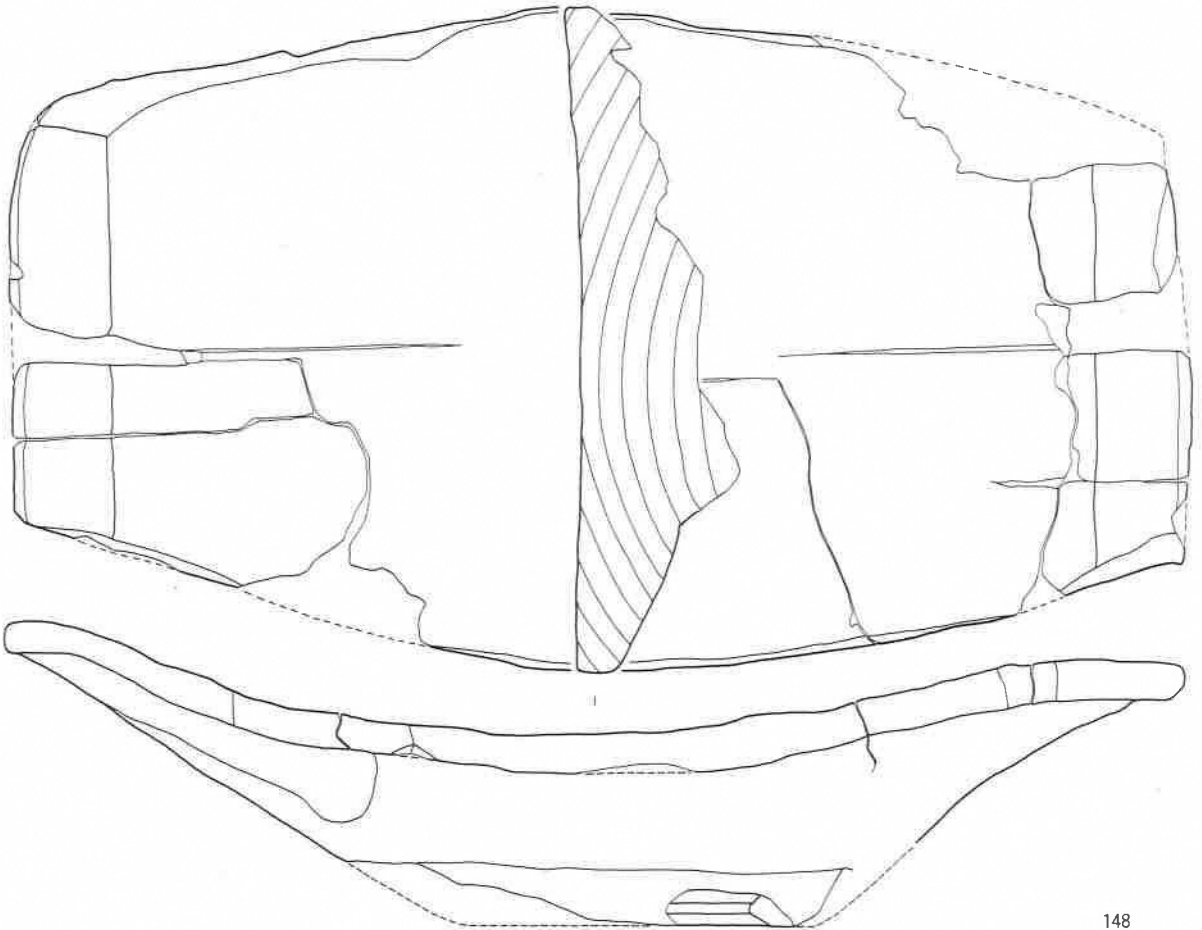
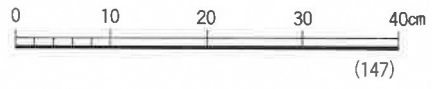
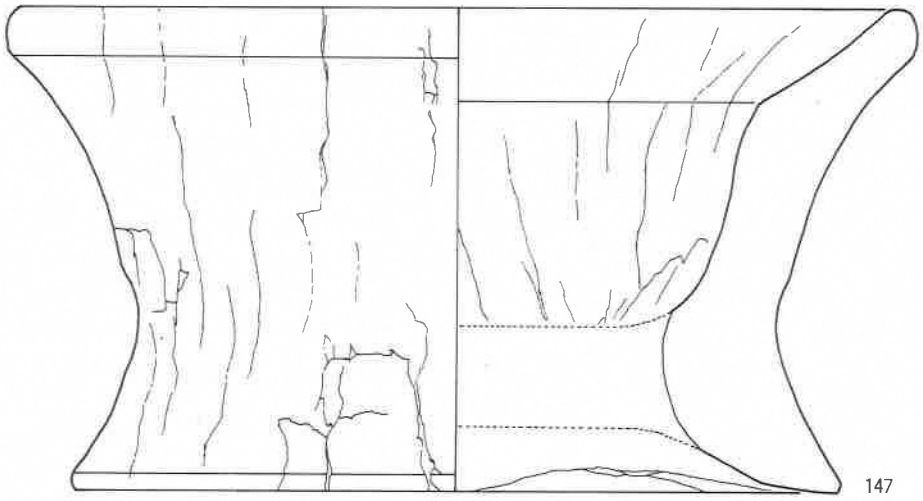
145

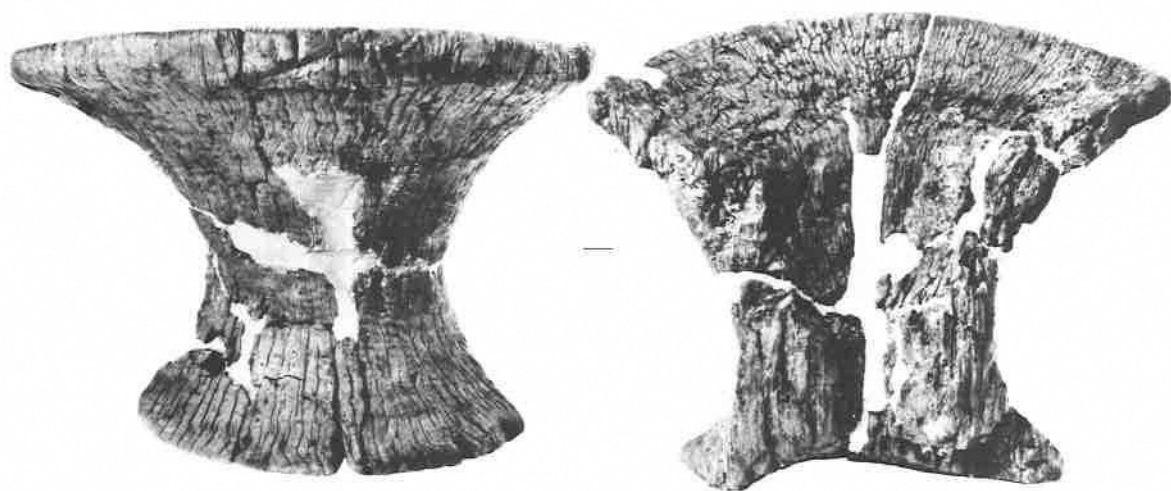
(2) 組板(あるいは折敷)



146

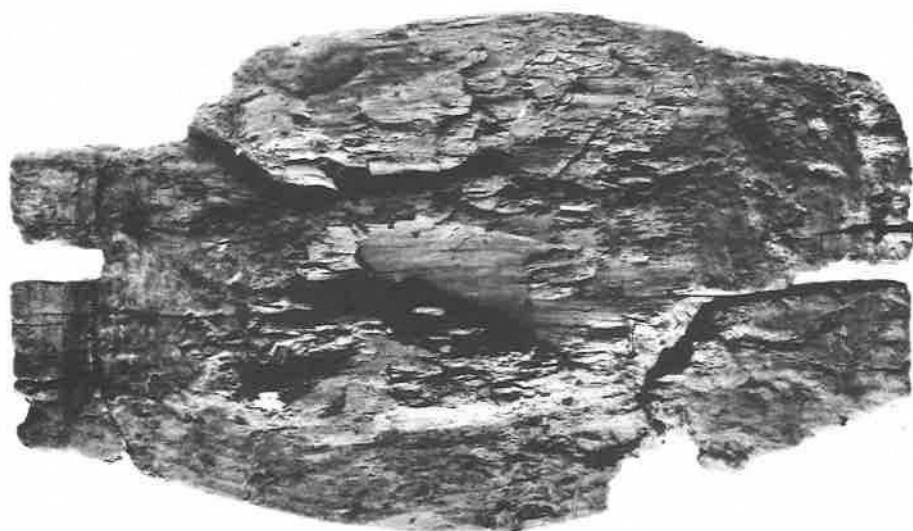
(3) 臼





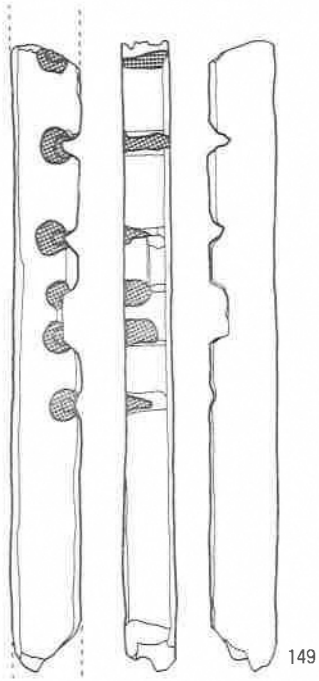
147

(1) 白

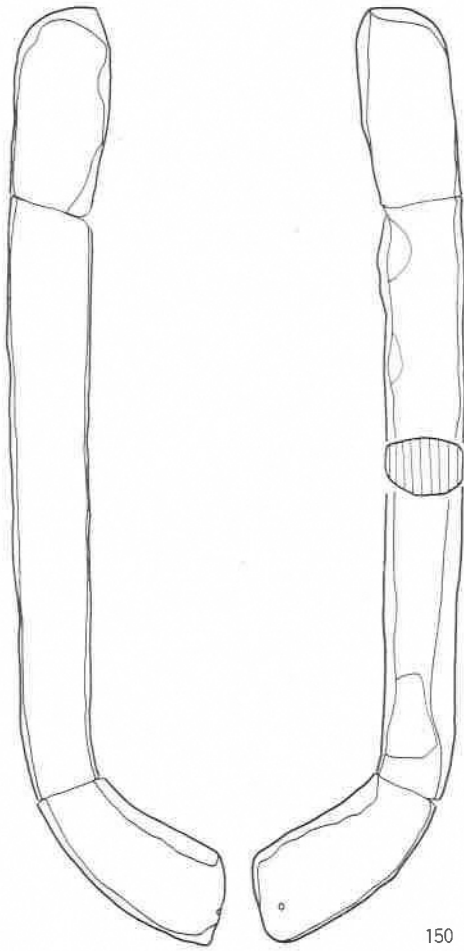


148

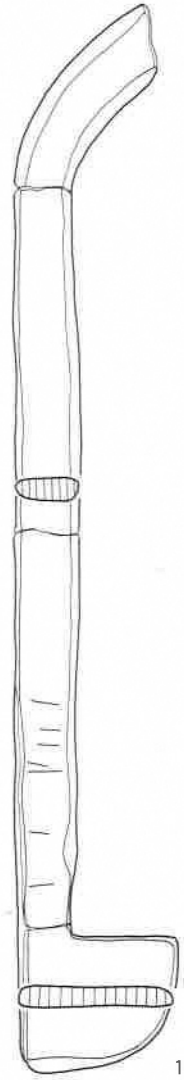
(2) 椅子



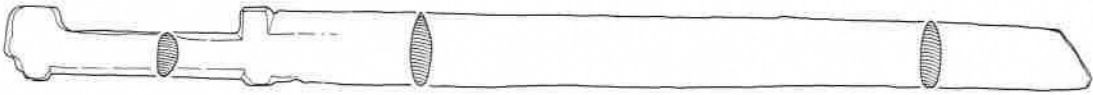
149



150



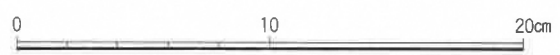
151



152



153





149

(1) 火鑽白



150

(2) 鎌の柄



151

(3) 鎌の柄



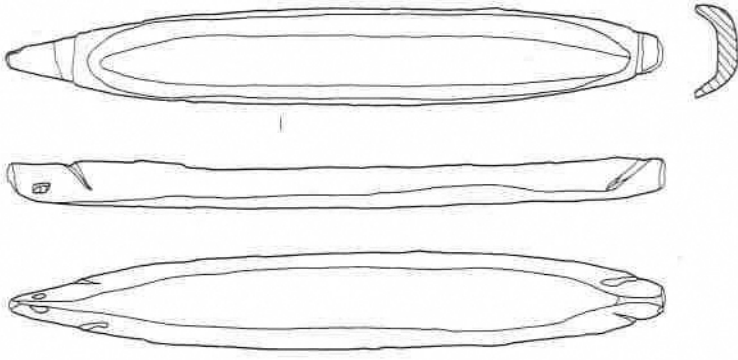
152

(4) 刀形木製品

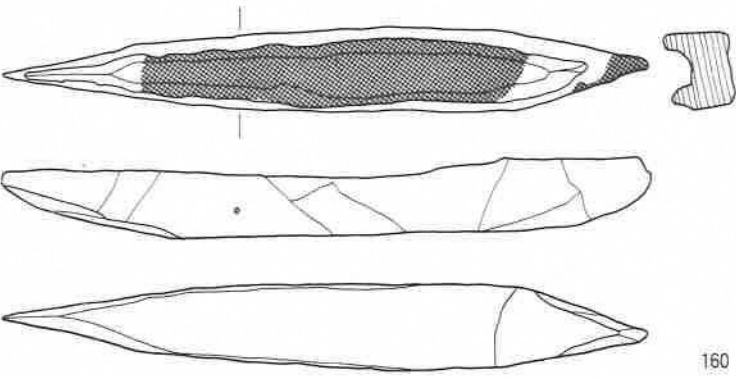


153

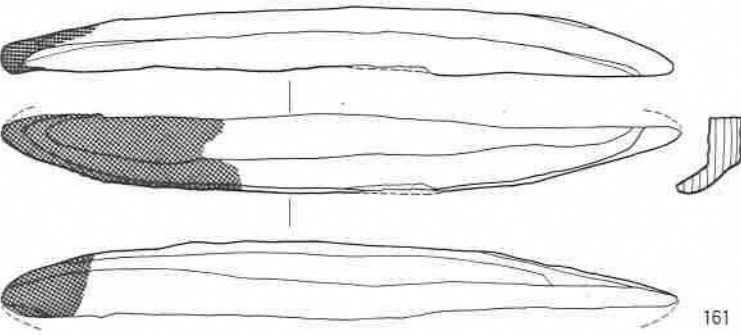
(5) 剣形木製品



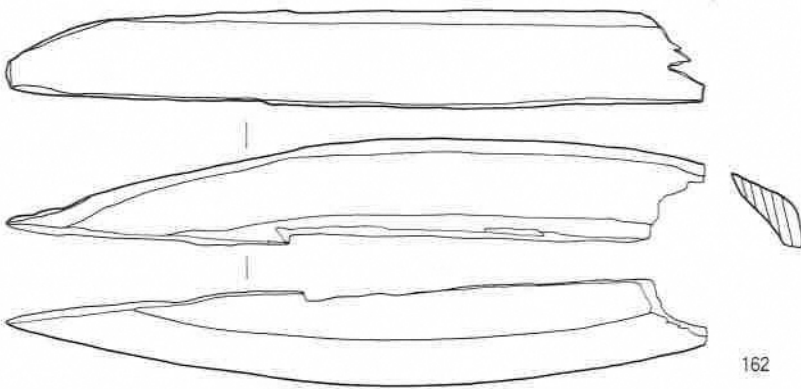
159



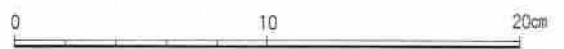
160



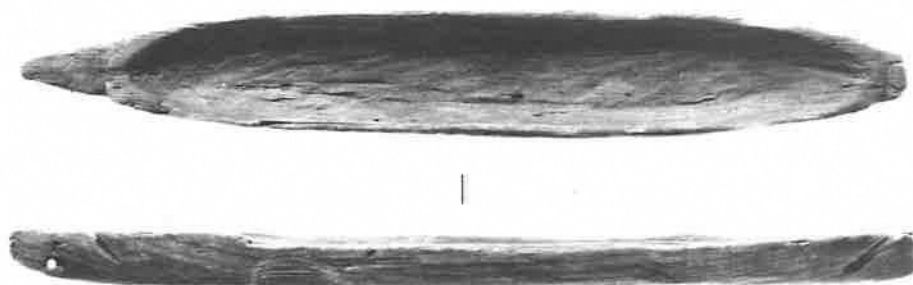
161



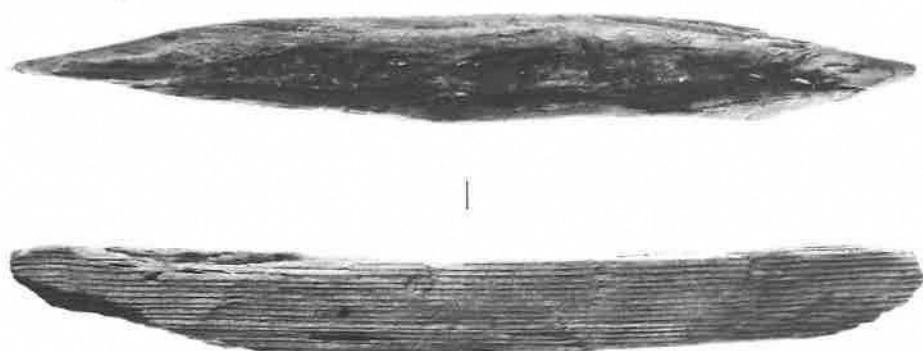
162



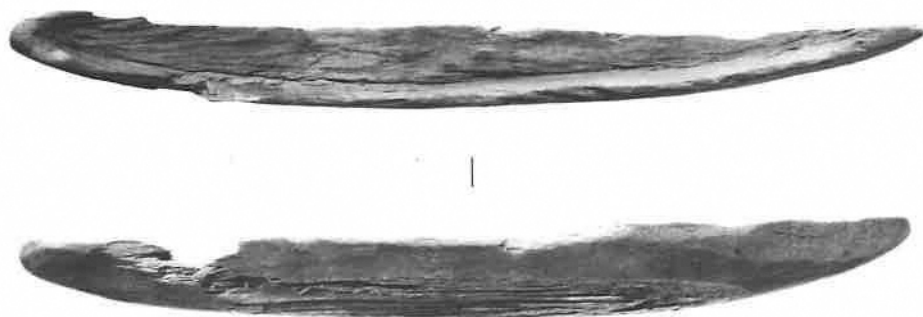
159



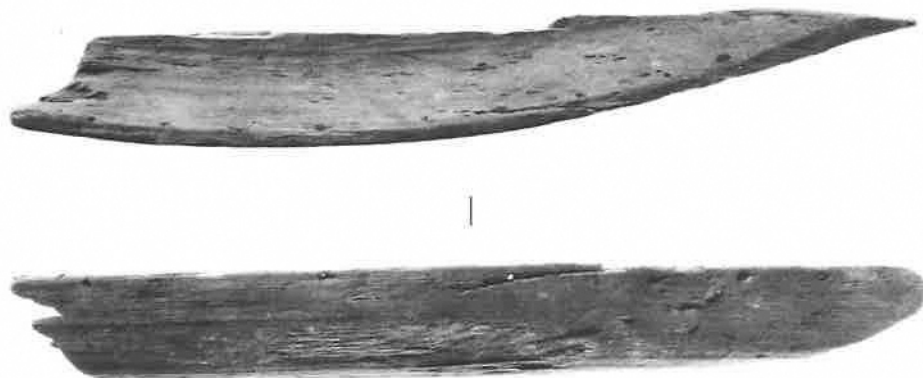
160

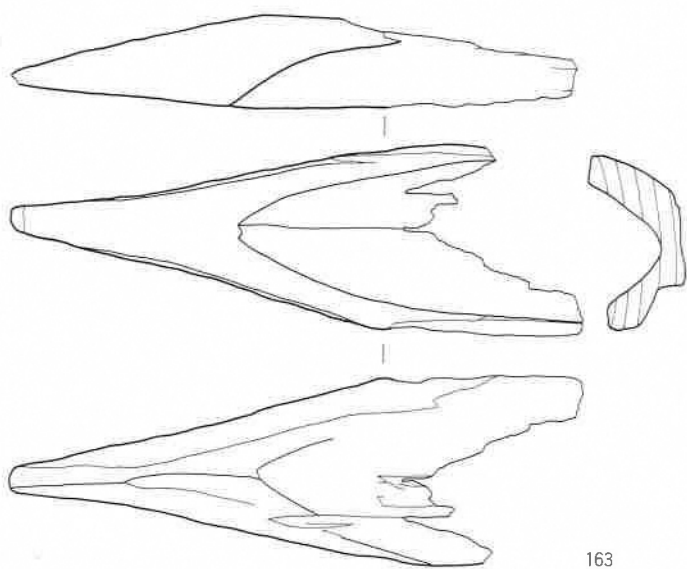


161

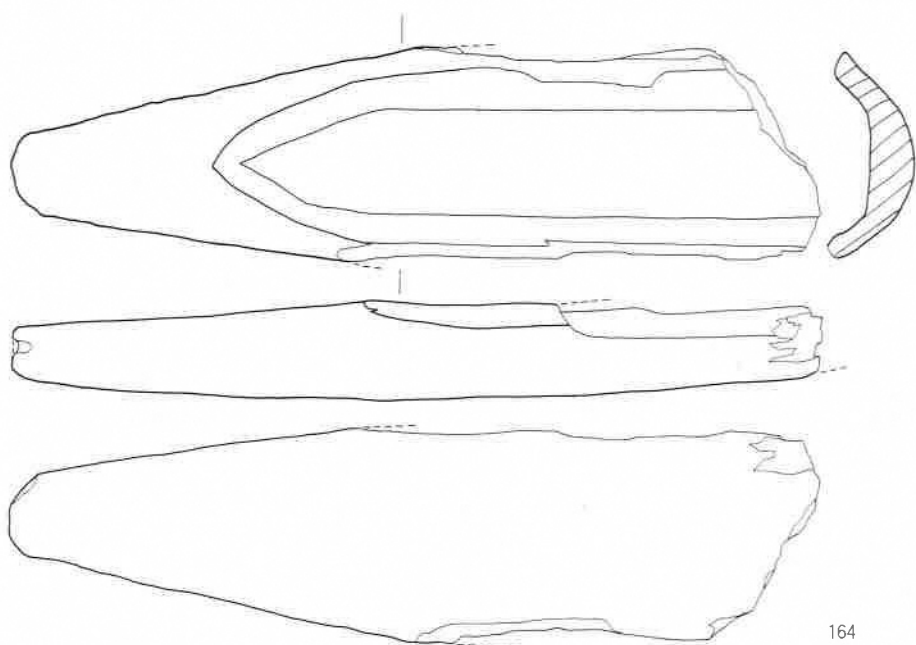


162

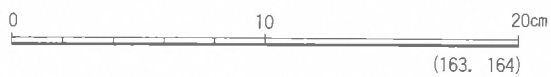




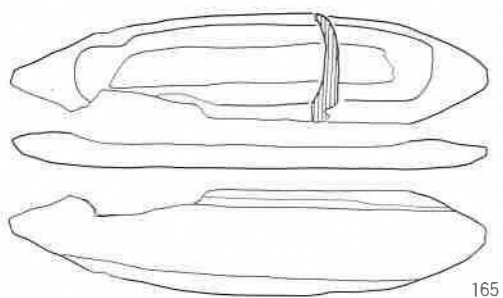
163



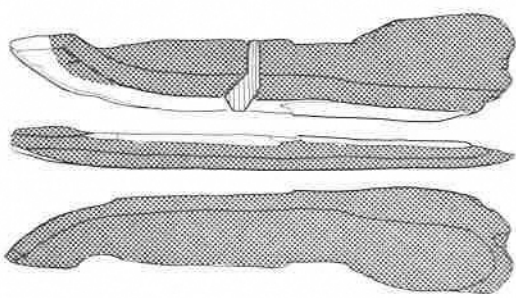
164



(163. 164)



165



166



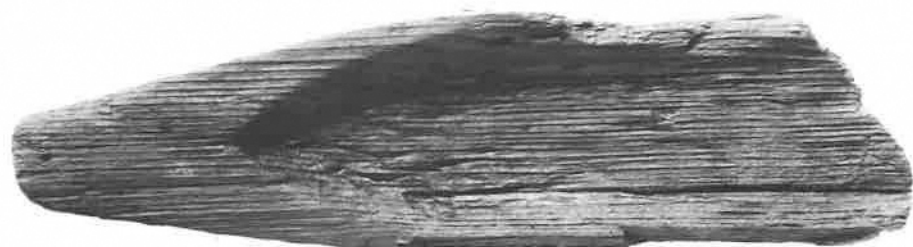
(165. 166)



1



163



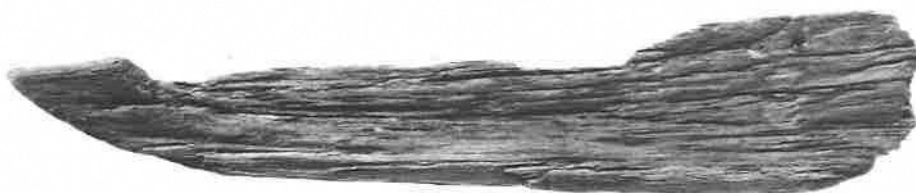
1



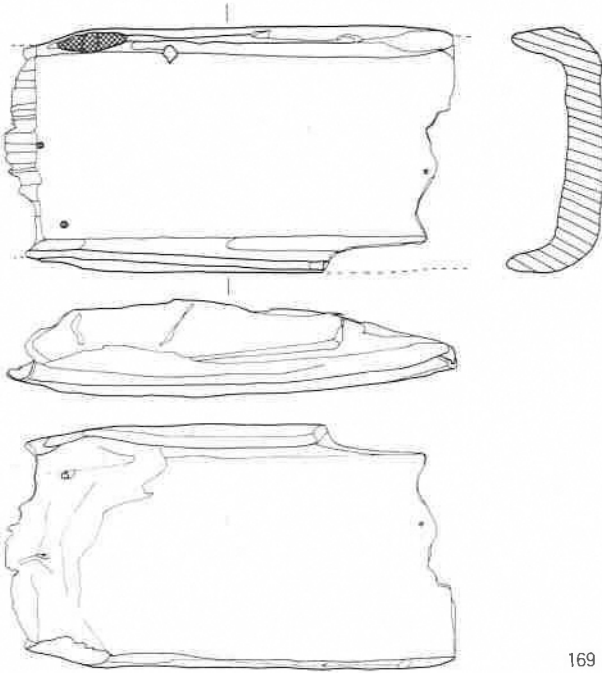
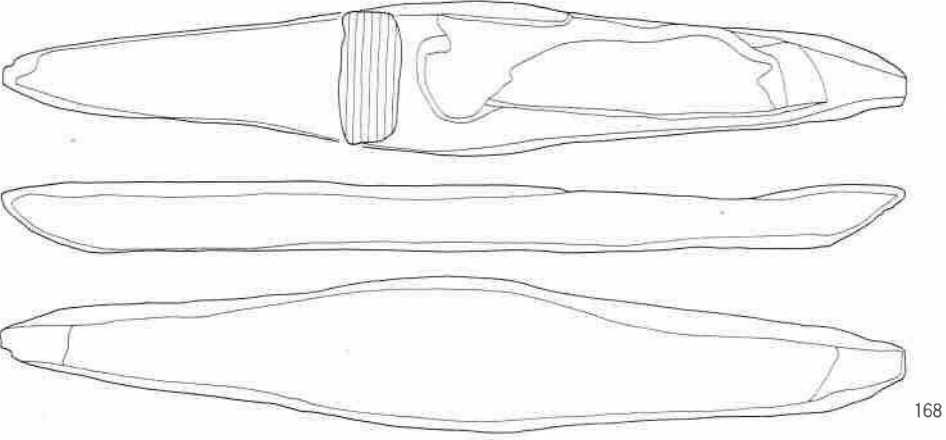
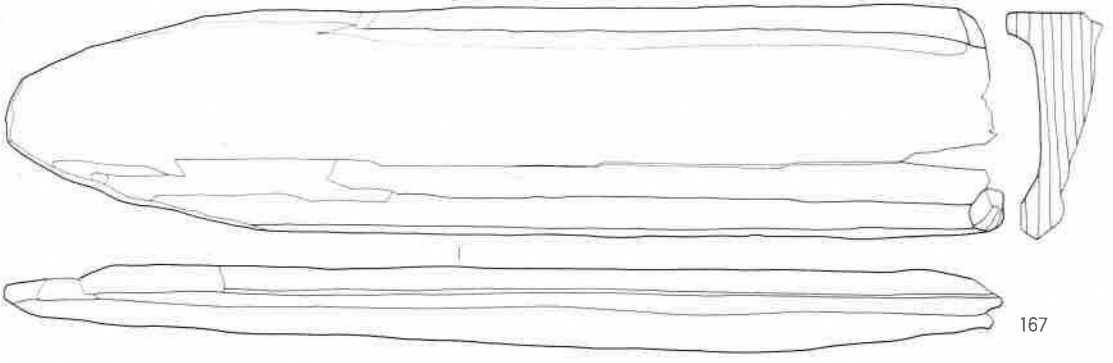
164



165

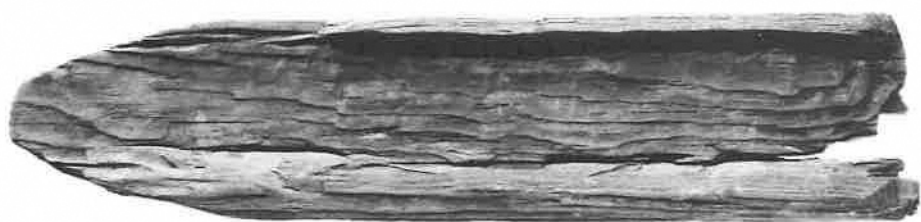


166



0 10 20 30 40cm

167



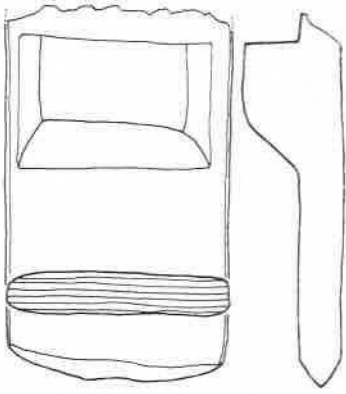
168

(1) 舟形木製品

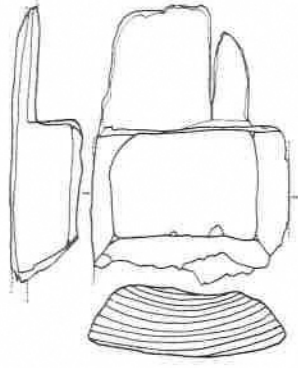


169

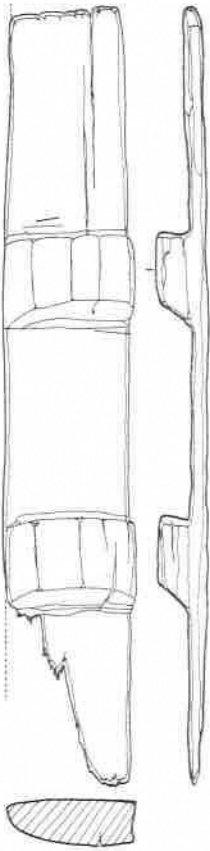
(2) 琴



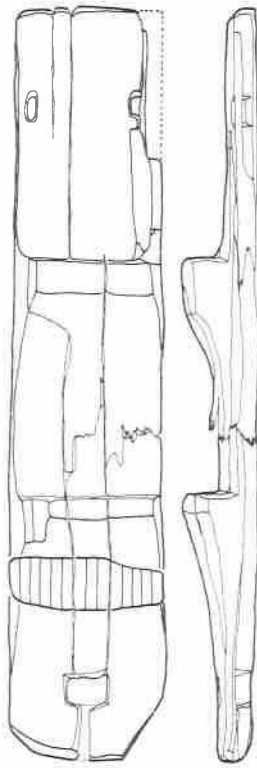
170



171

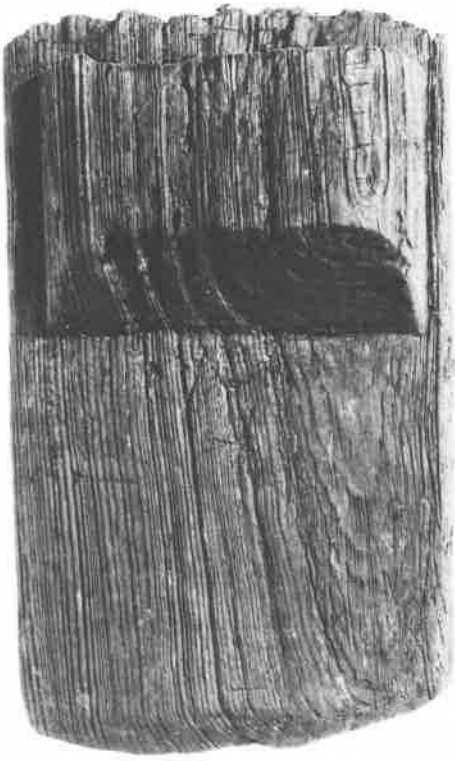


172

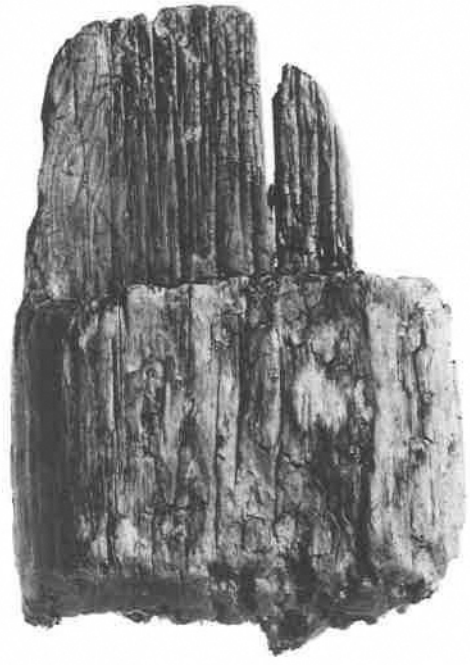


173





170



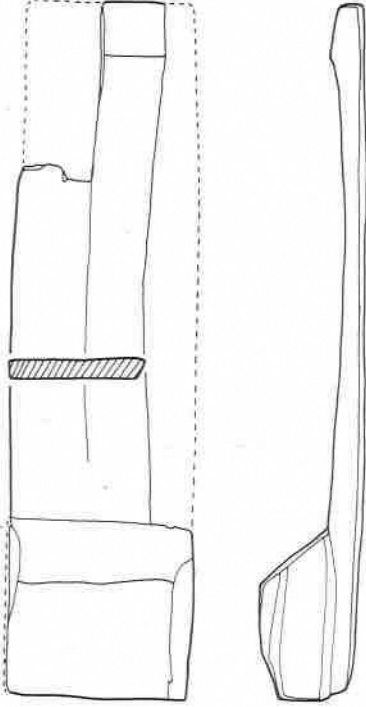
171



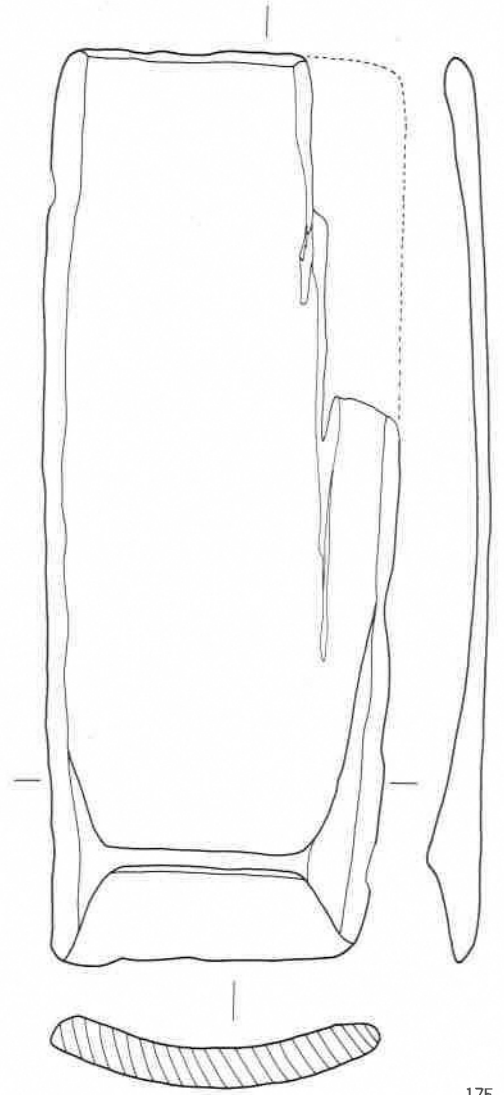
172



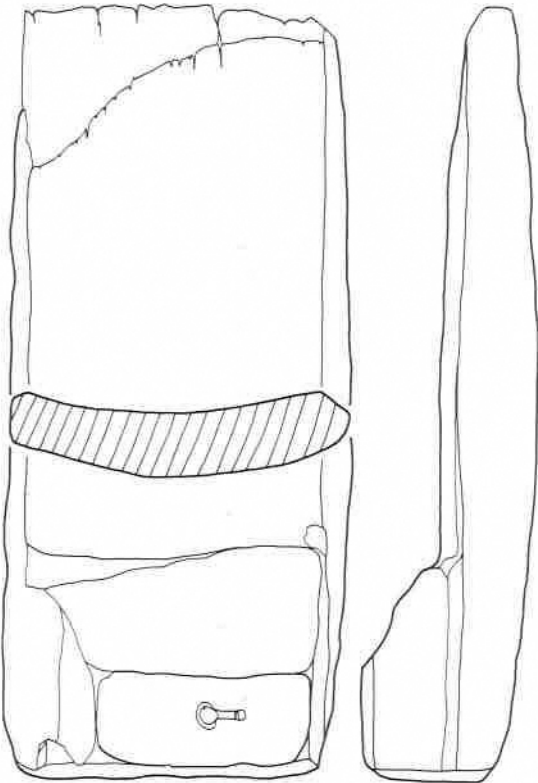
173



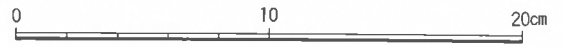
174

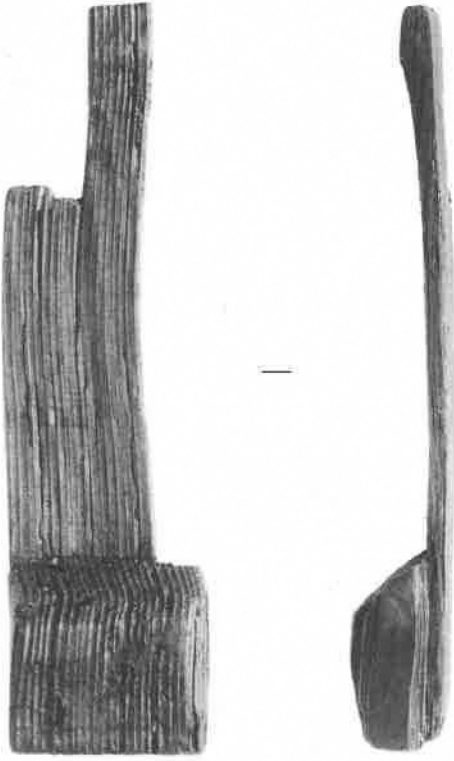


175



176

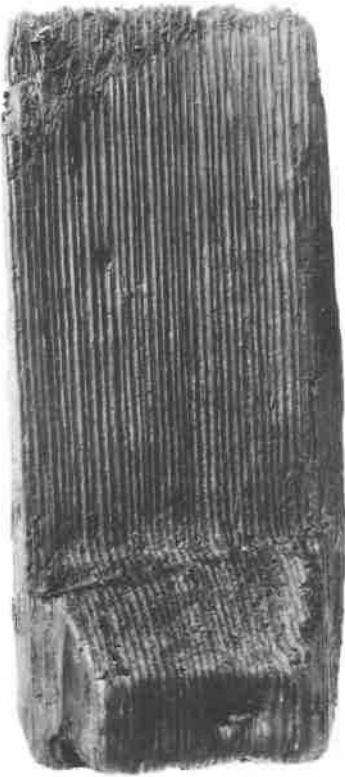




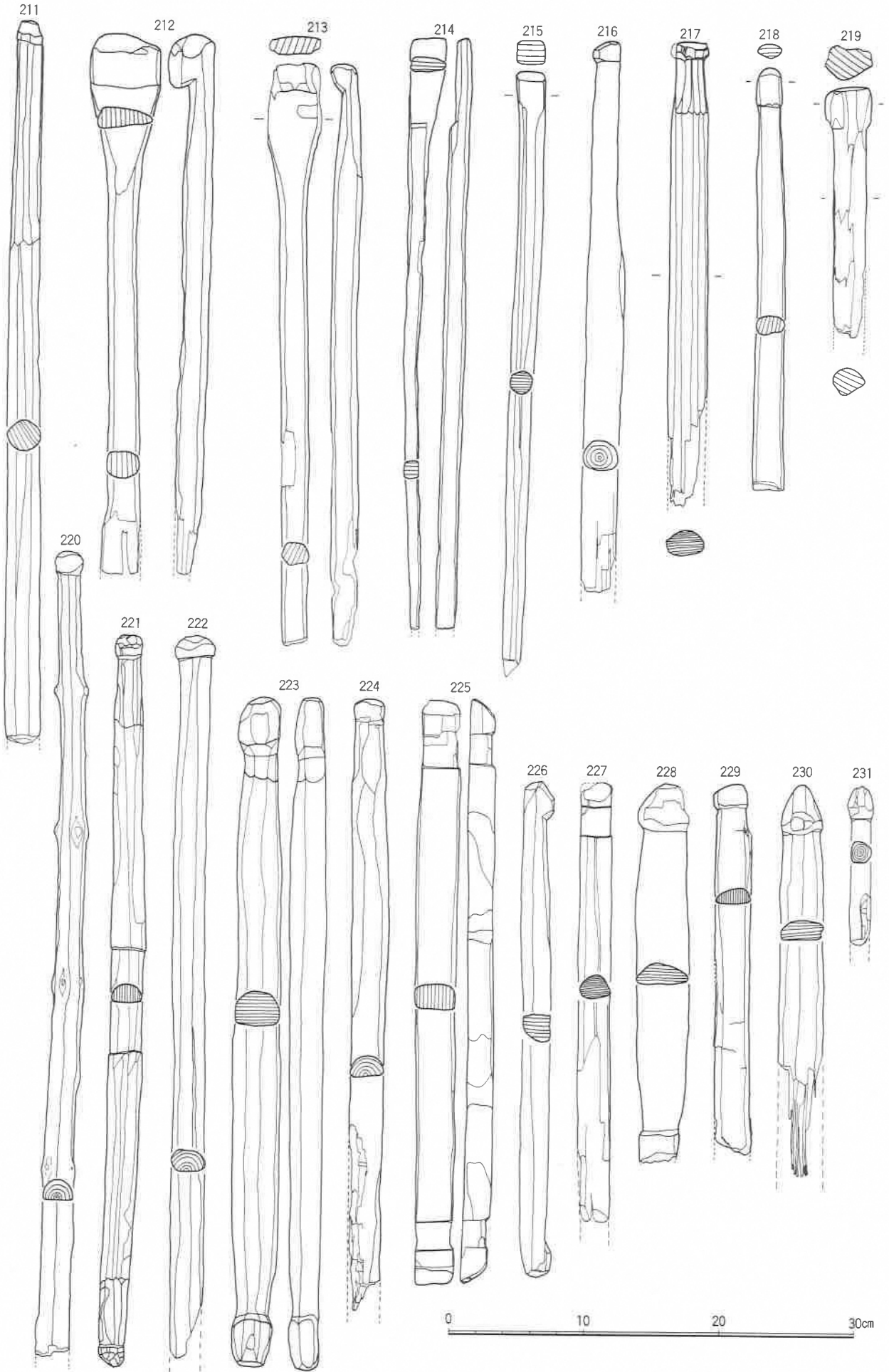
174

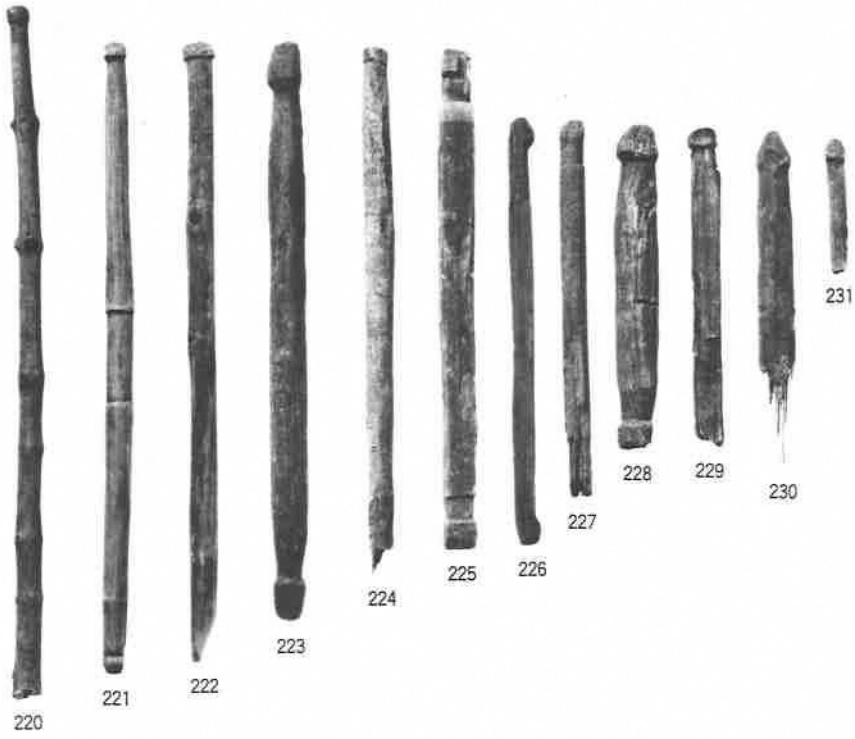
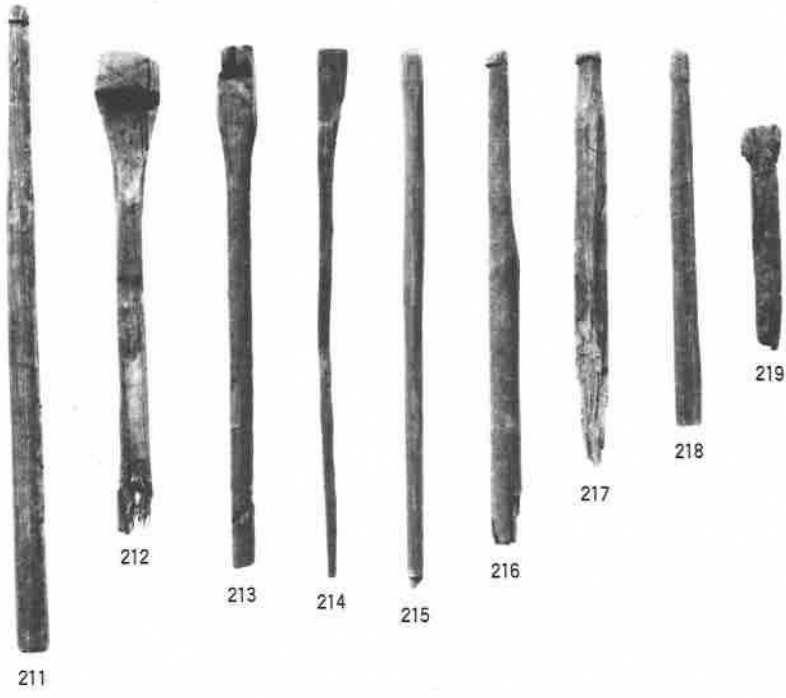


175



176





232



233



234



235



236



237



238



239



240



241



242



243



244



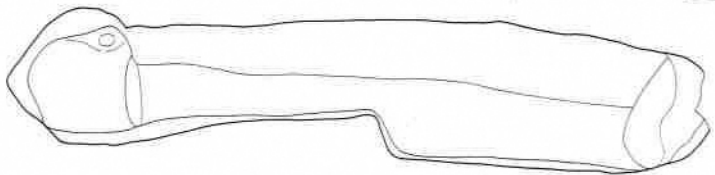
245



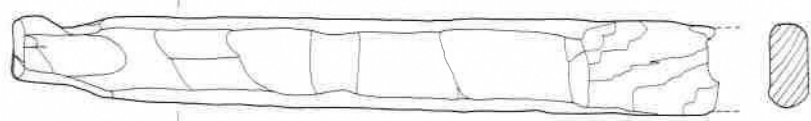
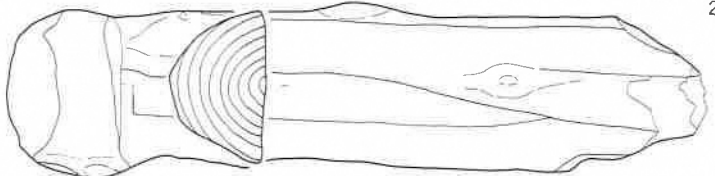
246



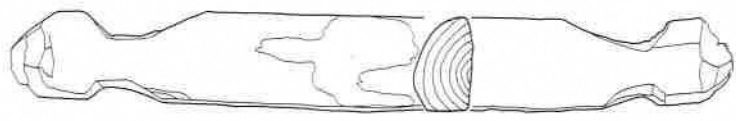
247



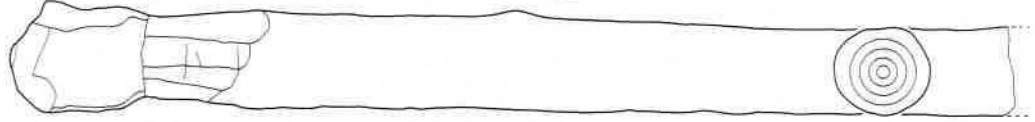
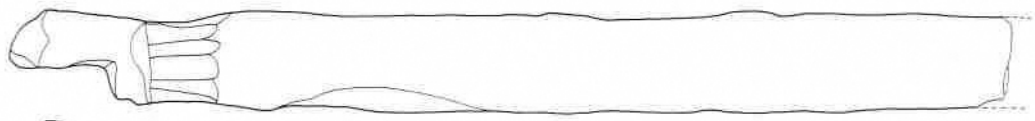
249



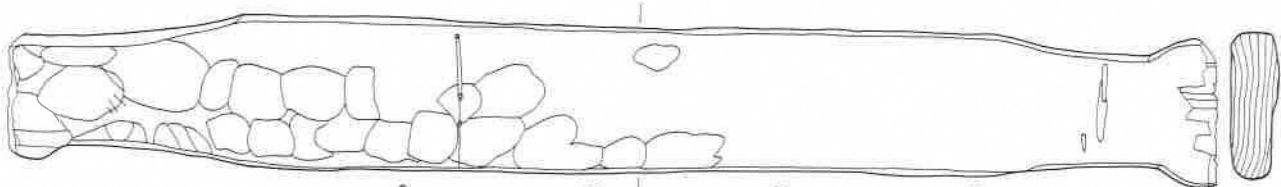
250



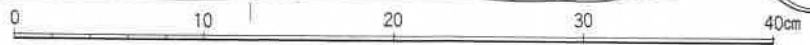
251

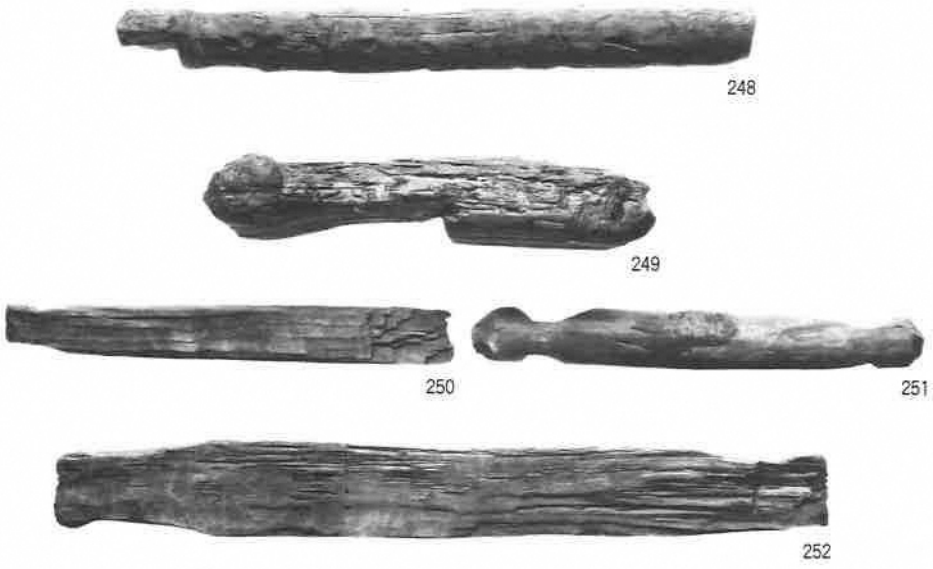
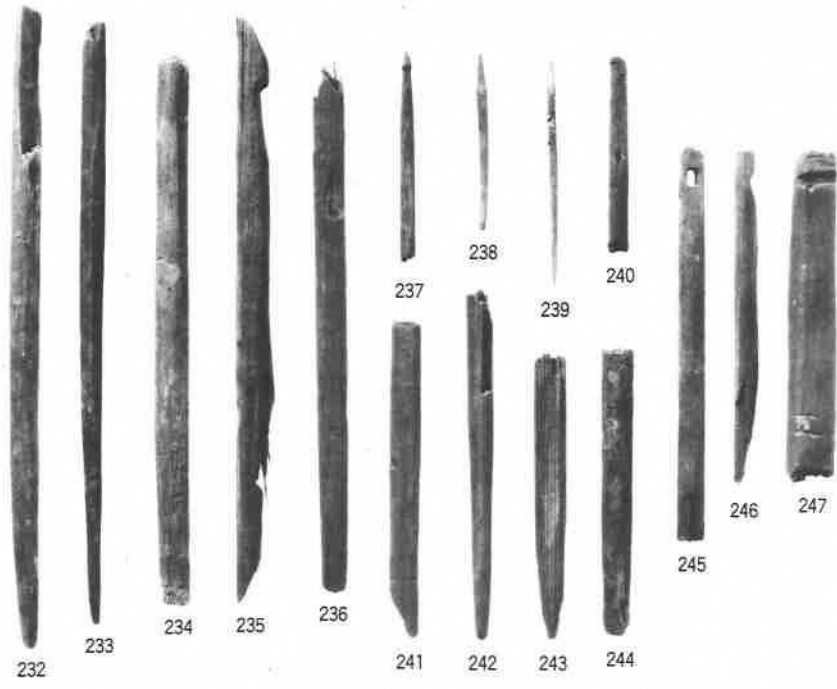


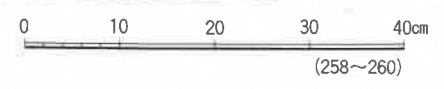
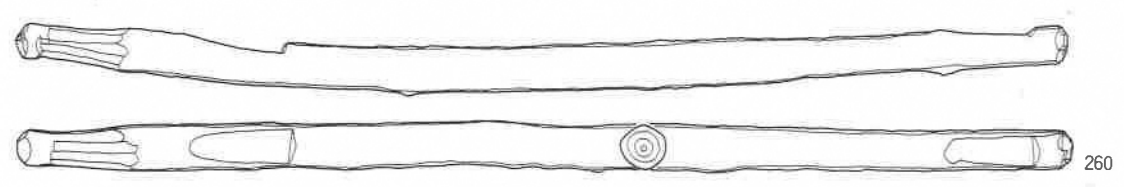
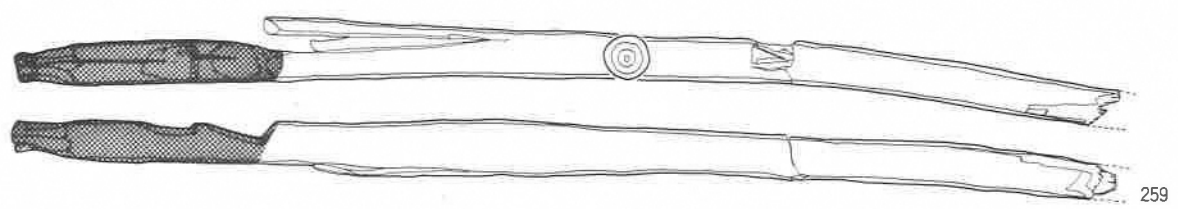
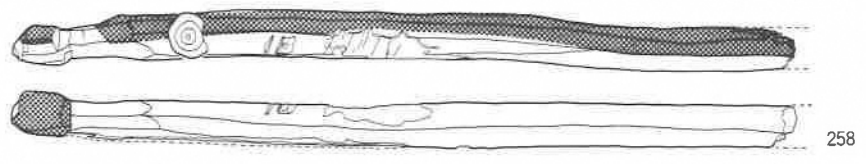
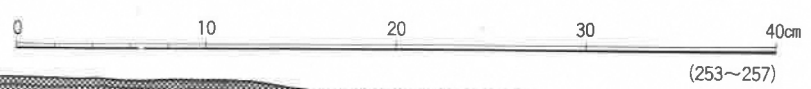
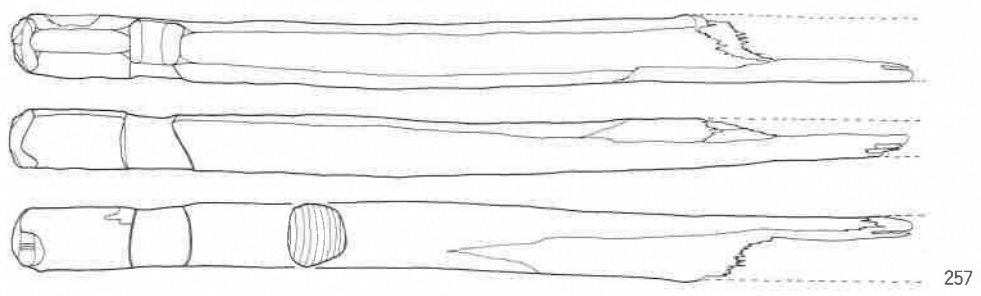
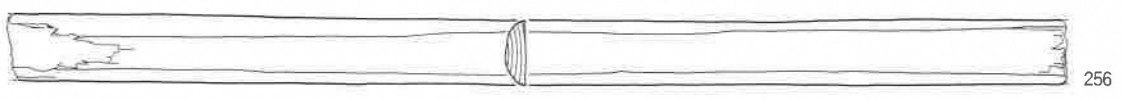
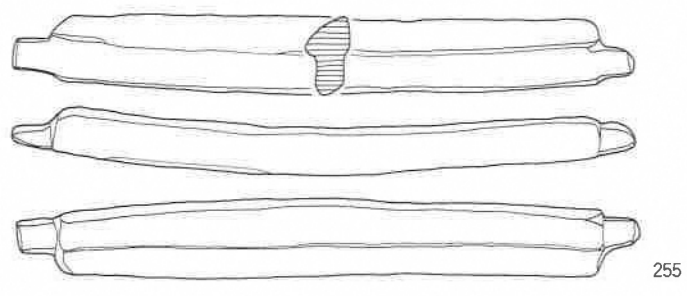
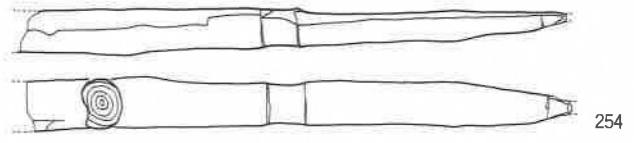
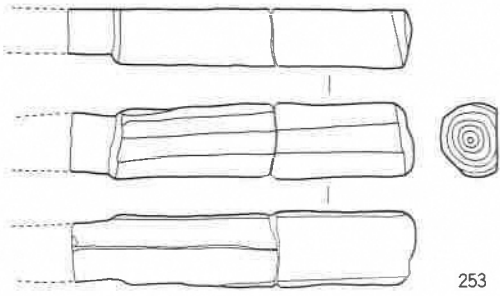
248



252









253



254



255



256



257



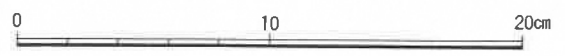
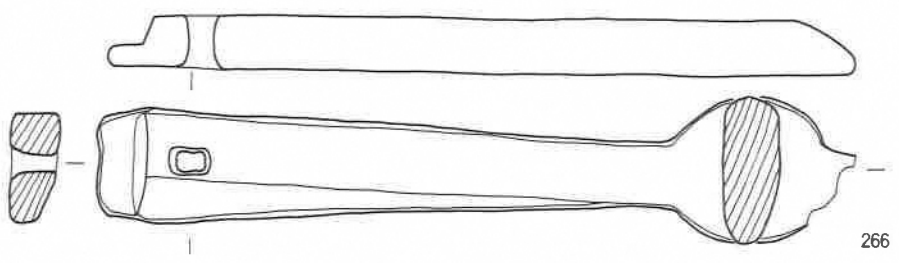
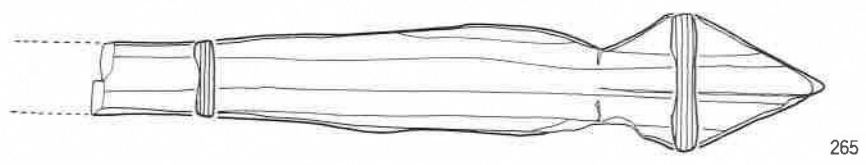
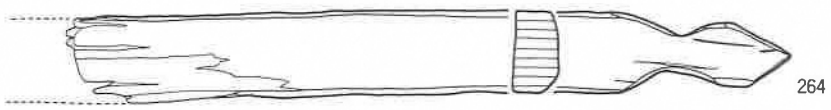
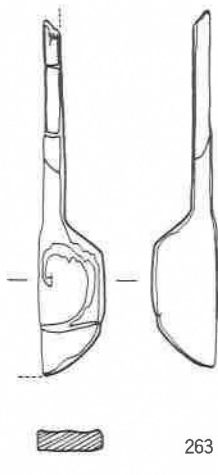
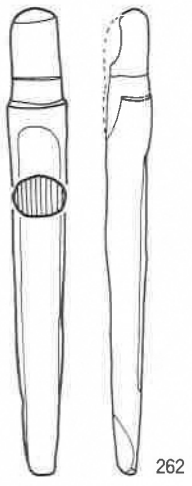
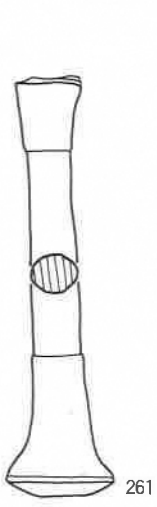
258



259



260





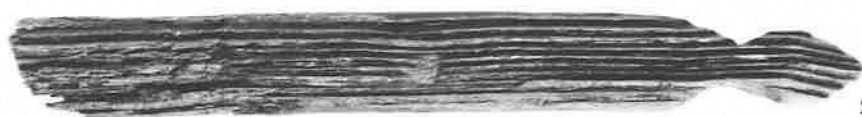
261



262



263



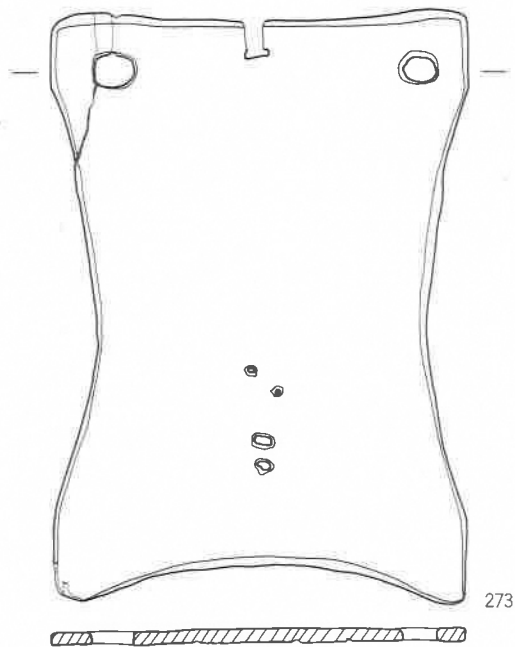
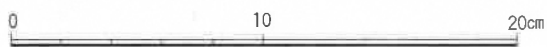
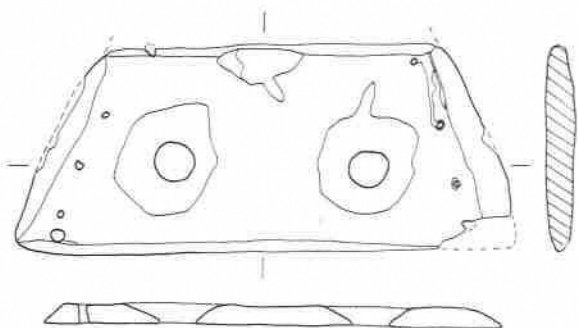
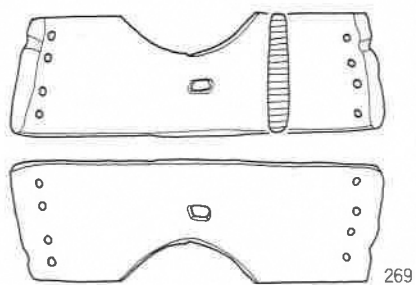
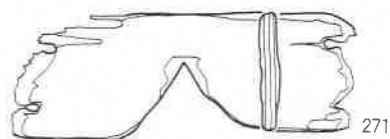
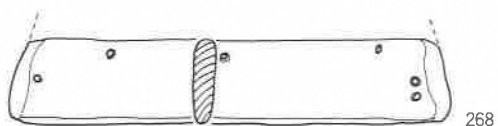
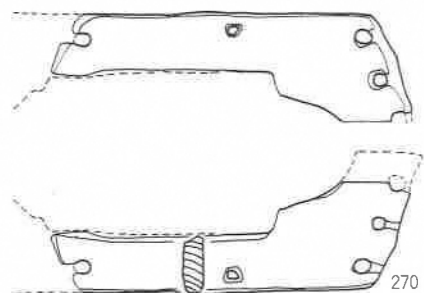
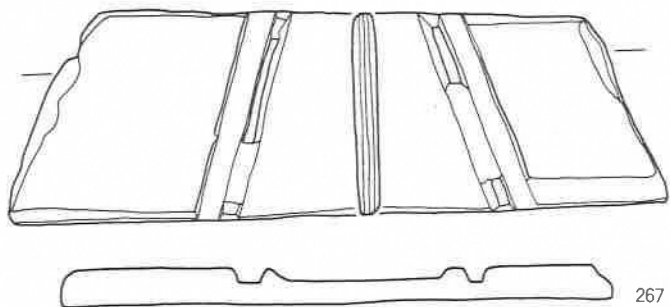
264

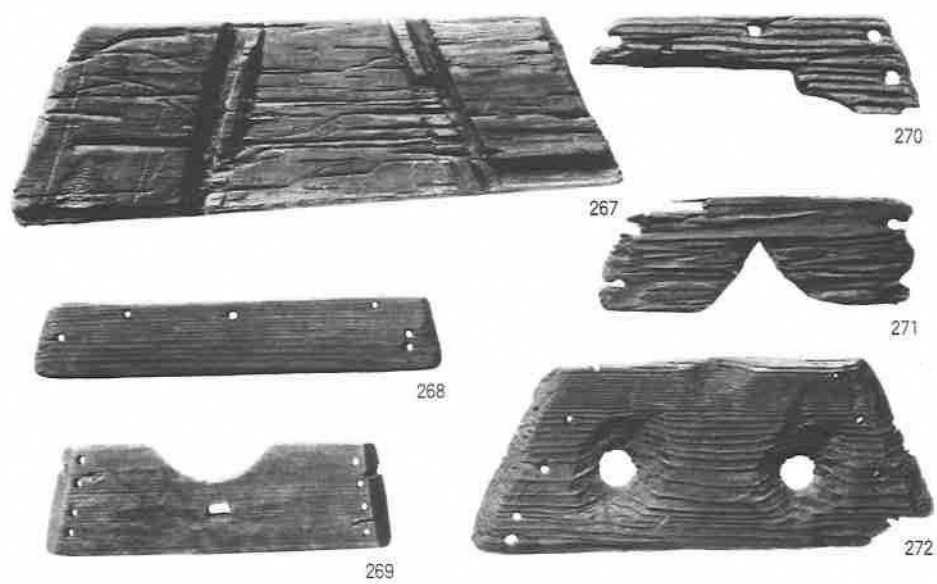


265

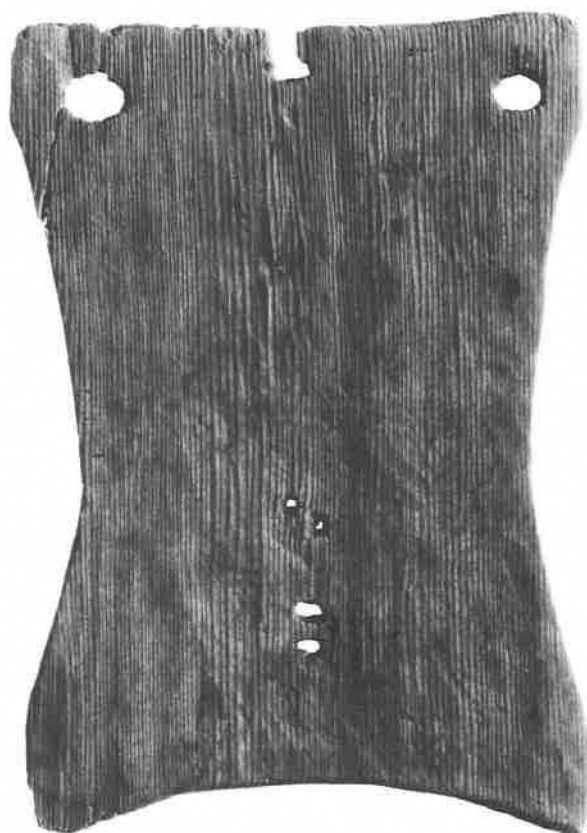


266

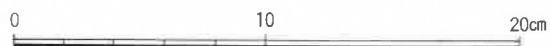
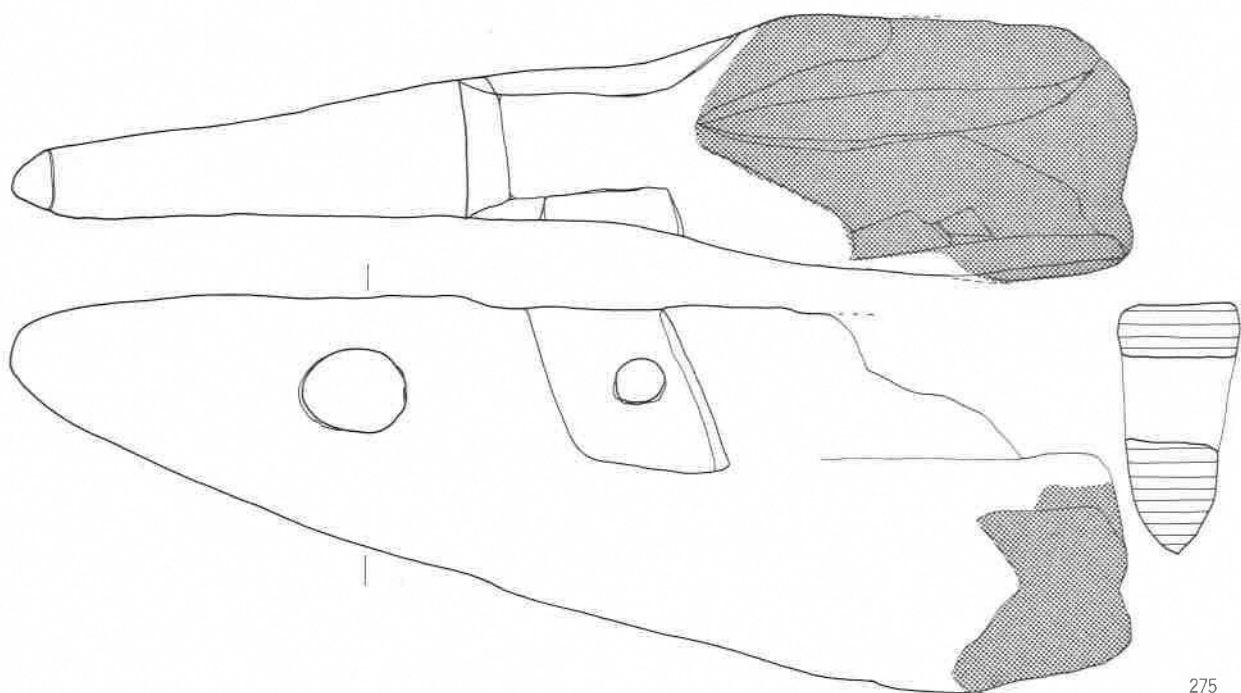
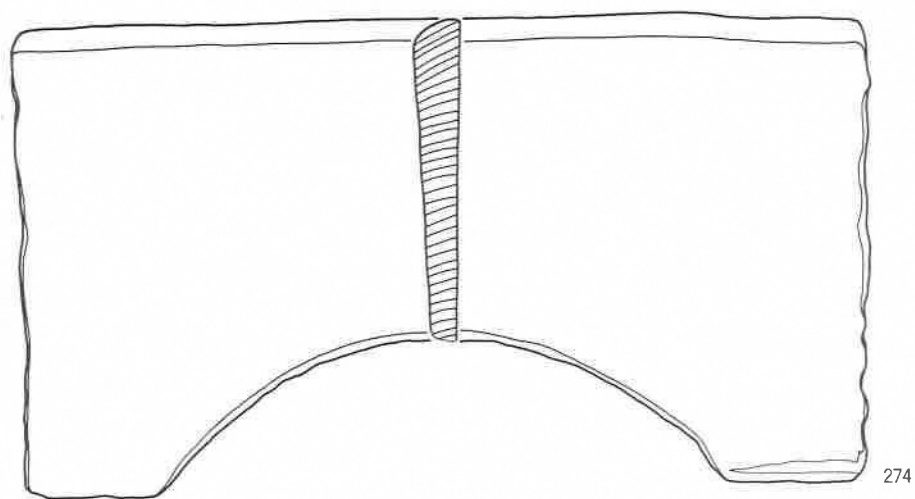


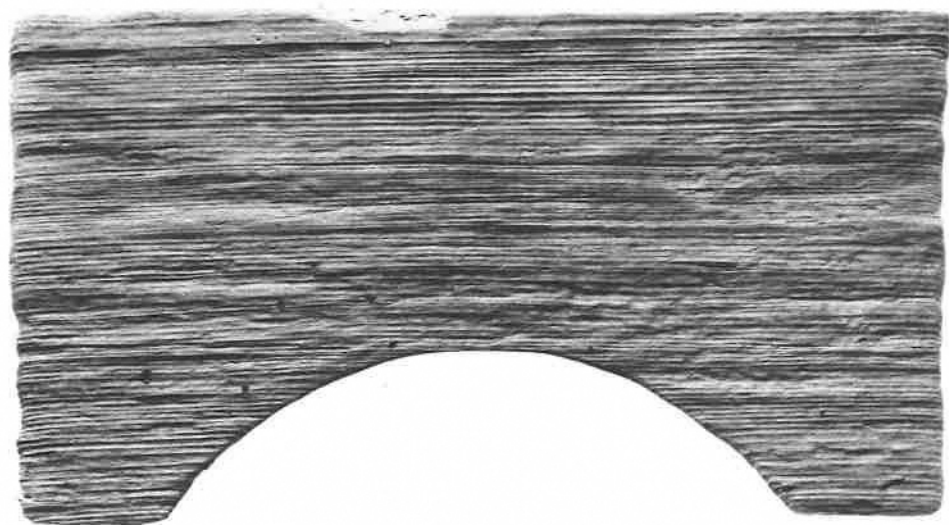


(1) 板状木製品 (箱材)



(2) 板状木製品 (脚材)





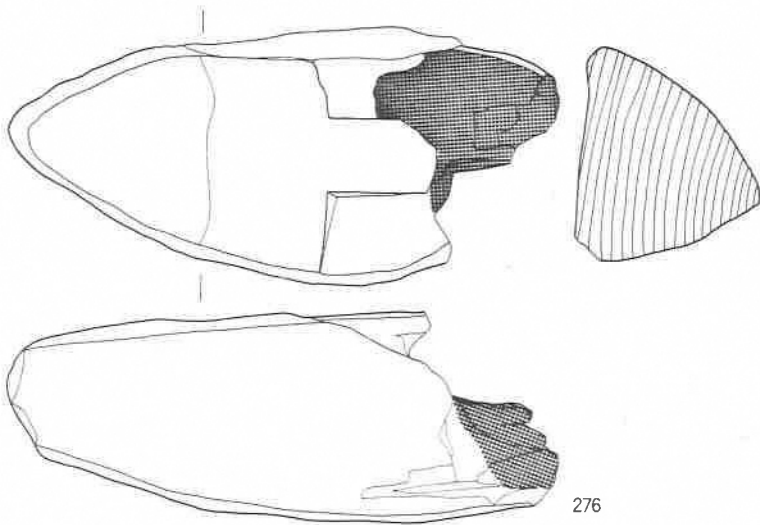
274

(1) 板状木製品（脚材）

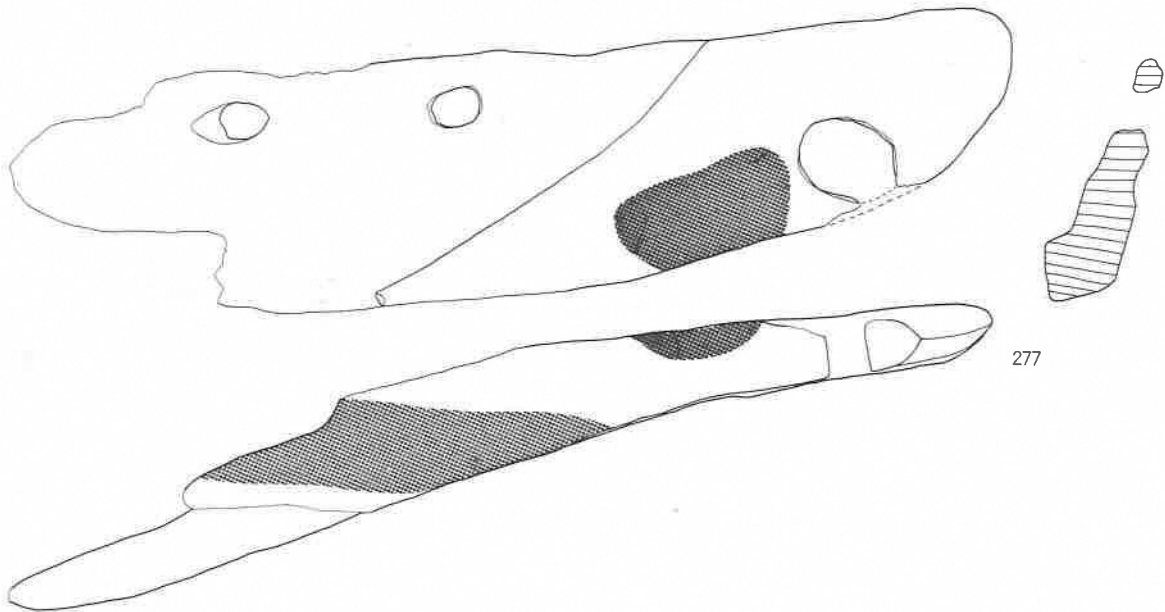


275

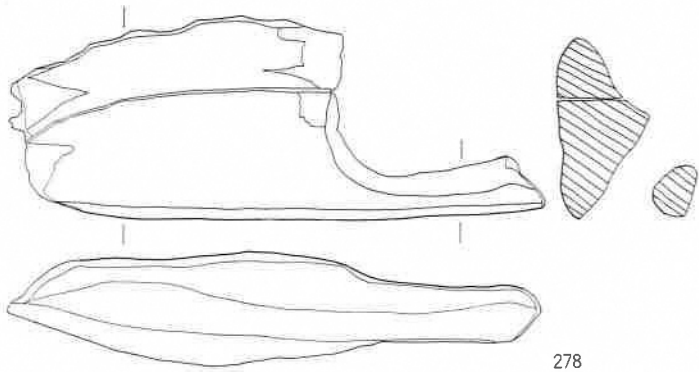
(2) 不明木製品（舟材か）



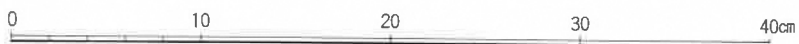
276

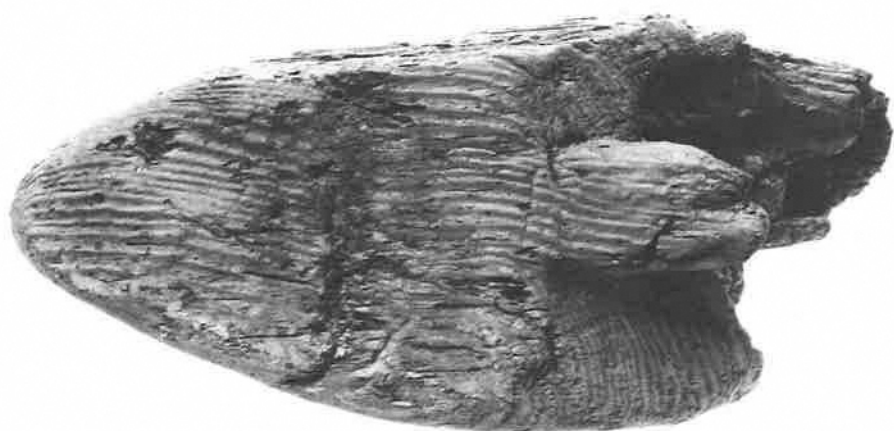


277

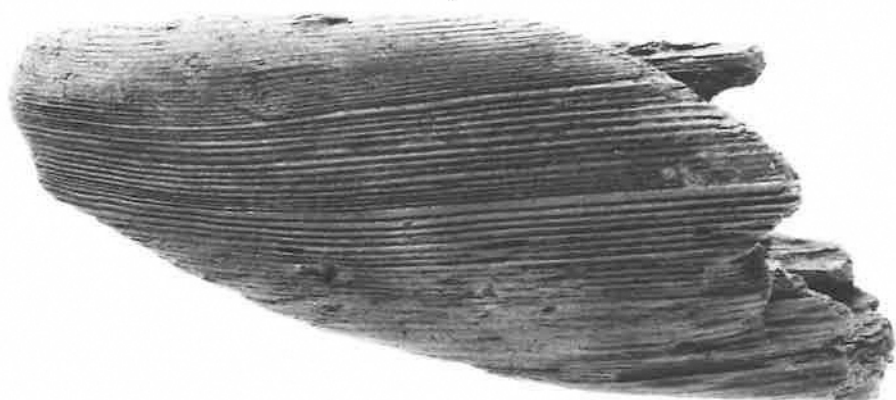


278

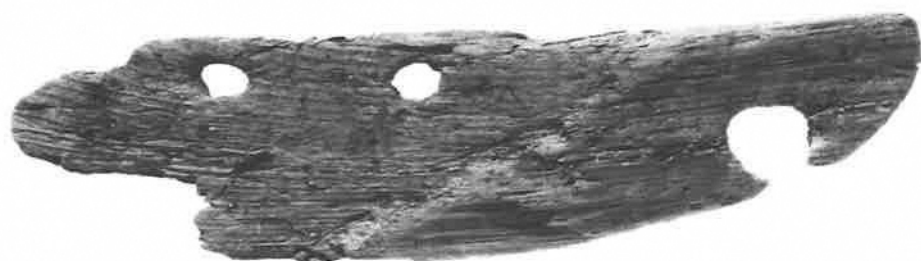




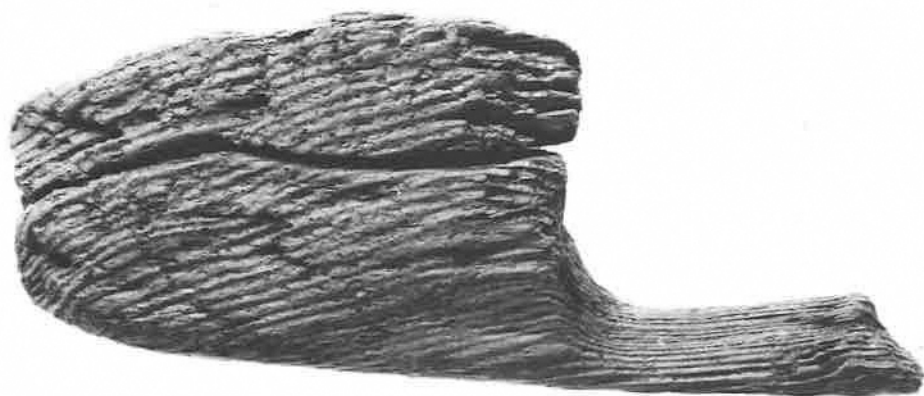
1



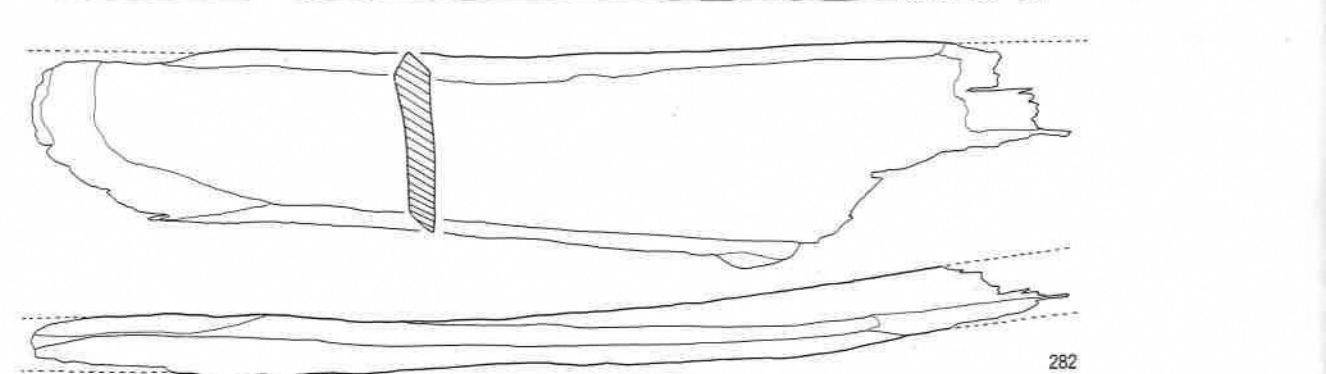
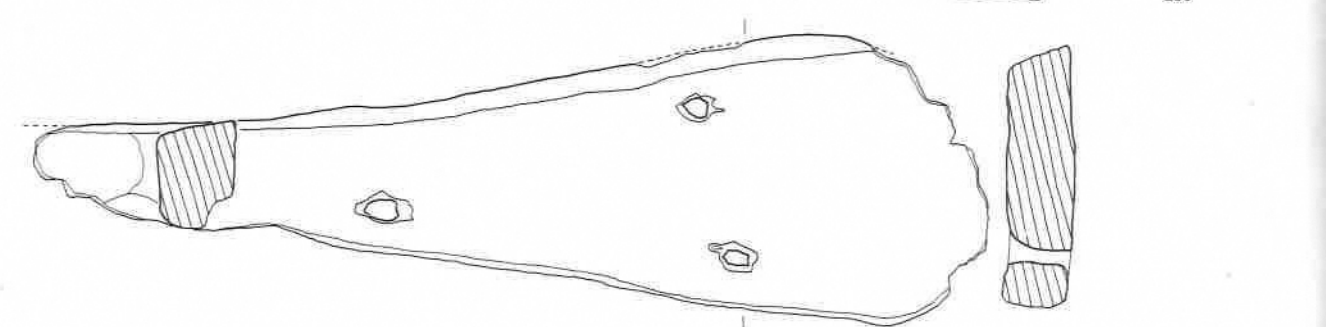
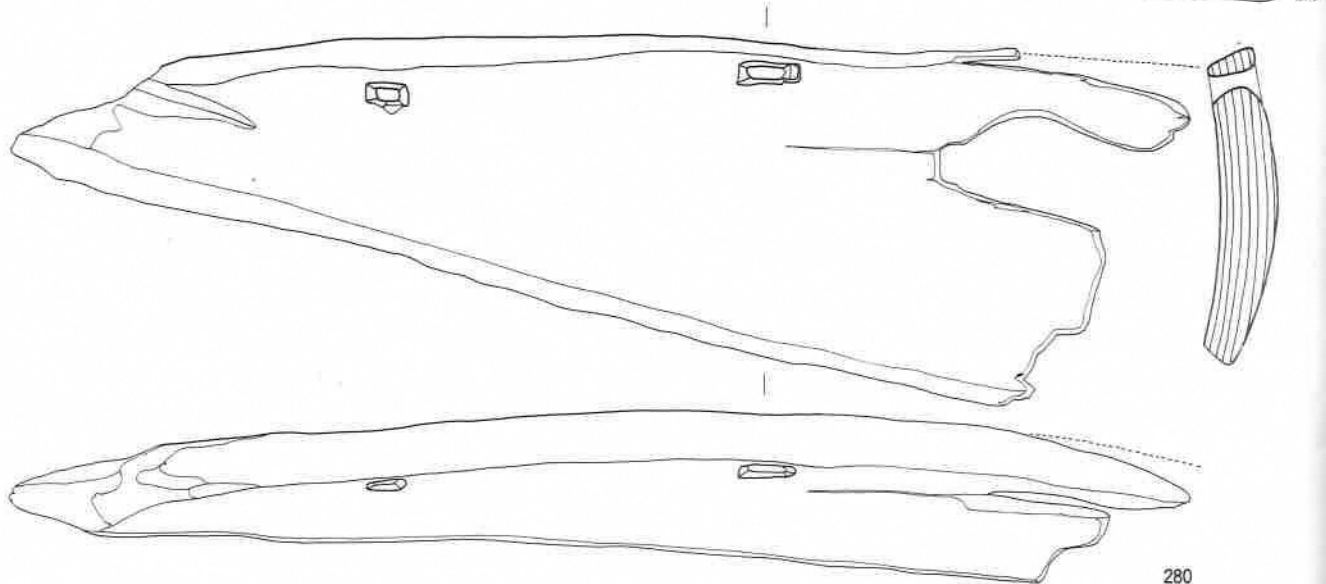
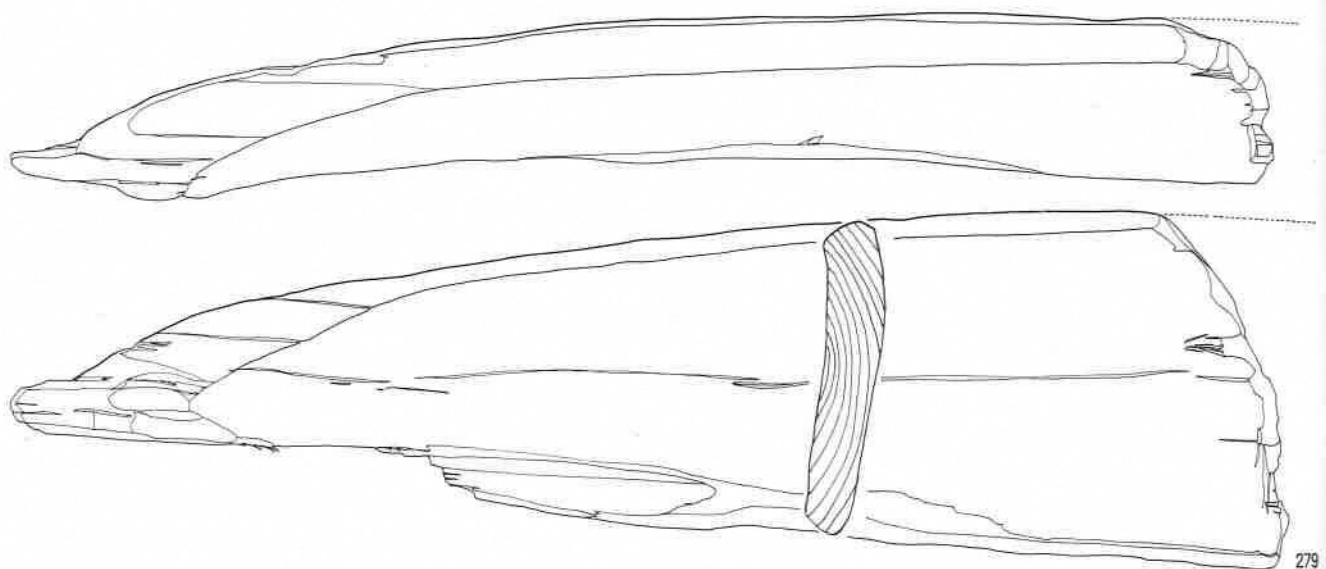
276



277



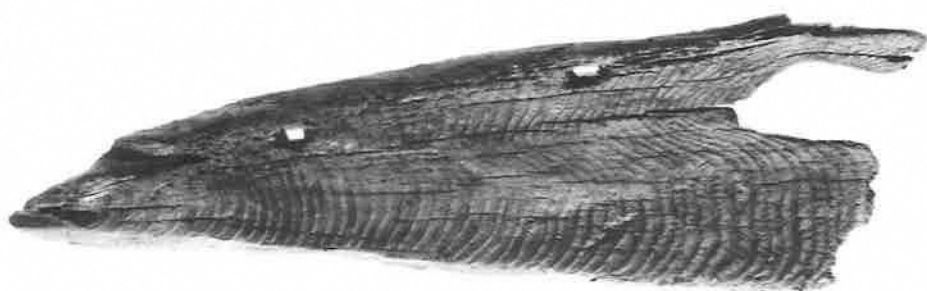
278



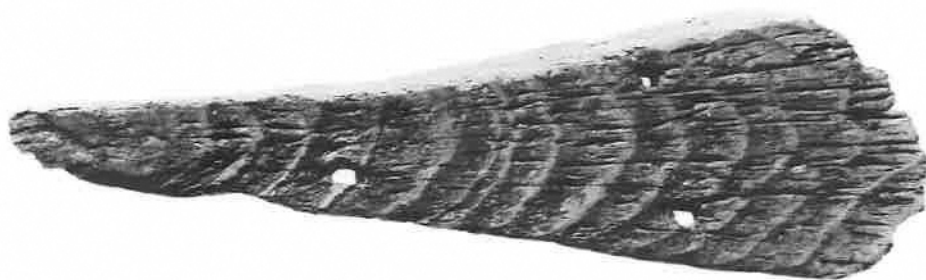
0 10 20 30 40cm



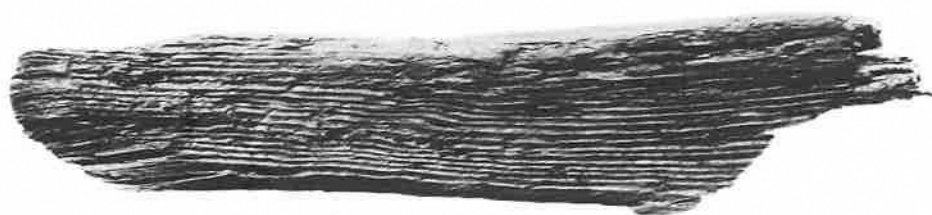
279



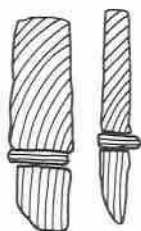
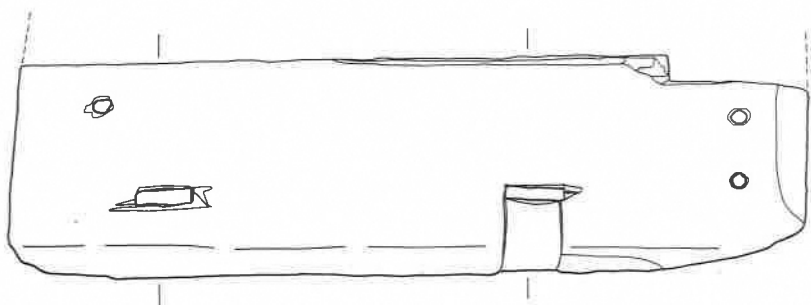
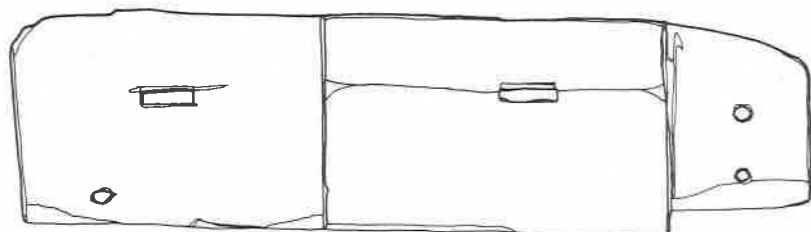
280



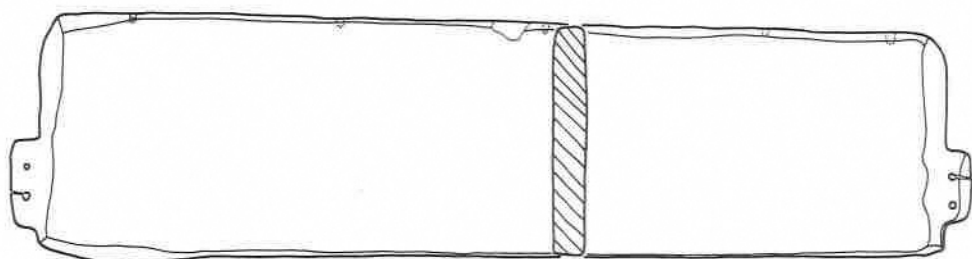
281



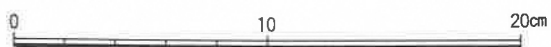
282



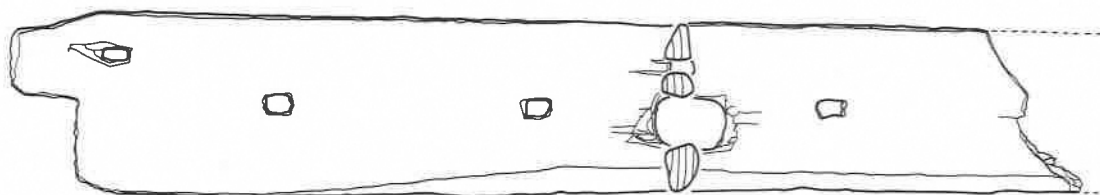
285



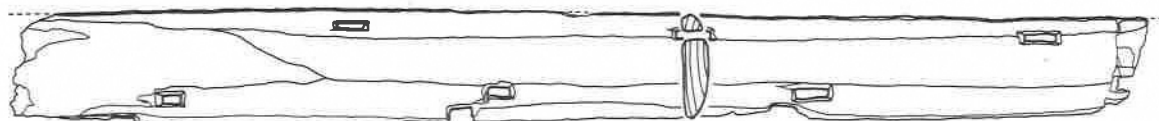
288



(285, 288)



286



287



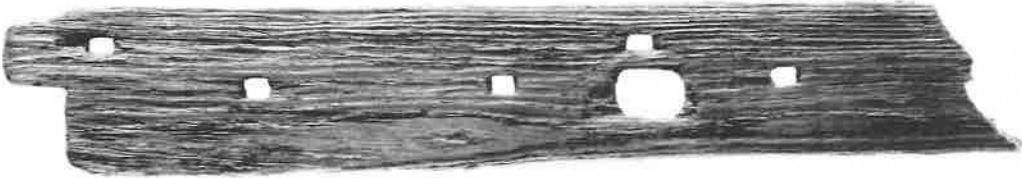
(286, 287)



285



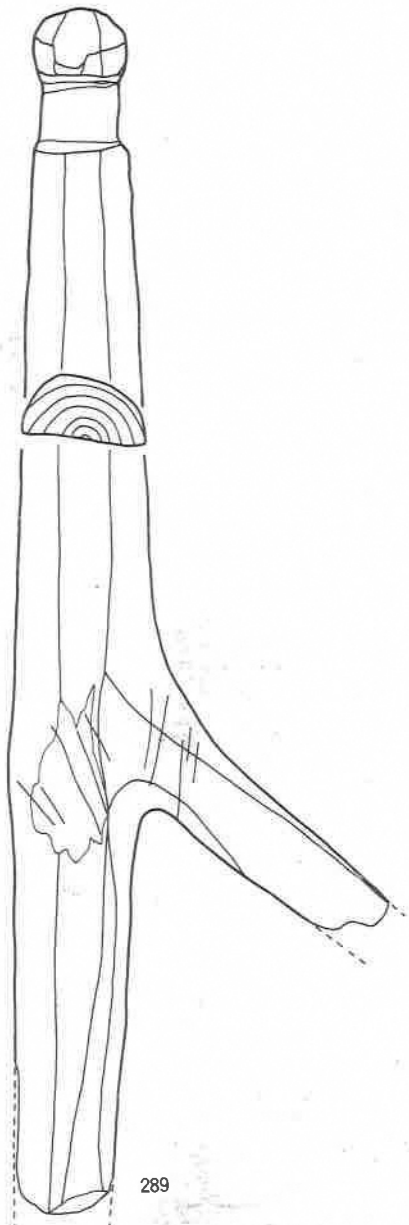
288



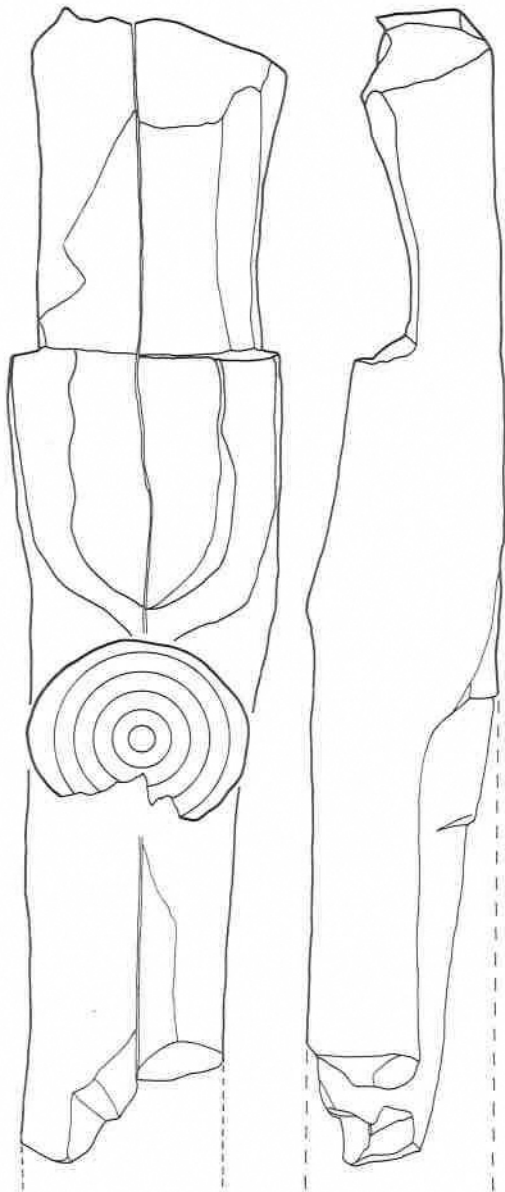
286



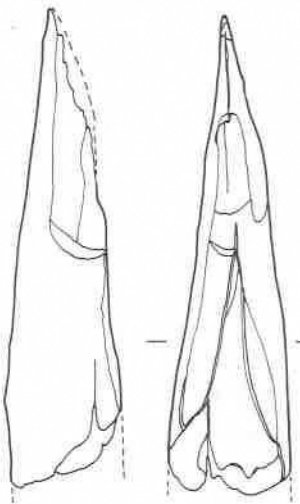
287



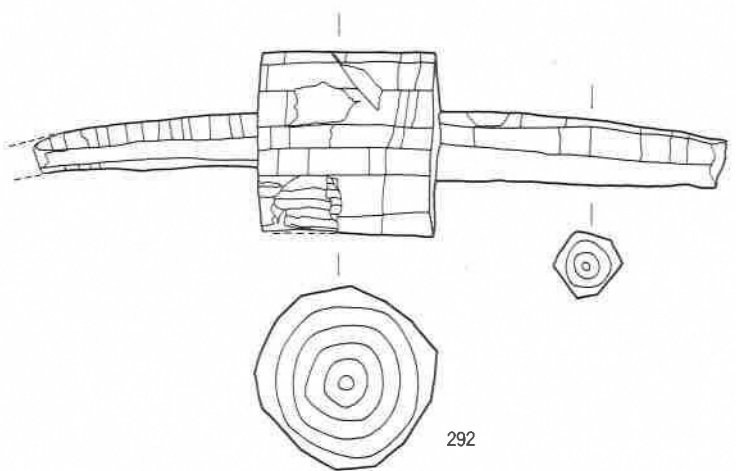
289



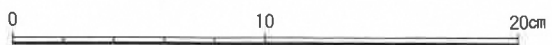
290



291



292





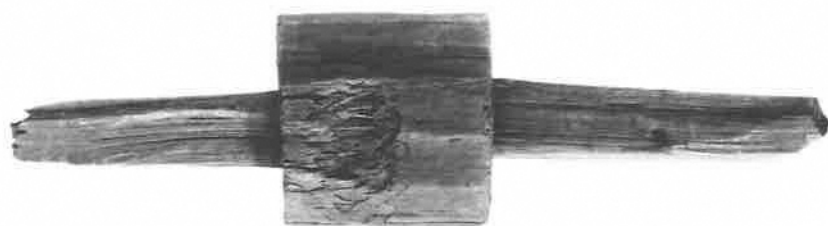
289



290

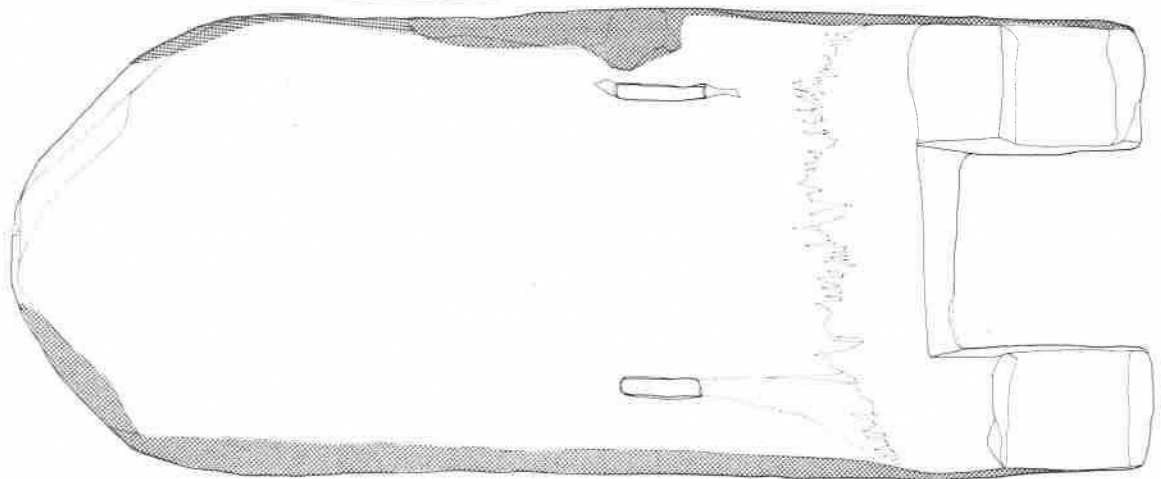
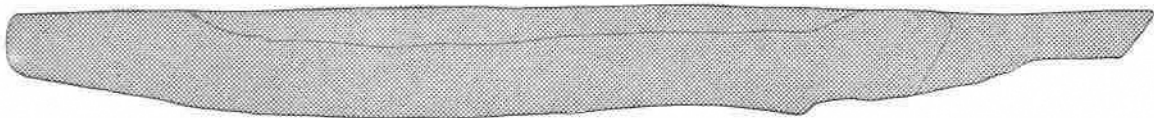
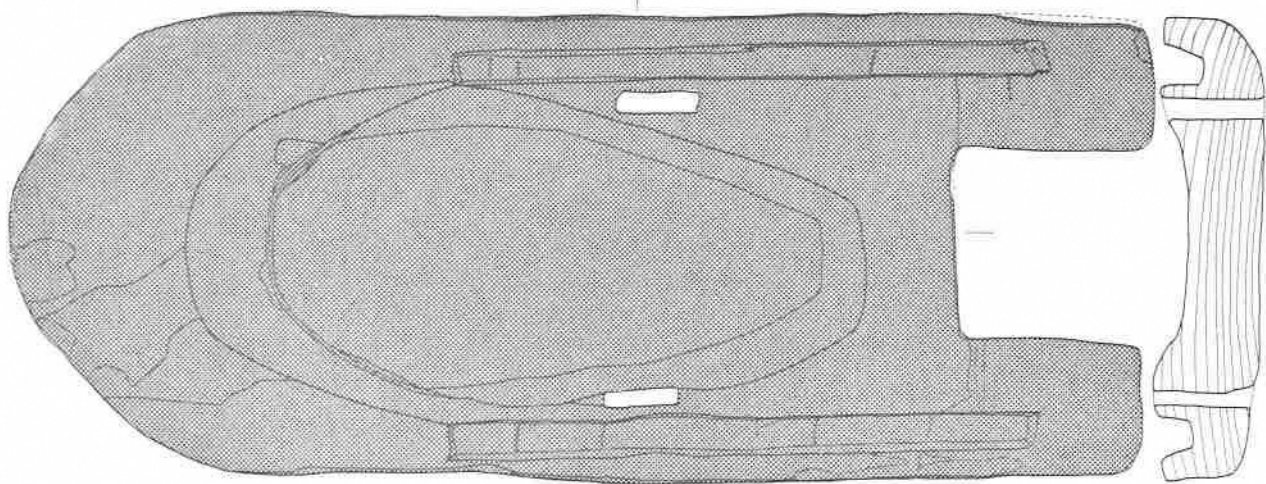


291

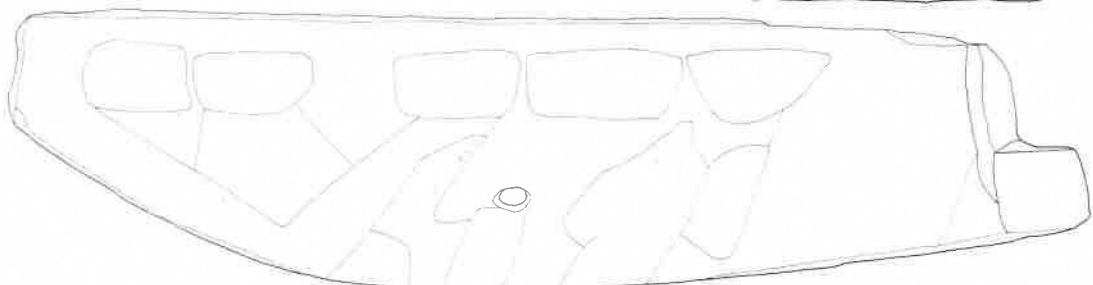
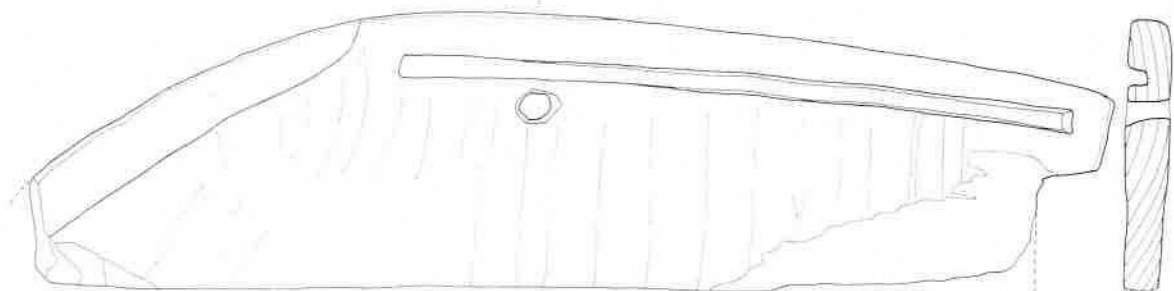


不明木製品 (工具の部材か)

292

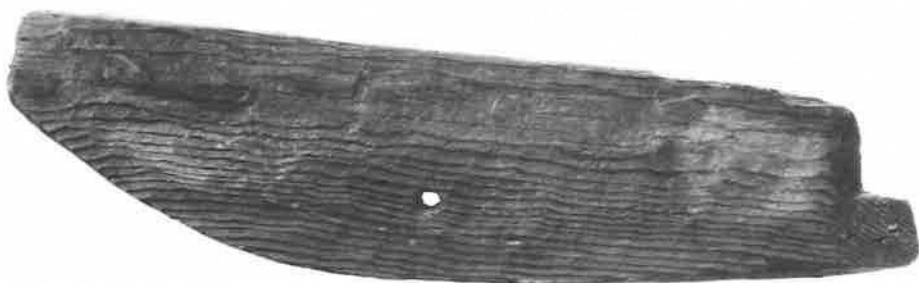
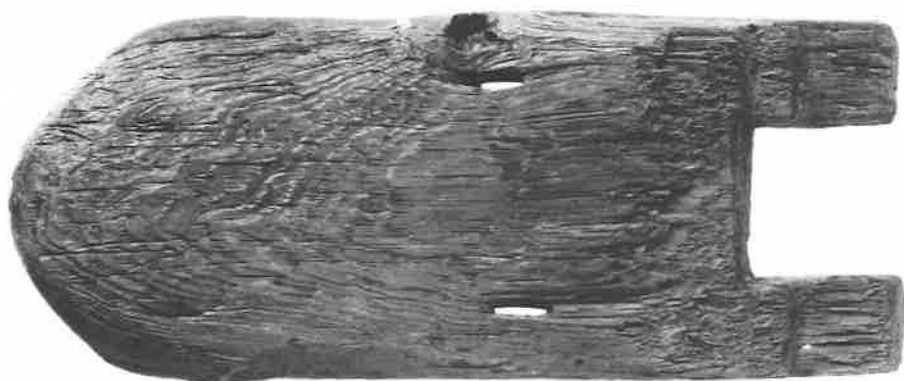
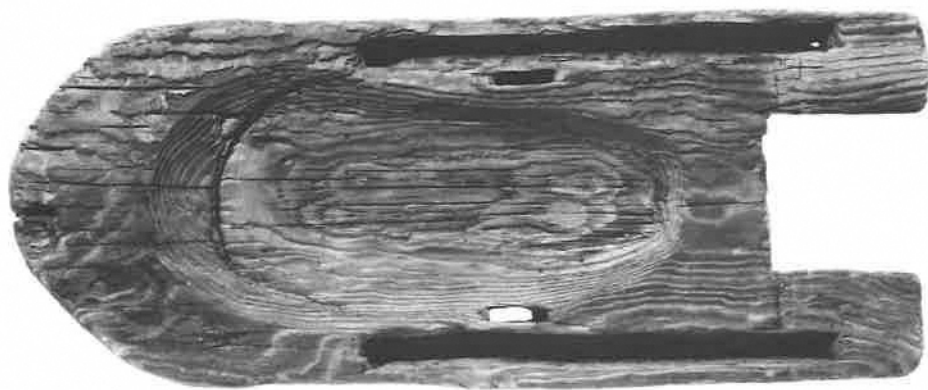


293



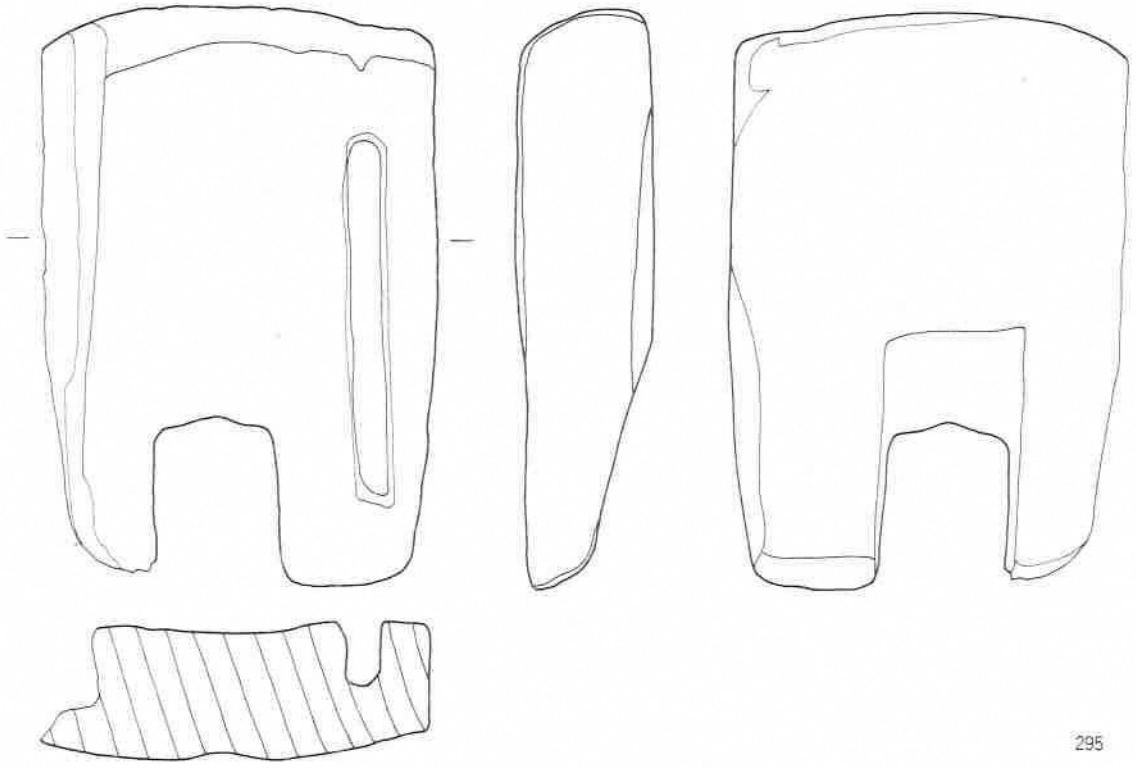
294

0 10 20 30 40cm

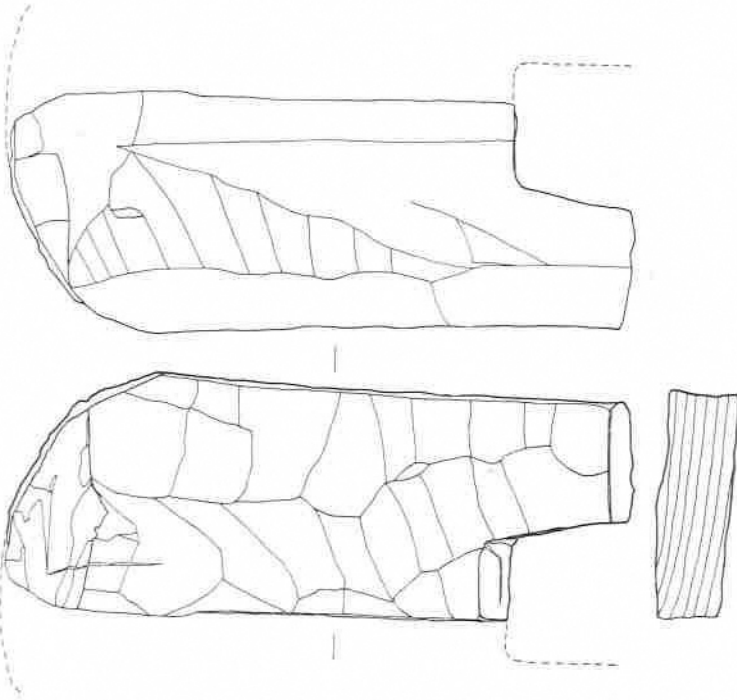


293

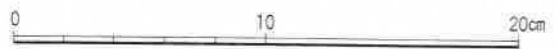
294

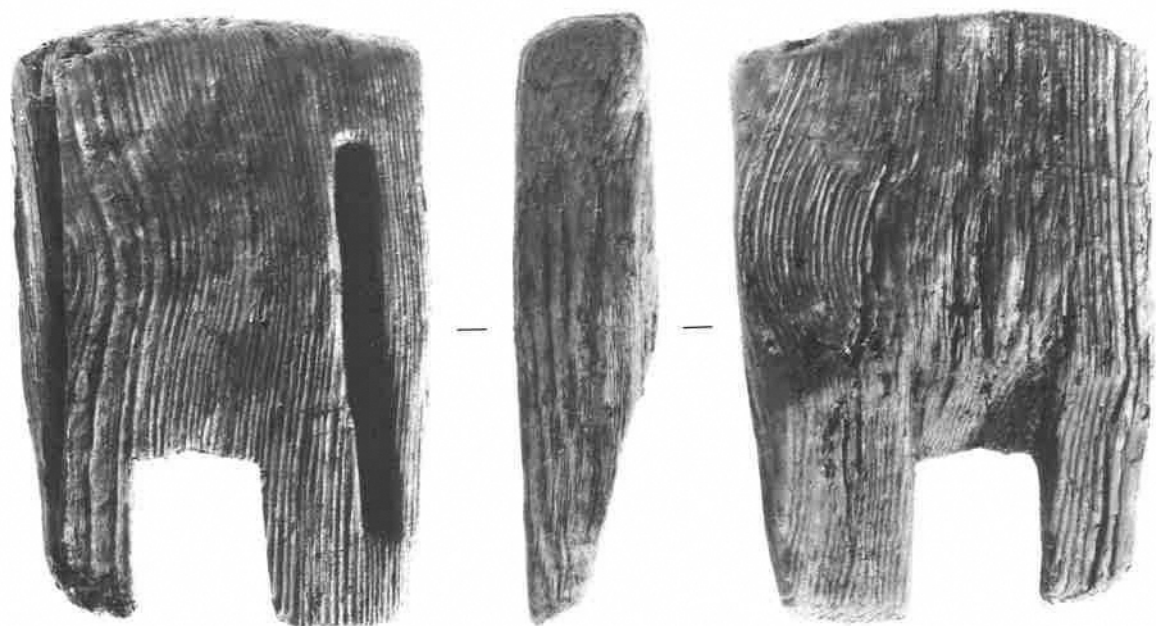


295



296



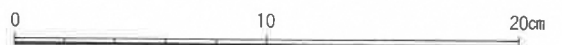
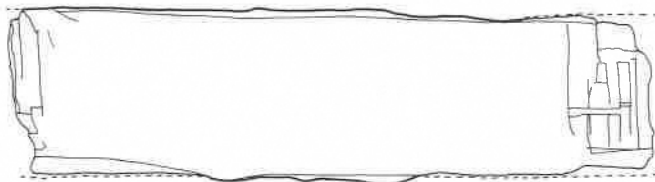
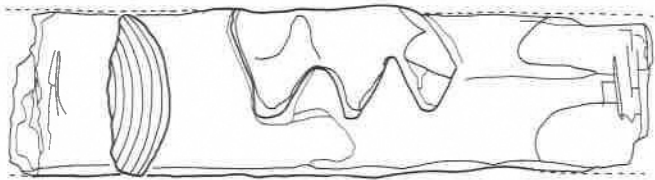
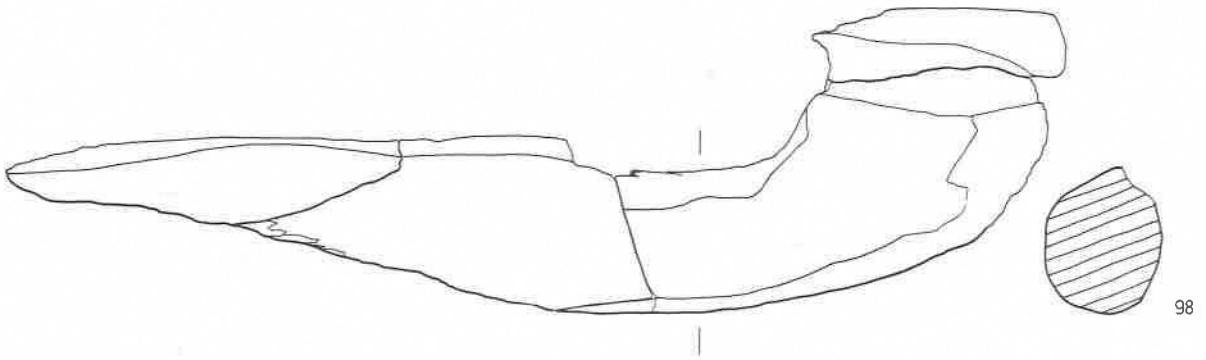
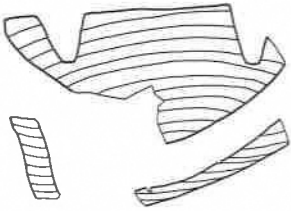
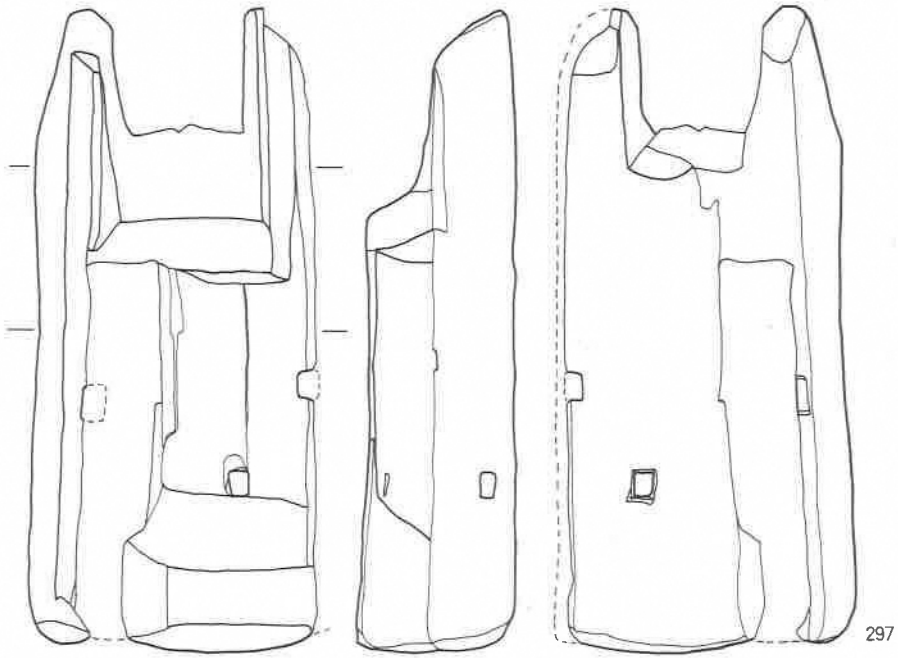


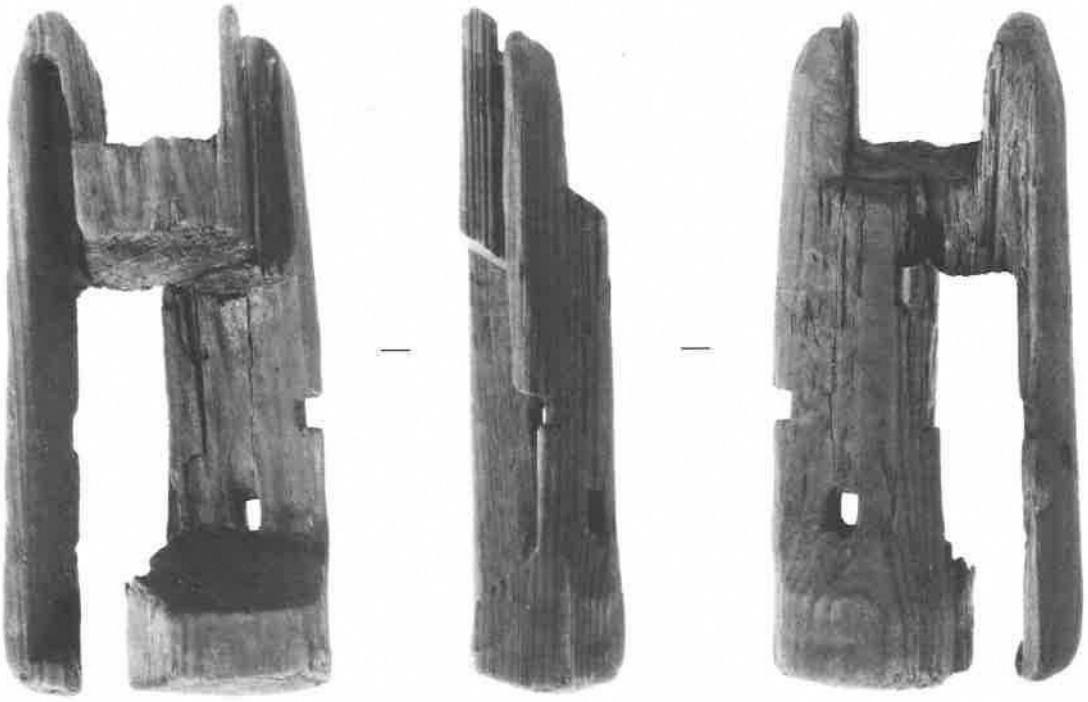
295



296

不明木製品 (用途不明品)

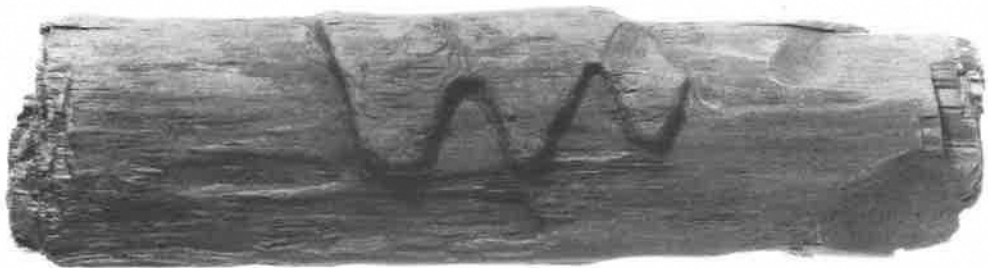




297

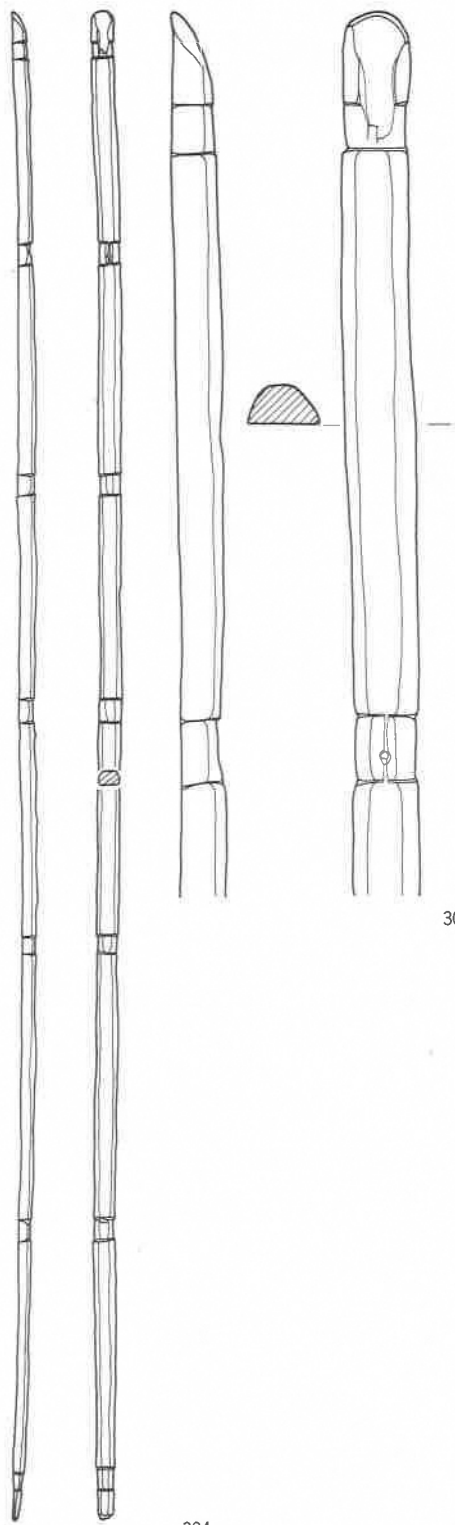
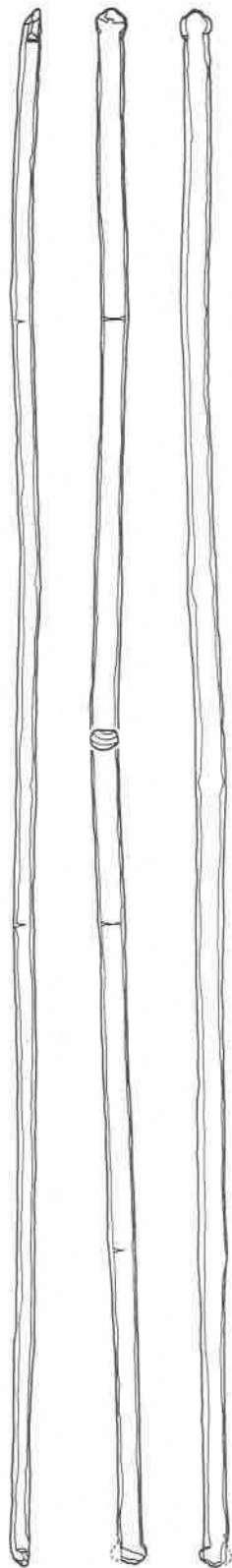
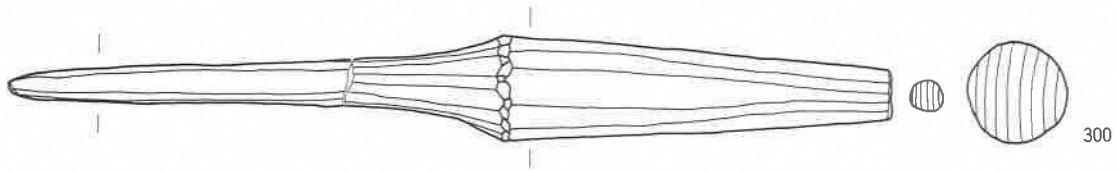


298

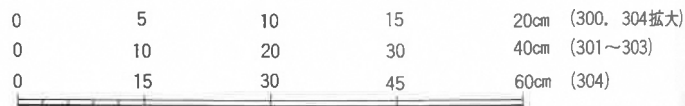


299

不明木製品 (用途不明品)



304 放大



300



301



302



303



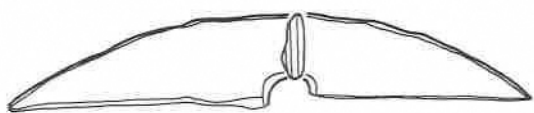
304



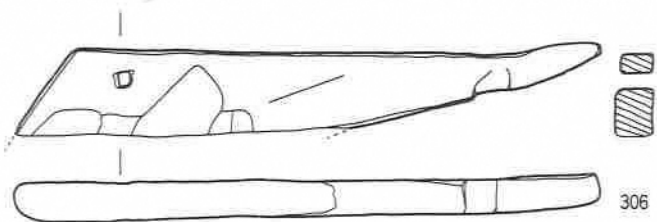
304拡大



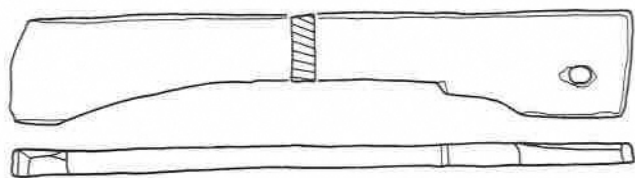
不明木製品 (用途不明品)



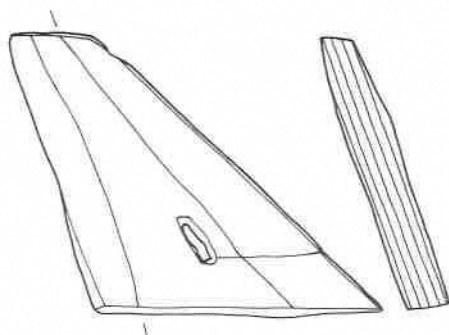
305



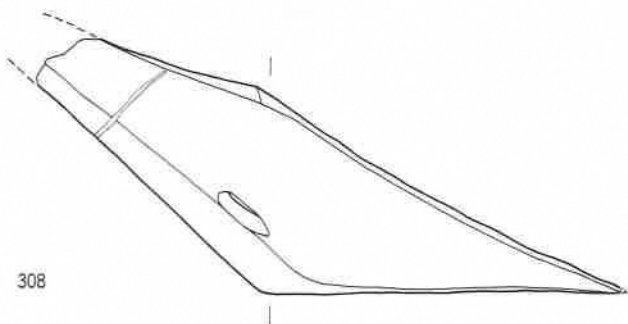
306



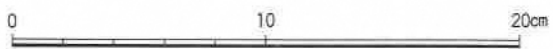
307



308



309





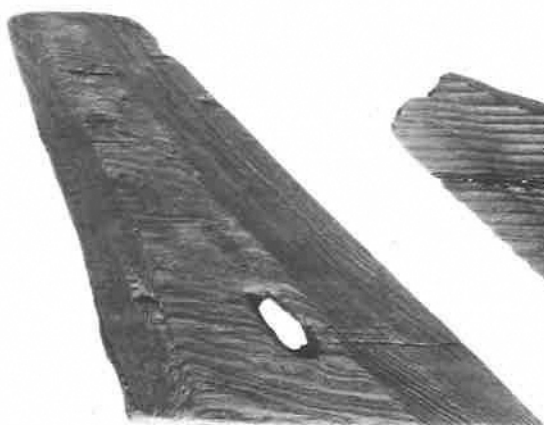
305



306



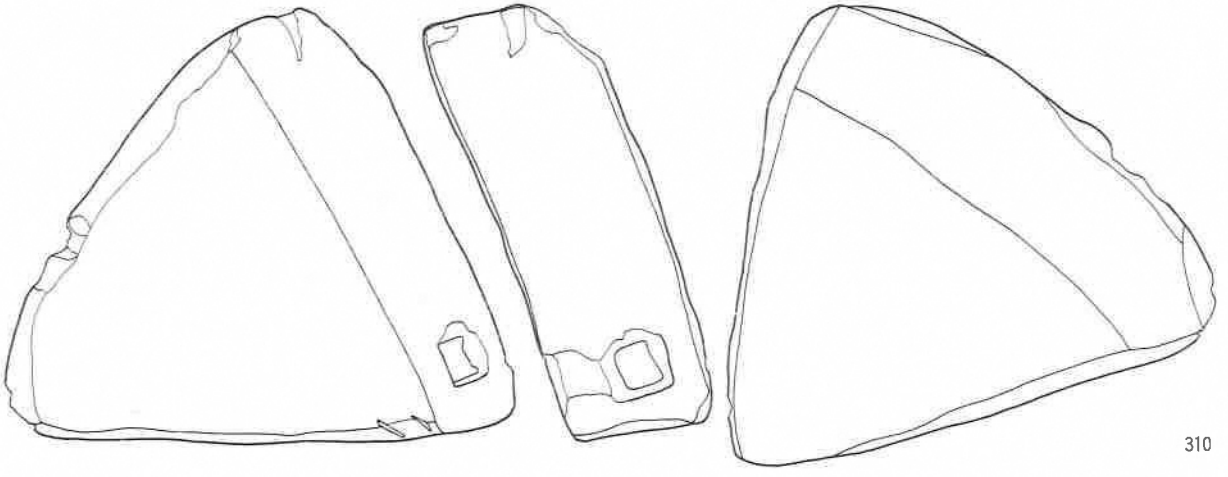
307



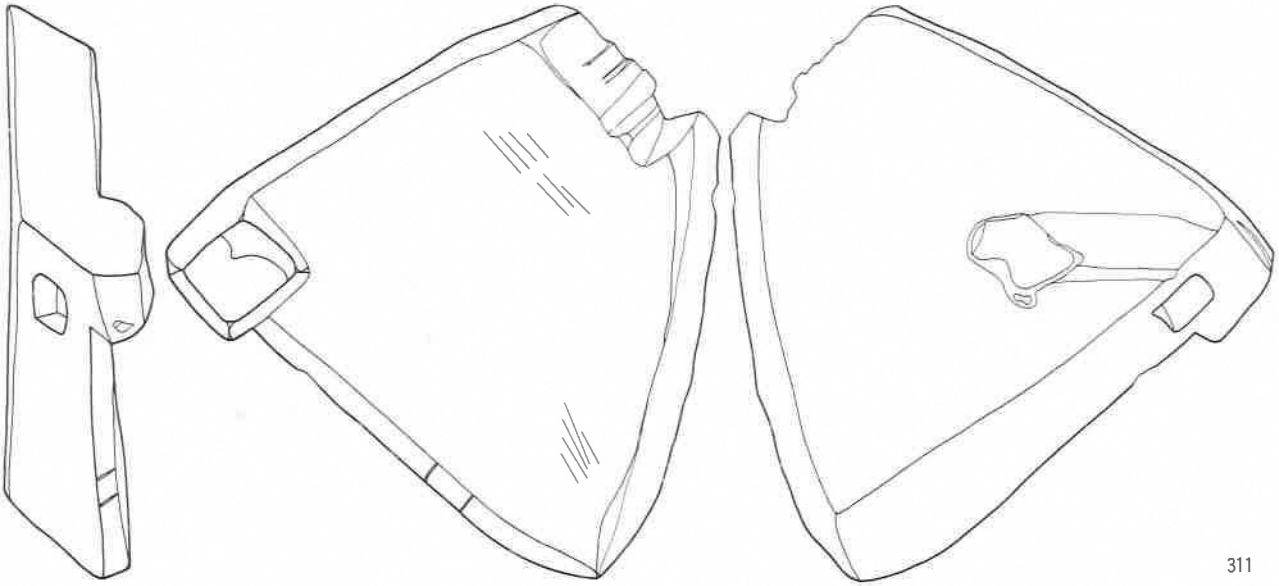
308



309

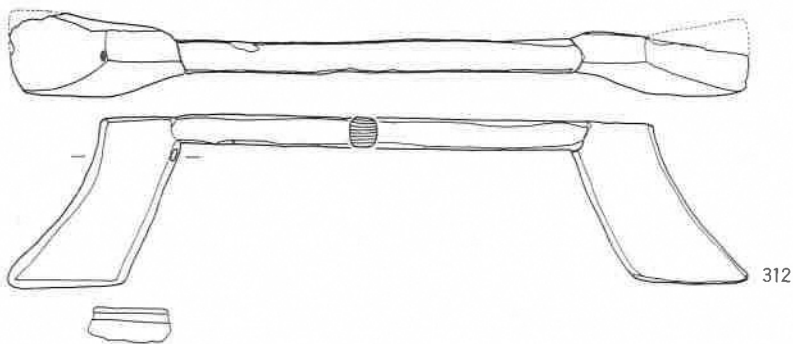


310



311

0 10 20cm
(310. 311)



312

0 20 40cm
(312)



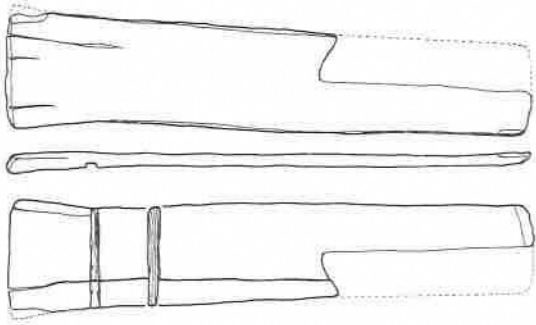
310



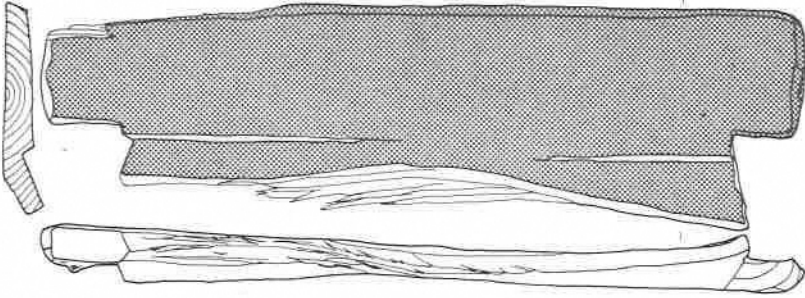
311



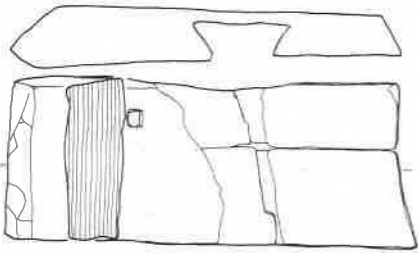
312



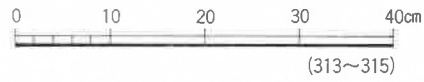
313



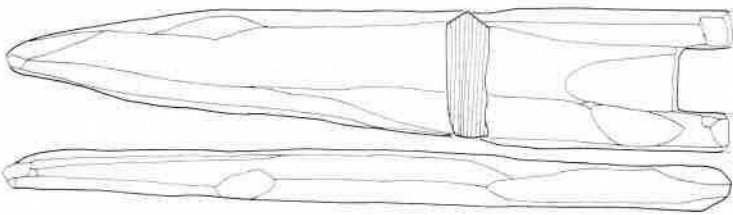
314



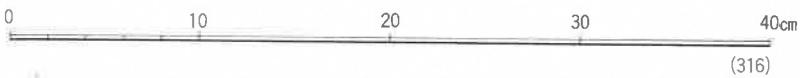
315



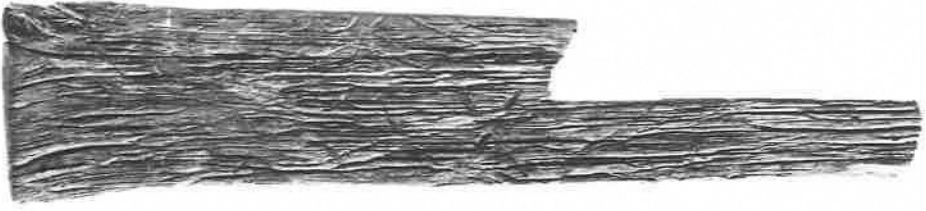
(313~315)



316



(316)



1

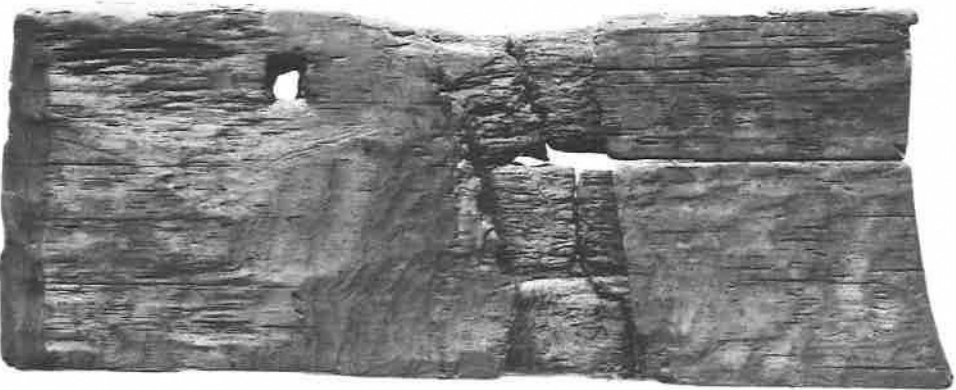


313

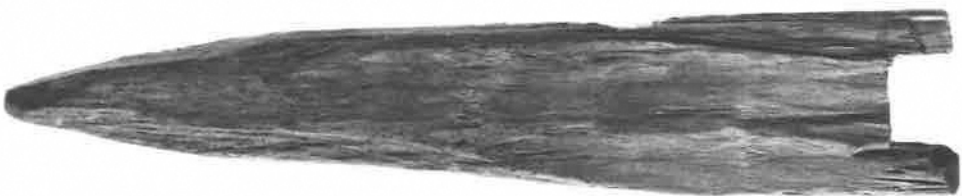
(1) 不明木製品 (小部材)



314

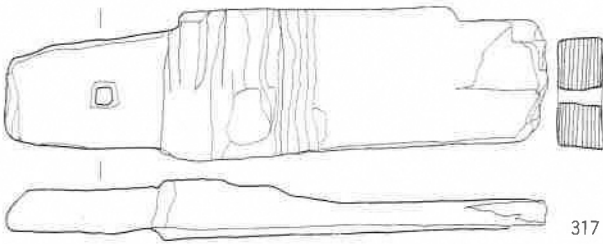


315

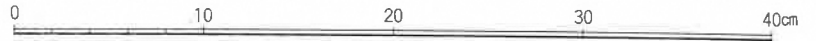


316

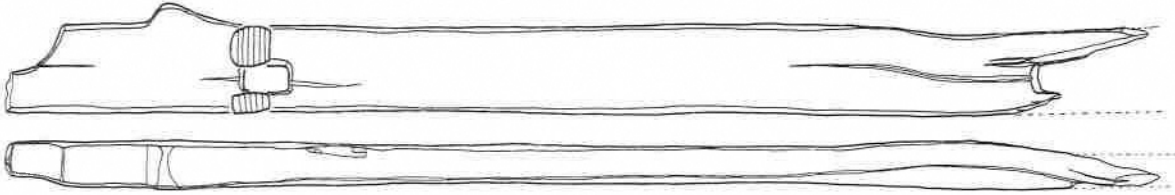
(2) 不明木製品 (建築部材)



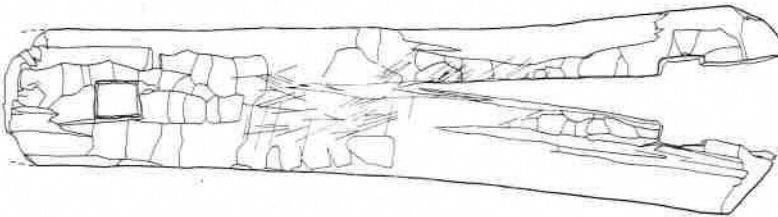
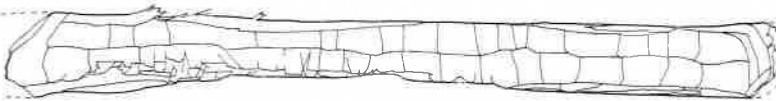
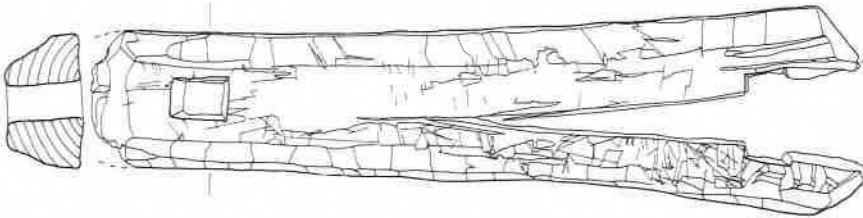
317



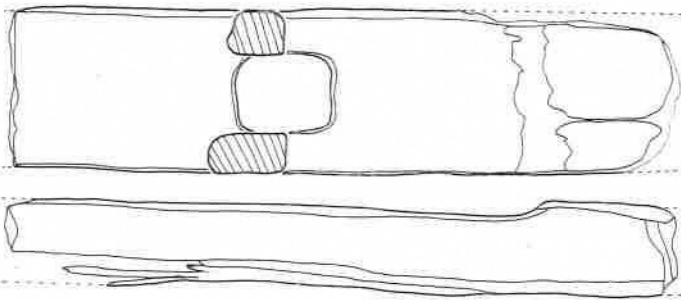
(317)



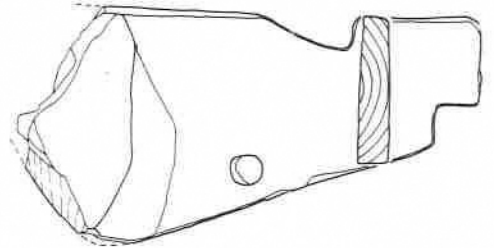
318



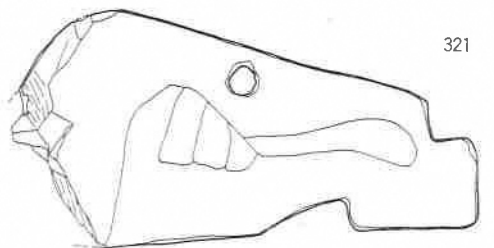
320



319



321



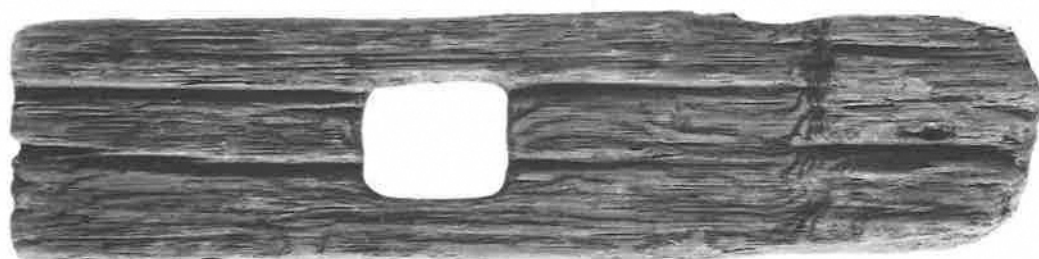
(318~321)



317



318



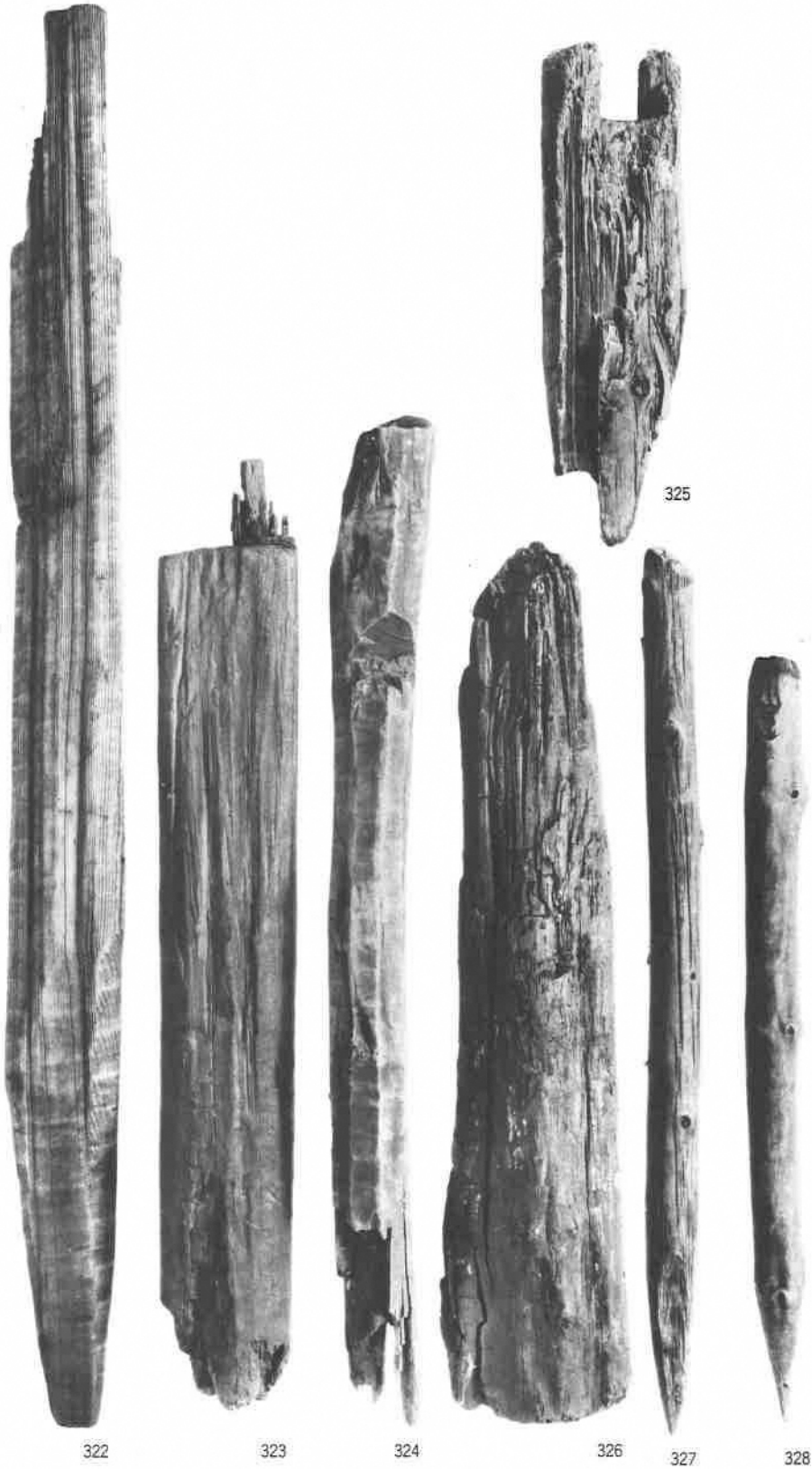
319



320



321



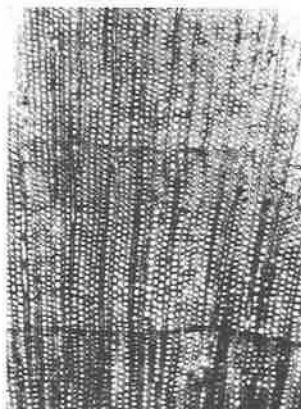
不明木製品 (建築部材のうち柱、杭材)



植物遺体1 上：オニグルミ、下左：噛じられた痕のあるオニグルミ、
下右上：トチノキ種皮片、下右下：イシガイ右殻 (縮尺実大)



植物遺体2 モモ、下右端は噛じられた痕のあるモモ(縮尺実大)



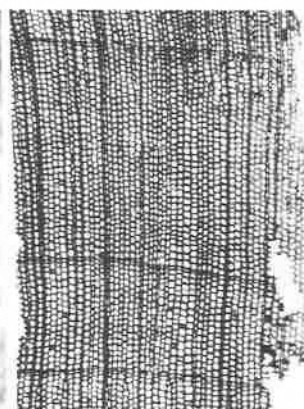
カヤ(231)木口 ×40



カヤ(231)柁目 ×200



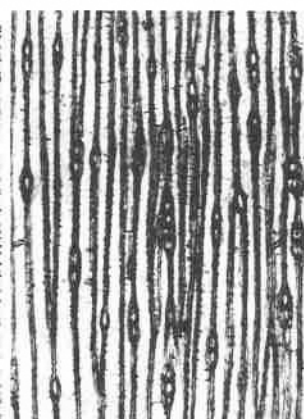
カヤ(231)板目 ×200



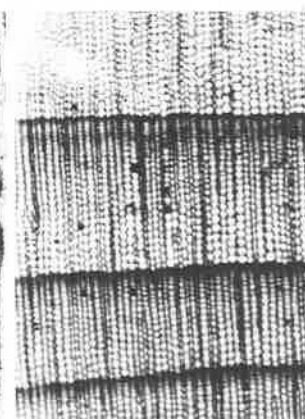
イヌガヤ(71)木口 ×40



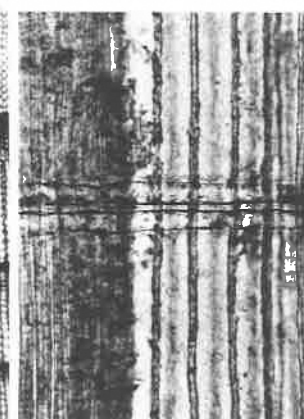
イヌガヤ(71)柁目 ×200



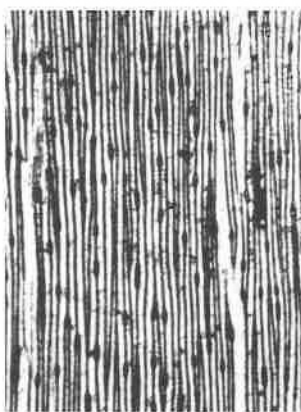
イヌガヤ(71)板目 ×100



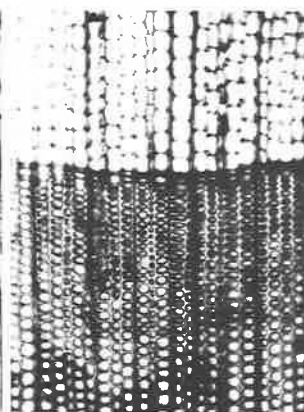
イヌマキ?(33)木口 ×40



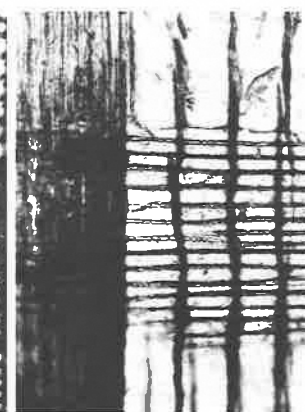
イヌマキ?(33)柁目 ×200



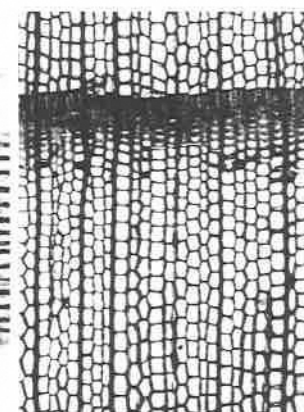
イヌマキ?(33)板目 ×40



モミ(20)木口 ×40



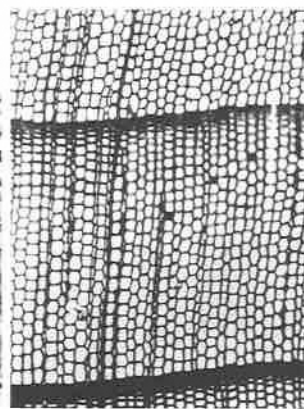
モミ(20)柁目 ×100



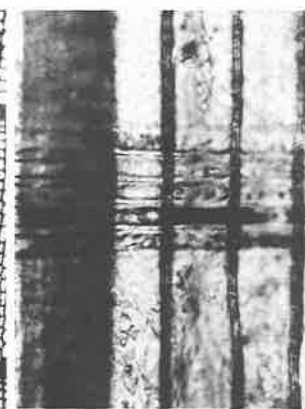
スギ(237)木口 ×40



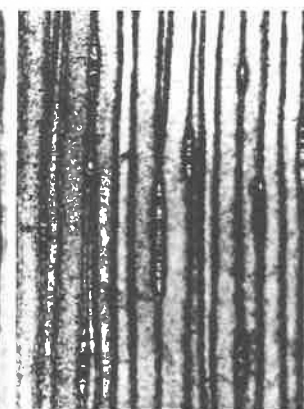
スギ(237)柁目 ×200



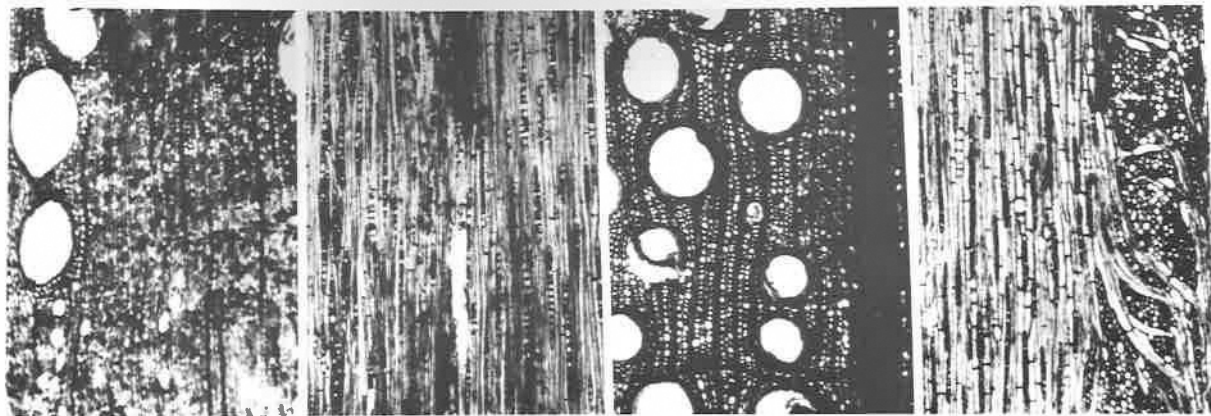
ヒノキ(230)木口 ×40



ヒノキ(230)柁目 ×200



ヒノキ(230)板目 ×100



シイノキ(82)木口 ×40

シイノキ(82)板目 ×40

アカガシ亜属(4)木口 ×40

アカガシ亜属(4)板目 ×40

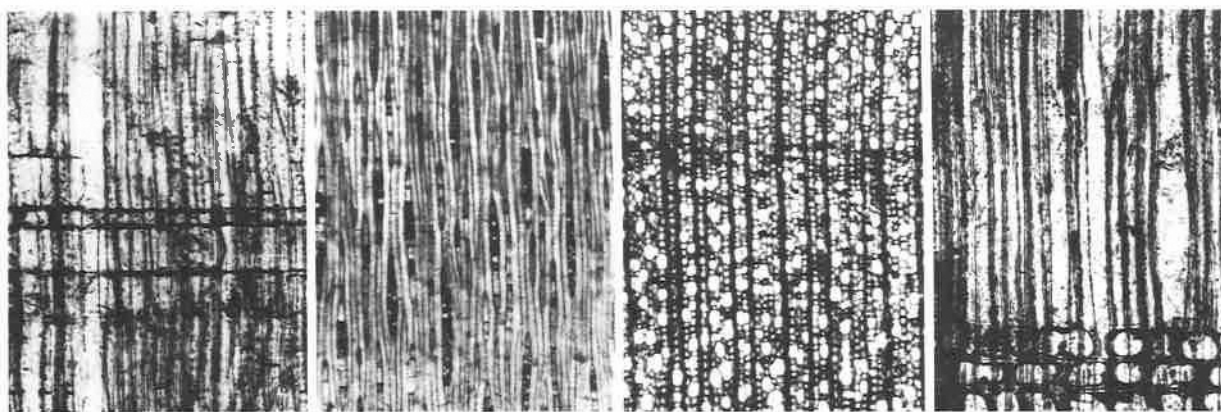


ユズリハ属(64)木口 ×40

ユズリハ属(64)柾目 ×100

ユズリハ属(64)板目 ×40

ツバキ(48)木口 ×40

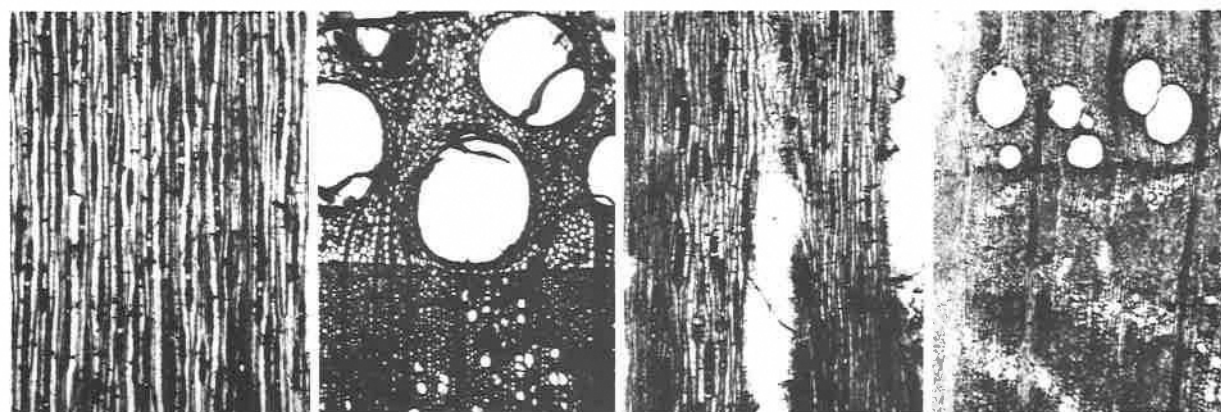


ツバキ(48)柾目 ×100

ツバキ(48)板目 ×40

サカキ(55)木口 ×40

サカキ(55)柾目 ×100

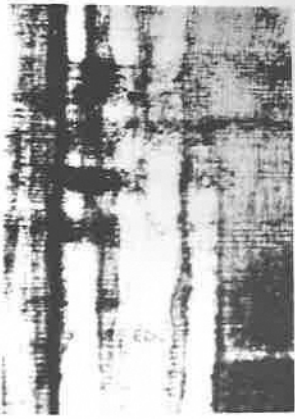


サカキ(55)板目 ×40

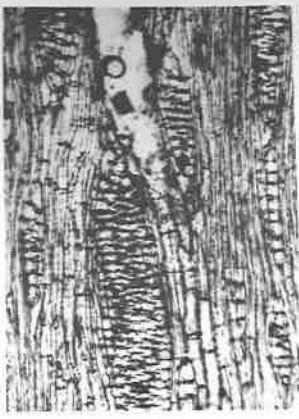
クリ(36)木口 ×40

クリ(36)板目 ×40

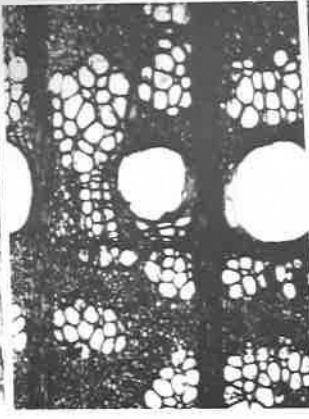
エノキ(253)木口 ×40



エノキ(253) 芯目 ×40



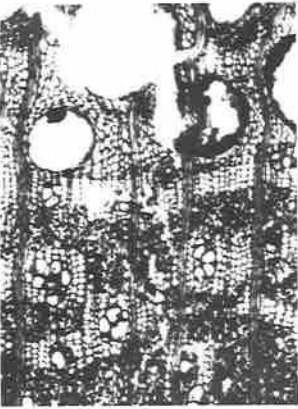
エノキ(253) 板目 ×100



ケヤキ(127) 木口 ×40



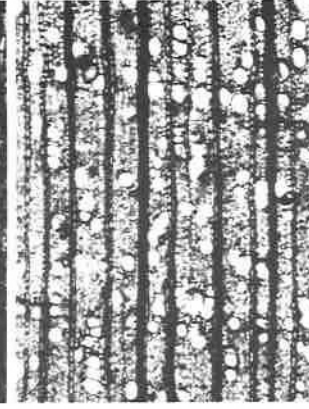
ケヤキ(127) 板目 ×40



ムクロジ(39) 木口 ×40



ムクロジ(39) 板目 ×40



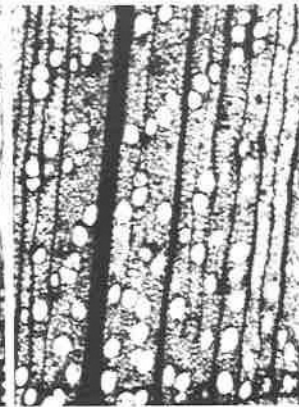
サクラ属(111) 木口 ×40



サクラ属(111) 芯目 ×100



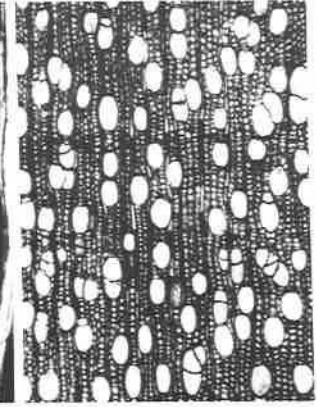
サクラ属(111) 板目 ×100



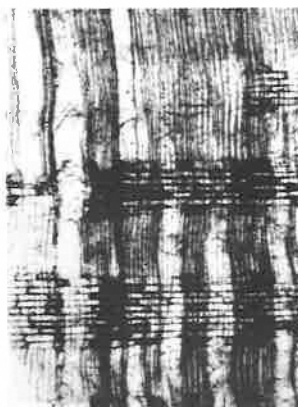
カエデ属(137) 木口 ×40



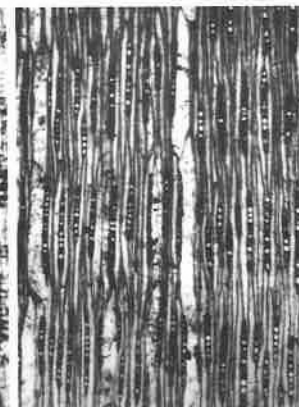
カエデ属(137) ×40



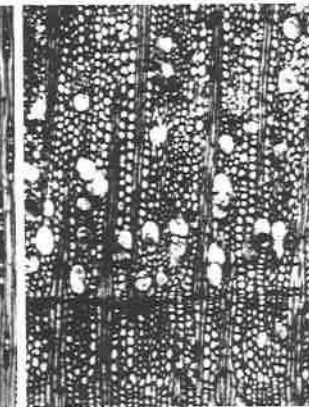
トチノキ(146) 木口 ×40



トチノキ(146) 芯目 ×40



トチノキ(146) 芯目 ×40



ミズキ(148) 木口 ×40



ミズキ(148) 板目 ×40

米原町埋蔵文化財調査報告IX

入江内湖遺跡(行司町地区)発掘調査報告書

—滋賀県立文化産業交流会館建設に伴う発掘調査—

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月31日 発行

発行 米原町教育委員会
滋賀県坂田郡米原町下多良3丁目3番地

印刷 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路通仏光寺上ル

TEL(075)351-6034